
endless battle

唯

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

e n d l e s s b a t t l e

【Nコード】

N 1 8 8 0 B

【作者名】

唯

【あらすじ】

動物も人間も、色々寄り道しながら「ボス」のもとへ。ブッ倒せ
〜！

第1話 『西の森』

電話音が鳴り響いている。

三回程鳴り、女が受話器を手に取った。

「はい？」

受話器の向こうから聞こえるのは、男の声だ。

「楓か！？俺だ！今西の森に居るんだが、デカイ変な奴が追いかけてくるんだ！頼む、助けてくれ！」

「……………？ちよつと待って！アンタ、誰？」

少しの間、沈黙の時間が流れた。

そしてようやく男が口を開く。

「……………わり。俺おれ、拓羅！」

「あ……………ななんだ、タクか」

「げ……………！」

「……………なに、どしたの？」

よく耳を澄ましてみる。木々の折れる音がしていた。どうやら、敵がすぐそこまで迫ってきているようだ。

それにしても、この男は叫びっぱなしだ。少々うるさい。

楓の方も受話器の向こうから聞こえる雑音に、そろそろ嫌気がさしてきたようだ。

「はあ……………。とにかく、すぐ行くからもう少し待ってなさい」

「え……………でも……………」

拓羅が続きを言う隙も与えず、楓は受話器を置いた。

「……………まったく。昔と全然変わってないわね」

「相変わらずだな、お前達は」

楓のすぐ隣から声がした。勿論人の姿はどこにも見当たらない。居るのは半分耳の垂れた犬だけだった。どうやらその犬が言葉を発したようだ。

拓羅と同類にされたのが嫌だったのか、楓のこめかみには「ムカ

ツキマーク」が付いていた。

「変わってないのはタクだけ！」

そのまま犬の毛を思いつきり掴んだ。

「いででででっ！？・・・まあそうカッ力するな。事実だし・・・」

「もー！」

「じゃあお前はどんな所が変わったんだ？」

「え・・・？」

そう聞かれると、楓は頭を抱え込んで考え始めた。

「あたしは―――」

「何？」

「・・・美しさに磨きがかかったってとこかな！」

イタズラ顔でそう言った。それを聞いた犬は、少々呆れ顔だった。

「・・・あ、そ」

言い終わると、犬は今までは打って変わった顔で楓を見た。

「つてか、いいのか？」

「は？何が？」

「・・・お前な、何が？じゃなくて拓羅だよ！このまま死んだって知らねえぞ」

「あ。忘れてた・・・！」

「はあ・・・だろうな。ほら、即行くぞ」

そう言われると、楓はジャンプして犬の背中に飛び乗った。

犬の名前は「ソラ」と言った。ソラは、背中に人間四人程は乗せられそうなくらい巨大な犬だ。そして名前の通り、空を飛ぶことが出来る。楓を乗せたまま雲の上まであがっていった。そこからソラの本領発揮の場である。

フワリと少し上がったと思ったら、一気にスピードアップした。

雲と雲の間をビュンビュンと抜け、物凄い速さで飛んでいく。

「西の森・・・だったよな？」

「うん」

（・・・確かあそこにはオレの友達が居るハズなんだが・・・）

じきに森が見えてきた。「西の森」だ。確認して、降りていく。
その降りた場所が良かったのか悪かったのか、そこは敵の目の前だった。

楓もソラも青ざめた表情で、自分達の前で牙を剥き出しにしている敵を見た。

だが、ソラはそこで気が付く。目の前に居る敵は、さっき思い出していたソラの友達だったのだ。

（・・・オレの・・・友達だ！友達なのに・・・殺れないよ・・・っ！）

驚きと悲しさに包まれた顔のソラだったが、向こうはもう敵だ。容赦せずに攻撃してきた。

「・・・ソラッ！」

楓が叫び、空は我にかえる。間一髪で避けられた。だが、やはりソラの中には「相手は友達」という気持ちが残る。

「楓・・・ゴメン・・・やっぱコイツはオレの友達だから・・・無理だよ・・・」

「友達？」

ソラは無言で頷く。

「・・・そっ・・・か。友達、なんだよね。でも・・・残酷かもしれないけど、あの子は、もうソラの知ってる子じゃないんだよ・・・？」

その一言で、ソラの目つきが変わった。

（そうだ・・・オレは戦う為にここに来た・・・！）

もはや敵となった相手を睨み、勢いよく敵に飛び掛った。

さっきも言ったように、ソラは巨大な犬だ。この相手より遥かに大きい。体の大きさを活かし、くるりと体をひねって後ろに回り込

むと、首にかぶりついた。

グロテスクな音を出しながら、ソラの牙はどんどん相手の首にめり込んでいく。敵は、血の塊を悲鳴と共に吐き出すと、その場で倒れ込んで息絶えた。友達だった相手を見て、ソラは物悲しそうな声を出した。

そこに、今までどこに隠れていたのか、拓羅が現れた。

「いよっ！ソラ、さんきゅ！」

ちなみに、拓羅は「場の空気」という物を読むのが苦手だった。

「・・・バカ・・・」

そばで楓が呟く。

「え？バカ・・・？楓？あの・・・バカって何が？」

「あーもーいーよもー！ソラ帰ろ！？こんなバカ男助けに来るんじやなかった！」

「あっおいコラ！バツバカ男とはなんだっ！？っていうか置いてくなよ！」

「楓、腹いせにあれやらしてくれ」

楓とソラの間で「あれ」と出た時、やる事は一つだった。ソラは拓羅の後ろに行くと、服を甘噛みした。そのまま上にあがる。

拓羅は、「高所恐怖症」である。

「あっ・・・え！？ちよっ・・・またかよッもうヤダよッ！」

必死に叫んで助けを求める拓羅だが、もう楓とソラの頭には悪魔のツノが生えていた。こうなってしまったらもう手遅れだ。どれだけ頼んでも、目的地に着くまでは下ろしてくれる事はまず無いだろう。

こうして、拓羅はソラと楓のオモチャになりながら帰っていくのだった。

第2話 『雪山』

ある日、楓の家のチャイムが鳴った。その日は日曜だった。朝からチャイムで起こされた楓は、少々不機嫌になりながらもドアを開けた。

そこに居たのは、普通の少年だった。見た感じでは楓より何歳か年下だ。

ごく普通の少年だが、この少年によって、この物語は本当の始まりを迎える。

「・・・助けてください」

少年の第一声はそれだった。案の定、楓には何の事だかさっぱりわからない。頭の上に「？」マークを並べ、眉をしかめた。

「・・・・・・・・はい？」

「あのつ・・・・ここ、困ってるの解決してくれるって聞いたので・・・」

「・・・誰が言ったのそんな事」

「隣の家の人」

「・・・あんのヤロー・・・」

楓と拓羅の家は、隣同士だ。つまり「隣の家の人」とは拓羅の事だった。

どちらも一人暮らしだが、隣の住人——拓羅の事だ——は年中無休で動き回っている為、一人暮らし、という感じは全くしない。

「・・・んー・・・まあいいや。とにかく入って」

「ありがとうございます！」

少年はにっこりと笑うと、中へ入った。

「で、何をどう助けてほしいの？」

楓にそう聞かれ、うつむきながら話し始める。

「・・・僕の家近くに山があるんです。その山、年中雪が積もってる変な山なんですけど。それで、家で犬を飼ってて、ハスキーな

んですけど。雪山に連れてつたら喜ぶかと思って行っただけです。最初は良かったんですけど、途中で雪が急にひどくなって・・・」

「犬とはぐれたから探してくれ、ってどこ？」

楓がそう言っていると、少年は少々驚いた顔をして頷いた。

「そうです・・・！お願い・・・できますか？」

「まあ話聞いちゃった以上はしょうがないでしょ。それってどこ？」
「札幌です！」

場所を聞いた途端、楓の動きが止まった。何せ、ここは愛知県だ。札幌に行くのに一体いくら掛かるだろう。

しかし、動きが止まった時間はほんの一瞬だった。楓にはソラがいる。事情を説明するため、楓はソラの居る所へ向かった。

「ソラ！札幌にひとつ飛び・・・」

ひとつ飛びは出来なかった。何故なら、ソラは3日前から風邪をひいていたからだ。しかも今回の風邪はタチが悪く、入院中だったのだ。楓はそれをすっかり忘れていた。

ソラは、体が弱まると大きくなれない。あの大きさは健康な体だからこそ保っていられるのだ。弱っている時は、中型犬程の大きさでしかなくなる。

こうして楓は、飛行機で行かざるを得なくなった。

午前4時。

今札幌居に着いた。何故かそこには、三人の人間が立っていた。

白い息を吐きながら、楓がノロノロと口を開いた。

「・・・タクはなんでここに居るのかな？」

「なーに言っちゃってんだよっ！楓が行く先は、俺の行く先なの！楓の行く先なんてすぐわかつちやうんだよーん」

そんな事を言っているが、本当は楓の家での話をこっそりと聞いていたのだった。

ビュービューと風が吹く中、楓は言葉が出なかった。寒さで唇がかじかんでいるわけじゃない。拓羅の発言に呆れて言葉が出なかったのだ。

そのせいで、楓の周りにはピリピリとした空気が漂っていた。

そんな中、少年がビクビクしながら言った。

「あ・・・あの、じゃあこっち来てください。とりあえず建物の中に荷物を置いて、またここに戻ってきてください」

楓も拓羅も頷き、言われた建物の中に各自荷物を置いた。

そして最低限要る物だけを持ち、さっきの場所へ戻った。そこかしばらく歩くと、雪山が見えてきた。

本当に真っ白だった。ノリを巻いていないオニギリのようだ。

「ここです。ほら、吹雪が凄くないですか？」

確かに凄い。山の周りをぐるぐると回るようにして、雪が渦巻いている。

しかし、楓は一つの疑問を覚えた。

「・・・ねえ、どうしてあの吹雪、こっちに来ないの？」

「ああ。特殊なバリアが張られてるんですよ。あんなに凄い吹雪に攻め込まれたらこっち側の被害はとんでもない事になる・・・。だからこうして来ないようにしてあるんです」

「なるほどねえ・・・」

楓は納得し、頷きながら言った。

その時突然、誰かが二人を後ろから捕まえてきた。ゴツゴツした手だった。

二人はそのまま、バリアの向こう——雪山側へと放り投げられた。

「・・・・・・・・・・！」

ボスボスと音を立て、雪の上へ着地したが、もう外には出られなくなっていた。

「特殊なバリア、ってのはこういう事だったのね・・・」

「てめえ！何のつもりだよこのクソガキ！出しやがれっ！！」

「タク、体力の無駄だよ」

「そーそ。そんなに怒っちゃダメだよお？」

バリアの外から、少年がバカにした笑みを浮かべながら見ている。さつきまでとは全くの別人に見えた。

「ざっけんじゃねえよ！こりゃ一体何なんだよっ！？」

「くすっ」と笑った後、少年は大声で言った。

「ゲームだよ！俺が完成させた、最っ高のゲームだ！中に出てくる敵などはランダム、生きるか死ぬかは自分次第！勿論命がけのイベントもあるぜ！」

「じゃあテメツ・・・犬の話は・・・」

「嘘に決まってるだろ？あんな話真に受けてたのか？・・・ははっ！傑作だな！」

ゲラゲラと笑っている。そして続けた。

「あ、それからね、これ、命の保障は本っ当に無いから。これで生き抜いたら認めてやるよ」

少年は、そう言い残し、建物の中に入って行ってしまった。

「認めてやるってなん・・・くそ。行っちゃった」

「まあ、ずっとここでこうしててもしょうがないし、とりあえずは雪を遮れる場所探した方がいんじゃない？」

「・・・そうだな」

そして話し合いの結果、雪山で別々になるのは危険なため、一緒に探す事にした。

「楓、大丈夫か？」

「何が？」

「・・・や、寒くないかなーっと思って」

「大丈夫だよ。それにタクのが薄着じゃんか」

笑いながらそう言っていると、少し前に出た。

それは楓の「癖」だった。考え事などをしている時には、拓羅より一歩前に出てしまう癖がついていた。その癖のことは、拓羅も良くわかっていた。

「なーに考えてんだ？」

「・・・へ？なんで・・・？なんも・・・？」

「嘘付け。お前は考え事してる時には、癖もあるけど目つきも変わるだぞ」

自分も知らない事を拓羅に言われ、一瞬ギョツとした顔で見た。

「・・・いつ見てんのそんなとこ・・・」

ため息まじりで楓が言っていると、拓羅は白い歯を見せてニカツと笑った。

「で？何考えてんの？」

「・・・何、って言うか・・・特殊バリア・・・」

「バリア・・・って、あの？」

「そ。だってあれ、普通に考えておかしくない？」

「え？そうなのか？」

「・・・話すのやめてもいいかなあっ！」

「やつ、ちよつと・・・マジでわかんねえの！お願い！教えて！」

笑いながらもちよつとキレかけている楓に向かい、拓羅は顔の前で手を合わせた。いわゆる「お願いポーズ」だ。

そんな事をされてしまったら、楓の性格上放っておけるはずがない。しぶしぶ話し始めた。

「・・・あのバリア、建物側から入る事は出来てもこつち側から出る事は出来なかったでしょ・・・？」

「・・・あつ、そつか！だから・・・」

「うん。あんなの誰が造れる？」

「わかんね。・・・あれ？んじゃあダメじゃん！」

「は？」

「じゃあ誰が造っ」

「だーかー！それがわかれば苦労しないでしょーがっ！」

そんな情けない会話を繰り返しているうちに、雪から身を守るのに適当な洞穴を見つけた。二人して安堵のため息をつき、中に入った。中は特別広いわけではなかったが、二人なら少し余裕があった。中に入ってホツとした途端だった。

すぐ近くで物凄い音がした。爆発音ではないようだが、それに近いような音だ。しばらくは地面が揺れたような気がした。

落ち着いてから外に出てみると、白いスモークに包まれた、犬のような生き物がいた。

そのスモークも、やがて吹雪によって掻き消された。出てきたのは、「犬」と言うより「ケルベロス」と言った方が確実に近い生き物だった。

頭から背中まで長い毛があり、四本足全くと尻尾の付け根には、黒くて太い枷のような物が付いていた。そして走ってきた二人を何秒か見つめた後、ソイツは口を開いた。

「お前ら、カエデとタクラか？」

「え？あ・・・や・・・。そう、けどなんだよ？」

オドオドしながら拓羅が言つと、ため息をついた後、

「・・・ガキか」

と呟いた。それを聞いた拓羅は、目を見開いてソイツを睨んだ。

「なんだとコラ！俺らがガキならテメエは何だよ！？犬ツコロじゃねえか！この犬犬犬・・・」

「ムッ！敵！」

「つて聞けよテメエ！」

拓羅の言葉を無視し、ソイツは口から炎を吹き出した。後ろから迫っていた敵の腹に炎を命中させ、ものの数秒で倒した。そしてもう一度二人の方を向きなおし、口を開く。

「さて、と。遅れたな。オレはファングだ」

第3話 『称狼』

「これからはお前らのパートナーだ、よろしくな。で、今からどこに行くんだ？オレは・・・」

「おいっ！待てよ！フアング・・・だっけ・・・？」

「なんだ？オレは一步も動いてないぞ」

「そーゆーことじゃなんだよ・・・」

一人と一匹はその場で睨み合った。しばらく沈黙が続き、先に沈黙を破ったのはフアングだった。

「ケッ！」

「・・・・・・・・！！！」

その明らかにバカにした笑いで、拓羅の怒り度はMAXとなった。

「デメエ！殺すぞ！このクソ犬、殺すぞ！あアン！」

拓羅が歯をキリキリとこすり合わせながらフアングの頭上で「グー」を作った。しかしフアングも怯まない。

「フン。誰がクソ犬だ、このクソガキ」

拓羅の頭の血管が切れる音が、真っ白な空間に響いた。そしてフアングに飛び掛る。が、フアングはさりとかわした。あっさりかわされてしまった拓羅は、頭から雪の中に突っ込んだ。

「・・・・・・・・ちつくしよ・・・・・・・・んのヤロオ・・・・・・・・！」

それでも拓羅は懲りてないようだ。自分の上に覆い被さってきた雪を払い除けると、またもフアングに向かっていった。走ろうとした時、その頭を楓に殴られ、ひとまず終わった。

気絶したままの拓羅を引きずり、洞穴まで戻る。

「はー・・・・・・・・先が思いやられるわ・・・・・・・・」

「コイツが悪いんだぞ」

「はいはい、わかったわかった。・・・ってかフアングさあ、なんでここ来たの？パートナーとか言ってたけど・・・」

「称狼様の命令だからさ」

「シヨウロウサマ？」

「んー・・・なんつーかな・・・、まあオレらのボスって言うか、リーダーって言うか。称狼様の後ろにももう一人居るんだが、その人が称狼様のボス。でもオレはあまり好きじゃないんだ」

「ふうん」

楓は、分かったような分かってないような曖昧な返事で済ませた。その時拓羅が目を覚ました。

「あ、タク」

「・・・ここ、どこだ？」

「最初に来た洞穴」

「・・・あー・・・」

拓羅がまだ眠そうにしている中、ファングが声をあげた。

「！あれ、なんだ？」

二人はファングの見ている方を見た。何故か地響きがしている。よく目を凝らして見てみると、白い物体が押し寄せてきていた。緊迫感に包まれている中、拓羅が震える口を開いた。

「・・・あれ・・・、雪崩か・・・？」

それは今、楓もファングも一番言われたくない言葉だった。しかし、どれだけ願っても起こってしまった目の前の現実は変えられない。このまま穴の中に居たら、雪に出口を塞がれて凍死、又は飢え死にしまうだろう。そんなふうにして死ぬなんて、この世に未練たらたらで成仏なんて出来るはずが無い。

二人と一匹は、とにかく逃げた。全速力で逃げた。後ろからは、絶え間なく危険を告知する音が聞こえていた。少しでも気を緩めれば、すぐに白い怪物に追いつかれ、餌食となるだろう。ファングはそんな中考えた。ここで全滅してしまつては元も子もない。

（オレがコイツらを守ってやる・・・！）

そう決め、少しスピードを速める。数秒で二人の前へ出た。だがそれだけでは時間的に足りない。思い切り走り、二人よりも何キロ

か前に出る。雪崩の方を向き、肺がはち切れるほどに息を吸いこんだ。透き通るような冷たい空気が、喉を通って肺へと引きずり込まれる。

この吸った酸素を、フアングの体内で炎に変え、それを吐き出す。そうしてフアングの魔法は成立するのだ。段々と口から煙があがってきた。準備OKの合図だ。丁度良く、楓と拓羅がそばに来た。

「お前らは先に行け。なるべくオレの真後ろ走って行け。真ん中だけしかガード出来ないかもしれない」

二人を先に行かせる。そして対決の時が刻一刻と迫ってきていた。タイミングを見計らい、口を大きく開けて、口内から体内から全ての炎を出した。

第4話 『称狼』 2

しかし、全てを出し尽くしても一部が溶けるだけで雪崩がおさまる事は無かった。もう一度炎を出す準備をしようと思っても、時間が無い。

その瞬間、ファングの頭の中は真っ白になった。

絶体絶命だ――。

(・・・ダメだ。どうしようもねえ)

目を瞑った。もうすぐ身体に物凄い衝撃が走るだろう。だが、それが過ぎればすぐ楽になれる。

覚悟を決めた。

――だがいつまで経ってもこれっぽっちも衝撃なんて来なかった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・？」

恐る恐る目を開けてみる。

周りを見回しても、ついさっきまでの雪崩など無かったかのように静まり返っていた。

「なんで・・・」

「なっさけねえなあ！」

声がした。驚いたファングが振り向くと、そこにはキツネが居た。そう、このキツネこそが、ファングの命の恩人なのだ。

ファングは、このキツネを覚えていた。ファングと同じように称狼の所に居たキツネ形の使者、「坤」だ。

「・・・坤っ！」

さつきよりも更に驚いた顔で、フアングは坤を見つめた。

「久しぶりだな、フアング」

「おまつ・・・なんでここに・・・!?」

「お前と同じ。称狼様からの命令だ」

それを聞き、フアングは一瞬ドキリとした。称狼が、一人の使者の居る所にもうひとり使者を送る時は、敵同士となるケースもたまにあるからだった。

フアングは坤と敵同士になるのか、と思い、掻きたくも無い嫌な汗を掻いた。

「あ、言つとくが悪い知らせじゃないぞ」

「え？」

フアングの心を読んだかのように、坤は笑いながらそう言った。

安心したフアングは、「なんだ・・・」と呟き、続けた。

「で、なんの知らせだ？」

「えっとな、カエデって人とタクラって人に・・・」

「おう！俺らか？」

走ってきた拓羅が、自分を指差して言った。

「えと、多分・・・じゃあそうかな？あの子、お前らの試験は終わった、入口に戻って来い、との事だ」

「・・・試験だったんだ？これ・・・。っていうかあたしら何かしたっけ？」

拓羅の横に並んで聞いていた楓が言う。それを聞いてフアングは、即、首を横に振った。

「いんや。なんも」

「まあいいじゃねえか！出すつつってんだからよ。早く行こうぜ！」

坤に入口までのガイドを頼む。その場から2キロ程歩いたところに、最初の場所、入口があった。こうして考えてみると、この雪山周辺はさほど広くはないようだ。

まず最初に、拓羅がバリアに向かってそつと足を出してみる。何も

ないかのように簡単に出られた。どうやらこのバリアは、称狼によつて操作されているようだ。

「・・・出れた・・・」

確かめるように、彼は自分の両手を広げてみた。そして喜んだ。その時、後ろから誰かの視線を感じた。

「・・・！」

振り向くと、そこには楓の家に来た少年が立っていた。

「・・・テメエ！あの時のクソガキッ」

「拓羅っ！貴様称狼様に向かつてなんて口の聞き方だ！」

「え・・・？」

楓と拓羅は、同時にフアングを振り返った。

「・・・じゃ・・・フアングが言つてた「称狼様」って・・・」

「そうとも！この方こそ恐れ多くも称狼様であるぞよ！皆の者、頭が高い！」

フアングは少しふざけながら言つたが、それに突っ込む人間はいなかった。楓と拓羅はカルチャーショックを受けていたのだ。開いた口が塞がらない。

自分たちをハメた張本人が、自分達のパートナーの尊敬している人なのだ。

「フアング、坤、ご苦労様」

称狼がフアングと坤の頭を撫でている間に、開いたままだった口を手で閉じて、拓羅はずっとブツブツ言っていた。

「・・・称狼・・・？って・・・まさか・・・」

「・・・タク？」

「おっ・・・おおおお前もしかして・・・薙・称狼っ・・・？」

「え？ああ・・・そうだけど・・・？」

「は？・・・薙・・・って・・・」

「楓、覚えてないか？・・・俺の弟だ・・・」

「・・・え？・・・じゃ、お前、薙せいはん氐か？」

「おう・・・」

それを聞いた二人と二匹は、拓羅の方を呆然と見ていた。

第5話 『称狼』 3

(回想)

(くそっ・・・！)

空き地での出来事だった。

三人程の男子が、一人の男子を囲んでいる。

囲まれているのは称狼だった。

「弱えな、お前！」

「もう行こうぜ」

三人の男子は称狼を地面に叩きつけ、バカにした笑いを見せて去ろうとした。

その時だった。

「コラッ！何度言ったらわかんのか！？称狼いじめんなっつてんでしょ！」

突然、称狼の前に人が立ちはだかった。

楓だ。

「げっ・・・鬼ババ・・・」

三人の男子のうち、一人が声をあげた。その一言で、楓の逆鱗に触れてしまった。楓がそばにあった石を掴み、思いっきり投げると「鬼ババ」と言った男子の背中に直撃した。

「いでえっ！」

顔をぐしゃぐしゃにして泣きながら帰ろうとすると、次は三人の前に男が立った。

これが拓羅だ。

「お前らな、人の弟殴るだけ殴って帰ろうだなんて虫が良すぎるんじゃないねえのか？あアンツ！」

わざと「コワイ顔」をしてビビらせると、三人は悲鳴をあげて一目散に逃げていった。そして称狼のそばに行き、手を差し伸べた。称狼は顔を伏せてその手を掴む。腕を引き、立ち上がらせると、拓羅が真剣な顔で言った。

「やられたらやり返せ。いつまでも甘えてられると思うなよ」

「・・・・・・ごめん・・・・・・」

兄弟のやり取りに、楓は口出ししなかった。ただ横で見ているだけだ。拓羅はあえて称狼に厳しく接しているのだ。

そして三人で帰っていく。これがいつもの光景だった――。

「・・・・・・つてわけ」

称狼が横を見た。今、ここは北海道、札幌だ。横には、拓羅、楓、フアング、坤が居た。

「俺も結構兄貴達に助けられてたんだよなあ・・・・・・」

遠い目をして思い出に耽る称狼の横で、楓と拓羅は内緒話をして
いる。

「思い出した。何度も助けてたわ・・・・・・。て事は何？これぞ恩を仇で返してんじゃないのよ。なんなのよそれ。最低じゃない？理不尽じゃない？」

「そうだよな、完璧に思い出したぜ。昔はあんなにチンチクリンの弱虫だったのに・・・・・・。なんであんな子に・・・・・・。そうか！楓、お前の教育方針がいけないんだ！」

「あたしかい！」

話していると言うより、愚痴をこぼしている二人の間に称狼が割って入ってきた。

「ま、キミ達、疲れてるだろ？休んでてくれよ」

それを聞いたとき、楓と拓羅は同じことを思った。

（疲れさせた張本人のクセに何抜かしとんじゃコイツ）

だがまあそんな事を思っても仕方がない。疲れているのは事実だった。休もうと思ったその時、後ろからドシドシと音がしてきた。

「称狼様ーッ！」

太く低い声で叫びながら走ってきたのは岩の塊にも見える「ゴーレム」だった。恐らく、最初の時に雪山に楓たちを放り投げた者だろう。その証拠に、ゴツゴツした手だ。

「なんだ？ゴーレム。どうした？」

「ボスが・・・称狼はまだか、とお怒りです！」

この「ボス」とは、二度目の洞穴でフアングが言っていた「称狼の後ろに居る人物」だ。

「そっか・・・すっかり忘れてたな・・・」

少し頭を抱えて悩んだが、すぐにゴーレムの顔の前で三本指を突き立てた。

「三日だ。あと三日待つてほしいと言ってくれ」

「わかりました」

ゴーレムが去った後、拓羅は称狼の方を向いて言った。

「なんだよ称狼。ボスってなんだ？俺達どーなんだよ？」

「アンタらとはにかく休んでおけばいい」

称狼はそう言ったが、それでは拓羅も納得できない。

「どーなってるのかちゃんと説明しろよッ！」

「休めつつってんだろ。ぐーすか寝てりやいいんだ！」

その言葉の後、拓羅の鳩尾みぞおちに硬い物がめり込んだ。それは称狼の拳だった。勿論手加減はしてあるが、気絶させるには十分な強さだった。

「タクツ・・・！称狼説明しなさ・・・」

そこまでしか言えなかった。

楓の鳩尾にも、拓羅と同じように拳がめり込んだのだ。そのまま、その場に崩れ落ちる。

二人の体は、ゴーレムによって建物内に移された。

第6話 『称狼』 4

数時間後、先に目を覚ましたのは楓だった。

ムクリと上半身を起こす。まだ眠そうな目を擦りながら辺りを見回した。

隣では拓羅が気持ちよさそうに熟睡している。

（暢気だ・・・）

そう思いながら拓羅を見ている楓の視界に、突如ファングの顔がニョキッと現れた。

「うわっ！」

「へへっ。ビックリしたか？」

ファングは一度ドアの外に出たかと思うと、おぼんに乗せられたご飯を持ってきた。持ってきた、と言うよりも、おぼんごと鼻で押してきた。

「飯だ。食いたくなったら食ってくれ。ここ、置いとくぞ」

「ありがとう」

照れたように「へへ」と言い、楓のかけ布団の上に丸まった。

「・・・なあ、称狼様って幼い頃どんくらい弱か・・・」
「・・・あれ・・・？」

言いかけて、ファングは目を泳がせた。そして再度口を開く。

「拓羅は称狼様の兄貴だろ？んで、楓も一緒になって助けてたって事は・・・お前ら、親戚とかそなんん？」

「親戚？・・・違うよ。ただの幼馴染。言ってなかったっけ？」

「いつ・・・言われてねえよ！聞いてねえよっ！」

「あれ？そうだったっけ？ゴメンゴメン」

「んでも「薙」なんて名字、日本じゃ聞いたことねえよな？」

「そりゃそうだよ。あたしら生まれは中国なんだし」

無論、ファングはそんな事一言も聞いていなかった。話について

いけずに固まっている。

彼の頭の中の世界地図には「日本」と言う国しか載っていないのだ。新しい国の出現に、フアングの頭の中は「？」マークで埋め尽くされていた。

「ちよつちよつちよつと待て。なんなんだ？中国つて・・・」

「な、なんだ？つて聞かれてもなあ。他の国だよ」

「他の国・・・「チュウゴク」なんてあったのか・・・」

こうしてフアングの世界地図に、新しく「中国」と書き足された。

「他の国でも今オレらが話してるような言葉で話すのか？」

「ううん。中国語」

「じゃあなんで今の言葉が話せてる・・・？」

「え・・・そりゃ勉強したから・・・」

「勉強で話せるようになるのかっ？」

「さあねえ。なんとかなんじゃない？現に今あたし日本語話せてるし・・・」

「・・・ほおお・・・」

そう言われてみれば、言葉がカタコトになっているときも、たまにだがあつた。しかし日本語が上手いか下手かと言われれば、断然上手い方に入る。

「こつちにはいつ来たんだ？」

「えーとね・・・何年前だっけ・・・」

楓は天井を見て指折り数え始めた。

「・・・五年前・・・？かな？」

「五年間ずっと勉強尽くしか？」

「んなわけないじゃん！そんなん逆に頭イカレるつて。そうだなあ・・・。最初の二、三年くらいかなあ」

「そんな短期間で出来ちゃうのか・・・大変じゃなかったか？」

「そりゃあ最初はね。言ってる事全っ然理解出来なかったし」

「でも今はペラペラだ、スゲエ。・・・なあ、今でも「チュウゴク語」話せるのか？」

「……んー……もう忘れた！」

「……話せるんなら聞いてみたかったけどなあ……」

一瞬楓の動きが止まった。ファングにはわからない変化だったが、楓の表情は少し重くなっていた。

横で声がした。拓羅が目を覚めたのだ。

「んーっ……あー……」

両手を突き上げ、伸びをする。

「……あ、タクおはよ」

「……うはよ……」

楓と同じように、目を擦りながら辺りを見回し、二人を見つけるとちよこんと頭を下げた。まだまだ眠そうだ。拓羅が頭を上げるのと同時に、ファングも立ち上がる。

「じゃ、オレは向こう行くぜ」

そう言って部屋を出て行った。中には二人だけが残された。

第7話 『称狼』 5

ファングの影も見えなくなると、拓羅がノロノロと口を開いた。

「・・・楓、俺らどうなると思う?」

「さあ? まあ一番重要そうなのは称狼の言ってた三日待ってくれ、
って言葉じゃない?」

「ふんふん」

「称狼はさ、なんで愛知に来てまであたしらをここに連れてきたんだと思う?」

「そりやお前、ゲームに参加させるためだろう?」

「それだけじゃないと思うんだよねえ・・・」

「なんでだ?」

「だってゲームって言ったって、じゃあなんであたしらなワケ? 他にも近場に色んな人が居んのにさ。参加人数稼ぎたいだけならもつと別の人だって良かったわけでしょ? でも愛知にまで来た。で、あたしらを連れてきた。嘘までついてね。そうなったら裏があるとか考えらんないっしょ」

「・・・確かにな。・・・もしかして、「ボス」って奴は俺らを狙ってる・・・?」

楓は、首だけを動かして拓羅の方を見た。そして頷く。

「その可能性はあるかもね」

「でもなんのためだよ? メリットなんてなんもねえじゃねーか」

「さあねえ。ソイツが考えてる事なんてあたしにわかるわけ無いじゃん」

「まあ・・・そっか。んでもどんな奴なんだろーな?」

ウキウキした顔で見つめる拓羅をチラリと見てから、「知るわけない」とでも言うような顔で、ため息をついた。そんな楓を放って拓羅は続ける。

「きっとブクブク太って、メガネかけて・・・」

そこまで言うと、拓羅の動きが止まった。同時に楓も止まる。二人でドアの方をじっと見つめたまま、ピクリとも動かない。部屋にはピリピリとした空気が漂っている。そんな中で、ようやく拓羅が口を開いた。

「今・・・音、したよな？」

「うん・・・」

そう言うと、楓は何かを感じたかのように布団から飛び出た。そのまま後ろへ下がる。

本当に次の瞬間だった。物凄い音をたて、部屋の壁が砕けた。今まで楓が居た場所は、ガレキで埋まってしまった。

拓羅と楓が顔を見合わせたその時、外から何者かの足音が聞こえてきた。足音は迷わず二人の居る部屋に向かってきていた。二人とも、瞬きもせず、息を殺して穴の開いた壁の外を睨んだ。

その足音は人間の物ではなかった。聞き覚えがある。

足音の正体は――

「ゴーレムッ！」

ファングの声だ。同時に穴からゴーレムが姿を現した。その後ろからファングが駆け寄ってきた。ゴーレムの上を高くジャンプし、二人の前に立った。

「何してんだゴーレム！おま・・・」

ゴッ、という音と共に、ファングの体は壁に叩きつけられた。そのままずり落ちる。よろめきながらも四足で踏ん張り、体制を立て直す。そしてゴーレムに向かって口から炎を吹き出した。

しかし、どうやらゴーレムは自分の体の周りにバリアのような物を張っているようだ。ダメージを受けていない。

「くっそ！これじゃあ攻撃の仕様がねえっ・・・！」

もう一度炎を出そうとするファングの後ろから、坤が走ってきた。

「ファングーッ」

「坤・・・！」

「ゴーレムの奴、操られてるぜ！」

「なんとか助ける方法無えのか？」

「ダメだ。もう体内にPBDが注入されてる・・・！」

「PBDだと？・・・一体誰が・・・」

「多分、ボスだと思う」

「くそっ！あの野郎・・・！どういつつもりだ！」

ファングの顔は、怒りの感情で溢れていた。そこに、ゴーレムの攻撃を避けながら楓と拓羅も来た。

「ファング、アイツ・・・」

「ああ。ゴーレムだ。PBDが入って操られてる」

「・・・なんだ？PBD？」

「『puppet・battle・die』の略だ。PBD。操って戦わせ、死ぬ・・・。PBDは体内に注入されたが最後、殺さない限り治らないんだ」

「セコイな、おい」

「んな事言ってる場合じゃねんだよっ！なんとかしてゴーレムの暴走を止めねえと！」

「二匹で攻撃すりゃいいじゃねえか」

「ダメだ！ゴーレムの周りにはバリアが張ってあつて・・・」

「ファング！」

声がした。後ろを振り向くと、称狼が走ってきていた。

「！・・・称狼様、危険です！向こうに・・・」

「ゴーレムのバリア・・・」

「・・・え？」

「アイツのバリアは前や横からの攻撃に強い代わりに、後ろからの攻撃は弱いんだ。しかもゴーレムが攻撃をする時、一瞬だがバリアが解かれる！そのタイミングを狙え・・・！」

「・・・なるほど・・・。ありがとうございます！坤、行くぞッ！」
「おうっ」

ファングと坤は、並んでゴーレムの方へ走っていった。

（楓達の居る部屋には称狼様も居る・・・。なんとかしてゴーレムを他のところに行かせねえと！）

考えているファングに向かって、坤が言った。

「ファング、オレがオトリになる。オレがゴーレムを引きつけて、攻撃させるようにしてみるからその間にお前が・・・」

それ以上言う必要は無かった。坤と目を合わせ、ファングは力強く頷いた。

死

坤は勢い良くゴーレムの目の前に飛び出した。後ろではファンゲがスタンバイしている。

(頼むぞ……… 坤ッ！)

煙を出しながら、炎の塊を口の中で転がす。

（悪いな、ゴーレム。だがやるしかねえんだ！）

坤は両手を突き上げた。

次の瞬間――何を考えたのか、踊りだした。

「らんらんらんハイキングううらんらんらんやぎさんもお
 メエーメエー・・・」

一氣に肩の力が抜けた。ファングも固まってしまった。しかし、勿論これも坤の作戦のうちだ。

段々とゴーレムもストレスが溜まり、拳を振り上げた。

「やれ、ファングッ！」

その坤の声と共に、ファングは炎を吹き出した。

「グオ……！」

称狼の言った通り、後ろのガードは弱かった。バリアを突き破り、ゴーレムに当たった。だがゴーレムも一度当たっただけで易々と倒れるほどヤワではない。

「ちっ・っ・っ」

やむなくファンゲは火力をあげた。火力はファンゲ自身が自由に
変えられる。今回は最大出力だ。勿論火力によってファンゲの体力
も減っていくが、そのくらいのリスクは仕方が無かった。

燃え盛る炎の中、ゴーレムが悲鳴をあげている。ゴーレムと仲が良かったファングと坤は、それが耐えられなかった。今すぐにでも炎を止めてやりたかったが、そうすると今度はこっちが攻撃される。

—— 殺らなければ殺られるのだ。

じきに、ゴーレムは火だるまとなった。もうこれ以上炎を吹く必要は無いだろう。

「ウ・・・グッ・・・オオオオオオッ！」

転がりながら悲鳴をあげる。その時、ゴーレムは自分の胸の四角いボタンを押した。坤にはそれが何なのかすぐにわかった。

自爆ボタンだ——。

第9話 『死』 2

押した後、ゴーレムはゆっくりとファングの方へ向かった。ファングには、ゴーレムが何を押したのかはわかっていないようだ。

「ヤベツ……！」

坤が駆け出した。ゴーレムの横から周り、ファングのすぐ近くにきた。そしてそこから思いっきりジャンプする。ファングに体当たりするようにして避けさせた。

間一髪だった。

今まで、ついさっきまでファングが居た所で爆発が起こった。

「……自爆ボタン……だったのか……？ 危なかった。坤、さんきゅ……」

次の瞬間、ファングは凍りついた。坤の姿が見当たらない。

「まさか……！」

ファングの頭の中には、坤の姿が無い二つの理由が飛び出てきた。一つは、寸前で別方向に逃げたのか。

そしてもう一つは——爆発に巻き込まれたか。

勿論ファングとしては前者を強く望んだが、いくら辺りを見回してもそれらしき姿はどこにも見当たらなかった。

「……こつ……坤……？」

震えた声で呼んだ。だが、返事はない。いよいよ爆発の起こった場所へ行った。ガレキの山がいくつもあった。やはりゴーレムは自爆したようだ。片足だけが黒焦げになってそこに転がっていた。

しかし、ファングの視界にそんな物が入っていなかった。今は坤を見つけ出すので精一杯だった。

「……坤……？」

もう一度呼んでみる。すると、すぐそこで声がした。ファングの

顔が一気に明るくなる。

「坤？・・・坤ッ？」

その場で何度も名前を呼んだ。何回目かようやく再度声がした。
「・・・・・・・・・・フアング・・・・・・・・・・？」

その声はかすれていた。坤はフアングの目の前に居た。ガレキの山から顔だけを出して。

顔は血まみれだった。口から、目から、赤黒い血を出している。

そんな親友の変わり果てた姿を見て一瞬絶句したが、フアングはすぐに声を出した。

「・・・・・・・・坤！大丈夫か・・・・？待ってろ、今すぐ助けるから！」

さっきよりも更に震えた声で叫ぶフアングを見て、坤はフツと笑った。

「さんきゅ・・・・でも、もうダメなんだ。足はブツちぎれてるし・・・・口ん中は血の味でいっぱいだし・・・・」

「何言ってんだよおっ！諦めんなよ！絶対助け」

「いんだよッ！」

そう叫ぶと、坤は口から大量の血を吐き出した。それでもまだ続ける。

「このガレキ・・・・オレでかろうじて止められてんだ・・・・。オレ抜いたら・・・・崩れ落ちる・・・・。お前まで死ぬぞ・・・・」

「だけどっ」

「お前は、こんなとこでくたばっちゃダメなんだ・・・・・・・・。無駄死にすんなっ・・・・・・・・。んなことしたら・・・・絶対許さねえからな・・・・・・・・」

そう言って歯を見せて笑った。フアングも震えるのをこらえて笑う。それが坤との最後の会話だった。もうそれ以上、坤の口から言葉が出る事は無い。そう考えた途端、フアングの目から涙がドンドン流れ出てきた。

「・・・・・・・・坤ッ・・・・・・・・！」

その後、わかっていても何度も名前を呼んだ。無論、そのファン
グの震える声に応えることは無かった。

第10話 『憧れの修学旅行！・ファングもついてくぞ・』

坤の死後、敵が全く来なくなった。平和なまま一週間が過ぎようとしていた。

「楓ー暇なんすけどぉー」

「オレも。暇なんすけどぉー」

「あーもー！ピーチクパーチクうるっさい！」

「ピーチクパーチクじゃねえもん！オレオレだもん！」

「そーだ！オレオレだ！」

「はいはい。もーいーよ、なんでも」

いつものようにため息まじりでそう言った。

ファング達は今、何故か楓の家に来ていた。シンプルな部屋だ。

ファングと拓羅は、丸い小さなテーブルを挟み、向き合って座っている。楓は家中を忙しく歩き回り、家事をしていた。洗濯機の中に洗剤を入れている時、はたと気が付いた。

一人首を傾げながら呟いた。

「・・・なんであたしがこんなセコセコ働かなきゃなんないんだ・・
・？ってつかあたしは二児の母か？」

洗濯機に向かって話しかけても応答は無い。ひたすらグルグル回っているだけだ。しばらくして、一人と一匹が居る部屋に向かった。

「あ、楓！遊ん」

「居候！働きなっ！」

「・・・・・・・・・・・・はい？」

そう言うわけで、拓羅は家事を手伝わされていた。まあ当然と言

えは当然だ。自分の家がすぐ隣だという事も忘れて、懸命に手伝った。と言うより、手伝わざるを得なかった。ファングは手が無いため、一匹でちょこんと座って、泣き泣き手伝う拓羅を見ているだけだった。

そんなこんなで更に一週間が経過した。

今日はすっかり忘れ去られていた学校がある日だった。朝早く――6時頃、フライパンを玉じゃくしで叩く音が響き渡った。

ガンガンガンと耳元で鳴らされるので、ぐーたら寝てなんていられない。強制的に起こされたファングと拓羅は、しばらくゴロゴロした後、朝食を終えた。そして楓と拓羅は学校へ行く準備をする。忙しさに興奮したファングは、ベラベラと喋り、その周りをただグルグルと回るだけだった。

「なんだ？なんなんだ？ガツコってなんだ？なんだ？ニワトリの一種かっ？」

それを繰り返し、二人の周りを何周も何周も走っていた。

「じゃー行ってくるね。留守番よろしくっ」

ボタンとドアを閉める音が犬一匹しか居ない家に寂しく響いた。

「……………つまんねっ」

そう言った数秒後、ファングの目は「イタズラっ子の目」と化した。

第11話 『憧れの修学旅行！・ファンゲもついてくぞ』 2

校舎内にチャイムが鳴り響く。放課だ。久しぶりの学校と勉強にぐったりしている楓のもとに友人と思われる女が一人近づいていった。

「かーえーでっ！明後日から修旅だね！一緒にまわろうねっ」
ワクワクした顔で寄ってくる友人を見て、あくびをしながら応えた。

「んー・・・はいはい」
「わーいっ！」

楓は、そういう「一緒に行こう」とか「一緒に走ろう」とか「一緒にまわろう」とか、そういうのが好きではなかった。特に理由があるわけではないが、なんとなく「ウザイ」ようだ。しかし今のうちに、嬉しそうにされるとつい断れない。

だが、拓羅の場合はキツパリ断る事が出来る。

「楓えっ！しゅーがくりよこーだってなあ！俺っちと一緒に」
「結構です」

即、そう言っただけで席を立つ。フラれた男は今や誰も座っていない空間に向かって瞬きを繰り返した。

「・・・そ・・・ですか・・・」

一羽のカラスが鳴いた。

午後六時。

高校生で溢れている商店街を、男と女、拓羅と楓が歩いている。

「学校、どうだった？」

「なんで？」

「や、なんとなく・・・」

「・・・疲れたの一言・・・」

「やっぱなあ。一日中疲れた顔だったもんなんっ」

拓羅がヘラヘラ笑う。この男の辞書には「疲労」と言う文字が無いのだろうか。

楓と拓羅が住んでいるのはマンションだ。商店街の道を一本横に入り、しばらく歩いた所にある。どちらも、そのマンションの2階だった。楓がドアを開ける。入ろうとしたその時、ボタンと音を立ててドアがひとりでに閉まった。

「・・・・・・？」

この奇怪な現象に、楓と拓羅は目が点になった。もう一度開けてみる。が、やはり勝手に閉まった。試しに拓羅がやってみても、それは同じだった。

「・・・なん、で？」

ドアを見つめて立ち尽くす拓羅の前に、楓が立ってドアを叩いた。「フアングッ！中居んでしょっ？開けなさいよッ！」

ひたすら叩くと、中から声がした。紛れもなくフアングの声だった。と言うか他の者の声がする方がおかしい。

「だってお前からオレ置いてガッコつてとこ行っちゃったもん！」

「・・・はア？ちよつと待ってよっ、学校に犬連れて行けるわけないでしょ」

「いーんだ！いーんだ！オレなんかっ・・・」

もうそろそろ楓の血管が切れる頃だ。

「男のくせにグジグジすんなっ！こんのクソ犬クソ犬クソ犬うううっ！」

と、いつもなら言うところだが、今回は違った。ここで怒ってしまつてはフアングがドアを開ける事はないだろう。

「・・・フアング、お願い開けて。このままじゃあたしら凍え死ぬよ？」

「だっ、だからなんだよ？」

「そうだったらファング、ご飯食べらんなくなるよねえ。棚に手え届かないし」

「・・・う・・・」

「て事は、あたしらが凍え死ぬ代わりにファング飢え死にだよ。そんでいーのお？」

それはファングも困るだろう。しばらく、楓はファングの返事を待った。そして返ってきた。

「いつ・・・いいぞ？別に！」

その返事がきた途端、楓のこめかみに「ムカツキマーク」が二つ付いた。それを後ろで見ていた拓羅が慌てて動いた。

「おいファング！いい加減開けるよっ！でないとお前、このドアごと吹っ飛ぶぞ！」

「そんなに凶暴じゃないわよっ！」

失敗だ。逆に怒らせてしまった。

「開けないもんねーっ」

「・・・っつーかこれイタズラのつもりかよ？」

「おう！一生懸命考えたんだ！」

ファングは自信満々に言った。ファングにとっては最高のイタズラだったが、楓達にとってはなんとも幼稚なイタズラだった。

「・・・ああそうかよ」

拓羅はそう言うと、小声で続けた。

「楓、ひとまず俺ん家来い」

「へ？」

「押してダメなら引いてみるっつうだろ？早く」

そう言うと、拓羅は一度階段を下りるフリをした。音を鳴らして騙す気なのだ。階段の途中まで下り、その後忍び足で再度上がった。

「よし、これでOK。俺の家に」

拓羅の動きが止まった。

「・・・タク？どしたの・・・？」

「・・・・・・・・ええーつとお・・・・俺・・・・」

「何？」

「鍵・・・・楓ん家に置きっぱだったや・・・・・・あっはっはっはっは・・・・」

「意味無いじゃんっ！」

「スマン」

そして二人は、また楓の家のドアの前に行った。ドアの前に座って、何か手は無いかと考えた。

約2時間半————寒空の下考えた。

二人で考え付いた方法はこれだった。

「フアングー、ここ開けてくれたらあたしら、フアングの言う事なんでも聞くよ。そんでどー？」

計算通り、フアングはその言葉に見事食いついてきた。

「なんでもっ・・・・？」

ニヤツと笑うと、楓は続けた。

「そ。なんでも！まあ不可能な事以外だけどね？」

「・・・・不可能な事ってどんな事だ？」

「ええ？んー・・・・金くれとか何か買ってとか・・・・」

「おーう。それなら大丈夫だ！オレ金なんて要らねえもん！わかった、開けてやる！」

フアングは意外にもあっさり開けてくれた。ガチャガチャと音がしている。ドアには仕掛けが付いていたようだ。

「よし、じゃあなんでも言う事聞けよっ？」

「いーよ」

するとフアングは、少し間を開け、再び口を開いた。

「・・・・・・・・シューガクリョコー、つてのに連れてけ！」

楓と拓羅は、それを聞いた途端固まった。一体どこでそんな情報を仕入れたのだろう。しかも、フアングは大きい。普通の犬より大分大きい。そして下手したらカバンが燃えるかもしれない。こんな危険な生き物をどうやって連れて行けと言うのか。

「・・・フアング？あのね？それは・・・無理！」

「何っ？嘘付くのか？お前言ったよな？なんでも言う事聞く、って！」

「確かに」

拓羅が頷く。

「そっ・・・そりゃそうだけどっ・・・これは不可能な事なんだからさっ・・・出来る事と出来ない事があんのよ」

「確かに」

またも拓羅が頷く。

「じゃあお前、撤回すんのか？自分の言った事取り消すのか？そんなの卑怯に値するってもんだ！」

「確かに」

「だからそうじゃなくてっ！」

「けどお前は言ったぞ。不可能な事って言うのは金を使う事なんだろう？て事はこれは可能な事になるじゃねえか！でも取り消すのか？それはやっぱり卑怯なんじゃないのか？違うのか？オレの言ってる事間違ってるのか？」

「難しいな。うんうん」

「・・・や・・・間違っではない・・・けど・・・」

「けどなんだ？けど、なんなんだ？そうやって言い訳するの catt？」

「うーむ。そうだな」

「にっ・・・人間にだって出来る事と出来ない事があんのよっ」

「おうおう」

拓羅が頷く。その時、一人と一匹に睨まれた。

「拓羅、お前さっきからうるさいぞ！」

「そーよっ一体どっちの味方よアンタッ！一緒に考えたくせに！」

「え．．．え、俺コウモリ」

「はア？」

「．．．とにかく！それが出来ないんだったら出てけよ！オレはそれを条件にお前らを入れたんだ！」

「っていうかここ、あたしの家だし！何が悲しくて自分家他人に追い出されなきゃなんないのよ！」

「問答無用！」

ファングはドアを開け、二人を追い出すと、鍵を閉めた。

「失敗．．．だな．．．」

「っうー．．．寒いっ！どーしよ．．．」

「．．．仕方ない。OKするしかねえだろ。大体お前があそこであーだこーだ言うから」

腕をさすってる楓に向かって拓羅がそう言っていると、彼女はムツとした表情で頬を膨らませた。

第12話 『憧れの修学旅行！・ファングもついてくぞ』 3

今日は修学旅行の日だ。皆ワクワクした顔で話しているが、その中の二人だけは違った。

存知の通り、楓と拓羅だ。二人とも近寄り難いオーラを放っている。そう。拓羅のカバンの中にはファングが入っているのだ。

(・・・重いぞチクショウ・・・)

拓羅ばかりが苦勞しているように見えるが、楓も苦勞しないわけではない。この修学旅行は4泊5日だ。男子と女子では行くところが違う時も多々ある。ファングが予定表を見て、行きたい所に行くその為には、二人の間でカバンを交換する必要があった。

一日目——今日——は拓羅、二日目は楓、三日、四日目が拓羅、そして五日目が楓だ。

「・・・楓っ・・・明日、楽しみにしてるよー・・・」

冬だと言うのに、汗を流し、苦しそうな声で話す拓羅に向かって、楓は引きつった愛想笑いを見せておいた。

今は、学校行事ではお馴染みの「校長先生の話」の時だった。その時不運にもファングが喋りだしてしまった。

「・・・拓羅？ 苦しいぞ、まだ終わ」

「バカッ喋んな！」

慌ててボツとカバンを押さえつけた時、担任の目が光った。それに気が付き、キチンと座りなおした。一応、今回は助かった。だがまだファングの「暇暇攻撃」は続く。

「いてエ・・・。なア楓、つまら」

「喋んなっつってんでしょーがっ」

楓も、カバンをバンバンと叩いた。ある意味袋叩きだった。

しかし、今度こそは担任も見逃してはくれなかった。二人の方へ

ずんずんと近寄ってくる。

「拓羅、楓。お前らさつきから「喋るな」とはなんだ！静かにしろ！」

だみ声でそう怒鳴る担任に、楓は「アンタが一番うるさいよ」と言つてやりたかったが、そんな事したら火に油を注ぐようなものだ。ぐつと堪えて二人で座りなおし、「はいっ」と返事をした。

その後、今日は二人分のため息が聞こえた。

「今のが担任か？デカイ声だな！」

二人とも、もう相手にしなかった。ファングのせいで自分達が怒られるなんて馬鹿げている。ファングももうそろそろヤバイと思つたのか、何も言わなかった。

そしていよいよ出発だ。東京へと向かう新幹線の中は、楓にとっては安息の場だった。拓羅と席が離れているため、心配事は何も無い。

だが、もう一人にとっては地獄だった。いつカバンがひとりで動き出すかわからない。そのせいで、友人達と話していてもカバンから目が離せない。話に集中できなかった。

そんな新幹線内では特には何事も無かった。ホームでホッと胸を撫で下ろす二人の姿があった。

そして今、東京に居る。都会に居る。それだけでも十分にテンションはハイになった。車のクラクションや人々の声などの中、教師達は声を張り上げている。

「よーし。じゃあ、今から自由行動だ！いいかあ？二時にはここに戻ってこい。二時だぞ！いいな？」

自由行動だ。しかし、拓羅は自由ではなかった。自由時間が逆に辛い。この重い荷物を背負って、何時間も何時間も歩き回らねばならないのだ。それは、高校三年の男にとっても苦痛以外の何ものでもなかった。

「くっそ……！足腰鍛えられるだろうけど………肩痛えっ！」

勿論拓羅の言葉の意味は、同じ班の者にも全くわからない。

「……拓羅の奴、さっきから何言ってるんだ？あのカバンそんなに重いのかな？」

「さあ……？」

そしてカバンの中から、ファングが見たいと指示するところでは止まってトイレに駆け込み、ファングを出して見させねばならない。拓羅と一緒に班の者達には、「拓羅と言う人物はトイレにやたら行きたがる」とインプットされてしまっただろう。

こうして拓羅の一日は過ぎていく。楽しいはずの旅行も、犬一匹のせいで全く楽しく感じられなかった。だが、明日は解放される。そう思えるのが唯一の救いだった。

第13話 『憧れの修学旅行！・ファンゲもついてくぞ・』 4

午後九時。

今、高校生一行は今日泊まるホテルに向かっていた。拓羅も、相変わらず重い荷物を持って向かっていた。ホテルに着くと、担任の話を聞いてから部屋のキーを渡される。

二人部屋だ。男子は四階、女子は五階だった。

(・・・五階まで持っていかなきゃなんねえのか)

拓羅は大きな深いため息をついた。

一方、こちらは楓達の部屋だ。

「うつわーベッドふかふかあ！スツゴイ！ねえ楓っ、ふかふかじゃない？」

「・・・はいはい・・・」

今日、楓はすぐにでも寝たかった。しかし拓羅がカバンを持ってくるのを待たねばならない。それに隣のベッドでやかましく中継されてしまつては、寝られるはずも無い。

そんな真逆の事をしている二人の部屋のドアがノックされた。楓はドアを開ける前に、小声で確認した。

「・・・タク？」

「おう」

ドアを開けたすぐの所にファンゲの入ったカバンを持った拓羅が立っていた。

「楓、これマジ疲れっから！」

そんなことは楓も重々承知だった。

「うん・・・。わかつてる・・・」

二人のため息は、もう合い言葉のようになっていた。拓羅が帰っていった後、楓は自分の部屋にカバンを入れるため、持ち上げよう

とした。・・・が、持ち上げようとした時に動きが止まった。

重い。

物凄く重い。

フアングの体重は五十キロは確実にある。楓がこの歳でなければ、完璧にぎっくり腰になっていただろう。

「・・・・・・・・・・・・・・・・えーーーーーと・・・・・・・・・・？」

ブリッジのような体制のまま、しばらく天井を見上げ、仕方なく引きずって入れる事にした。

しかし、問題はここからだ。今日の風呂は大浴場だ。入浴中はずっとカバンから離れている事になる。その間にカバンがひとりでに動きでもしたら――。

嫌な映像が楓の頭の中をよぎった。一気に顔色が悪くなった。

「楓？お風呂行かないの？・・・ってどうしたの？なんか顔青ざめてるよ？」

友人にそう言われ、一瞬ビクツとなった。

「いっ・・・いいいい行く行く行く！大丈夫大丈夫！」

友人は少し怪しい者を見る目で見たが、すぐに元に戻った。

そうだ。起こってもいない事を悩んだところでどうしようもない。とりあえずは入る事にした。それに部屋を離れる時は鍵をかう。少なくとも部屋から出る事は無いだろう。大丈夫、と自分に言い聞かせながら風呂場へ向かった。

「広おおおい！ね、ね、楓！広いねえっ！」

「そーだねえ・・・」

「・・・何？テンション低いよ？」

「低くない低くない」

「なーんか声も低いし！」

「低くない低くない」

「・・・不機嫌なの？なんか怒ってる・・・？」

「怒ってない怒ってない」

テンションが低いのはあったが、不機嫌なわけでも怒っているわ

けでもない。ただ不安なだけだ。新幹線内の拓羅と同じく、カバンの事が気になって気になって、会話に集中できない。そのため、友人に誤解されてしまう事も時々あった。

折角の大浴場、しかも温泉なのに、ゆっくり入る事が出来ないまま部屋へ戻る。恐る恐る部屋のドアを開けた。開けたらすぐにカバンを確かめる。置いた位置から動いていない。

チャックも開いていなかった。一応小声で中に居るか調べてみた。確かに声はした。これで中にちゃんと居ると確信できた。ホッとして、ベッドに倒れこむ。隣のベッドではまたも友人が楓に向かって話しかけていたが、全く耳に入らなかった。

第14話 『憧れの修学旅行！・ファンゲもついてくぞ』 5

そんな事の繰り返しで、ようやく修学旅行も五日目を迎えた。

「つつ・・・疲れた・・・」

「犬一匹連れてだけで、こんなに疲れるとはね・・・」

今、二人はバスに乗っていた。勿論他の生徒達もだ。カバンはトランクに入れてあるため、心配要らない。二人は一番後ろの席に座っていた。前を見ると、皆盛り上がっている。しかし、次の瞬間には、違う意味で騒がしくなる事になる。そんな事は誰も予測していなかった。

バスは信号も何もない所で急停車した。そして停車して数秒後、車体が前にガクンと傾いた。前のタイヤがパンクしたようだ。車内は、一瞬静かになったと思ったら、一気にざわめき始めた。

「・・・楓、ファンゲ大丈夫かな・・・？」

まだざわめきが止まない車内で、楓の耳元で拓羅が囁くように聞いた。

「大丈夫でしょ。アイツなら。それにただのパンク——」

そこまで言うと、楓は最悪の想像をしてしまった。だが、それも間違っただけではなかった。

「楓？」

拓羅の声にも耳をかさずに、楓はバスを飛び出した。パンクしたタイヤを調べてみる。前のタイヤ両方ともパンクしていた。——

——だが何かおかしい。何か違和感がある。

その違和感は、パンクでできた切れ目にあつた。これは破裂でできた切れ目ではない。

故意に切つてできた切れ目だ。少し青ざめた顔でタイヤを見てみると、担任が叱りに来た。しかし、そんな担任に楓は一切怯まない。逆に状況を読めずに偉そうな口を叩く担任にイライラしていた。

「楓！勝手な行動はやめ」

「先生、みんな避難させて」

低い声でそう言った。

「……あ？」

「早くッ！」

担任の顔を睨みつけてそう怒鳴った。逆に楓の方が迫力があつたくらいだ。担任はそれに負け、わけがわからないまま言われた通り他の生徒達を離れた場所へ避難させる。その生徒達の列から抜け、拓羅が楓の方に駆け寄ってきた。

「どしたんだよっ？」

「これ見て」

楓がパンクして潰れたタイヤを指差した。

「……あ？パンクしたタイヤだろ？」

「切れ目！」

「……切れ目？……あっ……！」

「おかしいでしょ？」

「……ああ」

「ね、称狼がさ、前「三日待ってくれ」って言ってたじゃん？でも三日間称狼見ても何も無い……。それどころか二週間くらい経つてんのにこの通り。こんなに平和」

「もしかして、これって……」

そう。二人とも「ボス」の仕業だと考えたのだ。タイヤを見て話し込んでいる二人の後ろに、いつの間にか何者かが立っていた。

「……！」

「……誰だお前！？」

「どうも、こんにちは。初めましてですね。カエデさんとタクラさんですか？私はラング様の使者、セルヴオと申します。どうぞお見知りおきを」

「……あぁん……？」

ベラベラと喋りながら楓達の方へ近づいてきた。二人は警戒している。

「さて、今日は——」

セルヴォがそう言った瞬間、二人の間を刃物が飛んでいった。そしてバスに突き刺さる。しばらくは振動で左右に揺れていたが、数秒後、ピタッと止まるとセルヴォの手元に戻っていった。

「今日は、あなた方に死んでもらいに来ました」

につこり笑ってそう言った。笑うセルヴォの瞳は尋常ではなかった。ギラギラと光っている。そしてその直後、どこから出したのか何十本ものナイフを二人に向かって飛ばした。

救いだっただのはその時ジャージ姿だった事だ。制服よりも大分動きやすい。そのおかげか、なんとか避けられた。しかしそれだけではセルヴォの攻撃は終わらない。次は接近戦だった。凄いスピードで二人に近づくと、何メートルと距離がない所でナイフを振り回した。

楓は、それを避けながら拓羅に向かって叫んだ。

「逆方向行つてッ！」

「・・・あ!？」

最初は意味がわからなかったが、楓が歩道へ向かって走ったところでわかった。拓羅も逆方向の歩道へと走る。一人の相手だったら固まらない方がよい。そう思ったからだ。

ただ、それはセルヴォが一人だったら、の話だ。

「あははははははははははははははははッ」

セルヴォは、車道の真ん中で顔を上に向け、急に大声で笑い出した。そして続ける。

「・・・私が一人で来たとでもお思いですか？」

そう言うとう腕を突き上げ、指を鳴らした。すると建物の影から大きな蜘蛛が出てきた。何匹も何匹も、うじゃうじゃ出てくる。

「げっ・・・・・・」

歩道の二人は、同時に顔をしかめた。だがじつと固まってなんていられない。一刻も早く他の生徒達から蜘蛛を引き離さねば、何をするかわからない。丁度幸運な事に、楓も拓羅も考えている事は同

じだった。事前に打ち合わせをしていたかのように、同じタイミングで二手に別れた。

しかしこの時、二人は蜘蛛のことで頭がいっぱいになり重大な事を忘れていた。一番の要注意人物だ。

他の生徒達にも危険が迫ってきていた。

第15話 『憧れの修学旅行！・ファンゲもついてくぞ』 6

地面に血が飛び散っている。その血の中心に、人間が立っていた。
「っうー……最つつつ悪！」

両手をぶるぶる振りながらそう言った。

今、楓は七匹目の蜘蛛を倒したところだった。だがまだまだ楓の目の前には蜘蛛の軍隊がいる。今倒した数は、その中のほんの一部でしかなかった。

「………もーヤダなあ………」

これだけの蜘蛛を見れば、それだけで気が遠くなる。それは楓の、本当に心の底から出た言葉だった。だが倒さねばならない。蜘蛛を倒すため近づこうとした時、うじゃうじゃという蜘蛛が急に一つの塊になった。最初は丸いただの塊だったが、次第にモコモコと動き出し、ソイツは形をあらわにした。

黒い、巨大な蜘蛛だった。体は黒く、目は赤く光っている。楓はその無数の目的となった。

その頃、拓羅の方でも同じように大きな蜘蛛が現れていた。楓の時と同じようにあの蜘蛛達が合体し、一匹の蜘蛛になったのだろう。
「なっ……なんじゃこりゃあっ！」

素直な感想だ。誰だっこの蜘蛛を見ればそう思う。

「……ま、まあ……この方が戦いやすいっちゃあ戦いやすい、よな……」

一人でうんうんと頷き、いざ蜘蛛の方へ向かっていった。

そして楓も、勿論蜘蛛との戦闘を強いられている。仕方なく倒そうとするが、そう簡単にはいかない。何度も何度も攻撃をするが全

て防がれるため、いつの間にかムキになっていた。楓は本当に本当の負けず嫌いだ。更にそれが自分の嫌いなモノとなれば、負けたくないという思いは倍増だ。何度か攻撃をしているうちに、ようやく楓の蹴りが蜘蛛に当たった。が、その蜘蛛は物凄く硬かった。逆に楓の方がダメージを受けるくらいだった。

「いいっ……ったあ！つかスツゴイムカツクツ！生意気だし！蜘蛛のクセにこの硬さはなんだっ！第一キモイんじゃないっ！」

蜘蛛に伝わるはずもない言葉を、足をおさえながら大声で怒鳴りたてる。

ようやく足の痛みも和らぎ、もう一度蜘蛛の方に向かおうとした時――。

蜘蛛の体から糸が伸びてきた。白い。一本一本はそう太くはないようだが、何重にもされれば解くのは難ほどしくなりそうだ。

「……！？」

気付いた時にはもう遅かった。その場に倒れこむ楓の体は自由を奪われていた。蜘蛛の糸が、楓の体を縛り上げたのだ。

すぐに取ろうとしたが、もがけばもがくほど糸の縛る力は強くなっていく。糸一本一本の太さが割には凄い力だった。その力で骨がメキメキと音を立てているのがわかる。腕が痛み始めた。

このまま放っておいては完全に動けなくなる。楓はダメ元で、腕に思いっきり力を入れた。

意外だった。

プチンと音がしたのだ。

「は！？」

楓自身もわけがわかっていなかった。こんなに簡単に切れるものだとは思っていなかったからだ。しかし安心してはいられない。急いで切れ目を探した。

それでも何も対処しようとしないうちに蜘蛛が、少し可笑しく見えた。
(相手がバカで良かった)

心の底からそう思える。そしてやっと切れ目を見つけ出した。切れた糸を中心に、中の方の糸も一本一本爪でちぎっていく。

ブチッ、という音と共に、楓の体は元気良く起き上がった。体のあちこち痛むが、もうそんな事関係なかった。近くに落ちていた石を、蜘蛛に向かって闇雲に投げた。

その中の一つが蜘蛛の目に当たった。よろめきながら、蜘蛛は後退する。そこでやっと楓は気が付いた。

そこからは目を狙って当てるだけだった。ここで石投げの実力が役に立った。石はどんどん目を潰していく。「目が弱点」と言う事以外は何も考えずに行った事だったが、これが吉とでた。全ての目に当て終わると、またも蜘蛛に近づき、蹴りを入れた。すると今度は手ごたえありだった。どうやらこの蜘蛛も空と同様、健全な身体だからこそあの硬さは保っていられたようだ。楓はニヤリと笑うと、攻撃を叩き込んだ。そして、いよいよ蜘蛛は動かなくなった。

「おっ・・・・・・とっ・・・・・・とっ・・・？」

気が緩み、その場に倒れた。都会の空を見上げながらボケーツとしていた。太陽の光が目差し込んでくる。眩しそうな顔で声を出した。

「・・・えーっと・・・なんだっけ・・・。あ、そーだ。タク忘れた。どーっかってるかなあ・・・」

いつもの楓からは間違っても出ないようなトローンとした声で言った。

第16話 『憧れの修学旅行！・ファンゲもついてくぞ』 7

今、拓羅はまだ蜘蛛と戦闘中だった。

「うおらああああああああつ！」

拓羅は、木の枝を折って攻撃していた。だが、楓の方の蜘蛛と同じでやはり硬い。その硬さ故に、半分に折れた枝はこれが四本目だ。「くっそ・・・！倒せねえだろこんなのっ」

役立たずになった四本目の枝を足元に捨てる。カラン、という音が、周りに何もない空間に響いた。その音で蜘蛛が一瞬ビクンとなった。本当に一瞬だったが、拓羅はそれを見逃さなかった。

「・・・そっか、なるほど・・・。なんで今まで気付かなかったんだ」

怪しく笑うと、木の枝や石を持てるだけ持ち、自ら蜘蛛に近づいていった。そして蜘蛛のすぐそばまでいくと、その場で手に持っているそれら全てを真下に落とした。

結構な音が響いた。蜘蛛がその音に驚き、警戒している隙に、拓羅は素早く後ろへまわる。後ろから蹴りや殴りなどの行為を何回も繰り返した。だが、やはり硬さは変わらない。拓羅の拳から血が出るだけだった。

「・・・チクシヨウ・・・駄目か！」

蹴りなどで蜘蛛は後ろに反応し、いくつもの目で拓羅を睨むと、足を延ばしてきた。足の先は意外にも尖っている。その尖った足は、彼の顔や肩などに無数の傷を付けた。

「・・・・・・チツ・・・！」

そしてヤケクソで向かってくる拓羅を、その足で払い除けるように横に飛ばした。危うくそのまま転がってしまうところだった。

地面で一回転した拓羅は足でその体の転がりを止め、体制を立て直

した。寝転がってしまったては負けたも同然と言えるほどの厳しい状況だったのだ。彼の身体は、もう傷だらけになっていた。もうこれ以上ダメージを受ける事は出来ない。拓羅は懸命に考えた。

この蜘蛛にも、必ず弱点はあるはずだ。しかしそれがわからないから、今苦労している。大抵の生き物は、目を傷つけられれば致命的だ。だが、体が硬いならば目をガードしている何かもあるかもしれない。もしも目を潰す事が出来なかったら――。

今度はもつと強い力で飛ばされ、立ち上がれなくなるかもしれない。この考えを実行するのは命懸けなのだ。

しかし、他に方法はない。

拓羅は自分の考えに賭ける事にした。覚悟を決め、一本木の枝を折った。今回は少し太めの長い枝を選んで折った。

「何回も痛くしてゴメンなっ」

そう言つて木の表面をサツと撫でる。そして走つて蜘蛛の目の前まで行つた。そこから更に助走をつけて大きくジャンプした。そして蜘蛛の頭上まで行くと、目をめがけて枝を下に突き出した。

――見事命中し、辺りに鮮血が飛び散つた。目を守っている物は何もなかった。拓羅は、驚いたような嬉しいような顔をしている。

「・・・蜘蛛のくせに、いつちよまえに俺らと同じ血い出しやがんのかっ・・・」

自分の顔にも付いた血を手の甲で拭いながらそう言った。やはり目が弱点だとわかると、拓羅は次々枝で突き刺していく。

蜘蛛も大分弱ってきたようだ。全ての目が潰れると、その場に沈み込んだ。ピクピクと体を震わせている。

そんな敵の体を、枝で突いてみた。さっきまでの硬さが嘘のようだった。

（・・・これなら・・・いけるっ・・・！）

拓羅は血だらけの手で枝を握りなおし、蜘蛛の上から思い切り突

き刺した。一瞬、蜘蛛はビクンとなったが、動かなくなった。

「・・・終わ・・・った・・・」

息を切らしながら、自分の血と蜘蛛の血がべっとりと付いた枝をその場に落とした。

第17話 憧れの修学旅行！ - ファングもついてくぞ - 7

ハツとしてすぐに走り出し、バスのある車道へ出た。丁度楓も今着いたようだ。あちらも結構傷を負っている。

「楓！……大丈夫か！？」

「うん……っていうか……タク自分の心配しなよ」

楓は血の出る腕をおさえながら、いつもの呆れた顔で笑う。

「こんな大丈夫だ！・・・やっと終わったなつ！」

「……………ん……………？　待って……………なんか忘れてない……………」

「え？」

「あのね……えーっつと……なんだっけ……
あっ！」

「
・
・
・
あ
あ
つ
！」

二人は顔を見合わせ、同時に言った。

「セルヴオツ！」

その名前を口にした瞬間、声がした。あの笑い声だ。

「あはははははははははははッ」

楓と拓羅は声の方を振り返る。建物の影にセルヴオは居た。

「よく出来ました！あの蜘蛛を倒すとは中々の腕前じゃあないですかっ！いいですねえ！あなた方、最高ですよ！！」

そう言つて影から姿を現したセルヴオの腕の中には、二人の友人が人質として囚われていた。

「……！汚ねエぞテメエツ！」

「大切な大切な友達を連れたままの私を殺す事ができますか？・・・あははははははッ」

「楓ッ！拓羅くん……！助けてよオッ」

セルヴォの腕の中で、友人が叫んでいる。しかしこの状況では助けようがない。だが助けないと、友人らがどうなるかわからない。

そんな中、楓が口を開いた。

「アンタの望みはあたしら殺す事でしょッ？」

「そうですよ」

「だったら友達なんて関係無いじゃん！放してよ」

「いや、最初はそうだったんですけどね？さつきラング様から電話がありました。あなた方を連れて来い、との事でした。」

突然の変更に、楓も拓羅も瞬きを繰り返した。

「え・・・ちよっ・・・え？・・・えっと・・・じゃああたしらを連れてけばいい・・・わけ？」

「そういう事ですね」

「じゃあ・・・あたしらがついて行けば放してくれる、の・・・？」

「はい」

セルヴォは笑顔で頷いた。しかし真正面の楓の表情は真逆だった。

「・・・・・・めっちゃ簡単じゃんかつ！先にゆえや！そーゆー事は！」

「あ、それはスミマセン。・・・それじゃあお友達放しますからこちらに来てください」

二人とも、セルヴォの方へゆっくり歩いていく。しかしどちらもハイハイとついてく気なんて全く無い。拓羅が呟くように言った。

「楓、マジでついてくわけじゃねエだろ？」

「当たり前でしょ」

そしてセルヴォの前に来た。

「さ、あなた方の友人です」

ドンと背中を押され、囚われていた友人は二人に返された。

これでセルヴォを倒せば終わり————だが、ここで二人の計算は狂った。

第18話 『憧れの修学旅行！・ファンゲもついてくぞ・』 9

セルヴオの腕の中にいた、友人と思っていた者は奴の手下だった。声も姿も化ける、ドッペルゲンガーだ。二人の腕はがっしりとソイツに掴まれた。まんまと罠に掛かってしまったのだ。

「フフ・・・愚かですね・・・。本物さん達はバスの中ですよ」
そう言われ、ハツとした二人はバスの中を見た。中など気にしていなかった。確かに中には沢山の人影が見える。しかし声はしない。動きもしない。

皆、ガムテープで口を止められ、腕も足も椅子に縛り付けられていたのだ。

「!・・・しまった・・・」

「あのバスには爆弾を仕掛けさせてもらいました。もしもあなた方がセコイ手を使った時のためにね・・・」

「セコイ手だと・・・?」

「うーん。そうですね。例えばついてくるフリをして私を倒そうとした時、とか・・・。まああなた方に限ってそんな事はしないとはいえませんがねえ・・・」

セルヴオは口だけで笑う。

二人はゾツとした。自分達の考えが分かっていたかのようなセルヴオにもだが、ドッペルゲンガーにも驚いていた。

見る見る自分達の姿に変わっていく。目の前にもう一人の自分が現れた。

「・・・マジかよおい・・・気持ち悪い・・・!」

「バスの中に居る人達の運命は私が握っています。」

奴は自分の手の中にあるスイッチをこれ見よがしに見せつけた。

「さあ、どうしますか?」

「…………あたしらを連れてって…………どうするつもり…………そのラングって奴の望みは何？」

「私には詳しい事は分りかねますねえ。行つてのお楽しみと言う事でどうでしょう？ですが、そんなに悠長な事は言つてられませんね。早くしないとそのソックリさんがあなた方の体力を食い尽くしますよ？」

「…………え…………」

そう言われてみればドッペルゲンガーが自分らの姿に変わつてから、体が重くなつた気がする。

「このまま放つておいたらあなた方、ただの抜け殻になつてしまいますよ？全滅でいいんですか？私についてくるのならば、すぐにドッペルゲンガーは元に戻しますが…………」

確かに今ここで二人とも体力が全て無くなつてしまつては意味が無い。

「楓…………やつぱついてくしか」

拓羅がそこまで言うのと、楓は拓羅を見て軽く二、三回頷き、
「わかつてる」

と言つた。そしてセルヴオの方を向き直して続けた。

「いいよ。わかつた。あたしらがついてけばバスの中の人達、解放すんでしょ？」

「ええ。もちろんです」

「…………じゃあ先に解放して」

「それは無理ですよ。あなた方は頭がいい。何をするかわかりませんからね…………先に来てもらわないと」

「ならこつちも駄目。あたしらだつてアンタの事信用してるわけじゃないんだから」

「…………どこまでも愚かな人だ。ならばバスを爆発させるまでですセルヴオは、またスイッチを二人に見せつけた。

「……………!!!」

「あなた方には、そんな事を言う権利は無いんですよ」

そう言つて目を見開いた。口は笑っているが、目が笑っていない。
「……………」

「何も言わないのなら押しますよ!」

手に力を入れるセルヴオの親指は、スイッチまで何センチとないところまできた。

「待つて!……………わかった。行くから……………」

楓は宥めるようにセルヴオに言った。

「なら早くこちらに来てください」

スイッチはポケットにしまわれた。ドッペルゲンガーもいつの間にか楓達の姿でなくなってきた。雪のようにドンドン溶け、終いには液体となって吸い込まれるようにセルヴオの体内に入っていた。しかし、ドッペルゲンガーは居なくなつたものの、二人は大部分体力を失つたようだ。少し動くだけでめまいがする。そんな中、楓は最後の確認をするため、声を絞り出した。

「…………絶対、解放してよ……………」

「疑い深い人ですね。喋るのにも一苦労でしょうに。…………解放すると何度も言つたじゃないですか」

楓と拓羅はやつとの思いでセルヴオの真ん前に来た。体力的にも距離的にも、逃げる事は不可能だろう。

「さて。それでは行きましょうか」

「…………え?おい!」

「…………ああ、そうか。今始末しますよ」

「何言つてんだテメエ…………!?!」

拓羅の言葉に耳も貸さず、セルヴオは笑いながらスイッチを取り出した。

「ククク…………。私があなた方の言う事を聞くとでも思つていましたか?」

「ふ…………ざけんじゃねえぞコラ…………!」

「ふざけてなんていません。至つて真剣ですよ?…………あなた方が

もつと早く蜘蛛を倒していれば、こんな事にはならなかったかもしれない。

「デメエぶつ殺すぞ！」

「やれるものならどうぞ？ 私はあなた方のお友達をぶつ殺します」

「ちよつ・・・やめッ」

楓は走って奪い取ろうとしたが、身体が思うように動かない。

そのままセルヴオの指は赤いボタンに向かって振り下ろされた。躊躇もせずスイッチを押した。

——二人の目の前で、バスは大きな音をたてて爆発した。

「・・・！」

「・・・の・・・ヤロオ・・・ぶつ殺す！」

「黙って見てろ」

拓羅がセルヴオの方を向こうとした時、奴の口調が一変した。そしてその声の後、二人は手を後ろで縛られ、地面に膝を付けさせられた。逃げようとするとしても大きく動いてしまう。セルヴオはそれを狙っていたようだ。動こうとすればすぐにわかる。

真っ黒になったバスからは、未だに煙があがっている。周りの空気が灰色になっていく。あんなに凄い爆発音と、こんなに凄い煙の量だ。中の人間はもう助からないだろう。

二人はボロボロになっていくバスを呆然と見つめているだけだった。

——助けられなかった

その言葉が、二人の胸を痛ませ、締め付けていた。

第19話 『憧れの修学旅行！・ファングもついてくぞ』 10

バスから出ている煙はまだ収まらない。

「グオツ！」

その時突然、二人の後ろから声がした。セルヴオが出した声のようだ。振り向くと、奴の背中で赤い炎が踊っていた。

「うつ・・・あ・・・！あ、あつ・・・熱い・・・！」

二人の耳にはセルヴオの叫び声など入ってこなかった。考えるので精一杯だったのだ。

（・・・まさか・・・）

そして同じ事を思っていた。しかし、どこにも姿は見当たらない。首を動かして探していると、目の前に獣の足が降りてきた。

「情けないぞお前ら」

聞き慣れた声——ファングだった。四足を踏ん張り、フンフンと鼻を鳴らしている。

ファングの前に居る男女は、驚きのあまり言葉も出ない様子だった。

「乗客はオレが降ろした。安心しろ」

「・・・・・・あ・・・・・・？・・・え・・・」

ようやく状況が把握できてきたようだ。とにかくファングのおかげで皆助かったのだ。

「どーだっ？オレ連れてきて良かったらう？」

得意気に、また鼻を鳴らす。

「・・・・・・うん・・・・・・ありがと・・・・・・」

楓が意外と素直に礼を言ったからか、ファングは少しビックリした顔の後、照れたように横を向いて言った。

「・・・早く立てよ」

「あ・・・うん・・・・・・。あれ？そいえばセルヴオは」

「ああ、あの変な男か？逃げてったぞ」

「弱いな、おい。・・・て事は？ファングのおかげで全てが好転した、ってわけか・・・」

「オレいい奴だろう？カッコイイだろう？だから楓、帰ったらご褒美よこせ！おやつおやつ！」

白く尖った歯を見せて笑いながら尻尾を振る。そんな無邪気なファングを見て、拓羅は少し笑いながらたずねた。

「ファング、どうだった？憧れの修学旅行は」

するとファングは振り返り、二カッと笑って

「楽しかったぞ！」

そう言った。

その後、楓達は何事も無かったかのように観光を続け、愛知県に帰ってきた。二人負傷者は出たが、クラスメイトは全員無事に帰ってこれた。ファングのおかげだ。

——しかし、全てがいい方向に転がるとは限らないようだ。まず二人は帰ってからマッサージ院などで金が殆どなくなった。

怪我は東京の病院で治療し、なんとかあった。学校からの金や保険もあり、二人の金はさほど無くならなかった。だがマッサージ院は違う。一人ならまだしも二人ともなると結構な出金だ。

それだけでも痛いのに、更に「嫌な事」は二人を襲った。

バスの乗客はファングに助けられた。と言う事は、ファングの姿を見た、と言う事だ。勿論担任も——。

次の日学校へ行くと、下駄箱に靴を入れた瞬間二人は担任に連れて行かれた。職員室だ。そしてみっちり叱られた。

担任もファングに助けられたとは言え、やはり禁止行為は禁止行為だ。他の教師が止めに入ってやっと収まった。

その後、家に帰った二人の気分が一気に沈んだ事は言うまでもない。

第20話 『事情』

一大イベントの修学旅行も終わり、ここ何カ月はイベントというイベントが無かった。しかし楓達三年生は、もうすぐ卒業だ。だがそこまで楽しいものでもない。

その証拠に、二人はこんな会話をしている。

「卒業式なんてやらないでもいいのにねえー」

「なんでだ？」

「だって練習とか面倒くさいしハッキリ言ってウザたいし。パパッと集まってパパッと卒業証書渡してパパッと終了！これでよくない？」

「・・・確かに。歌とかがあつから変に長引くんだよなア」

「そうそうっ！学校つてやたら余計なもんやりたがるんだよねえ。」

生徒としてはいい迷惑だよ」

「うむうむ・・・お？」

廊下に座り込んで喋っている二人の前に、もう一人の足が見えた。恐る恐る上を見ると、今の会話を一番聞かれない人物、担任が居た。顔全体にしわを寄せ、二人を睨んでいる。その顔から目をそらし、拓羅が焦って言い訳をした。

「・・・せっ・・・先生、ごきげんようでございますね！あの・・・い・・・今のはですね！・・・そう！空耳！空耳です！・・・あの、えっと・・・あ！あれですよ！ね？先生、あれ！あの・・・どっかの誰かがまるで俺らが言ってるかのようにイタズラしてるんじゃないですか？困るなあ本当に・・・あはははははっ！」

一生懸命笑った。しかしどこからどう見てもわざとらしい笑いだ。拓羅が懸命に笑っても、担任が笑うことはなかった。

「ほう。そのどっかの誰かとはどこに居るんだ？」

「・・・あ・・・あっち！」

拓羅は隣の校舎を指差した。

無論、そんな事を信じるほど馬鹿な担任ではない。

「お前らはあ……まったく！職員室に來い！」

そして二人は連れていかれる。また大声で怒鳴り散らされるのだが、もうそれには慣れっこだった。今回も含めて二回目だったが、よく怒鳴る教師ほど恐がられる日数は少ない。

楓の頭の中の面積は、恐いという感情よりも、

（よく喉枯れないなあ……）

という感心の方が多く陣取っていた。

この教師の説教は、「全くお前らは——」から始まり、「

——だ。違うかつ？」で終わる。そしてそこからは楓の反撃の時間だった。

「先生！私達が先生の居ないところで話していた事は悪いと思いません。反省してます、でも私達が詫びるべき所はそこじゃないと思うのですが。それに今の世の中学生と教師でクラスを作り上げるのも必要だと思うんですよ。なのでたまには生徒の意見も聞き入れたほうが良いのではないのでしょうか。あ、その前に、一つ質問してもいいですか？いいですよね？」

「……お、おう……」

「なんで卒業式では歌を歌ったりする必要があるんですか？その必要性がわからない限りは歌う気なんて出ません」

「う……歌う必要性……？そんな物校長に聞け！」

「先生がわからないんじゃないやあ生徒にも伝わるはずありませんよね？と言うか伝えようがないですよ。皆が納得した上で歌うからこそ感動があるんじゃないんですか？ねえ拓羅くん？」

「え……あ……そつ……そうですよ！」

「歌う意味がないんなら歌う必要ないじゃないですか。必要最低限の事するだけでいいじゃないですか。嫌々歌わせたんじゃない感動もクソありませんよ——」

と、こんな具合で近くの人達も巻き込んで三十分も一時間もベラ

ベラと喋り続けるため、担任のほうに折れてしまう。そして極力早口で話すため、相手に言葉の意味を考えさせる時間を与えないのも彼女の得意技だった。

楓の言ってる事があるか間違ってるかは関係なく、とにかく拓羅は助かっている。内容はどうでもいい。担任が参ればそれでいいのだ。楓もそうだろう。

第21話 『事情』2

「いやぁー今日も楓さんはいいい舌さばきでしたねぇ！」

今は帰り道だ。いつも通り、夕日に照った商店街を歩いている。

拓羅がニコニコと笑って楓を褒め称えた。しかし、楓にとってはそんなものどうでもよかった。

「何よその舌さばきって・・・」

「よくあんなにも言って一度も噛まないな。コツ教えてくれよ」

「はぁ？」

二人がマンションに着いた時、中からはフアングが走り回る音がしていた。そして楓がドアを開けようとした時、今度は勝手に開いた。

「わっ」

ギリギリのところまで右に避けた。するとドアの攻撃は、楓の後ろに居た拓羅の方へいった。

「ぶっ・・・」

拓羅も避けようとしたが、惜しくも避けられず。顔面強打だ。そんな暴れん坊のドアも静かになり、家の中からフアングが顔を出した。満面の笑みで出迎えた。自分の開けたドアが拓羅に当たった事はわかっていないのだろう。

「楓！拓羅！おかえりい！」

「・・・フアング・・・テメエ・・・ツ！」

「！なっ・・・なんだ？何怒ってるんだ？あ、その鼻から出てる血はなんだ？」

自分で自分の首を締めてしまった。

「テメエのせいだろうがよぉ！あぁッ！おん前急にドア開けんじやねえよ！前は勝手に閉まつたしよぉ！どんだけやったら気が済むん

だよ！」

「苦し……。いや……。オレか？ 気付かなかった！ スマン拓羅！」
「いや、許さねえぞ！ 今日こそ息の根止めてやる！」

拓羅の手がフアングの首に伸びてきた。拓羅の握力は凄い程ある。そんなので締められたらいくら首が丈夫なフアングでもたまらない。
「かつ……。かかか楓え！ 助けてくれっ！」

「うるさいな、自業自得だそんなもんッ」

「ええっ……。そんな……」

「ふあああんんぐうううッ！ このクソ犬！ 似非えせケルベロス
！」

こうなったらフアングももう開き直るしかない。

「たっ……。拓羅がノロマなのが悪いんだぞ！ それにオレちゃんと謝った！ なのに似非ケルベロスとは何だ！ っていうか「似非」って何だ！」

「謝ればいいって問題じゃねえんだよっ！ 容量悪いクソ犬！」

そして一人と一匹の喧嘩が始まる。楓は呆れて、耳を塞ぎながら家の中に入ってしまった。

「タクも喧嘩なら自分家ですりゃいいのに……」

ブツクサ言いながら私服に着替えた。

「あッ！」

楓が着替え終わった時、拓羅が急に大声をあげた。目の前に居たフアングは、案の定驚きだ。

「なっなんだ……？」

「そいえば俺……」

「あ？ 何？」

フアングの質問に答ええないまま、拓羅は独り言を言いながら入っていた。

「……。な……。なんだアイツ……？」

玄関に取り残されたフアングは、拓羅の後姿を見ながら首を傾げた。

(楓連れて・・・行かねえと・・・中国に)

第22話 『事情：楓vs拓羅【ラウンド1】』

「来れっかなあー、楓の奴・・・」

今日、拓羅は珍しく自分の家に居た。と言っても楓の家と隣同士なのでそう変わった感じはしない。今彼は凄く悩んでいた。彼の親は中国に居る。その親に、高校卒業する前に一度顔を見せに戻って来い、と言われたのは中学一年生の時だ。拓羅の親は、本当の親よりも楓に優しかった。拓羅が帰ってくる時も楓を連れて来いと言われていた。彼自身は中国に帰る事に何も反対しないが、問題は楓だった。

「中国に行こう」と率直に言っただけに行ってくれるとは思えない。彼女にとつて中国は嫌な場所だった。出来る事なら二度と戻りたくはないだろう。だが拓羅にも親との約束があった。その約束は、楓に一度も話した事が無い。それも心配だった。

二人の意見が食い違っているために、彼は悩んでいるのだ。

しかし聞いてみないとわからない。しばらく考え、決心した。顔をあげて玄関へ向かう。ドアを開けようとした時、そのドアがバンバンと音を出した。外から誰かが叩いているようだ。そして声がした。

「タクーン」

「おい、何も音しねえけど大丈夫かお前？」

それは紛れもなく楓とファングの声だった。拓羅は少し迷ったが、緊張しながらもドアを開けた。

「あ、出てきた。どしたの？自分家居るなんて」

「ん・・・だって・・・なんつーか・・・自分家だし・・・」

「・・・はい？」

拓羅の発した言葉は、彼自身でもわかるくらい変な返事の仕方だ

った。拓羅は言った後で、しまった、という顔をした。

楓はこういう事にとことん鋭い。恋愛系は本当に鈍いが、こういう事とはかくとことん鋭い。それで拓羅の嘘がバレた回数は数知れない。やはり今回も、楓の目の奥がギリリと光った。獲物を狙う肉食動物のような目になった。

睨まれた草食動物は鼓動を速めながらその目を見た。しばらくは睨み合いの状態が続いたが、やっと終わった。耐え切れなくなって拓羅が顔をそらしてしまったのだ。それを合図のように、楓も拓羅に向けたロツクオンを解除した。

「今日はタクン家上がらせてもらうよー」

そう言って拓羅の横を通って玄関で靴を脱ぎ、中に入ってしまった。楓が行った後も、拓羅の心臓は速く動いているままだった。

(・・・ヤ・・・ヤベエ、寿命が縮む・・・！)

ため息をついて拓羅も中に入った。そして楓を椅子に座らせると、これからが本番だった。

しかし中々言い出せない。ひたすらゴソゴソしているだけだ。楓は自分の家で拳動不審になっている変な男を凝視するだけだった。

第23話 『事情：楓vs拓羅【ラウンド2】』

15分後、やっと口を開く。だが、先に開いたのは楓の方だった。

「ねえ、何？」

その声に、拓羅はビクンとなり、しきりに動かしていた顔も止まる。楓の声はイライラしていた。ヤバイと思い、ゆっくりと楓の方を見る。そしてこれまたゆっくりと口を開いた。

「ちゅ・・・ちゅ、ちゅ、ちゅう・・・」

丁度、口もその言葉通りの形だ。楓はそんな拓羅を、「何コイツ」と言う冷めた目で見た。

「ちゅっ・・・ちゅっ・・・・・・チューしょ」

「馬鹿者」

早かった。即答だった。「よ」という言葉も最後まで言えたか言えないくらいだった。

「・・・本当は何が言いたいわけ？」

彼女の顔も言葉も声も、「怒り度」の中間まで来ていた。楓が15分待っただけでも凄い事なのだ。拓羅以外の人物だったらとつくに痺れを切らしてスタコラサッサと帰っているところだ。

「いや・・・その・・・ちゅ・・・ちゅちゅちゅ・・・」

しかし、楓ももう限界だった。机の上でトントんと鳴らしていた指を止め、ため息をついた。

「帰ります」

「ちよちよちよちよっ！ちよい待ちい！」

拓羅は焦った。楓の場合本当に帰りかねない。

椅子を後ろに引いて立ち上がるうとする楓の袖を引っ張って止めた。急に強く引っ張ったため、楓の顔は机に激突した。

「いっ・・・だー！もー！何！？」

「頼む聞いてくれ！」

「・・・あのさあ、だからさっきから聞いてんだけど。すっごく聞いてんだけど」

「よし。わかった・・・。い、言っぞ・・・？」

「はいはい。どうぞ」

「・・・ちゅ・・・中国、に、行こ・・・」

急に楓の顔色が変わった。睨むように拓羅を見た。

「・・・え・・・？」

「や・・・だから・・・中国に・・・行こ・・・？」

確かめるように言ったが、返事はこなかった。楓は下を向いて黙り込んでしまった。

時間ばかりが過ぎていく。

いつもは気にならない時計の音が妙にうるさく感じた。

第24話 『事情：楓vs拓羅【最終ラウンド】』

あれから三日過ぎた。楓と拓羅は顔を合わせる事あっても会話をすることはなかった。今まで二人は大声で喧嘩する事はあっても沈黙続きなのは一度たりとも無かった。クラスメイトも、二人の近くにはとてもじゃないが寄れなかった。

こういう事の方が対処に困る。ピリピリとした空気は、それを感じ取ったファングにもストレスが溜まるくらいだ。と言うより、逆にファングの方が二人よりもストレスに感じているだろう。気を使っていないといつ爆発するかわからない。

（なんかこの頃二人ともコワイぞ・・・）

ファングは楓を恐いと思う事は多々あったが、拓羅を恐いと思う事は全く無かった。だからこそ今回は余計に恐い。

そんな生活も一週間を迎えようとしている頃だ。朝、拓羅の家のチャイムが鳴った。

「ほいほいほいっ」

急いでドアを開けると、目の前には楓が居た。

「お・・・おう楓ッ！・・・どうした・・・？」

「ちよつと言いたい事があって・・・、来た」

彼女は自分よりも少し背の高い拓羅の顔を、目だけで見上げた。

「そかそか！・・・あつはつはつは！・・・と、とにかく入れよ」

楓を中に入れ、拓羅はドアを閉める。そしてまた、前に話をした椅子に座らせた。

「で、言いたい事・・・って？」

手を組み、自分の前に居る楓を見るが、相手は拓羅の顔を見ようとしなない。下を向いたままだ。そしてそのまま口を開いた。

「・・・・・・・・あたしの家にも・・・行くの？」

それは拓羅としては予想外の言葉だった。彼はてつきり、「言いたい事」と言うのは自分を怒りに来た事だと思っていたからだ。そして驚きの顔のまま言った。

「中に入らないとしても、まあ行くのは俺ん家だから・・・すぐ近くには行く、かな。でもちよつと帰るだけだし・・・」

楓はやつと顔をあげた。しかしやはり嬉しそうではない。少し悲しそうな笑いを見せ、「やつぱり・・・」と呟いた。そしてすぐにいつもの顔に戻り、キツパリと、「行かない」と言い放った。

拓羅も「やつぱり」と言う気持ちだった。ここで折れる事も出来るが、そうしてしまつたら約束が守れなくなる。彼は大喧嘩覚悟で言った。

「楓、頼む。お前ん家には入る事絶対ねえから！」

「入んなくなつてあんな小さな町じゃわかるに決まつてんじゃん！」

「あつ・・・わかつた！じゃあ変装して行こう！」

「・・・バツカみたい。そんなに行きたいんなら一人で行けばいいじゃんッ！タクの家に行くのにあたしが行く必要なんてどこにもないし！」

「お前連れてくつて約束なん——」

失言してしまった。こんなところで言うつもりではなかった。また今度改めて言おうと思つていた事だった。拓羅は気付くな、と祈つたが、楓が気付かないわけが無い。

「・・・約・・・束？なにそれ・・・」

「違・・・」

「誰とツ？」

「・・・お・・・親・・・」

「いつ？」

「・・・中一ん時・・・」

「・・・あたしらがかつち来た時じゃんか・・・。え、じゃあ隠してたわけ？六年間も？」

「ゴメン・・・その・・・また今度話そうって」

「隣に住んだのもその為？」

「え？」

「あたしの様子うかがってたの？そんで待ってたってわけ？あたしがあの事忘れるの待ってたわけッ？」

「ちよっ・・・ちよつと待てよ、俺はそんな事」

「じゃあなんでもっと早く言ってくんなかったの」

「違うんだって！あの・・・」

「何が違うの。っていうかまた今度話そうって、普通順番逆じゃないッ？」

「・・・俺だって悩んでたんだよッ！けど言わなきゃ駄目だろうッ？約束の事お前に言わなかったのは悪かったよ！謝るよ！でもっ・・・じゃあ黙って行ってもよかったのかよッ！！？」

机が大きな音を立てた。拓羅が殴ったのだ。その場所には大きく穴が開いていた。しかし楓も怯まず言った。

「何よそれッ！それで謝ってるつもりッ？そんな投げやりな謝り方で許してもらえとでも思ってたんの？」

「だから悪かったって言ってたんだろ！」

「開き直ってるし！最ッ低！別に行くなら黙って行きゃいいじゃん！っていうかそんな約束してまでタクに一緒に来てもらわなくなってよかったよ！」

「・・・・・・」

「・・・あたしはタクに頼んだわけでもないし！そっちが勝手についてきたんじゃないかッ！それなのに何！？自分は可哀相に悩んでた、みたいな言い方してさあっ・・・」

「そんな言い方してねえよ！」

「してんじゃないか！・・・あたしはあんなところから離れて忘れるためにこっち来たの！なのになんでまたノコノコ帰んなきゃなんないの！？」

「・・・・・・悪い・・・・・・。ホント、ごめん・・・」

拓羅は座ったまま頭を下げた。楓の動きも止まる。こんな拓羅を見るのは初めてだった。いつもの謝り方とは全く違う。それを見てしまっただけはもう怒れない。楓は黙って一生懸命に言葉を探した。しかしいい言葉が見つからない。

「・・・・・・今日・・・・・・もう帰る・・・・・・」

首の後ろに手を回しながら言った。そして気まずい雰囲気は抜け出す。拓羅は頭を下げたまままだ。

ドアの開く音がして、少し時間を置いた後に閉まる音がした。

第25話 『事情』3

「かーえーでっ！どーだったんだ？拓羅と仲直りしたのか？」

「・・・・・・ほっというて」

「・・・ハイ・・・」

拓羅の家から戻ってきた楓は、靴を脱ぎ捨て、部屋に閉じこもった。それからもう四時間が経過していた。

（腹減ったぞ・・・）

今は午後九時だ。いつもの夕飯の時間はもうとっくに過ぎている。流石にフアングも腹が減ってきたようだ。

「か・・・楓？その・・・オレ・・・腹、減ったんだけどさ・・・」

すると、凄い勢いでドアが開いた。不機嫌そうな顔で出てきた楓は、キッチンへ行き、棚を開けてフアング用のドッグフードを専用の皿に盛った。無言でフアングの前に出す。そしてまた自分の部屋に戻り、ドアを閉めた。所要時間は三十秒だった。

「・・・・・・早ッ・・・」

しかし、やはり三十秒は三十秒。いつもより大分ザツだった。ドッグフードが台所からフアングの足元まで散乱している。フアングはそれさえも拾って食べた。

（勿体ねえ勿体ねえ。美味え美味え）

そう思いながらボリボリと食べた。

その日、楓は自分の部屋の椅子に座ったまま朝まで起きていた。その間時々目を長く瞑ることはあっても寝る事は無かった。楓の中に「どうせ明日は休日だし」と言うヤケクソな気持ちがあったからなのかもしれない。

翌朝七時頃。

楓の部屋の外からは、あくびまじりに彼女の名前を呼ぶフアングの
声がしていた。

「楓ー？起きてるか？入るぞ」

その声に楓は一瞬ピクンと動き、ドアの方を見て返事をした。部
屋に入るとフアングは少し驚いた。そこには今まで見た事の無い、
椅子に座ったままボーッとしている楓が居た。

「・・・楓・・・？どうした？」

彼女が喋りだすまでには時間が要った。

「・・・？・・・フアングー・・・」

「ん？何だ？」

「・・・もー無理」

「えッ！どとどつかしたのか？調子悪いのか？腹痛いのか？頭痛
いのか？」

フアングの対応は、久しぶりに孫に会った祖父のようになってい
た。

「もー無理なの！とにかく無理なのっ！」

「な、何がだ？一体どうした？」

「だってさあー・・・そんなのさあー・・・ねえ？」

「ねえ？・・・って言われても・・・」

「だって帰ろつつたって無理に決まってるじゃん！フアングのば
かっ」

「えっ・・・オ、オレ？」

「もーヤダ！ホントヤダ！マジでヤダッ！」

「・・・大丈夫かお前？もしかして酔ってるのか？」

「酔ってないもーん！タクがばかなだけだもんねーっだ！」

「拓羅？」

返事はなかった。

「拓羅が何か言ったのか・・・？何言っただ？アイツ・・・」

フアングは考えた。楓をこんな風にさせる言葉とは一体何なのだ
ろつか。そして拓羅は何故そんな言葉を楓に言ったのか――。

考えていると、ゴン、という鈍い音が静かな部屋に響いた。ビツクリしたファングが慌てて楓を振り向くと、彼女の顔と机が正面衝突していた。

「ぶっ……ぶつかっ……楓……？い、痛くないのか……？
ってか……もしかして寝てんのか……？て事はさっきの、寝言
か……？」

（それとも……本心か……？）

ファングは真剣な顔で、スヤスヤ眠る楓を見た。その寝顔は、彼女の年齢よりももっと幼く見えた。そんな安心しきった寝顔を見て、ファングは少し微笑んだ。

（……まだ十八だもんなあ……）

人間の歳で言えばファングは二十八歳。丁度楓達より十歳上だ。

（拓羅は……コイツに何言っただ……？）

第26話 『事情』4

その日の夜、拓羅が楓の家のドアを開けた。そつと中を覗きこむ。

「・・・楓・・・？居るかあ？」

足音がした。少し緊張して待つと、中から出てきたのはフアングだった。拓羅が立っている目の前にちょこんと座った。

「楓ならまだ寝てるぞ」

「・・・寝てる？風邪か？」

「いや、そうじゃないんだが・・・」

「？何だよ」

フアングは少し下を向いていたが、思い切った顔で拓羅の目を見た。

「お前、アイツに何言っただ？」

「・・・アイツ・・・え・・・？何か・・・言っただのか・・・？」

「拓羅の名前が出ただけだ。何を言われたのかは聞いてない」

拓羅はそれを聞くと今までの緊張を解いたようにため息をついた。

「・・・気にしないでいいよ、お前は」

彼なりに考えて言っただけだった、フアングはムツとした表情を見せた。

「なんでだ。オレが人間じゃないからか？」

「え？・・・いや違えよ。そんなんじゃないよ・・・」

「じゃあなんでだ？オレはお前らの仲間だ。仲間の事を知る権利、あるだろう？」

拓羅は顔をしかめた。そしてまたため息をつく。

「・・・わかった。話す。だけどアイツの事を全て俺がベラベラ喋るわけにはいかない。軽々と話せる内容でもない。俺が話せるのはほんの少しだけだ」

「ああ。それでもいい」

フアングが頷く。そして拓羅は自分の家に呼んだ。フアングは椅子に座らせる事が出来なかったため、一人と一匹は床に座った。ぺたんと腰を下ろすと、一呼吸おいてから話し始めた。

「・・・最初の話は俺のオフクロから聞いた話だからな」

「おう」

「・・・。。アイツはな、虐待児、なんだ。・・・意味、わかるか？」

「わかんない！」

拓羅は出鼻を折られたというような表情で小さくため息をつき、説明し始めた。

「えつとな、なんつか・・・あの・・・暴力、ふるわれちまう子・・・つか・・・」

「あ、なんとなくわかった」

「そつか。アイツの親、子供が出来るって事、よくわかってなかったっていうか、予想してなかったみたいで、気付いた時には腹ん中で大分育っててさ。中絶とかは母体に負担がすっげえ掛かるって言われたらしいんだ。だからそのまま仕方なく産んだ、って感じ。それが楓だ。だからめっちゃ望まれて産まれてきたわけじゃないんだ。そんな時アイツのオフクロさんはまだ十六・・・俺らよりも二つも下で、事実、子供なんてどうやって育てればいいのかわかんねえ状態だったんだ。楓の親父は子供ができたってわかった途端逃げ出しちゃったから一人で育てるしかない。最初のうちは頑張ってたらしいんだけどさ、やっぱ色々大変みたいで・・・」

「そうなのか？」

「多分な。それに「仕方なく」で産んじまった子供だからさ」

「・・・フウン・・・」

「だから俺らが一歳になった時かな。もう我慢の限界で・・・暴力、ふるっちゃったらしい」

「・・・それがギャクタイってやつか？」

「ああ、そうだな。・・・だからそれからは・・・もう、少しでも

泣いたら即暴力だった。・・・楓もな、小三くらいまではこれでもかつて程ビービーギヤーギヤー泣いてたんだぜ」

「ええっ・・・」

「今じゃ信じらんねえだろ？・・・まあ十八で小三と同じくらい泣いてたらそれはそれで信じらんねえけど・・・。・・・ちよつと多く話すぎちまったかもしんねえけどさ、俺が話せんのはここまでだ。もつと詳しく聞きたかったら楓本人に聞いてくれ。・・・教えてくれるかどうか・・・わかんねえけど」

「・・・ああ」

「で。結局俺が楓に何言ったかってゆうと・・・」

「あ、そうか」

しかし、ファングは今、聞きたいような聞きたくないような気持ちだった。

（・・・オレが聞いて・・・楓に何をしてやれる・・・？）

心の片隅にあっただけのその思いが、段々大きくなっていた。

「や、やつばいいや！」

聞いても何も出来ない自分を想像すると、あまりにも惨めだった。そんな事なら聞かない方がいい。

「いいのか？」

「ああ。ゴメンな、教えろとか言つといて・・・でもやつばさ、オレが首つっこむ事じゃねえだろうし」

「・・・そっか・・・。わかった」

ファングは複雑な表情で拓羅の家を出ていった。楓の家に入る前に、ドアの前で一度深呼吸をする。気持ちを落ち着かせるためだった。そして中に入った。

入った時、楓はもう起きていた。少し変な気持ちになったが、ファングは楓のそばに歩いていった。

「あ、ファング。どこ行っ・・・」

ファングは、床に座っている楓にもたれかかり、ぴったりとくっ

ついた。

「……どしたの……」

「……どうしてないけど……」

チラリと楓を見た。それに気付き、楓もファングを見た。そして微笑む。それは朝とは全くの別人に見えた。

その楓を見て、ファングの胸が少し痛んだ。

（無理して笑わなかったっていいのに……）

「……楓、言いてえ事あったら……言えよ？何だって聞いてやる……」

（だって……オレにはそのくらいの事しか出来ねえ……）

「え……？」

ファングの言葉を聞いた途端、楓の表情が急に固くなった。さっきまでの優しい顔はどこかへ消えていた。

「いや。だから……」

「……もしかして……タクに何か聞いた……？」

「あ……う、うん。少し……」

「……ゴメンだけども、出てって」

「……へ？」

「あたし一番嫌いな、そういうタイプ！人の事情知った途端優しくなるなんて信じらんないし……！っていうかただの同情でしょ！？そんなの別に要らないしさあ……！」

ファングに背を向けた楓の声は、微かに震えていた。ファングはハッとした。

「楓……ゴメン……」

彼女は血が出るほどに唇を噛んだ。そうでもしないと今にも涙が溢れだしそうだっただけ。

「……とにかく……出てって……」

ファングはもう一度頭を下げて謝ると、静かに出ていった。立っただけだった楓は、近くの椅子に乱暴に座る。そして顔だけで笑った。

「あんなの・・・ただの八つ当たりじゃんかつ・・・」

フアングは何も悪くない。そんなことは分かっていた。だが言わずにはいられなかったのだ。そんな自分が物凄く嫌に感じた。

「・・・サイテーだよ・・・」

彼女はため息まじりにそう呟くと、机の上に置いた自分の腕に顔を埋めた。

第27話 『事情：川原にGO!1』

次の日、楓はいつものように家中を歩き回って家事をしていた。その変わりように、フアングは目を丸くしていた。瞬きを繰り返して楓を見る。バタバタと動き回っていた。

「かつ・・・楓・・・？」

「あ、フアング。おはよ」

今やつとフアングに気付いたようだ。顔を上げ、フアング用の皿を持つ。中にはもうドッグフードが入っていた。

「どうしたんだお前・・・大丈夫なのか・・・？」

「は？何が？はい、ご飯」

「え？あ、あ・・・どうも・・・」

しかしフアングには忙しさで気を紛らわしているように見えた。その証拠に、椅子に座ると途端に顔が変わる。何かを深く考え込むような、そんな顔だ。

（・・・まあそりや暇な時なら考え事くらいするだろうけど・・・でもなんとなく違う気がすんだよなあ・・・）

ドッグフードをボリボリかじりながらフアングは考えた。

（楓を悩ませてんのは・・・昨日のオレの発言か・・・？）

言うまでもないが、楓が悩んでいる原因は拓羅の「中国に帰ろう」発言だった。あれからまた少し話したが、やはり拓羅の意見は変わらなかった。ボーッとしている楓の顔を、フアングが覗きこんだ。

「お前、本当に大丈夫か？」

「・・・ん？あ・・・うん。・・・ってかフアングさっきからそればっかだよ」

そう言つて、楓は笑う。

「そうだったか？・・・まあいいじゃん」

笑った楓を見て、フアングも照れたような安心したような、そんな笑いを見せた。そしてまた皿に顔を突っ込んでドッグフードを食

べる。楓も、しばらくはフアングを見ていた。

「・・・・・・・・あ！そうだ！」

急に手を叩くと、さっさと朝食を口の中に放り込んで席を立つ。そして自分の部屋に入っていた。フアングはその様子をポカンと見ていた。

「・・・・・・・・何だアイツ？また閉じこもる気かな・・・・・・・・」

口いっぱいにはドッグフードを詰め込み、モゴモゴと呟く。そして最後の一粒も食べ終わり、皿を銜^{くわ}えて流し台の下に置いた。

その時丁度、楓が出てきた。上着を着ている。

「フアング！遊び行こっ！」

「あ？」

「気分転換！フアングもあんま動いてないっしょ？」

「ああ・・・・・・・・そういえばそうだな・・・・・・・・」

そう言っている間に、ドアが閉まる音がした。フアングが顔を上げると、もうそこには楓の姿は無かった。

「あっ！ちよつと・・・・・・・・おい！」

急いで追いかける。少し走って、階段のところで追いついた。そして一人と一匹はマンションを出た。楓がフアングを連れていった場所は川原だった。フアングは川原を見るのは初めてだ。目が輝いている。

「・・・・・・・・広いな・・・・・・・・」

草もあつて川もある。フアングは、「走りたい」という衝動に駆られた。それを察して楓が小さく川原を指差し、言った。

「ほら、走ってきていいよ」

「・・・・・・・・おっ！」

嬉しそうな声で返事をする、すぐに下りていった。凄いスピードで走り回っている。

「・・・・・・・・やっぱこの辺は犬だわな」

楓は少し笑って芝生の上に座った。

第28話 『事情：川原にGO!2』

— 時間後 —

走り回って疲れきったファングが息を切らしてヨタヨタと戻ってきた。楓の横まで来ると、その場に伏せをした。

「ど？気持ちよかった？」

「最高だッ！」

白い歯を見せて笑う。楓もニカツと笑った。

「そっか！」

彼女は後ろに倒れ込むようにして寝転んだ。

「楓は走んないのかよ？」

「んー……。あたし走るの嫌いだし」

「ええッ……。！」

「なによ……。？」

「だって……。なんか速そうに見えるぞ……。？」

「速くない速くない」

楓は顔の前で手を左右に振った。

「……。フウン……。じゃあ競争しよ！」

「……。や。だからね？走るの嫌いだったってのに……。しかも二本足と四本足だよ？勝てるワケないっつの！」

走る気なんて全く無いようだ。しかし、ファングは納得がいかない。どうしても彼女の本気を見てみたかった。そこで楓の性格を使ったある作戦に出た。

「ほー……。やってみる前から負けを認めるんだ？」

ファングの予想通り、楓は見事、目を細めて食いついてきた。

「……。何？今なんだった？」

「だからやってみる前から負けを認めんだな？負けず嫌いの楓さんよお」

「……。。」

一人と一匹は川原の道を全速力で走った。

道が切れるところまで走り終わると、楓は転がるようにして芝生の上に倒れこんだ。ファングも横に転がった。どちらも同じように息があがっている。

「お前っ・・・めちやくちや速えじゃねえかつ！」

ファングは、隣で空を見上げている楓に向かって叫んだ。

「オレ・・・これでも足には自信あったのに・・・！」

「でもファングが勝ったじゃん・・・」

「あんなのほんの少しの差じゃねえかよッ！うああーっ！すっげえ屈辱的！すっげえムカツク！」

悔しがって手で顔を覆うファングを見て、楓は白い息を吐き出しながら笑った。

「・・・でも・・・お前が笑っててよかった・・・」

「えあ？」

「・・・なっ・・・なんでもねえ！」

ファングは少し赤くなった顔を、再度手で覆った。

——それからどのくらい経っただろう。

遠くで子供達の遊ぶ声がする。空は赤く染まっていた。そんな空をボーッと見つめながら楓が言った。

「・・・ごめんねファング。この間の・・・単なる八つ当たり・・・」

楓の声を聞き、ファングは振り向くと優しく笑った。

「気にしてねえよ。それに・・・当たっちゃみたい時だってあんだる・・・言っただじゃん？「言いてえ事あったら何でも言え」って。「何でも聞いてやる」・・・って。だから・・・もし、この間みたくに言ってお前が楽になれるんならどんだけでも言え。オレが全部聞いてやる」

「ん……………っていうかフアング犬のクセにしつかりしすぎっ」

「！なんだとツ！オレはケルベロスだ！……そりゃ少しは犬の血も入ってるけど……んでもケルベロスだツ！」

「……犬なんじゃん……」

楓は口を少し尖らせ、小声で言った。しかしフアングはそれを聞き逃さなかった。

「犬じゃない！ケルベロスだツ！」

そう言って楓をバンバン叩いた。

「わかったわかった！爪痛いつての！」

フアングの手を払い除ける。そして、一度深呼吸してから続けた。
「……もうさ、何聞かれたって平気だから……なんでも聞いてくれていいよ」

「え？……あの……中国………での？」

楓は無言で頷く。フアングは驚いた表情を見せたが、川の方を向いて口を開いた。

「……じゃあさ………暴力………ってどんな……？」

「やっぱりきたか」と言う顔をしてから、手を少し上げて親指から順に折って数えた。

「……殴られるのは当たり前だった。あとは……蹴られたり……カッターで切られたりとか、包丁持ち出してた時もあったなあ……。……もう、半分死んでたよ。多分」

フアングの動きが止まる。平気な顔、平気な声を作って言っている楓の姿を見るのはいたたまれなかった。だが聞きたいことは他にも沢山ある。少し悩んだが、再度口を開く。

「………肉親に………そういう事されて憎まないのか………？」

「や……憎む………って言ったってしょうがない？まあそりゃ一時期、絶つ対殺してやるとか思ったけどさ。……でも……やっぱ産んでくれた人だし？だからこうして今フアングとも話せて

るわけだし・・・」

「許してんのか・・・？」

「許す事は多分一生無いと思う。だけど今は昔ほどは憎んでない・・・かなあ？」

「・・・そつか。・・・その・・・虐待・・・でさ、自殺しようとか・・・そう言うのは思ったりしたのか・・・？」

「そんなのしょっちゅうだよ。いつも考えてた。「自殺」って選択肢はどんな時でも頭の中のどつかにあったの。実際包丁自分の首に突き付けてみたり・・・カッターで手首切ってみたりもした」

フアングは心底驚いた顔をした。目を、眼球が飛び出るほどに見開いた。

「し、死なないのか!？」

「水の中に腕入れてなければ大丈夫なんだよ。その頃はまだ知らなかったから、その事。意識はブツ飛んだけどさ。いつの間にか、血止まってた」

「・・・それ以上は・・・何もしなかったんだ・・・？」

「うん。自分で自分の命絶てる程肝座ってなかったんだ。それに・・・タクが止めてくれたの。あたしが首に包丁突きつけてたら、「何やってんだバカ野郎」って」

「・・・拓羅が・・・？」

「そ。親すら止めなかった事、止めてくれたの。・・・待ってたのかもね。止めてくれんの」

「やつばいい奴なんだな。アイツ」

「うん。こっちにも・・・嫌な顔ひとつしないで一緒に来てくれた・・・なのに・・・酷い事言っちゃったなあ・・・タクにも・・・」

楓は目を瞑り、静かに深呼吸した。そしてまたゆっくりと目を開ける。

「・・・親父は？」

「え？」

「親父。お前の。産まれた時からいなかったのか？」

「うん……。母親にも聞こうにも聞けないし。だから……。家族三人で笑ってるタクの家が羨ましかった。喧嘩もしてたけどすぐ仲直りして。笑顔が絶えなくて。日曜には決まって家族で出掛けてたんだよ。たまに一緒に連れてってもらってたけどね。あたし、泣いたら怒られる、っていうのが当たり前だと思ってたから、「泣いてもいいんだよ」って言われた時ビックリした。だから、泣きたくなったらすぐタクン家行つてたの。……。今思うとタクに泣き顔すっごい見られてたなあ……。」

楓は微妙に笑っている顔を手で覆った。そんな彼女を見て、ファングは呟いた。

「……。コイツも女なんだよな、やっぱ」

「なんか言つた？」

極力小声で言つたつもりだったが、楓は聞き逃さなかったようだ。ファングをギロツと睨んだ。

「いえ……。何も」

そしてファングは次を最後の質問にした。

「今……。こっち来てさ、……。幸せ、か？」

「勿論」

首を動かし、横のファングを見て笑った。

もう空は暗くなっている。辺りはすっかり静まりかえっていた。

暗闇の中で、楓はジャンプするように立ち上がった。

「寒くなってきたし……。帰ろっか！」

ファングも立ち上がる。そして頷いた。

第29話 『事情』5

——マンションへ帰ると、楓の家の前に拓羅が座り込んでいた。首が少し上下に揺れている事から、眠っているのがわかった。
「・・・何してんのコイツ」

楓が吐き捨てるように言った。言いながら足で突付く。その時、マヌケな男はハッと目を開けた。

「うおっ！びつくりした・・・」

「こっちのセリフだ！何してんのよ人ん家の前で！」

「べっ、別に変な事なんて考えてないぞ！待ち伏せして驚かそうなんて考えてないぞ！ましてや夜這いなんてもつての他・・・」

「あつそ。考えてたんだね。めっちゃくちゃ変な事考えてたんだね・・・この変態男が！」

楓はそう言いながらしゃがみ込む。そして同じ目線になった拓羅の頭を小突いた。

「いてっ・・・くそっ・・・しまった・・・！」

「しまったじゃない！本当の用は！？何？」

「・・・め・・・飯、作ってくれ・・・」

「・・・は？んなもん自分で作りゃいいじゃん」

「違えんだよお！作ってみたんだよ！でも真っ黒焦げになっちまっ
てさあ・・・」

「そういう子犬みたいな目で見な・・・」

「頼む！」

楓は深いため息をついたが、しぶしぶ中に入れた。

「っていうかさ、飯作れって言われてもあたしも今日コンビニ弁当
なんだけど」

「じゃあ金くれ！」

「あほ！あたしはお前の保護者か！」

「・・・じゃあ・・・楓の飯分けて・・・？」

拓羅はさっきのように上目で見た。彼は気付いていないようだが、楓は拓羅のこういう「捨て犬顔」に弱い。そんな目で見られては断れない。

「・・・あーもー！じゃあいいよほら！」

楓は上着を脱ぎ捨てて、テーブルの上にコンビニの袋を置いた。
「おおッ！さんきゅー楓！」

そしてもなくと食べ始めた。楓も拓羅と向き合う形で椅子に座った。誰かが見ようが見まいが、拓羅はそんなこと御構い無しだ。ペースを全く変えずに食べまくる。時々、「美味え！」という声がある。

そんな拓羅を見ながら、楓が口を開いた。
「・・・いいよ。中国、行つても」

丁度その時拓羅はお茶を飲んでいた。だが吹き出したら後からどうなるかわかったもんじゃない。吹き出さないのに苦労した。口の中に入っている物を全て飲み込むと、楓を見た。

「いっ・・・いいのか・・・？マジでいいのか？」

「マジでいって。なんか・・・もうどうにでもなれって感じだし」
「でも・・・行ったらまたお前・・・もしかしたら・・・」

「自分から言い出したくせに・・・」

楓は意地悪な笑いを見せた。そして続ける。
「約束、守るんでしょ」

拓羅は楓の口から出た優しい声と言葉に驚いた。少し返事に困ったが、「ああ」と頷いた。

「・・・あ、でも一つ。条件、付けてい？」
「なんだ？」

「日数出来るだけ・・・、本ッ当に短くして」

「ああ。わかった」

また頷き、ファングを見る。
「ファングも行くよな？」

「二人が行くんなら行く！」

ファングはもう食べ終わっていた。その場に座って二人のやり取りをじっと見ていたようだ。

こうして、中国行きは決まった。

第30話 『中国』

今、楓、拓羅、フアングは空港から出てきたところだった。

「ここは・・・」

中国の空気を吸い、一番に口を開いたのは拓羅だ。

「ここは中国だねえ！」

「そりゃそうでしょ」

興奮する拓羅の横には、「当たり前だろ」と言う顔で拓羅とその背景を見つめる楓が居た。拓羅は楓の言葉に少し落ち込んだようだったが、すぐに顔を上げてポケットから紙を取り出した。そこには拓羅の字で「中国旅行プラン！」と大きく書かれ、その下に中国に着いてからの行動がズラツと箇条書きにしてあった。

本人曰く「少々ザツ」なため、拓羅以外は誰も読む事が出来ない。「え・・・と。じゃあまずは俺ん家行くか。挨拶とかもしといった方がいいし」

楓もフアングも賛成して、拓羅の家へと向かった。

自分の家と言ってもやはり久々なのだから、開ける時少し戸惑うのだろうか、と考えていたフアングとは裏腹に、拓羅は何の躊躇もせずに豪快にドアを開けた。中からは中年の女性が出てきた。最初は驚いた顔をしていた。行く前に何も言わなかったから当たり前だ。しかし二人を見た途端、大声で笑いながら喋り出した。恐らくは拓羅の母親だろう。

そして彼女は座っているフアングに視線を向けた。初めて見る生き物なため、不思議そうな顔でジロジロと見ていたが、ニツコリと笑うとフアングも中に入れた。

中に入るとまず目に入るのは四角く大きなテーブルだった。そのテーブルを挟むようにして置いてある椅子には父親と思われる人が座っている。父親も驚いた顔の後に、満面の笑みで二人を抱き寄せ

た。どちらにも優しいような顔をしている。フアングは少し安心した。だがやはり父親もフアングに目を向ける。いくら珍しい生き物だとは言え、ジロジロ見られるのは気分のいいものではない。

フアングはビクビクしながら拓羅のそばに行くと、耳元でささやくように言った。

「オ、オレの事ちゃんと説明してくれよ」

「あ。そっか。・・・わかってるって」

拓羅は説明を始めた。何十分も掛かるかと思いきや、たったの一分で終わった。両親は納得したように頷いている。

「・・・なんて言ったんだ？」

「突然変異で髪が生えて喋れるようになったらしいぞ、って」

サラツと言った。

「え、それで納得しちまったのか？もう少し疑う事を覚えた方がいいんじゃないのか？お前の親」

フアングが驚くのも当然だ。普通ならそんな説明ではまかり通らない。

「ま、面倒な説明延々とせずに納得してくれたんだしさ、いいじゃねえか」

その後、何時間か話し、昼食も拓羅の家で終えた。そして一行はその場を後にした。中国の街に出て、拓羅はまた紙を取り出す。

「次は——楓の家・・・」

そこまで言うと、隣を歩いている楓に少し睨まれた。慌てて言い直す。

「楓の家は素通り、と。んーと・・・じゃあフアングどっか行きたい所あるか？」

「え？いや別に・・・全然わかんねえし」

「んー・・・どーすつかねえ？一泊するからホテルまで・・・」

拓羅がそう言った時、大きな音がした。羽をはたかせているような音だ。それも半端無くうるさい。辺りは一気に悲鳴で溢れかえった。

「なんだ？」

音がする方を向くと、鳥のような怪物が降りてきていた。着地した所は人が大勢居た。その中の殆どがソイツに踏み潰され、犠牲となった。

「アイツは・・・！」

「ファング知ってんのか？」

「・・・ああ。ヴェギリス。とにかく殺し方が酷い事でオレらの中じゃ結構有名なんだ。だが何故ここに・・・」

「え、でもじゃあ放つといたら俺らの親も殺され兼ねないワケだよな？」

「ああ」

「ヤベエじゃねえか！こんなところでチンタラしてらんねえよ！」

「そうだな、でも・・・」

ファングの言葉を無視し、拓羅は駆け出した。

「あつ！おい、ソイツは・・・」

だが言った時にはもう遅かった。拓羅の体は、風によって地面に叩きつけられた。「・・・何だ今の・・・！触ってもいねえのに・・・」

「アイツはあの羽で風を出すんだ。ほら、お前の体、ところどころ切り傷が出来てるだろ」

ファングが走って来ていた。言われて見てみると、腕や足から血が出ていた。特別大きな傷なワケではないが、いくつも出来ている。『かまいたち』だ。

「じゃあどーすんだよ！攻撃出来ねえじゃんかよ！」

「あの羽が無くなればこっちのものだ。身体よりも羽を狙え」

そう言うつとファングは走り出した。ヴェギリスに一番近い建物の上に行くと、そこから炎を連射した。ヴェギリスも一応押されてはいるが、羽が取れるとまではいつていないようだ。ファングの放った炎で、一面煙だらけになった。煙の向こうでチラリと何かが動いたのが見えた。その瞬間、物凄い勢いで何かがファングを下に叩き

落とした。

ヴェキラスの腕だ。やはりあの攻撃だけで死ぬ程弱くない。

「くそっ……！」

もう一度炎を出そうとするが、上手く出ない。出るのは灰色の煙と少しの火だけだった。

「フアング！どうしたんだよ？」

「……喉痛くなって出ねえ……」

一度にあまりに多くの炎を出しすぎたせいだろう。フアングの身体は、まだそのレベルには到達してないようだ。いくら身体が炎を出せる造りになっているとはいえ、やはり限度がある。途方に暮れている時間すらない。しかしフアングの炎でも倒れなかった奴だ。人間の攻撃で倒れるはずが無い。

だが拓羅は納得出来なかった。自分の両親が殺されるかもしれないのに、自分はこんなところで降参だなんてそんなものは彼自身が許せなかった。

拓羅は殴りかかろうと走り出した。フアングの止める声が聞こえたが、構わなかった。拳を握り締めた時、後方から足音がした。だがフアングのではない。拓羅の横を足音の持ち主が通っていき、ヴェキラスの前に立った。まだ煙が少しあったため、その姿はハッキリとはわからない。

「お、おい危な……」

拓羅はその者に手を伸ばす。しかしその時、辺りは冷気に包まれた。伸ばした手を引っ込め、反射的に目を瞑った。

第31話 『中国』2

——そして再び空気が常温に戻るまでには少し掛かった。

ゆっくりと目を開ける。最初に目に入ったのはヴェキラスだった。拓羅の目の前に巨体が立ちはだかつていた。

「・・・・・・・・！」

もう一度目を閉じる。

しかし攻撃はこなかった。動きもしない。よく見てみると氷に包まれて固まっていた。

「・・・・・・・・一体・・・何がどーなっちまったんだ・・・？」

わけが分からなく呆然としている彼の横から、ふと声がした。だがそれは彼に向けての物ではない。後ろにいるファングに向けての物だった。

「アンタ何しとるん？情けないったらあらへんわ！」

女の声、しかも大阪弁だ。一呼吸おいて、ファングが叫んだ。

「ユキ！ユキじゃねえか！」

「ユキ」というのは白くまだだった。ファングと同じく称狼の使者である。そして何故だかいつも大阪弁で話す。ファングよりも二つ、年上だった。

「んでもなんでここに居んだよ？中国だぞここ！」

「あのマヌケ・・・・・・・・ヴェキラスがここに向かった言う情報が入ったんや。せやから来た。そんだけのこっちゃ」

「・・・・・・・・ちょっと待てよ。どうやって来たんだ？白くま乗せて中国に行く飛行機なんてあったか？」

「アホ。んなもんあらへんわ！」

「じゃあどうやって・・・」

「ファング、あたしを誰と心得とるん？」

「白くま」

ファングはためらいもせず即言った。

「……………まあええわ。あんな？使者の下っ端にグリフォンが入ってきたんや。ソイツに送ってきてもらったんよ。ソイツあたしにめっちゃ懐きおつて。「姐さん」なんて呼ぶもんやから……………あーもー参つてまうわあ！あつはっは！」

そう言つてファングをベシベシ叩いた。

「……………なーにが「姐さん」だ。モロ大阪のオババじゃねえか」

ファングは横を向いてボソボソと言った。

次の瞬間には氷に包まれた者が一つ増えた。

「……………スマン……………オレが悪かった……………」

「まったく！口慎みや！」

ユキは何かを唱えた。唱え終わると、ファングを包みこんでいた氷が一瞬にして溶け、消え去った。

「何だ今の？」

「氷を溶かす呪文や！凄いやろ？アンタがおつた時あたしこんなん習得しとらんかったから驚きやろ？結構苦労したねんで。これ覚えんの」

「て事はヴェキラスの氷も……………」

ファングは慌てて後ろを振り返る。しかしユキは顔色一つ変えなかった。

「何言うとんねん。敵の氷まで溶かすんやったらアンタの氷なん一生溶かさへんわ」

「ひでえっ！……………あ、本当だ。溶けてねえ。ユキやるじゃねえか！」

「せやからそう言うとするやんか。もっと褒めてもええよ」

ユキはフン、と鼻を鳴らした。ファングは「付け上るから」と言つてそれ以上は褒めなかった。

「……………ケチケチしとると嫌われるで」

「うるせえよっ」

「ほな、最後の仕上げやな！」

凍っているヴェキラスの近くに行くと、ユキはその身体を前足の

先で少し押した。ヴェキラスは凍ったまま砕け、その場に崩れ落ちた。

午後十時。

あれから色々やっているうちに夜になっていた。楓達はこの時間になつてようやくチェクインを済ませ、部屋に入った。動物も宿泊OKな所だ。だが人間と同じ部屋に入る事は出来ない。隔離された部屋で、一頭ずつケージに入れられる。ファングとユキもそうだった。ケージ越しに、二匹は小声で話していた。

「・・・まだようわかつとらんのやけど、あの人らは「カエデ」と「タクラ」って言うんやな？」

「おう」

ファングは大きく頷く。

ヴェキラスを倒した後、ユキはやっと楓達に気付き、ファングに紹介してもらっていたのだ。

「カエデにタクラか・・・。な、な、あだ名付けてもええかなあ？」

「いんじゃない？」

「どないしよつかなあ・・・」

ユキは真剣に考え始めた。

一方、こちらは楓達人間チームの部屋だ。部屋を二人分も取るほどの金が無いため、二人一部屋だった。

（明日帰んのかあ・・・）

そう考えているのは拓羅だった。今、彼はベッドの上に座りこんでいた。

（ま、楓は日本のがいいだろうけど）

中国は彼の母国だ。楓にとってもそうだが、彼女の場合は日本に居る方が気楽なのだ。拓羅も、楓は日本に居る方がいいと思っている。しかし、やはり一度中国に帰ってきてしまうと、その環境が懐かしく、日本に帰るのが気持ち的に困難になる。だが楓一人を日本に帰すのも心配でならない。

そして、その時の楓の心境はこんな感じだ。

（明日帰れるぞっ）

湯船に浸かりながら満面の笑みを浮かべていた。中国に居ては、またいつ自分の母親と対面してしまうかわからない。

（まあタクは中国のがいいかもしれないけど・・・）

自分から望んで日本に来た楓でも中国の空気が懐かしく思えるくらいだ。拓羅の場合はもっとだろう。自分の家や、親など懐かしいものばかりだ。もっと色んなことを話したりもしたいはずだ。だが、いくら親が一緒だと言っても、やはり拓羅一人を中国に置いていくのも心配でならない。

髪を拭きながら風呂場から出ると、拓羅がベッドで熟睡していた。「風邪ひくつつの・・・お？」

何も掛けずに寝ているため、拓羅の下にある掛け布団を取ろうとした。が、ビクともしない。

「・・・タクってこんなに重かったっけ・・・？」

何気に失礼な言葉をぶつ放し、そのままにしておいた。

第32話 『中国』3

そして場所は再びユキとファングの居るケージに戻る。

「決まった！」

三十分ほど悩み、やっとユキの声が上がった。寝ようとしたところをその声に邪魔されたため、ファングは少し不機嫌そうな顔だった。

「カエデって子は「かえちゃん」、タクラって子は「たつくん」や！」

「・・・ああそーかよ。決まって良かったな。じゃあオレは寝るぞ」
喜んで踊っているユキの隣のケージで、ファングは再度丸まった。
しかし、またユキの声で眠りを妨げられた。

「あああ！」

「なんつだよ！うるせえな！」

ファングが飛び起きる。

「アイチってどんなところ？」

「ああ？」

「アンタが住んだるとこアイチってとこなんやろ？どんなとこか教えてくれてもええやないのー」

「・・・どんなとこ・・・？・・・オレが知ってんのは・・・
シャチホコってのがあるってことだな！」

「シャチホコ？なんやそれ？」

「ケツ上げて屋根の上に立ってるシャチ」

平然と言うファングを、ユキは目を点にして見ていた。そしてしばらくして口を開く。

「・・・えらい下品なシャチやな」

「だろ？しかも金ピカ！」

「・・・えらい金持ちで下品なシャチやな」

ユキは何か勘違いをしているらしい。しかしファングも本物の鯨

を見た事があるわけではない。楓から聞いた話をあたかも自分が見たかのようにユキに言っているだけだ。だから、シヤチ自身が金持ちなのではないと言う事を自分もわかっていなかった。勿論ユキもわかっていない。これで更にユキの頭の中に無駄な知識が一つ加わってしまった。

「で？で？他には何があるん？」

「え．．．えーつとな．．．」

「まさかアイチにおつてその「金持ちで下品なシヤチ」の事しか知らんわけあらへんよな？」

悪気があつてこんな事を言っているのではない。その証拠に、ユキの目は輝いていた。だがフアングは、鯨以外の話はあまり聞いていなかったためわからない。ここでフアングの悪知恵が働いた。

「．．．東京よりも都会で．．．東京タワーよりもデカイ名古屋タワー．．．つて言うのがあるんだ．．．」

「凄いやん！」

調子に乗ったフアングは、更に続けた。

「富士山よりも高い山があつてな、世界一高い山なんだ！世界遺産に登録されてるしギネスブックにも載ってるんだぜ！」

もはや滅茶苦茶だった。だが、愛知に行った事のないユキはそれを信じ込んでしまった。

「あたしもその山登つてみたいわあ！また今度連れてつてな！」

「．．．お、おう」

「他は？他は？もつと話聞きたい！」

「．．．え、と。も、もう品切れ」

「なんや。つまらへん。ほな、行つてのお楽しみつちゅうわけやな！」

「．．．．．え？」

フアングは凍った。ユキは愛知に行くつもりで話を聞いていたのだ。それをすっかり忘れて調子に乗ってしまった。これがバレたら恐ろしい事になる。

「なに？どないしたん？・・・おい。ファング・・・？」

ファングの耳には、ユキの言葉は届いていなかった。凍ったまま一夜を過ごした。

次の日、ファングの足は棒になり、おまけに寝不足だった事は言うまでも無い。しかしそれでも中国の観光を楽しんだ。昨日、ユキの仲間入りが決定し、楓達もユキと一緒に日本に帰る事を反対しなかった。しばらく街を歩いていると、ファングが楓と拓羅に疑問をぶつけた。

「・・・なあ、お前ら小さい頃遊んだりしてたのか？」

前を歩いていた二人が振り向く。

「遊んでた・・・っていうか・・・」

「遊びって言う遊びはしてなかったよな」

「そうそう。交流はあったけどさ、んでも・・・一緒にお風呂入ったりとかそのへんだったね」

「ええっ！」

突然、ファングが大声をあげた。道行く人々はみんなファング達の方を見た。

「バツバカ！うるさ・・・」

「バカはお前らだっ！風呂に一緒に入ってただあ？」

「だから小さい頃だっ」

「小さい頃でも男は男、女は女だ！っていうか小さい頃っていつだよ！」

「・・・二、三歳・・・？」

「邪道だッ！絶ッッ対邪道だ！」

「アホかつ！動物が喋るって方がよっぽど邪道じゃん！」

「そーそ。それにほら、男でもチビな時って女湯に入るじゃん。母親と一緒にさ。銭湯とかでも温泉とかでも・・・」

拓羅も楓側について参戦した。だがファングの熱りはさめなかった。

「じゃあなんだ！お前らは男女でも同じ風呂に入れると言うのか！

今でもそうなのか！そんなのは許されないぞ！有り得ないぞ！」

「今は無理に決まってるでしょーがッ！」

楓は思い切り赤面し、絶叫した。それは街の賑わいを一気に静める程だった。拓羅もその後ろで咳払いをしている。

「・・・っていうか・・・なんでファングがそこまでムキになんのよ」

「だって男と女が同じ風呂に・・・」

「あーわかったわかった！」

ユキが間に入って止めた。ファングを少し睨むと、続けた。

「まあ、人間には「混浴」言うもんがあるらしいやんか。それと同じ事や思て片付けりやええやん。それにファングと一緒に入れ言うとするわけやないんやし・・・。これはかえちゃん達のことやろ？アンタには関係あらへんやん」

「カエちゃん？」

拓羅が口を挟む。

「あ、そうや！言い忘れとった。アンタらの事「かえちゃん」と「たつくん」ゆうて呼ばせてもらうさかい。よろしゅうな」

ユキの言葉に、楓と拓羅は嬉しそうな顔を見せ、ファングは「関係ない」と言われ、少し落ち込んだ。

だがすぐに歩きだした。

第33話 『ラング』

一行は日本へと帰ってきた。ユキも連れて楓の家に入ろうとしていた。鍵を開けるため、ドアノブに手をかける。

「・・・・・・・・あれ？」

しかし何故だか鍵が開いている。恐る恐るドアを開けてみる。中は電気も付いていない。

「なん・・・・・・・・なんで・・・・？」

「お前鍵掛け忘れたんじゃないの？」

「違うよ。ちゃんと掛け・・・・」

その時、中で何かが動いた。それを見た瞬間、楓は固まった。彼女はホラー系が大嫌いなのだ。だが、中から出てきたのはホラーでもなんでもない、笑顔の称狼だった。

「称狼！」

「あー称狼様やッ！」

「楓、大丈夫か？」

みんな一斉に別々の言葉を発した。楓は固まった名残とショックで言葉が出てこなかった。

「おかえり」

満面の笑みで皆に手を振る。やっと喋れるようになった楓は、驚きの顔で当たり前な質問をした。

「アンタどうやって入ったわけ？」

「フツ・・・・。凋^{ちよう}婪^{らん}さん、俺をナメちゃいけませんよ」

「や、ナメるとかそういう問題じゃないし。しかもその名前嫌なん・・・・・・・・」

「凋^{ちよう}婪^{らん}？凋^{ちよう}婪^{らん}ってなんだ？お前の名前か？」

ファングが口を挟んだ。楓はファングを見ると、「中国での名前」と言った。それはファングの興奮を更に引き立てるものとなった。

「中国での？じゃあじゃあ拓羅が「菁汜」^{せいはん}ってゆうんだな？」

「ああ」

今度は拓羅が言った。フアングは「へえー！」と言い、それ以上は何も言わなくなった。そして称狼が続ける。

「まあ、鍵開けを身につけた、と言う事で」

「ちよちよちよちよちよと待て！そうゆうのが一番困る！すごい困る！本当に困る！っていか人の話聞け！」

「実は管理人にマスターキーを借りたんです」

「聞けっちゆうに」

小声でそう言って、楓は続けた。

「まあマスターキーを借りるとはなかなか考えたもん……………」
「……………って……………んな簡単に渡していいのか……………？」

「ダメですね！」

「ダメじゃん！管理人もアンタも！よくもそんな平然と言えたもんね！」

「でも貸してくださいって言ったらすんなり貸してくれましたよ。」

「今出かけてるしね」って

「出かけてるから貸すって……………じゃあ鍵掛ける意味ないじゃないのよ。鍵も必要ないし管理人も必要ないなあ……………」

「あ、今有り得ない事言いましたね！そんな事言っちゃ管理人さんが可哀相……………」

「有り得ないのはアンタの行動だろがっ！」

「んまあそんなカツカしい」

「……………つかなんで鍵借りてまで人の家に上がりこむんですか！その辺の理由がわかんないんですけどー」

「決まってるじゃないですか。凋樊さんに会いたかったからですよ」

称狼はニツコリと笑った。

「称狼ったらかーわいー」

と言って、楓は笑いながら称狼の腹に重いパンチを入れた。

「なっ……………何すんですかっ……………」

「こないだの仕返し。鳩尾に一発入れたでしょ」

「・・・まだ覚えてたんですか・・・」

「これでおあいこ！さー中入ろー」

「いってえ・・・ちよつと潤婪さんッ！」

腹を押さえながら称狼も中に入った。

第34話 『ラング』2

全員入ったところで、三人は椅子に座った。ファングとユキは別の部屋で遊ばせている。

「で。本来の目的は？」

「……雪山のところで「三日待ってくれ」って言ってたじゃないですか？」

「うん」

「でもすっかり忘れてて……」

「忘れてたんかい！」

「タク、つつこみはいいから」

「はい」

「ぐーすか寝てるとか言ってからでホント悪いんですけど……ボスの所に一緒に来てください」

「ああん？」

「楓、女だろ！足広げないの！しかもその言葉使い！」
「はい」

片方の頬を膨らませて足を閉じ直し、改めて称狼を見た。

「行く前にさ、「ボス」って一体誰？どいう奴？」

「名前はラング」

「ラングッ？」

楓は眉をしかめた。その横で、拓羅は驚いた表情を見せている。

「ラング……ってセルヴオが言ってたよな……？」

「うん」

「セルヴオ？……ああ。そんなんも居ましたね」

「って事はもう居ないの？」

「ボス曰く「辞めた」らしいですよ」

「……へえ……」

その時、玄関からコッソ、と音がした。皆音のした方を見る。

「・・・今の・・・何だ？」

拓羅はそう言つとゆっくりドアの方へ歩き出した。恐る恐るドアを開けてみる――。

しかし何も無い。外に出て辺りを見回す――足に何かがぶつかった。

「お・・・つと」

自分の足元を見下ろした拓羅の顔から、一気に血の気が引いていった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・！」

彼の目に映つたもの。それは生首だった。しかもその顔には見覚えがある。

（こ、こいつ・・・）

齒がガチガチと音を立てている。そんな拓羅を変に思い、楓もそばに来た。

「・・・・・・・・これ・・・セルヴオ・・・？」

「ああ・・・誰がこんなの・・・」

「辞めたつて殺したつて事・・・？」

「みてえだな・・・」

突然、一人の男が急ぎ足で階段を下り、踊り場の隙間から外へ飛び出した。いかにも怪しい下り方だ。二人は怪訝けげんそうな顔をしてから、同時に飛び出した。男は怪我もせず道を走っていく。やっと二人が階段を下りた時には、その男は遠くに居た。かろうじて姿が見えるくらいだ。

楓は舌打ちすると、直線の道を走った。人がそれほど通っていないかったため、楽だった。だが男の足も速く、どんどん距離が開いていく。

「速えぞあの二人つ・・・」

拓羅は遙か後ろからついてきていた。しかし途中で力尽き、膝に手を置いて荒く息をした。止まった途端、汗がダラダラと出てくる。ゆっくりと顔を起こし、前を見ると、二人の姿はもうどこにも無か

った。

「・・・あれ・・・？」

ゼーゼー言いながら辺りを見回す。ジャンプをしてより遠くを見てみたりもした。だが姿はない。どこかの角で曲がったのだろう。仕方なく歩き出した。

第35話 『ラング』3

その頃、楓は男を捕獲していた。男が角を曲がる時のスピードダウンを利用し、ジャンプして捕まえたのだ。案の定その場に倒れこんだが、すぐに起き上がると腕を引っ張り、強制的に後ろで組ませた。

「いでででっ！」

「動くな・・・ッ！」

楓も拓羅と同様、ゼーゼーと荒く息をしながら男に向かって叫ぶ。そして男の腕を更に強く引っ張る。それ以降は動かなくなった。その時丁度、拓羅が二人を見つけた。

「・・・・・・あ！あの男か？でかしたぞ楓！」

「イエッサー隊長！」

楓は少しふざけて敬礼をし、また男の腕を両手で掴んだ。そこから拓羅の尋問が始まった。

「お前誰だ？「ラング」って奴か？」

「あ？何だよ！誰だよそれ？」

「今はこっちが質問してんだ。そうなのか？違うのか？」

「だから誰だよっ！違えつつてんだろ！」

「ならなんで逃げた？」

「んな事どうだっていいだろうが！」

「・・・楓、もうちょいやってやれ」

拓羅がそう言くと、楓はニヤツと笑い、力を強める。

「いででででッ！」

男はさっきよりも大きな声で絶叫した。

「答える。なんで逃げた？」

「い、急いでたんだよ・・・」

「急いでたとしても踊り場から飛び降りる人間がいるか？」

「ここにいい見本がいるじゃねえか」

「お前以外にする奴いないだろ。そんなバカな行為」

「うるせえよ！テメエはなんなんだよ！人に名前尋ねる時はまず自分から名乗るつてのが礼儀じゃねえのか！ああ？」

「・・・ダメだな、こりゃ。絶対口割らないぜ」

楓の方をむき、首を横に振る。

「どーすんのよ」

「マンションに連れて帰る。称狼に見せればラングって奴かどうかわかんだろ」

「タク今日冴えてるじゃん！」

「へっへっへー」

そう笑うと、拓羅は歩き出した。楓も男の腕を掴んだまま後に続く。

マンションに帰ると、楓は称狼の目の前に男を出した。

「ボス！？」

「やっぱな。やっぱりお前ラングじゃねえか」

拓羅は勝ち誇った笑みを見せる。しかし、この期に及んでもまだ男は白を切る。

「・・・ラングッテ誰？オレ知ラナイ・・・」

「とばけんな！」

犬だったら今にも噛み付きそうな勢いで男に向かって怒鳴った。

「・・・あーもー。そうだよ。俺がラングだ」

半ばヤケクソになって男は白状した。

「ボス。丁度良かった。今から行こうと・・・」

そこまで言うのと、ラングは楓の手を乱暴に振り解き、称狼の耳元に顔をやり、囁いた。

「あと一日待ってやる。もし来なかったら——わかってるな？」
「・・・はい・・・」

ラングは楓と拓羅を見ていやらしく笑うと、横を通って階段を下りていった。

「・・・称狼、何言われたんだ？」

拓羅は称狼の青ざめた顔を覗きこみ、訊ねた。称狼は一瞬ビクツと動くと、拓羅の顔を見て、無理矢理の笑顔を作った。

「いや？なんでもないよ？」

「大丈夫か？」

「ああ」

称狼は頷くと、奥に入っていった。楓も家の中に入ろうとする。

しかし拓羅は行かなかった。階段の方を見ている。

「・・・タク？どしたの？」

「ん？あ・・・うん。先入っていいよ」

不思議そうな顔をしながらも、楓は中に入っていった。ドアの閉まる音と共に、拓羅の顔付きが変わった。足音を忍ばせて階段を下りていく。踊り場に出た。

「・・・」

拓羅はそこで用心深く辺りを見回す。

（視線・・・感じんだよな・・・）

彼の思った通りだった。足音が聞こえてきた。

「誰だッ！」

拓羅はそこそこ大きな声で言う。返事はない。だが足音はする。

彼は下の階から続く階段をじっと見つめる。足音が近く、大きくなるにつれ、彼の鼓動も速くなった。

そして最初に見えたのは——耳だった。だが人間の耳ではない。犬の耳だ。

「・・・あ・・・？」

顔をしかめる。じきに全体も見えた。それは真っ黒く大きな犬だった。その犬は拓羅を見た。そして、

「いよっ！オレ良真りようま！」

と言った。なんとも脳天気な言葉に、拓羅はがっくりと膝を付きそうになった。しかしその脳天気さはそこだけだった。

「お前らの名前はもう知ってる。色んなところでのやり取りを聞かせ

てもらってたからな。それでだ。オレも仲間に入れろ。オレこれ言いに来た。だから他の奴等にも言っておいてくれ。よろしくな」

真剣な顔で拓羅に向かってそう言つと、良真は階段を上がっていった。

あまりに急な出来事だったため、拓羅の頭の中はぐちゃぐちゃになつていた。

第36話 『ランゲ』4

「何これ！」

マンシヨン全体にその声は響いた。楓だった。

「・・・なんか・・・新しいお仲間・・・」

頭を掻きながらオロオロしている拓羅の陰から、良真が顔を出していた。

「オレ良真。狼犬。今年二歳になったばかりなんだ！よろしく！」
勿論二歳とは犬の歳でだ。人間の歳で言えば二十四、五歳と言ったところだろう。

「エエ子やし。カワエエし。えんやない？」

「賛成！」

と言う事で、表向きはいい子の良真は仲間入りが決定した。

そして、事件はその日の夜に起こった。

一同は、楓の家で「セルヴオの生首をどうするか会議」を開いていた。首は広告で丸めてビニール袋に入れてある。勿論外に出したままだ。

「どーすつかねえ？」

「どうするもこうするも早いとこ片付けた方がいいに決まってんじやねえかよ。凋夔さんも変な噂されんの嫌でしょ？」

「だーかーらその名前・・・。っていうか噂どころじゃ済まないでしょ。警察沙汰になるわよ」

「片付けるって事は決まってんだ。でもそれを誰がやるか・・・」
拓羅は楓をチラリと見た。

「・・・え？・・・何？・・・ちよつと待ってよ、なんであ
たし見んのよ」

「だってお前ん家だし・・・」

「ほおー。じゃああたしの家から出てけ。即出てけ」

「そういう事じゃなくてよお・・・」

「ってか、生首でしよう？警察に届けたほうが・・・あ。ダメだ。俺も捕まりかねない」

「そんなどうせあたしらが犯人扱いされるだけでしょ」

「でもこれ、片付けてハイ終わり、なんてワケにはいかねえだろ？」

「当たり前じゃん」

「あーくそっ！あん時ラングの野郎に返しときや良かったぜ・・・！」

三人は頭を抱えて考え込んだ。そして拓羅がひらめいた。

「・・・あつ！そうだ称狼！お前アイツの居場所くらいわかんたろ？行つて渡してこいよ、生首」

「生首生首言うのもどうかと思うけどね・・・。んでも簡単に受け取ってくれるかな・・・それに——」

称狼は何かを深く考えるような表情を見せた。頭の中は、ラングのあの言葉で埋め尽くされていた。

（もし来なかったら——わかってるな？）

「称狼・・・？称狼！・・・おい称狼ッ！」

ハツとなつたのが二人にもわかった。

「え・・・な、何？」

「本当に大丈夫か？お前おかしいぞ。アイツ・・・ラングが来てから・・・」

「・・・大丈夫だつて！明日行つてみる。ボスん所」

「じゃあオレも行くよ。一人じゃ危ないだろ」

良真が出てきた。皆、少し驚いた顔をしていたが、承諾した。しかしファングも黙っていない。

「オレも！称狼様、オレも行く！」と言って、ファングは称狼にすがりついた。称狼は、そんなファングの頭を笑顔で撫でて頷いた。

（新入りに称狼様取られてたまるかつ）

頭を撫でられているファングは、内心そう思っていた。すると良真がファングを別の部屋に誘った。肩書きは「遊ぼう」だった。フ

アングも頷いて後に続く。だが、実際に行ったのは遊びではない。良真が小声でファングに言った。

「お前なんか呼びじゃないぜ？」

ファングは驚いた顔で良真を見た。良真はあからさまに嘲笑^{ちやうしやう}していた。

「テメエこそ……。称狼様にはオレが付く。テメエは下がってろ、新入り！」

「新入り？あははっ！そうだな。オレは新入りか……」
良真はクスクスと笑う。

「何が可笑い！」

「オレはもう仲間だ。そうだろう？」

「……だからなんだ？」

「仲間の権限で言わせてもらう。ハッキリ言ってさ、お前要らないよ」

そう言つと、良真は目を光らせる。なんとも言えない目だ。ファングはその「目」に恐怖を感じた。

「……！なん……」

「出て行け」

声を低くし、言った。しかし、ファングはそこであることに気付いた。

「……そうか。お前……」

「出て行けと言っている。出てけ！」

「寂しいんだな」

ファングのその一言に、良真の動きが一瞬止まった。

「寂しいだと？」

「目が言ってるぜ？」

「……黙れ」

「八つ当たりか？妬^{ねた}みか？」

「うるさいんだよ！妬みだと？ふざけるな！」

「だがそうだろう？違うなら何故オレに出てけなんて言う？」

「邪魔なんだよ・・・!」

「邪魔?」

「幸せそうにしゃがって・・・。そうさ、妬みかもな!だがな、オレの苦しみは貴様の思っているようななまっちょろい物じゃないんだよ!貴様には一生分からないだろうがな!」

そう言い、良真はその部屋を去った。ドアを開け、外に出る。階段を降りていった。そして数秒し、その足音は聞こえなくなった。ファングはため息をつく。と楓達の居る部屋に行った。

「良真、どうしたんだ?」

「・・・いや・・・なんでも・・・」

何事も無かったように首を振る。称狼達は話を続けた。

「えーと、それで明日までアレは・・・」

称狼はドアの方を振り向く。

「兄貴ん家に・・・」

「なんで俺ん家なんだよ!嫌だよ寝る時怖えじゃんかよ!」

「わかった。今日はここで寝る事を許す」

「えっマジか?よし、ノツた」

「簡単だな、兄貴・・・」

嬉しそうな顔の拓羅を見て、ため息まじりにそう言う。拓羅はそれから、ビニール袋に入れてある首を自分の家の中に放り込んだ。そしてまた楓の家に戻る。称狼の目の前まで行くと、彼を指差して言った。

「絶つつつ対に明日持つてってくれよ?」

「わかってるって」

しかしまだ信用できないのか、拓羅は続ける。

「絶つつつ対に明日の朝五時には・・・」

「わかったって!早く寝ようぜ」

称狼は、ちゃっかり布団の中に潜り込んでいた。楓は何故称狼までここで寝るのか疑問に思ったが、朝早くに持つていってもらうにはそれが一番だと思い、そのままにしておいた。

第37話 『ラング』5

次の日、まだ楓達も眠っている時間に、称狼は飛び起きた。家の中だと言うのに寒い。すぐに靴を履く。そして拓羅の家に入り、例の「アレ」を持った。拓羅の家に入った時にマフラーと手袋が目に入ったため、壁から奪い取り、装着した。そして階段を下りていく。勿論「アレ」は中身が見えないようにしてあった。

マンションから出ると、更に寒かった。空もまだ暗い。白い息がこれでもかと言うほど出る。道は、車がたまに通るくらいで、人は全くすれ違わなかった。

（寒いなチクショー・・・）

手袋もマフラーもしているが、やはり寒い。

信号をいくつか越え、一本、普通に歩いていたらわからないほどの細い道に入る。称狼が横歩きをしてやっと通れるくらいだ。

冷たい壁が身体に当たり、称狼を更に震わせた。ようやく細い道を抜けると、一つの広場があった。しかし、水の止まった噴水、ツタが生い茂っているベンチなど、長年使われていない事が一目瞭然いちもくりようぜんだった。

噴水の向こう側には、四つほどの建物が建っている。その中で使われていると思われる物は一つだった。それがラングの棲み家だ。

称狼はゆっくりとその家に近づき、ノックをした。扉は勝手に開いた。中に入ると、外よりも幾分か温かった。見ると、ストーブに火が付いている。吸い込まれるような速さでストーブの近くに行き、しゃがみ込む。そして手を出した。白かった手が赤く照らされる。今まで自分の手がどれだけ冷たかったかわかる。しばらくは温度差で手がピリピリしていた。足が痺れそうなので、あぐらを掻く。ストーブのまん前にベタンと腰を下ろした。そのまま待っていると、

奥からラングが出てきた。称狼を見ると、ニツコリと笑った。しかし、それは優しい笑いではなかった。

「やあ称狼。よく来たね」

称狼はビシツと立つと、震える口を開いた。

「・・・・・・・・コレ、返しに来ました・・・・・・・・」

紙袋を投げ捨てる。ゴツン、と言う音がした。ラングはそれを見て、また視線を称狼に戻す。

「で、連れてきたか？」

「・・・・・・・・今日は・・・・・・・・それを返しに来ただけです・・・・・・・・。あの、もうこんなことしないでくださ・・・・・・・・」

「この間からお前、私をバカにしているのか？」

「え・・・・・・・・」

「私を待たせていいとも思ってるのか？いい気になるなよ。お前なんていつでも殺せる」

笑ったままそう言った。その時称狼の背筋が凍った。今すぐにでも逃げ出したかった。だが、今日はもう一つ目的があって来たのだ。それを達成せねばならない。

「バ・・・・バカになんてしてません・・・・。あの・・・・俺は・・・・もう兄貴達の敵にはなりたくないんです・・・・」

「なんだと？」

ラングの顔から笑いが消えた。

「とにかくつ・・・・・・・・も、もう来ません・・・・・・・・！失礼します・・・・・・・・」

そう言うのがやつとだった。称狼はドアを乱暴に開け、外へ飛び出した。気を抜いたら豪快に転びそうなくらい膝が震えている。

口の中が乾燥してきた。喉も乾燥して、ヒリヒリしてくる。だが立ち止まったら終わりのような気がして、マンションまではずっと走り続けた。階段を上がるうとした時、足がもつれて倒れた。

「・・・・・・・・いつてえ・・・・・・・・」

やつとの思いでその言葉が出た。息を荒くしながら立ち上がる。痛いのだが、なんだかスッキリしたような、変な気持ちだった。ゆ

つくりと一段一段踏みしめるように階段を上がり、楓の家の前まで来た。

時刻はいつの間にか七時をまわっていた。中から声がする。渴いた喉に必死に水分を与え、ドアノブをまわして入った。

「・・・お、称狼！」

「ただいま・・・」

息を切らしながら言った。

「ラングに返してきたんか？」

「ああ。・・・フアングは・・・？」

「なんか良真を捜してくるとかなんとか言って出てったぞ」

「・・・そか」

深呼吸して、椅子に腰掛けた。

第38話 『ポケポケ少女』

良真探しに出たフアングは、まず川原を見に行った。楓と話した、あの川原だ。川原全体を見渡したが、良真は見当たらない。次にビルの隙間などを見ていく。

しかしやはり居ない。フアングにとって良真は嫌な存在だが、何故か放っておけなかった。

（あの寂しそうな目が気になるんだよねあ・・・）
フアングに突っ掛かってきたときも、目の奥は寂しさを訴えているように見えて仕方が無かった。

だがフアングの心配とは裏腹に、良真は一向に見つからない。行きそうなどころの見当もつかないため、見つけ出すのは困難極まりなかった。

捜しに来てから二時間は経っている。フアングの足にも段々と負担が掛かってくる。気が付くといつの間にか、またあの川原に戻ってきていた。

「ふう・・・。少し休むかな」
そう言つて、フアングは芝生の上に寝そべった。ため息をつき、目を閉じる。

（・・・眠いぞコノヤロウ）
睡魔に負けそうになった時、足音がした。フアングの目も一気に覚めた。

「良真!？」
思わず振り返る——しかし、そこに居たのは、一人の少女だった。

「・・・髪生えた犬だ」
少女の第一声だ。フアングは少しムツとした。
「誰だお前?それにオレは犬じゃな・・・」

フアングは目を凝らした。よく見てみると、少女の耳は尖ってい

る。人間には有り得ない牙も少し見えている。口を開くとその牙は完全に姿を現した。どう見ても人間の持ち物には分類されない。

「……人間じゃあないな……？」

確かめるように言った。その瞬間、少女の目がギラリと光った気がした。ファングは攻撃態勢に入る。

「うん！」

返ってきたのはその二文字だった。しかも少女はヘラヘラと笑っている。

「……う、うんっておま……」

「あたしね。狼！」

「狼い？じゃあ狼……少女……？」

「あつ、それいいね！あたしも次からそうやって呼ぶ！」

「や、いいねえって自分の事だろ……」

「おじちゃん名前は？」

ファングは「おじちゃん」と言う言葉にショックを受けた。

「おじ……おじちゃ……違う！オレはまだまだ「おにさん」だ！」

「うん！わかった。それでおじちゃん、名前は？」

「……もういい……」

小声でボソツと言い、続けた。

「名前はファングだ」

「ファング……。あたしみーな！あのね、狼なの。……じゃなくて狼少……」

「さっき聞いた。歳は？いくつだ？」

「えっとね……十カ月！」

こちらも良真と同様、「十カ月」とは犬の歳でだ。人間の歳で言えば十五歳くらいだろう。

「……今はどうやって人の姿になってるんだ？」

「わかんない」

「……。わかんないのに人になれるのか？」

「だって寝てただけなのにこうなってたんだもん。あのねおじちゃん、この世はね、リクツじゃない事で溢れてるんだよ」

「うるせえ！ガ、ガキに言われんでもわかってんだよ！オレはもう三年も生きてんだ！それにお前、「リクツ」の意味も知らねえで・・」

「え、じゃあおじちゃん知ってるの？教えて教えて！」

「・・・え、えつとな・・だから、その・・リクツ・・ってのはだな・・。り、理由とか・・道理とか・・論理とか・・」

「フアングは顔をそらして切れ切れとそう言う。ドンドンとボリユームが下がっていくのが分かる。」

「だがみーなはわけが分かっていなかった。」

「リユウ？ドウリ？ロンリ？」

「・・・そ、そうそうそう！そうだよ！ロンリユウだ！うん。そう！リクツつてのはロンリユウで、ロンリユウ。意味わかるか？どうだよこれ・・」

「おじちゃん、それを言うならオンリユーだよ」

「・・・・・う、うるせえな！ギャグだよギャグ！そんなくらい分かればよな！」

「いわゆる親父ギャグだね？」

「お兄ギャグだ！親父じゃねえ！」

「でも三年も生きてりやもうそろそろ頭の毛も抜け落ちる頃・・」
「みーながそこまで言うつと、フアングは目の前の少女めがけて炎を何発も放った。」

「そういう事はあと十年してから言えッ！！」

「うわっ・・わっわっわっ・・」

絶対に避けられないだろうと思っていた炎を、ギリギリではあったものの避けてしまった。バック転だ。

「・・・マジかよ・・？」

それを目の前で見えていたフアングは目を疑ったが、すぐにみーな

の前に座った。

「お前さあ！」

「え？あつ・・・はいつ・・・」

「オレ達の仲間になれ！」

「・・・え？」

みーなは顔をしかめた。

第39話 『ママを尋ねて皆殺し』

「ただいまッ」

ファングが楓の家のドアを開けた。中の部屋から楓が顔を出す。

「あ、おか——」

良真が居ないかわりに、耳の尖った少女が立っている。当然のごとく楓は驚いた顔をしている。ファングとその少女の顔を交互に見た。

「……………え、と……………誰?……………っていうか良真は?」

「あつ!良真忘れてたッ!……………あ、えっと、コイツはみーな。十カ月だつてさ」

「フーン……………」

「あたし、狼少女!このおじちゃんに仲間になれって言われたからなりました!」

「お兄さんだつつの!」

後ろからファングが言った。そして言った後、耳がピクリと動き、ドアの外を見て真剣な顔になった。

「……………今、音がしなかったか?」

「音……………」

今度はハッキリと全員の耳に、その音が入った。音はどんどんとマンションへと近づいてくる。

「……………なんなんだ……………」

「わからね……………。とにかく行ってみようぜッ!」

しかし全員で行ってもそれぞれが邪魔になるだけだ。とりあえずは拓羅とファングで行く事になった。急いで階段を降り、マンションの外に出て辺りを見回す。

東の方にソイツは居た。巨大な——犬のようだ。

目が三つある。頭には角が生えていた。

「なんだ、アイツ?」

「ストラント族！」

「・・・あ？ストラ・・・？」

「拓羅、戻ってろ」

「は？」

「いいから！」

「なんでだよッ！俺だつて・・・」

「アイツはあれでもまだ子犬だ。今の状態でも物凄く危険なんだ。暴走しちまったら・・・」

ファングの頭の中に、嫌な光景が広がった。だがそんな心配をよそに、拓羅は叫んだ。

「子犬う！？」

「・・・ああ。とにかく戻れ！戻って作戦考えとけ」

ファングを見つめて、拓羅はしぶしぶ頷いた。

「・・・わかった。でもじゃあ、三十分経っても帰ってこなかったら行く、そんでいいか？」

「おう・・・」

拓羅はファングの後姿を見て、心配そうな顔をしながらも戻っていった。マンションの階段を上がっていく拓羅を見届けると、ファングは再度ストラント族の方を見た。

「さて、と」

もつまん前まで来ていた。やはり近くで見ると更に迫力があつた。話終わるまで待つてゐるなんて余裕じゃねえか」

ファングがそう言うのと、敵は不服そうな顔をした。

「よく言うよ。隙があればいつでも攻撃してやろうと思つてたのに」

「ほおー。ガキのクセになかなかだな」

「ガキつて言うな！」

敵は勢いよくファングに飛びかかった。

その頃、拓羅は家の中で待つてゐた他の者達に状況を説明していた。

「・・・三十分待つ？」

楓が怪訝そうな顔をして言った。

「フアング、今戦ってた。・・・アイツがめちゃくちゃに頼んでくるから・・・」

「どんな奴やったん？」

ユキが楓の横から顔を出し、訊ねた。拓羅は敵の事を全て話した。その話を聞いていると、次第にユキの顔色が変わった。

「ストラント族か・・・。アイツ、あほやなあ・・・。アカンで。

フアングじゃ勝ち目あらへん。ま、あたしもやけど」

「えっ、なんで？」

楓と拓羅は同時にユキを見た。

「ストラント族はな、魔力を喰うねん」

「・・・・・・・・・・は？」

ユキの言った通り、敵はフアングの放った炎を喰っていた。そして自分の体力にする。フアングの攻撃は敵を強くしてしまうだけなのだ。

「チクシヨオ！」

悔しそうに歯軋りして、攻撃を避ける。しかし足の攻撃は避けたが、直後、角が伸び、フアングを襲った。その角に後足を攻撃され、その場に倒れ込む。

「うおっ・・・・・・・・・・」

見ると、足には穴が開いていた。そこから血がドクドクと流れ出る。ヨタヨタと立ち上がろうとするが、上から敵に押さえつけられた。

「ぐ・・・・・・・・・・」

背中からメキメキと音が聞こえた。歯を食いしばり、痛みに耐える。敵はそんなフアングを見下ろしながら不敵に笑った。

「・・・・・・・・・・三十分だ・・・」

拓羅は時計を見ながら呟いた。そして立ち上がる。

その時、彼の左腕に切り傷ができた。

「……！」

振り返ると、そこには外で見たあの敵が居た。角を伸ばして攻撃したのだ。

「な……なんで……ファングは……」

「ファング……。ああ、それってコレの事？」

そう言っていると、拓羅の目の前にファングを放り投げた。

「……！！ファングッ！」

傷だらけだった。拓羅はファングの体をそつと撫でると、的を睨んだ。それを見て、思わず敵も後退る。

「……ガキだからって容赦しねえからな……」

物凄く低い声で言った。そして拳を握りしめ、敵の方へジャンプしながら構えた。

「うおおああああッ！！」

足を思い切り殴った。ボキッ、と言う音が響く。

しかし敵はニヤリと笑うだけだった。

「折れたね。お前なんかには僕の体に傷なんてつけられないよ」

「……！！」

拓羅は右腕を押さえてその場にうずくまった。全体が震えている。猛烈な吐き気を覚えた。

やつとの思いで顔を上げる。だが、目の前にいたのは敵ではなくみーなだった。みーなは徐に敵の足を掴むと、手おもむろに力を入れた。足は見る見る変な方向へ曲がっていく。仕舞いには、引きちぎる始末となった。

敵は嫌な音と共に悲鳴をあげた。しかしみーなの顔は全く変わる事が無い。ずっと敵の顔を睨んだままだ。

「……おつ……お前なんかに殺られてたまるか……。僕は生きてママの許に戻らなきゃ……」

「アンタの事情なんてどうでもいい」

冷たい声で言い放つ。敵が啞然としている中、みーなは更に続けた。

「・・・生きてママの許に戻らなきゃ」？」

口だけでフツと笑うと、そのまま敵の腹を蹴りつけた。

「死ぬ覚悟も無く来てんじゃねえよッ！」

怒りのオーラを放っているみーなの後ろで、楓は目をパチクリさせていた。開いた口が塞がらない様子だ。

「・・・あんな・・・男口調、なワケ・・・？」

みーなを見て言う楓の横で、拓羅が「お前も負けてねえから安心しろ」とボソリと言った。楓は前を向いたまま拓羅にストレートパンチをくらわせた。

「っていうか腕は？大丈夫なの？」

「殴った後に言うなよ、お前・・・」

頬を押さえながら言った。そして右腕の袖を捲くった。手首が明らかに変な方向に曲がっている。

「・・・痛くない・・・ワケないな」

「うん。痛え」

「はい、病院レッツゴー。いつてらっしゃーい」

楓はマンシヨンの外を指差し、笑顔で手を振った。

「え、一緒に行ってくんねえの？」

楓を見て、拓羅はわざと寂しそうな顔で言う。しかし楓は「何言ってるの、ガキじゃあるまいし」と冷たく言った。仕方なく、拓羅は一人で病院へと向かった。

そんな事をしている間にも、みーなは圧倒的に敵を押していた。ヨロヨロと向かってくる敵の顔を、爪で引っ掻いた。そしてそれに続け、顔を思い切り蹴りあげる。敵はそのまま倒れ込んだ。

「ファンゲ！」

みーなはファンゲの方へと駆け寄る。楓が「生きてる、生きてる」と言くと、安心したようにため息をついた。だが、そんな時間も束の間だった。敵は起き上がるとみーなの腕に噛み付いた。

「……………！」

みーなはそのまま後ろへ投げ飛ばされる。壁に叩きつけられた。

「……………帰んなきゃなんないんだ……………。ママのところに……………」

「

その目はセルヴオのようだった。みーなを睨みつける。

「そのためには……………倒すんだ……………！」

切れ切れにそう言っていると、角をみーなに向け、走り出した。

「……………みーなッ！」

その時、敵の後ろから声がした。直後、敵はその場に沈み込む。

「大丈夫か……………？」

みーなの前に立ったのはファングだった。瞬きを繰り返してファングを見つめ、やっと頷く。

「……………うん……………。ファングも……………」

「あ？何だよ……………。ホラ、早く立て」

その後ろで、敵が立ち上がる。振り返り、ファングが面倒臭そうに言った。

「……………しぶといな……………。オレお前の弱点見つけちゃったんだよなあ」

「……………え……………」

不安そうな顔をしている敵を無視して、ファングはみーなにコッソリと耳打ちした。話し終わったのか、みーなは力強く頷いた。

第40話 『新ママ誕生』

みーなとフアングは二匹で敵を挟むような形になった。

「おりやつ!!」

フアングが炎を放つ。だがやはり敵はそれを喰った。

「無駄だって言ってるのがわかんないのっ!？」

「バーカ」

フアングの攻撃に集中していた敵の背後には、みーなが迫っていた。みーなは拳を握り締めると、敵の角めがけて振り下ろした。

「うわっ・・・!」

しかし、敵が避けたのもあるが、角は思ったよりも硬く、なかなか傷を付けられない。みーなが着地した所を狙って、敵は角を伸ばした。

「痛っ!」

後でフアングが炎を当てた。こちらを向いていなければ喰いようが無い。敵がフアングの方を向いた時、もうすでにまん前まで迫っていた。

「・・・!!」

フアングは、伸びたままの角に思い切り噛み付いた。しかし敵は不敵な笑みを浮かべた。

「そんなんで・・・傷付けられるかつ!」

頭ごと動かしてフアングを振り落とそうとする。その間にも、フアングの口からは煙がもくもくと上がっていた。

「オレが噛み付くだけだと思ったか・・・?」

「え・・・」

「うおらあッ!!!」

角に噛み付いたままの至近距離で、フアングは炎を放った。見事角は砕け、敵の顔は見る見る驚愕の色に染まっていった。

弱点の角を砕かれ、敵はその場に崩れ落ちる。フアングも飛び降

りた。角からは大量の血が流れ出ている。

「……………何故ここに来た？」

息をするのがやっとの様子の敵を見下ろし、ファングが聞いた。

「……………ボス……………」

「ボス？……………ラングか？」

「……………退け……………ママの所に帰らなきゃ……………」

「無理だ。出血多量で死ぬぞ」

ファングがそう言っても、立とうと足を踏ん張ろうとする。だが

踏ん張れば踏ん張るほど角血が出る。

「ちよつ……………」

そこまで言い、ファングの視線は角へと移った。真っ二つに折れたはずの角は、どんだん元の形に戻ってきている。

（再生能力……………！？）

「……………よし……………！」

「あ？」

敵は急にファングの方を向くと、角を伸ばした。

「……………！！！」

「ファングツ……………」

みーながそう言うのと同時に、ファングの叫び声が空に響いた。

敵の角はファングの腹を刺し、体ごと宙に浮かせていた。

「……………の、ヤロオ……………！！！」

「仕返しだ！死んじゃえツ！！」

攻撃しようにも口も届かず、息を吸う事すら困難なので魔法も出せない。みーなも敵に攻撃するが、やはり効いてない様子だ。

「くおらッ！！！」

その時、後から声がした。拓羅と楓の声だ。振り向くと、拓羅はコワイ顔を見せ、楓は自分の後ろに当たり前のように居る拓羅を、

「あれ？」と言う顔で見ていた。

「……………いつ帰ってきた……………！？」

「ついさっき！」

拓羅は前を向きながら答えた。二人のやり取りに緊張感を無くした敵が下を向くと、フアングの腹から角が抜けた。

地面に落とされる寸前に、みーなが体を受け止める。そしてそれと同時に楓と拓羅は敵に向かって走り出した。

「ママの所に帰るんだっ！退けよ！みんな死んじゃえ！」

「もう居ねえよ」

拓羅が攻撃を止めて言った。敵の動きも止まる。

「・・・なん・・・で・・・？」

「なあ、「ママ」ってこれの事？」

後に称狼が立ち、何かを掴んでいる。掴んでいたのは敵と同じストラント族だった。もう生きてはいないようだが、多分母親だろう。

「！ママッ！！」

「なん・・・なん、なんであんなん持ってたの！？」

楓は眉をしかめて称狼を見た。称狼はケロツとした顔で、「そこに転がってたんですよ」と言った。そこに拓羅が割り込んできた。

「アイツ殺ったのって・・・」

拓羅は楓の耳元でコソコソと話した。

「・・・何なんそれ？なんでよ？」

「知らねえよ。急に出てきていとも簡単に・・・」

「・・・何？何話してんだよ？俺もまぜてよ。・・・なあってば」

真剣な顔で話す二人の後ろで、称狼がピヨコタンピヨコタン跳ねている。

「なあ！何話してん・・・」

「称狼！！黙って」

「称狼！！黙れ」

同時に二人にそう言われ、飛び跳ねていた称狼はショックを受けた顔でしゃがみ込んだ。しかしそんな称狼を無視し、二人は話を続けた。

「やってる事が矛盾しまくりじゃん」

「そうなんだよなあ。マジで何が目的なんだろ・・・？」

「でも見たんでしょ？」

「おう」

「・・・っていうかさ、「それ」やった後どこ行っただの？」

「左！」

「もういいです」

「・・・お前らが・・・」

二人の後ろで、敵がノソリと動いた。

「お前らが殺したんだなッ！！？」

「ちよつと待て。違うぞ。話聞け？」

「うるさい！！お前らが殺したんだ！！ママはお前らに殺されたんだッ！！！」

「お前のがうるせえよ・・・——！！？」

敵の角が拓羅を攻撃した。幸い腕に軽く刺さっただけだった。

「・・・いつてえな、テメエ！！何すん・・・」

「ママの仇だ！！死んじゃえッ！！みんな死ねエッ！！！」

もう一度角を伸ばそうとした時、敵の頬に殴られた痕が付いた。

「・・・！！？」

「ふざけんな、バカ。勝手な事ばっか言ってるんじゃないわよ」

「！！・・・かかか楓ッ！なんでお前はそうおいしいトコばっか取って・・・」

顔だけ起こし、フアングは泣きそうな顔で楓を見た。だがそんなフアングを無視して、今度は敵が泣きそうな顔で楓を見つめた。

「ママ・・・」

「・・・あん？」

「ママだあああッ！！ママの口調だああッ！！会いたかったよママあああッ！」

急に楓を見て涙を流し、そのまま突進してきた。

「・・・あれ？うそ？・・・まぢ、で・・・」

瞬きを繰り返してそう言ってるうちに、楓は敵にのしかかられ、下敷きとなった。

「うわあぁっ！楓！！大丈夫かつ！！」

「……………うおっ…………背中がつ…………いて…………いて…………」

這い出てきた楓は、背中を押さえた後、何事も無かったかのように体のホコリを払い落とした。

敵と本人以外の誰もがその姿を怪訝な顔で見つめた。

「……………何なんだ？お前大丈夫なのか…………？」

「ママ！これから僕はママに付いていきます！！」

「…………いや、困る」

「ありがとう！絶対離れないよ、ママ！」

「ちよつと待て！日本語理解して！」

「分かってるよ。ママってばいつからそんなに照れ屋さんになったの？」

「分かってねえだろ、お前」

「楓、男口調になるな。今のコイツにや何言ったって無駄だろ。目の前に転がってる肉親の死体だつて目に入ってねえんだ」

「あ…………。そだねえ」

「それにお前んとこの空も入れりやデカイ犬二匹だろ？何かと役に立つんじゃない？…………おいお前、名前は？」

（…………しまった。空忘れてた…………）

敵に向かって名前を聞く拓羅の横で、楓の顔には大きくそう書かれていた。

「僕ね、僕ジーク！ママ名前忘れたの！？」

「ジークか。ジークな……………おい楓？」

「かえちゃんなら「空ゴメン」って叫びながらどっか行ったで？」

「…………あ、そ」

その後、楓は一週間程空のご機嫌をとりながら過ごした。しかしそれでもしくは空の機嫌が直ることは無かった。

第41話 『良真みつけ!』

ジークの件も片付き、ファングとユキは改めて良真を探していた。
「もう県内に居なかつたりしてなあ」

「良ちゃんカワエエのに……。惜しい男を逃すことになってまうやないの」

「……。リヨウチャン……。もしかして、良真の事?」

「当ったり前やないか!他に誰がおるっちゅうの?」

「いや、一応聞いてみただけ……。お前ってホント、あだ名とか付けんの好きだよなあ」

「ファングにも付けたるか?」

「遠慮しとく……」

暢気に喋りながら歩いていると、二匹の目の前を黒いものが通り過ぎていった。

「! 良真か!?」

「え?」

「あっちに行つた……。追いかけるぞ!」

「わかつとる、わかつとる」

二匹は走り出した。少し行つた所で、その「黒い物」に追いついた。

「くそつ!……。良真アッ!!!」

ファングが叫ぶと、ソイツは振り向いた。急に止まった為にファングもユキも激突した。

「いちち……。良真……。?」

「……。!お前……」

「ドコ行くつもりだったんだ?どうせドコにも行く所なんて無いんだろ?」

「……」

「良ちゃん、帰ろ?……。な?」

「……………どうせアイツらも……オレの事怖がつて気持ち悪がるだけだ」

良真は下を向いた。

「どうしてだ？お前は気持ち悪いのか？」

「違えよ！！ただ……オレの目も牙も……他の奴らとは違うんだ……」

「目……？」

フアングは部屋で自分に向けられた目を思い出していた。確かに他の犬達とは全く違う。

「だけど……」

「お前だつて気持ち悪いって思ったんだろ！？お前ら皆偽善者なんだよ！」

「……オレは……偽善を語ってるつもりは無い。……この際ハッキリ言おう。確かに他の奴等とは違うだろうな。だけどオレは、怖いとは思ったけど気持ち悪いなんて思つて無いぞ！それに他の奴等と違つて何が悪い？」

「だから！違つと気持ち悪がられるんだよ！！」

「オレは気持ち悪いなんて思わなかったつってんじゃねえかよ！！」

「だけど怖いとは思つたんだろ！？」

「ああ思つたさ！！そりや思うだろ、普通は！！だけどなあ！じゃあ他と違つてダメならオレはなんだ！？髪生えて魔法出せて……ユキだつて魔法出せるぞ！？」

「……なんであたしを引き合いに出すん？」

フアングの後ろでユキがボソツと呟いた。しかしそんな事無視して二匹は続ける。

「だからなんだよ！？」

「っあーもー！なんで分かんねえかなあ！！オレらだつて怖がられて当然の生き物なの！だけどアイツらは怖がつたりしなかったの！気持ち悪がつたりしなかったの！！！！普通に接してくれたんだよ

「！！・・・エセケルベロスとか、クソ犬とか言われる事もあるけど・・・」

「アンタ段々ボリウム下がってってるで？」

「またもフアングの後ろでユキが言った。更にまたも二匹は無視し続けた。」

「アイツらはなあ！お前が思ってるほど嫌な奴等じゃねえんだよ！そりゃあ男勝りな無駄に強え変な女だし！？女に尻に敷かれっ放しのマヌケな弱い男だし！！？」

「褒めてんの？けなしてんの？」

「もう言うまでも無いだろうが、後ろで問うのはやはりユキだ。」

「ああじゃあ良かったじゃねえか！いいお仲間さんがいてよお！」

「羨ましいんじゃないのかよ！？・・・お前も仲間になれよ！！！」
「そう言ったフアングを、良真は「え？」と言う顔で見た。」

「・・・第一、それが目的だったんじゃないかよ？」

「そう、だけど・・・」

「お前が変にいじくりまわすからいけないんだぞ？オレから称狼様を奪おうとしゃがって・・・。称狼様はなあ、オレのご主人様なの！称狼様だけは絶対渡さねえの！！・・・。楓と拓羅は好きにしていぞ」

「かえちゃんもたつくんもなんか可哀相やな・・・」

「べっ別にオレはソイツらが欲しいわけじゃ・・・」

「まだ意地張るか！？もういいだろ？帰るぞ、仲間！」

「そう言うつとフアングは後ろを向いた。「仲間」と言う言葉で感激している良真を置いて、さっさと行ってしまった。」

「良ちゃん、行こ！仲間は多い方が楽しいからなあ！」

「・・・」

「行かへんの？」

「アイツ・・・。オレ、なんか・・・嫌な事しちゃって・・・。だから・・・」

「フアングはもう怒ってえへんよ。フアングとアンタの間で何があ

「つたんかは知らんけど、ファンゲも、かえちゃんもたつくんも。みんなアンタをもう仲間と思うとるんよ？」

「……」

「男やったらそんなくらいでメソメソすな！ホラ、早よ帰るで」

「……うん……」

「半べそ状態の良真を連れて、ユキもファンゲの後を追ってマンシヨンへと帰っていった。」

「おう、おかえり」

「マンシヨンに帰ると、待っていたのは称狼だった。」

「称狼様だけ……ですか？拓羅は……」

「自分家帰ったぞ」

「あ。そうですか。……あれ？あと何か足りないような……」

「」

「……お前それ本人の前だったら殺されてるぞ。凋婁さんだろ」

「あつ！そうだ、そうだ！楓……」

「バカ！静かにしろ！もう寝てるから……」

「ケツ。仲間の帰り待たないで寝るなんていい度胸してるぜ……」

「ファンゲが顔をそむけていじけたように言うと、称狼はフツと笑った。」

「そいえば称狼様はどうして……？」

「帰ってきて誰も居なかったら嫌じゃねえ？それに……あ、見つかったんだな？」

「え？……ああ。良真ですか。ちょっと喧嘩になりましたけどね。ちゃんと見つかりました！」

「そつかそつか。良真……だよな？こっち来いよ。お前真つ黒でカッケエじゃん！」

「称狼は笑いながら、恐る恐る近づく良真の頭を撫で回した。その後ろでブスツとしたファンゲが居たが、「オイ」とユキに肩を突付

かれて無理矢理笑い顔を作った。

第42話 『真つ白』

良真も無事見つかり、平和なまま一週間が過ぎようとしていた。

十二月も終わる頃。真冬だ。その日、朝早くに楓が目を覚ました。

「……さぶっ……!」

一度布団から出たが、あまりの寒さに、巻き戻しても行つたようにもう一度布団の中に潜り込んだ。

「……でもやっぱり起きないとなあ……」

しぶしぶ布団をはがす。楓は高速で起きて高速で着替えた。

(今日も空のご機嫌取りか……)

上着を着ながら憂鬱だった。上着のチャックを閉めながらドアを開けると、中とは比べ物にならないくらい寒かった。一度開けたドアはすぐに閉められた。

(寒っ! なにこれ! 寒っ!?)

「手袋とマフラーは必需品だ!」

そう言つて楓は中に戻つていった。そして五秒後にはストーブの前で丸まっていた。

「……もうヤバイな。空の機嫌が悪くなる……」

ため息をついて手袋をはめてマフラーを首に巻き、ドアを開ける。今度こそはちゃんと外に出た。

階段を降りると、一面雪景色だった。

「あ。雪降つたんだあ……」

手袋をしている両手を擦りあわせながら、嬉しそうな顔を見せた。そして時々「お、深い!」と言つて雪と格闘しながら道を進んでいく。雪の上にはまだ一人分の足跡しか付いていない。後ろを振り返った楓は、満足そうに笑うと左の空き地に入つていった。

「空!。おはよ……おおっと……」

雪でバランスを崩しながらも空の許へ行く。空は懸命に怒っている自分を演じていた。本当は尻尾を振って楓に飛びついたかった。

「雪だよ？」

「見りゃ分かる！」

空は、健康な時なら自分の大きさを自由に変えられる。いつ大きくなってもいいように、空はこの空き地で飼われている。今は丁度大型犬くらいの大きさだった。

「遊ばないの？」

「遊ぶか！ガキじゃあるまいし！」

「・・・ふうん・・・。前は雪がちよつと降っただけでも大はしやぎだったのに」

空は鼻で大きなため息をついた。全く乗り気じゃない空を見て、楓は少しムツとした表情を見せた。

「・・・いーぬは喜び庭駆け回りねーこはコタツで・・・」

「歌うなああ！！」

「何よう。ピッタリの曲じゃんよ」

「生意気な・・・。忘れてないだろうな。お前はオレを怒らせた、オレはお前を怒ってる、OK？」

「NO！」

「なんでだよ！」

「無理しないでさあ。遊びやいいじゃん」

「無理なんてしてねえよ！お前一人で遊べよ！人間が一人遊びだな！あーあー寂し！」

「・・・じゃあタクと遊ぼつと」

「へっへー！遊ぶ相手が居な・・・え・・・？」

「ほんじゃあバイバイ。あ、また風邪ひくよ？ちゃんと小屋ん中入るときなよ？」

そう言っただけで空に向かって手を振ると、楓はマンションの方へ戻っていった。

「・・・な・・・なんだよチクショーめ！」

空はその場でブスツとしていたが、しばらくすると素直に小屋の中に入った。

マンションに戻った楓が拓羅の家のドアを叩くと、拓羅はもう起きていた。

「あれ？珍しいね、早起きなんて」

「雪の匂いがしたんだ！今外降ってんだろ！？」

「や、降っては無いけど積もってる」

「よっしゃあ！」

拓羅は飛び跳ねながら階段へと向かった。

「あ、タク！マフラーほどけるよ」

「ん？あ・・・」

立ち止まって後を向く。楓がマフラーを巻きなおしてやった。

「へへっ！さんきゅう」

ニカツと笑うと、階段を二段飛ばしで降りていった。楓は上着のポケットに手をつ込んで拓羅を見ている。そんな楓の後ろに、称狼が忍び寄ってきた。

そして後ろから覆いかぶさるようにして抱きついてきた。

これは昔から称狼が楓にしていた事だ。

「あ、称狼」

「アニキに恋でもしました？」

「は？恋？なんで？」

「・・・いや、なんでって・・・。もっと照れてくれないと・・・なんつか・・・こ、困ったなあ・・・」

「ダメですよ称狼様。コイツ恋愛に関してはトコトン本当に鈍いですから」

「何よそれ」

楓は家の中から出てきたファンングを睨んだ。

「事実だろ」

「・・・っつかホラ！犬はさっさと遊べ！庭駆け回って遊べ」

！」

「オレは犬じゃねえ！ケルベロ・・・」

「フアング。行ってこい」

「はい称狼様！」

称狼が言つと、フアングはすぐに階段を降りていった。爽やかな顔の称狼の隣で、楓はフアングを睨み続けた。

「・・・なんで称狼の言う事は聞くのに・・・」

「凋婪さん苦労してますね・・・」

「・・・・・・・・。あつはっはっはっはー！」

楓は一度称狼の方を向き、またフアングの方を向いた。そしてムカツク気持ちも納得のいかない気持ちも、全て笑い飛ばしてやった。

「楓ー！雪合戦しよーぜえ！」

下で拓羅が呼んでいる。楓は不敵な笑いを見せると、降りていった。

「コイツに当てられたら絶対痛えぞ！つつか必ず命中すんだもん」

「え、なんで？」

「石投げを中国で鍛えたもんな」

「楓様をナメたらアカンベ！」

「お前どこの人だよ」

フアングが楓にツツコミを入れ、雪合戦が始まった。と言ってもフアング達は投げる事が出来ないため、拓羅と楓の二人だけだ。

しかし雪が積もると言ってもこちらの地方での量は多寡^{たか}が知れている。真っ白だった雪はすぐに灰色のシャーベットに変わった。

「あー。終わっちまった・・・」

「うわっタク汚いよ！そんなとこ寝転んだら・・・」

「冷てえだけだ。死にそうなくらいに」

「じゃあ早く立ちやいいじゃん・・・」

「・・・俺は真っ白よりも灰色になつての方が好きだ・・・」

「は？」

上から楓が拓羅の顔を覗きこむ。

「……………なんか、怖いじゃん。真っ白って……………」

「あんなにはっちゃけてたのに？」

「お前怖くないのか？」

「うん」

「拓羅もそんな風に感じることもあるんだなあ」

横でファングがニヤニヤと笑った。しかし真剣な顔の拓羅を見て笑うのをやめ、座りなおす。

「なんか嫌な思い出でもあんのか？」

「…………別に…………いや、無いわけでもねえけど……………」

「……………？」

「今日のタク…………変だよね」

部屋に戻った楓がファングに言った。

「今日の拓羅は変だなあ」

「……………だからそう言ったつつの……………」

楓が小声でボソツと言うと、ファングは今気付いたかのように振り向いた。

「ん？どうした？」

「…………いや別に……………」

「なんか知ってるか？拓羅が真っ白嫌な理由」

「全然。なんも知らない」

楓は昼飯を作りながら答えた。

「くそお、気になる……………」

「別にいいじゃん。んな事……………」

「嫌だ！オレは知りたいぞ！」

「あーはいはい。どうぞご勝手に」

「・・・なんだよその言い方・・・」

「はあ？・・・アチッ」

ファングの方を向いた時に手にフライパンが当たった。しかし何事も無かったように料理を続ける。

「いいもんね！じゃあ何か知っても教えてやんねー」

「はいはい。だから別にいいわよー」

「・・・」

ファングがブスツとした顔でテーブルを向くと、楓は嬉しそうな顔で近づいてきた。

「・・・スネた？スネた？？ねえねえスネた？？？」

「スネた。カワイイ？」

「カワイイ！」

ニッコリと笑ってファングの頭を撫でたかと思うと、すぐにいつもの顔に戻った。

「さあ行つてこい。理由聞いてこい」

「はーい」

楓に背中を押され、ファングは隣の拓羅の家へ向かった。だが行く途中の通路で立ち止まり、「・・・あれ？利用された・・・？」と呟いた。

第43話 『理由と風邪』

拓羅の家の前まで行くと、ファングはドアを爪でガリガリと引っ掻いて音を立てた。

「拓羅ー？入るぞー」

「あ、おう！」

ドアを開けてファングを中に入れる。拓羅も昼飯の時間だったよ。うだ。こちらはコンビ二弁当だったが。

「なんだよ、どうした？お前昼飯は？」

「や、まだ食ってない。帰ったら食う」

「・・・どしたんだよ？」

拓羅は急に箸を置いた。

「え？あ・・・何が・・・？なんで？」

「なんか真面目な顔してっから」

そう言っつてファングの顔を覗きこむ。ファングは一度顔を逸らしたが、ゆっくりとまた拓羅の方を向いて口を開いた。

「・・・雪・・・」

「あ？ユキ？」

「違う、雪！」

「雪？」

「雪！」

「・・・が、何？」

目をパチクリさせてから、拓羅が聞いた。

「雪・・・何が怖えんだ？」

「・・・」

「楓も知らないって言うし・・・」

「知りたいのか？」

拓羅の顔付きが変わった。ファングは一瞬ビクツとすると、恐る恐る頷いた。

「・・・・・・・・」

「・・・あつ・・・でも嫌なら無理して話さなくても・・・」

「俺がさあ」

「・・・・・・・・うん？」

「俺が、中学生の時・・・。確か、二年・・・？だったかな・・・」

「・・・・・・・・うん」

「中学の時にもうこつち来ててさ。十二月頃、雪、降ったんだ。俺等が初めて見た雪・・・」

「うん」

「真っ白で。真っ白以外なんもなくて。どこまでもどこまでも真っ白で・・・。その白さが、怖かったんだ・・・。朝早くだったからさ、誰の足跡も付いてねえの。嬉しい事なんだろうけど、俺からしたらそれはスツゲエ怖いことだったんだ・・・。寒さとか、空の暗さとか、そんなの忘れるくらい、怖かった」

「・・・それ、だけ・・・なのか・・・？」

「その日に、じいちゃんが死んだんだ」

「・・・・・・・・え・・・？」

安心してたファングの顔が、また固まった。

「俺らが日本に来たのは、じいちゃんが日本に居たから。俺の父親日本人なんだ。最初はじいちゃんの事無愛想だな、って思って嫌だったんだけど・・・やっぱ一緒に暮らしてる間に段々と好きになっ

「・・・・・・・・うん」

「だけど、じいちゃんなんの前触れも無く・・・」

「・・・・・・・・死んじまつたんだな・・・？」

拓羅は下を向いたまま、無言で頷いた。

「そんな時にさ、ガキだったから「あの白さがじいちゃんを奪ったんだ」とかって根拠も理屈もなんもないまま考えてさ・・・。でも・・・今でもそれが嫌だっ

「ガキなんだよな・・・」

「・・・・・・・・」

「・・・何も無いって・・・怖えよ・・・・・・・・」

ファングは拓羅の横で静かに頷いた。

「・・・あははっ！それだけで怖くなるなんてバカだよなあ！もつと深刻な事情があるならまだしもさあ！笑えちゃうよなッ・・・・・・・・！」

「拓羅・・・・・・・・」

「・・・それだけだ。たったそれだけ」

「・・・・・・・・ホント似てるな、お前ら」

「んあ？」

「楓とお前だよ」

「・・・・・・・・似てるか・・・？」

ファングを見てすっとんきょうな声を出した。ファングはそんな拓羅を笑い、続ける。

「ああ。こういう暗い話の時に限って・・・なんつか、自虐ネタ？つつかさ、そういうの持ち出してきて、ケラケラ笑って・・・全然笑えないのに笑ってさ・・・。お前もそうじゃん」

「・・・・・・・・」

「お前ら二人とも無理すぎんの！笑えない時は別に無理して笑わなくていいんだよ」

「・・・・・・・・でも」

「でもヘチマも無い！！・・・・・・・・なあ、ヘチマって何？」

一人の男が椅子からずり落ちた。

「・・・おまつ・・・分かってから使えよ！」

拓羅が声を裏返ししながら言うと、ファングは「ニヒッ」と笑った。

「ただいまー。楓、昼飯！」

「おかえり。お風呂にする？ご飯にする？そ・れ・と・も・・・」

「だから飯だって・・・・・・・・って、何言ってるんだお前？」

ファングがビツクリして顔を上げると、そこに居たのはニヤリと笑っているユキだった。

「何言うとんの、あたしや、あたし！」

「・・・あ、ユキ」

「なーにかえちゃんと間違えとるん」

「スマン。・・・楓は？」

「出てってもうた。「急に友達に呼ばれたから行ってくるねー！ほんじゃ！ばいばーい」やって」

「・・・なんかアイツキャラ変わってきたな・・・」

「せやな・・・。夕方には帰ってくる言うとったで？」

「そか」

「ほんで、メシはテーブルの上や」

「おう。さんきゅう」

ファングは椅子に飛び乗ると、そのままテーブルの上のドッグフードを食べ始めた。

—— 昼二時頃。

楓の家のドアが開けられた。開けたのは拓羅だ。

「・・・楓ー・・・」

「お、拓羅。楓なら友達と遊びに行っただって！」

「マジかよ・・・」

「なんだ、どうした？」

「いや、なんでもない・・・。じゃ」

拓羅は静かにドアを閉めた。

「・・・？なんだアイツ？」

自分の家に帰った拓羅は、ベッドに倒れ込んだ。

（ヤベエ、かつたりい・・・）

昼のうちから毛布を被り、寝始めた。

拓羅の家の外では心配したファングがドアを開けようか開けまいか迷っていた。

（どうした方がいいかな……。もしも大事なこととかしてたら邪魔だし……。でもアイツなんか変だったよな……。開けた方がいいのかな。でもなあ……。）

ドアの前で行ったり来たりしている。結局ファングはドアを開けた。爪で音を立てても開けてくれないので、自分で開けた。

「……ドア自分で開けるのって……。疲れる……」

ボソボソと言いながら奥に入っていく。すると寝室から寝息が聞こえてきた。

「……拓羅……?」

そつと見てみると拓羅が熟睡していた。毛布に包まってぐーぐー寝ている。

「昼間っから毛布かよ……」

ファングが少し笑いながら近づくと、拓羅はトロンとした目を開けた。ファングの方を見てゆっくりと瞬きすると「気持ち悪い……。……」と言った。

「!! 気持ち悪い!? オレか!? オレが気持ち悪いのか!? 髪生えてるからか? 喋るからか? それともこの目か!!?」

勘違い魔王のファングは目を見開いて言った。

「……違えよ……。体、だりいの……。……」

「……。……は? カラダ?……。そう言えばダカラっていうスポーツドリンクが……」

「だから違えよ……。……楓はあ?」

「居ないっつの。オレじゃ不満か?」

拓羅は相変わらずトロンとした目でファングを見ると、ゆっくりと口を開いて「ふまん。」と言った。

「もういい! お前なんか知らん! 勝手にへバってる!」

「うつ……。……」

「!?!?」

ファングが出て行こうとすると、拓羅は急に口を押さえた。

「なんだ！どうした！？」

「・・・・・・・・！！！」

「おわっ・・・・・・・・」

拓羅はトイレへ駆け込んだ。しばらくして出てきた彼の顔は、スツキリしていた。

「・・・・・・・・なんだ・・・・？大丈夫か・・・・？」

「おう・・・・・・・・。でもやっぱ寝とく・・・・」

そう言つとベッドに転がり込んだ。

その頃、楓は友人の千明^{ちあき}に呼び出されてファミレスに居た。

千明とは、あの修学旅行で一緒に行動した友人だ。

楓は朝雪が降るほどに寒いと分かつていながらも冷たい飲み物を注文してしまい、頭痛地獄に悩まされながらもズビズビと飲んでいた。

そんな楓を目の前にして、千明はテーブルをバンツと叩いた。

「ねえちよつと！聞いている！？彼氏がさあ！」

「・・・・あたしは愚痴吐き機じゃないんだけど」

頭を押さえながら答える。しかし千明は話すのをやめない。

「いーの！聞いて！！」

「急に呼び出されたと思ったら愚痴ってさあ・・・・。あたしは一体なんなのよ？」

「楓のバカ！いいから聞いてよっ！！」

「・・・・・・・・あー・・・・・・・・頭痛い・・・・・・・・」

さすがの楓もこの迫力には勝てないようだ。冷たい飲み物と千明の愚痴のダブルパンチで、頭痛地獄は更に凄いものとなつていった。

第44話 『お怒りユキ様』

「熱？」

「おう」

「たつくんが？」

「おう」

午後六時。フアングとユキは楓の家の中で話していた。

「アイツのデコが熱いの」

「ほなこのチャンスにたつくんのデコで魚焼こかー」

「バカ、そこまで熱いわけねえだろ」

「……じゃ、冗談や、冗談！」

「つつか……楓の野郎は何やってんだ！拓羅が熱あるつてのに……」

「……本人が聞いとらんでホンマ助かったわ……」

「どーすんだよおお！このまま拓羅が死んじまってでもしたら殺されんのはオレらだぜ？」

「そういう心配かい……」

呆れたユキがフアングを見てると、みーなと良真も入ってきた。

「おじちゃん！どうしたの？」

「おじちゃんなあ、困っちゃってんだよ」

「おじちゃん、何に困ってるの？」

「おじちゃんなあ、拓羅に困つ……って……おじちゃんおじちゃん言うなああ！オレはお兄さんだっ！！」

「……面白くないよ？なんかテンション上がって一人浮いてる子みたい」

「そんな具体的に分析しなくたっていいだろ……」

「だってなんか見てるこつちが痛々しく……」

みーながそこまで言うつと、フアングは下を向いて赤面して、「うるせえよ……」と言った。

「なんだよ？あの男がどうかしたのか？」

落ち込むファングの前に良真が座り、尋ねた。ファングはゆつくり顔を上げると、イジケ顔で「熱があんの」と言った。

「あの男がねえ……。今の状態は？」

「さつき便所行って「おえー」って言ってた」

「……。それってただの胃腸風邪じゃねえの？」

「なんや？銀杏風邪？あの黄色い葉っぱか？」

「違う違う。銀杏じゃなくて、胃腸」

「銀杏やんか」

「……。だから、胃腸！」

「せやから銀杏……」

「お前ら漢字で会話するなッ！分かり辛い……」

ファングは喧嘩になりそうな二匹の間に入って止めた。

「……。ま、とりあえず、かえちゃんが帰るまではあたし

らで看とくしかあらへんやろ？」

「あたしら、って……。オレら？」

「他に誰がおるん？」

「こんな四足歩行の獣達が看病？」

「そや」

しばらく沈黙が流れた。

ファングは気に入らない様子だったが、結局四匹で拓羅の家に押しかけた。

「おいそこの男！大丈夫か」

「拓羅くーん、みーなさんが来てあげたよーん」

「たっくん、あたしのアザラシやるか？北極に埋めてあんねん」

「……。騒がしいぞお前ら……」

ファングが呆れて物申す。

そんな具合で動物達が騒いでいると、拓羅がしかめっ面で目を開けた。

「あ、起きたで。たっくん！」

「おい男！男なら男らしく男でいろ！！」

「・・・良真、ワケわかんねえぞ？」

「つまり・・・寝込んでちゃダメだ！」

「みんな滅茶苦茶！。拓羅くん、しょうがないからあたしが楓の代わりになつてあげるね！」

「お前も滅茶苦茶だぞ」

「ホラ、おじちゃんも！ブツクサ言つてないで声掛けてあげなよ」

みーながフアングの後ろに回り、背中を押してきた。フアングも

「お兄さんだ！」と言いながら拓羅にそつと近付く。

「拓羅・・・？大丈夫か？」

「・・・・・・気持ち悪い」

「！！！！！！ オレか！？気持ち悪いのはオレのせいか！？髪が生え・・・」

興奮気味のフアングを三匹で押さえ込み、とりあえず別の部屋に移動した。

「アホフアング！あつこで興奮してどないすんの！？」

「ただだだつて・・・」

「だってクソもあらへん！！たつくんの病状悪化したらどないするつもりや！！」

「おおお前らもうるさは人の事言えないぞ・・・」

「自分の事棚に上げて人の事責めるつもりか！？」

「そそそそれだったらお前も人の事言えないぞ・・・」

「ユキ・・・？」

「アンタなあ！そうやって逃れようとしたつてダメや！」

「ユキ！」

「あたしはなあつ！・・・・・・あれ？今あたしの事呼んだ？何？」

あつけらかんとした顔でみーなを見た。

「・・・ボリユーム下げて。部屋移動した意味なくなるから」

「あ、ゴメンゴメン」

みーなの言葉どおり、ユキの声は拓羅の居る部屋に大音量で響いていた。

「そうだぞユキ！それじゃあまるで白くま版の楓だ！」

「・・・そんなにヒドかった？」

不安そうに尋ねるユキを見て、三匹は同時に首を縦に振った。

「・・・かえちゃんまでは行つたらんやろ・・・？」

三匹はまたユキを見ると、同時に首を横に振った。

「まるで大阪弁の楓だ」

「そうそう！その通り！！」

ファングと良真はそう言うと、二匹でウンウンと頷いた。

「・・・今頃かえちゃんクシャミ連発しとるで」

「は？クシャミ？」

「知らへんの？噂された人ってクシャミ連発するんやで」

「なんだそれ？迷信？」

「さあ？とにかくそう言うんや！」

「ユキ！だから静かになって・・・」

ユキの後ろでみーながそう言うと、隣の部屋でゴソゴソと音がした。

見ると、拓羅が這いずりながら携帯電話を手に入っていた。

「拓羅！お前なにやってんだ！？」

「携帯・・・楓の番号入ってっから・・・」

拓羅は何故かファングに携帯を渡した。ファングは足元に転がる携帯を見て、再度拓羅を見る。

「・・・呼び出するのか？」

ベッドに戻った拓羅はコクリと頷いた。

「お前は子供か？」

拓羅は首を横に振った。

「でも呼び出すのか？」

また頷く。

「・・・オレがやるのか？」

「頼む」

「オレは手先は全く器用じゃないぞ？ホラ、指三本しかねえし。一本一本が太いし……」

「貸して」

自分の前足を見せるフアングに向かって、拓羅は手を出した。フアングはそこに銜^{くわ}えた携帯を乗せる。

何度か鼻をすすりながら、拓羅は携帯のボタンを押した。再度フアングに渡した時には、もう電話からは呼び出し音が聞こえていた。慌てて耳に押し付ける。耳に携帯を押し付けながら、フアングは心臓が飛び出そうなくらい緊張していた。

（楓……。オレを怒鳴るなよー。怒鳴るなら拓羅を怒鳴れよー……）

携帯の呼び出し音は、静かな部屋に十回ほど響いた。

「ねー！ちょっと楓！！聞いてんのぉ！？」

「聞いている聞いている。聞いているからさ、お願いだから耳元で大声出さないで」

楓と千明はまだファミレスに居た。やっと頭痛地獄から抜け出せた楓は、次なる敵の餌食となっていた。「千明の大声攻撃」だ。

本当に耳のすぐそばで声を上げるから鼓膜が破れそうなくらい痛くなる。

「……で！どう！？楓はどう思う！？こんな彼氏どう思う！！？」

「……ゴメン、何が？」

「もー！！ちゃんと聞いてよ！！こっちは真剣なんだから！！」

「ゴメンゴメンゴメン！違うのホントに痛い……あれ？

あ、電話」

「あっ、ちょっとー！そうやって逃げんの！？ねえってば聞いてよ！！」

「うん。後からねー。あ、もしもしー？」

楓はそそくさと出入り口のドアを開けた。傘立ての横に座り込む。
「タク？どうし……あれ？違う？フアング？なにどしたの？」

【拓羅が熱あんだよ。お前今何してんだ？】

「や、まだ友達とファミレス……」

【帰れそうか？】

「どーかなあ……」

楓がそう言った時、遠くで「まだー？」と叫んでる声が聞こえてきた。

「あーもううるさいなっ！戻ってなさいよっ」

【な、なんだ？「トモダチ」か？】

「そ……あ、そいえば称狼は？」

【称狼様も出掛けてる。だからお前に電話してんじゃねえか】

「んーと……わかった。なるべく早く帰る。じゃね」

【ちよっ……おいつ……】

フアングが言うのを無視し、楓は携帯を閉じた。席に戻ると、千明が待つてましたと言う顔で楓を見た。

「……」

「楓、聞いてっ！」

「うん。もう凄い聞いた」

「でももつと聞いて！」

「……ねえ、あたしつてさ、暇人に見える……？」

千明は急な質問に驚いた顔をしたが、数秒としないうちに大きく頷いた。

「見える！」

そう言うと同時に楓は立ち上がり、「帰る」と言った。

「ちよちよちよつと待ってよ！ゴメンって！嘘嘘！全然忙しそうー！すんごい大変そう！あらまあ楓ちゃん大変ねーってくらい大変そうー！」

「・・・・・・・・・・ 実際暇か暇じゃないかなんて関係ないんだよねえ」
「んえ？」

「ゴメン、ホント帰らないと」

上着を着る楓を見ながら、千明はポケットとした顔をしていた。

「・・・・・・・・さっきの電話？ 拓羅くん？」

「うん、まあ・・・・・・・・。。じゃあね」

「楓は・・・・・・・・ホントに拓羅くんが好きなんだねえ」

その言葉に、颯爽と歩いていった楓はその場でずっこけた。頭をぶつけ、店内にゴン、と言う音が響いた。

「なななななななんっ・・・・・・・・なんでそーなのよッ！！」

体を起こし、後頭部を押さえながら涙目で千明を睨んだ。

「だって凄いドモってるじゃん」

楓に睨まれながらも、千明は笑顔でそう言った。笑う千明の前で立ち上がると、出入り口のドアの方を向く。

「・・・・・・・・ かつ帰るからねっ！ もう何も聞いてあげな・・・・・・・・」

「あ、楓、奢って！」

伝票を持った千明がニツコリと笑っている。

「・・・・・・・・・・ は？」

「あのね、だってね、財布の中にね、お金がね、入ってなくてね・・・・・・・・」

楓に向かって自分の財布を広げて見せた。中には百円と一円玉しか入っていないかった。

（・・・・・・・・コイツわざと金抜いてきやがった）

そう思いながらも千明に渡された伝票を見た。合計金額を見た楓はその場で気絶しそうになった。

「アンタ食べすぎ」

「えへへー」

楓はため息をつくとき、千明の顔に伝票を押し付けた。

「札は？」
さう

「無いよ。一枚も」

「よくもそんな平然としてられるわね」

「だってなんだかんだ言っても楓、優しいんだもん！」

千明は顔の横で手を組むと、甘えた声でそう言った。

「優しいと甘やかすは違うでしょーがっ！」

「あ、でも楓、早く帰んなきゃいけない？」

千明がそう言つと、楓は伝票を押し付けていた手の力を強めた。

楓の顔には、「アタのせいだろ」とハッキリ書かれていた。

「いたたたたっ！痛い痛い痛い！」

「金は貸したげる。だから学校で返して。いい！？」

「はい・・・」

やっと手を離すと、グシャグシャになった伝票と五千円札をテーブルの上にダンと置いた。そして出口へ向かう。

「あ、楓ー。百円足んな・・・」

そう言いかけた千明の額に、楓の投げた百円玉が見事に当たった。

第45話 『楓母ちゃん』

「フアングッ!!」

楓が家のドアを開けた。走ってきたせいで息が荒くなっている。

「……あれ？」

中には誰も居なかった。それもそのはず、全員拓羅の家の方へ行っているのだ。楓は自分の家の中に入って居ないことを確認すると、鍵を閉めて隣へ向かった。

そつと拓羅の家のドアを開けてみると、中は物凄く騒がしかった。ギヤーギヤー言い合う声や椅子を動かす音、仕舞いには皿を割る音まで聞こえる。

「……なんで……こんなにうるさいんだ……？」

首を傾げて中に入っていくと、うるささの原因はすぐに分かった。リビングで動物達が騒いでいたのだ。隣の部屋に病人が居るなんて想像がつかないくらいうるさかった。床には皿やコップの破片が散らばり、椅子もテーブルも地震が起きたかのようにバラバラの位置にあった。

そんな部屋で動物達は寝転がったりソファに座ったり、好き勝手に過ごしていた。

「……ちよつとコラ! 病人の家で何してんのアンタら!？」

「あつ、人間版の楓だ」

「は!?!? ……っていうかねえ、ちよつと……とりあえず外出な!」

楓はフアング達四匹を外につまみ出すと、再び中に入ってしまった。ドアの鍵を閉め、もうフアング達は中に入れないようにした。

寝室を覗くと、拓羅はベッドでぐったりとしていた。布団を被り、その中に更に枕がある。これであのうるささに耐えていたようだ。
「タク……? 大丈夫?」

拓羅の体をポンポンと軽く叩くと、中から赤くなった顔を出した。

「・・・・・・・・楓？もう帰ってきてくれたのかぁー・・・・・・・・」
「ど？」

楓は拓羅の額に手をあてた。手が冷たくなっているせいもあるのか、熱く感じた。

「・・・・・・・・ちよつと熱い・・・・・・・・かな？・・・・・・・・んーと、とりあえずあたし着替えてくるから向こう行・・・・・・・・だっ・・・・・・・・いてっ」

立ち上がるうとした時、楓の腕を拓羅がガツシリ捕まえた。バランスを崩し、その場に倒れ込む。

「・・・・・・・・あたし今日頭打ってばっかじゃん・・・・・・・・」

一人天井を見ながら呟いた。その後片手を使えないながらも体を起こし、床に座ると、ベッドに顔を乗せる。

「おバカな拓羅さんはどんな夢を見てるんでしょーねー？」

呆れ顔でそう言っていると、拓羅の顔を見た。腕を掴みながら気持ち良さそうに眠る彼の額に、軽くデコピンを喰らわせた。

それからどれだけ経っただろうか。

楓が目を開けた。外は暗い。窓から微かに差し込む光は月によつての物だ。

勿論部屋の中も真っ暗で、白い息が出るほど寒い。ベッドに置いていた寝ぼけた顔を起こすと、辺りをキョロキョロ見回した。目をこすり、やっと声を出す。

「・・・・・・・・寒っ・・・・・・・・。アホだなー。なんでこんな薄着・・・・・・・・」

自分の服と、ついでに部屋の中を見て、寝ぼけた顔は一気に冴えた顔になった。片手で髪をかき上げながら携帯を取り出す。画面の明かりに対して眩しそうな顔を見せたが、次の瞬間には険しい表情となっていた。

「・・・・・・・・さんじ・・・・・・・・？————三時！？うそっ！！」

腕を握られてることも忘れて立ち上がるとする。やはりバラン

スを崩した。

「またやつちった……」

ムクリと起き上がると拓羅の指を自分の腕から一本一本引っぺがしていき、今度こそ立ち上がると、部屋を静かに出ていった。

行動は至って普通だったが、楓の頭の中はごちゃごちゃで混乱していた。部屋を出ると玄関のドアに向かう。自分で鍵を掛けた事も忘れてパニくるくらい重症だ。

（ちょっと待て。なんだ？あれ？看病？看病してたのか？でも看病って言うほどの事は……いやいやそうじゃなくて……）
頭を掻きながら拓羅の家を出ると、寒いのと同時に透き通った空気が感じた。

そんな中、ファング達が楓の家の前で丸まっていた。

「……しまった……」

何を思ったのか、楓は口を開けたまま固まってしまった。

その時ファングが目を覚ました。中央に居るファングが動いた為、他の動物達も目を覚ます。

「ぶえつくし!!」

ユキ以外の動物が、三匹一斉にくしゃみをした。

「なんやアンタら。風邪ひいたんか？」

「うう……。楓が鍵なんて閉めたから……」

ファングがそう言った。そのファングの肩をバンバン叩くユキは、寒さには物凄く強い。一匹だけ全く風邪などひいてなかった。

「楓のせいだバカヤロー！拓羅と俺らとどっちが大切なんだよー」

「ゴメンゴメン。分かったからとりあえず中入って」

「どっちだー！どっちが大切なんだバカ楓ー」

「はいはい。ファングのが大切だよー。だから早く入って。ストーブ付けて暖かくしたげるから」

「かえちゃん……。母親みたいやな……」

鍵を開けて中に入ると、ファングと良真とみーなはすぐにストーブの前まで行き、三匹でくっ付いて丸まった。

「ユキは？どーする？中暑いけど」

「ほんならあたしはたつくん家行くわ」

「ほんならあたしはたつくん病院に連れてくわ」

楓はユキを見てふざけて同じ喋り方をし、拓羅の家の中へ入った。

「寝室には入っちゃダメだよ」と言っつてユキをリビングに行かせ、
寝室に向かう。

未だ眠っている拓羅の前まで行くと、彼はノロノロと目を開けた。

「はい、熱測つて」

拓羅に体温計を渡す。ゆっくりと上半身を起こし、体温計を脇に
挟んでまた横になった。

数分後、部屋に規則正しい電子音が鳴り響いた。デジタルの数字
は「39.7」と示していた。

「高っ・・・！？」

「・・・何度・・・？」

「39度7分」

「俺死ぬう？」

「バツカ。何子供みたいなこと言っつてんの。こんなんで死んだらア
ンタが生きてる事自体おかしいわよ」

楓は体温計をケースに仕舞いながらいつも通りの冷たい口調で言
った。そして体温計を棚に戻すと、振り向きざまに言った。

「朝になったら病院ね」

「朝まで待つのかよ・・・・・・」

「救急外来行くほどでもないでしょ」

「うわああ！ダメだ俺ー！死ぬんだ俺ー！死・・・」

「うるさいッ！黙って寝てろ！」

（病人にも容赦無しかよ・・・・・・）

怒鳴られた拓羅はそう思っつて、心の中で涙を流した。拓羅がそん
な事を思っつても知らず、楓は何かを探している様子だった。

「何してんだ？」

「・・・どこー？」

「何が？」

「診察券」

「あー・・・えっと・・・その棚の二段目・・・」

拓羅は楓の隣の棚を指差した。二段目を開けると、一秒後には額に手を当てた楓の姿があった。

「ぐっちゃぐっちゃで分かんないんだけど！」

「黒いケースに入ってるヤツ」

「・・・黒いケース」？あ、あった」

楓はカードケースの中から診察券を取り出した。棚に戻すと、部屋を見回す。

「あのさあタク、ちよつとは掃除しなよ」

「だって面倒臭えんだもん・・・」

「面倒臭いんじゃないくてゴミ臭いよ・・・」と言いながら、楓はわざと肩を大きく落としてため息を付いた。

第46話 『楓とラング』

次に目を覚ました時には、もう朝の10時になっていた。楓はあくびをしながら目をこすり、病院に行く準備をしていた。

「よし。タクシー。ホラ起きな」

「んー……」

「はい、熱」

夜中の時と同じように、楓は拓羅の目の前に体温計を突き出した。今の熱は『38.3』だった。

「あ、ちよつと下がった」

「病院だろ病院。行こ行こ早く行こ」

「アンタホントに病人？」

「え、なんでー？早く行こうぜー」

ヨロヨロしながらも上着を来て玄関に向かう。そんな拓羅を、楓は呆れた笑いで見た。拓羅の家から出ると、ファングが居た。

「ビョーインか？」

「そうだけど……ファング中入ってないと……」

「歩いてくのか？」

「だってそれしか足無いし」

「車はないのか？」

「免許はあるけど車は無い」

「……ビンボー女め……」

「お前寝てる。一生寝てる」

楓はファングの前で軽く足を振って蹴る真似をし、家の中に戻した。「クソ犬」と言うセリフ付きで。拓羅と一緒に階段を降りようとした時、下に称狼が現れた。

「あ、凋婁さん。アニキも……」

「あつちよつとこら！アンタ今まで何してたのー？アンタのアニキこんななっちゃってるわよ」

「すみません、すみません。病院・・・ですか？」

「そ。一応ね」

「俺運びますよ」

そう言うのと称狼は拓羅を背負った。病院には5分ほどで着いた。着くと、「終わったら連絡してください」とだけ言い残し、称狼は帰っていった。

平日だからか病院内はガラガラで、すぐに終わった。

診察結果は胃腸風邪だった。良真大正解だ。

称狼がマンションに帰って手を洗い、ヨッコイショと椅子に腰を下ろしたその時に携帯が鳴った。

「早っ・・・！！？」

携帯にそう呟き、称狼は再度出ていった。

帰り道、また雪がパラパラと降ってきた。

「凋婪さん」

「うん？」

「あなた方学校は？」

楓はその場で凍った。本当に体の芯から凍った。かろうじて目が動くくらいだ。楓の頭の中には、「ヤバイ」と「どうしよう」の文字しかなかった。

「凋婪さん・・・凋婪さん？このままじゃホントに凍りますよ？」

「っあー！もうヤダ！もうやめる」

「はい？」

称狼が驚いた顔で聞き返すと、楓はドシドシと歩いていった。

「もついい！学校なんてやめてやる！！退学にするなら勝手にしろい！」

「ちよちよちよっと！凋婪さん言ってる事滅茶苦茶ですよ」

楓の得意技の一つに「開き直り」がある。今まさにその状態だった。こうなってしまうては誰が何と言おうと聞かない。右耳から入って左耳から抜けていく。

開き直り界の女王だ。開き直りの世界でなら楓はイナバウアーだ

って出来てしまう。

わざと大きな足音を立てながら、楓は雪の中を進んだ。その後を称狼が追いかける。そんな図でマンションまで帰ってきた。

マンションのまん前まで来ると、二人は同時に足を止めた。入口にはラングが立っていた。

「や。お久しぶり」

「……ボス……!？」

「おー。上手くいったみたいだね」

ラングは称狼に背負われている拓羅を見てから、楓達に不気味な笑いを見せた。

「まさか……」

「ついこの間開発したんだ。人工風邪菌。略して人工風邪菌!」

「略してねーし」

楓がボソリと言った。それでもラングは続けた。

「さすがにおかしいとは思わなかったか?いくら寒いとは言え同じ時に皆で風邪をひくのは」

「だけど……俺達はひいてない……」

「そりゃそうさ。いたぶる相手が居ないとつまらないだろう?」

そう言つと、ラングは問答無用と言った様子で殴りかかってきた。楓はそれをギリギリで避けると、彼の腹に蹴りを入れた。だが少しかすつたくらいだ。

再度向かってくるラングに、今度は確実に攻撃を喰らわせた。

「とりあえずタク置いてきて。んでユキ呼んできて」

そう言われ、称狼は走ってマンションの中に入っていった。そのすぐ後に、ラングがむくりと起き上がった。

「一人で余裕、ってわけか?」

「こうするしか無いでしょ」

少し怒り顔で言う楓を見てラングはフツと笑つと、ゆっくりと楓に近づいた。まん前まで来ると、片手で楓の顎を上げさせた。

「似てると思わないか?」

「誰と誰が」

「お前と俺だ」

「ふざけんな」

楓はわざと齒を噛み合わせたまま言った。

雪が雨に変わってきた。ポツポツと二人の肌に当たる。それでも両者とも動こうとしなかった。

「まあ似てるのも無理はないがな」

「だからさつきから似てるなんて・・・」

そこまで言うと、頬に銀色の冷たいものが当たった。その「冷たいもの」はラングの手から伸びている。雨でないことは確かだ。

「あ。銃刀法違反」

「ふざけるな。いいか、今から俺の指定する場所に来い。一人で、だ」

「はあ？」

その時、頬に突きつけられた銀色の冷たいもの——ナイフが肌の上を移動した。ナイフが動くにつれ、赤い血の量も多くなる。

白い雪の上に、一滴だけ赤いものが落ちた。

「場所は誰にも言うなよ。誰か来たらお前も来た奴も殺す」

ラングは耳元でそう言うと言いつつナイフをしまった。楓の顎を持っていた手も放す。

ポケットに手を突っ込んで紙を取り出すと、楓の手に握らせた。

そしてまた不気味な笑いを見せ、足早に去っていった。

「・・・なんじゃこりゃ？」

頬の傷を服で拭くと、紙を開いた。中は英語で埋め尽くされていた。拓羅や称狼に分からないようにしたようだ。

（英語で書くなよボケ）

心の中でラングにパンチを喰らわせると、紙をじっと見つめた。一分くらい紙と睨めっこした後、それを手の中で潰した。そんな楓のこめかみには、久しぶりに「ムカツキマーク」が現れた。しかも出血大サービスで三つもだ。

彼女が握り潰した紙の最初には、英語で『お馬鹿な楓さんへ』と書かれていた。

そしてその紙に書かれていた場所へと走る。ラングに言われた通り、楓はそれを誰にも言わなかった。

——指定された場所。それは海の近くにある倉庫だった。

入口は重そうな鉄の扉だ。その前まで行くと、紙が挟まっているのに気付いた。

「・・・・・・・・・・？」

中を見ると、今度は日本語で『裏に行け』と書かれていた。

「なにこれ」

その紙も握り潰す。そして素直に裏へ向かった。少し錆びている倉庫の裏には一つのドアがあった。楓はドアノブに手を伸ばすと、捻った。

しかし一向に開かない。ヤケになって思い切り引っ張っているとドアノブの影からまたも紙が落ちてきた。

「・・・・・・・・・・アイツ絶対遊んでる・・・・・・・・」

そう言いながらもしぶしぶ紙を広い、中を見た。『岩に向かって歩け』と書かれている。楓は首を動かし、辺りを見回した。楓から見て後ろ、砂浜に大きな岩があるのに気付く。

堤防を乗り越え、砂の上に足を置いた。冬の海は風が冷たく、楓は縛っていた髪をほどいた。しかししばらくすると、やつぱり邪魔になったので縛りなおしていた。風が強くないのが救いだった。

岩の前まで行くとため息をつき、周りを一周した。だが何も無い。

「・・・・・・・・・・」

怪訝そうな顔で離れて見てみると、岩と砂の間に白い物が挟まっていた。

「・・・・・・・・よくやるねえ、こんなにも・・・・・・・・」

まるで子供のお遊びに付き合っているようだった。

岩のまん前でしゃがみ込み、白い紙を引っこ抜く。中に書いてあった文字を見て、楓は一人「はあ!？」と怒鳴った。

『倉庫に戻れ』。

第47話 『関係』

楓は一人紙に向かって怒りながら、倉庫の前まで戻ってきた。

「クソムカツクツッ！あんにやるー！」

指をポキポキ鳴らせそうな勢いだったが、楓は鳴らすことが出来ない。「タクなら鳴らせるのに」と思いながら、自分の手を見た。拓羅に出来て自分に出来ないのが悔しいのか、しばらくその場に座り込んで「えいっ！鳴れ！鳴れってば！」と自分の手と格闘していた。

数分後、そんな自分がバカらしく思えてきたのか、スッと立ち上がると倉庫の入口の前に立った。また何か仕掛けがあるだろうとダメ元で開けようとしてみると、いとも簡単に開いてしまった。

楓は移動している間もずっとこの扉を見ていたが、人が近づく所は見えていない。

（……って事は………？）

最初から開いているのに自分はまんまと騙された、と言うわけだ。そんな自分を見てラングは笑っていたのだろうと思うと、無性に腹が立ってきたみたいだ。扉を思い切り蹴って開けた。

中には予想通り、笑い疲れた様子のラングがダンボールの上に座っていた。

「あー。ホント笑えるなあ」

笑いすぎで目には涙が溜まっていた。その涙を指で拭くと、楓の方を向きなおし、「よく来たね」と言った。

「誰にも言わなかったんだ。いい子だ」

一瞬にして目の前に来て、楓の頭を撫でようとしたが、彼女はそんな手を強い力で振り払った。

「何なのさつきから」

「まだ分からないのか？」

「だから何が」

「・・・勉強出来てもこう言う時に頭回らないと意味ないぞ」

「赤の他人にそんな事言われたくないねっ！」

楓が睨んでそう言くと、ラングは急に笑い出した。

「赤の他人？・・・笑わせるなよ。俺とお前は――」

その頃、称狼とユキは楓を捜していた。雪の上に落ちていたあの血を見て少し焦ったようだ。マンションの敷地内の他、空き地や街に出て捜してもみたが姿は無い。

「凋婪さんどうしちまったんだよ・・・！」

「称狼様ああ！！」

向こうの方からユキが走ってきた。

「どうした？」

「かえちゃんの匂いがあつちに続いとって・・・」

「どこだ!？」

一人と一匹は小雨の中走った。時々ユキが匂いを探す為に止まる事があったが、なんとか海の近くまで来れた。しかし潮の匂いが強くなり、匂いが分からなくなってしまった。

「どないしよう・・・」

「とにかく捜すしかないだろ」

オロオロするユキを置いて、称狼は一人歩き出した。後ろからユキが「どこ行くんですかー!？」と叫んできたが、そんな事称狼自身にも分からない。とにかく動かないと始まらないと思って動いているだけだった。

（凋婪さんどこに居んだよ・・・!？）

そう思いながらひたすら歩いていた。

そして場所は倉庫に戻る。段々と風が強くなっていて、シッカリ

と閉まっている扉を風が叩いた。静かな倉庫内にその音が響き渡る。そんな中、さっきラングの口から出た言葉に、楓は戸惑いを隠せない様子だ。

「だから言つたら。似てるのも無理はない、と」

「・・・おかしいじゃん。じゃあなんで今更あたしの前に現れんの！？」

「我が子の成長を見守って何が悪い？」

楓は「我が子」と言う言葉に反応し、あからさまに嫌そうな顔をして見せた。

ラングの言つた言葉。それは『親子』だった。ラングは自分が楓の父親だと言いたいのだ。

だが自分と母親を置いて逃げた輩を父親と呼べるハズがない。目の前に現れた、今までただの敵だと思っていた人が自分の父親だと分かり、楓の頭の中はパンク寸前だった。

「シヨックか？結構ヒントを与えてきたつもりなんだがな」

ラングが楓に触ろうとすると、楓は先程以上にそれを拒んだ。しかし攻撃するでもなく、少し身を引いただけだ。

どうしたらいいのか分からない様子の楓を見て、ラングは少し笑った。

「俺が父親だと分かつて・・・どうだ、今の心境は。俺に対する想いを聞かせてくれ」

「・・・最低・・・を乗り越してもう呆れてる」

「呆れてる、か。何にだ？」

「言わなきゃ分かんないの？」

楓は軽蔑の眼差しを向けた。それでもラングはすました顔で「分からないな」と言つた。そんなラングに対して、今までに無い怒りが込み上げてきた。こんな奴が自分の父親と思うだけでやるせない。つた。

「・・・もうホント馬鹿！」

口から出せるのはそれだけだった。しかしラングの顔からはすま

した表情は無くなり、代わりに険しい表情があった。

「親に向かって馬鹿とはなんだ」

「親？よくためらいも無くそんな事言えるね」

その瞬間、楓の顔に向かって拳が飛んできた。楓は意外にもそれを素直に受け、倉庫内に音が響いた。

しかしそこまで痛そうな顔をしていない。

自分から殴られる方向に顔を向け、ショックを和らげたようだ。再度顔をリングに向けると、彼は少し驚いた表情を見せていた。

「殴れば？」

驚いた顔のリングを鼻で笑いながら楓は言った。

「殴って済むんならどうぞ。どんだけでも殴って結構です」

半ばヤケクソ気味にそう言った。拳を握りなおそうかどうか迷っている様子のリングを見て更に続けた。

「でもその代わり一生顔見せないで」

最後のその一言だけ冷たく言い放った。

「ユキ！潤婪さん海の方に行っただつてさ！」

街のと真ん中でユキと称狼が話していた。喋る白くまとそれと会話する少年。珍しいどころじゃない光景に、通行人全員が驚愕した。だが今はそんなのに構っている場合ではない。注目の的になろうとも、一人と一匹は会話し続けた。

「せやけど海に行つて何するんやろ・・・」

「・・・アレ、じゃないか？」

「へ？」

称狼は堤防のすぐ横の街側にある小さな錆びた倉庫を指差した。

「倉庫・・・ですか？」

「きつとボスに呼び出されたんだ・・・。だとしたら人が入る可能性が極めて低い所を選ぶはずだろ？」

「そつか！さつすが称狼様！！」

「へっへっへー……って天狗になってる暇は無いからな。早く行くぞ！」

一人と一匹は、街から人気の少ない所へと走っていった。扉を開けようとしたが、鍵が掛かっている。

仕方なく扉ごとユキの魔法と称狼の力でなんとかこじ開けた。

「凋婪さ……」

大きな音を立てて中に入る。だが目の前には何も無く、称狼は首を傾げた。

だが横から聞き覚えのある声がした。

「あ、称狼。ユキも」

横を見ると、壁に手を付いた楓が居た。よく見ると所々血が滲んでいる。

「あ……え！？ちよつと……凋婪さん……？」

「なに？」

「や、なにじゃなくて……大丈夫、なんですか？」

「歩けるし大丈夫じゃない？」

あっけらかんとした顔でそう言った。そのまま歩き出す。左足は少し跛をひきながらだった。

「あ、そうだユキ」

「はいっ！？」

「フアング達の様子見てきて。あとついでにタクも。なんかあったら携帯に電話してくれていいから」

「ついであつて……でも……」

「ユキ、行け」

称狼に言われ、ユキはしぶしぶ走り出した。二人になった途端、称狼は楓の顔を覗きこんだ。

「……なに？」

「力貸しましよか？」

「大丈夫だよ」

強がって先に行こうとする楓の腕を強引に掴むと、自分の肩に組ませた。

「俺だって役に立てますよ。立たせてください」

ちよっと頬を膨らましながら言う称狼を見て楓は少し笑い、「ありがと」と言った。

称狼も少し照れくさそうに笑い、今度は違うコンビで注目を浴びながら帰った。

第48話 『涙』

エレベーターで自分達の部屋がある階へ行くと、音を聞きつけたのかユキがドアを開けて出てきた。

「たつくんまだ風邪っぽいで。熱が下がらんみたいや」

「やっぱただの風邪じゃないんだねえ」

「アンタ暢気やなあ・・・・・・・・。平気なん？」

「何が？」

「たつくんや。熱下がらんのやで？心配やあらへんの？」

ユキがそう聞くと、楓はケラケラ笑って「だってアイツ殺しても死なないよ？」と言った。それを聞いた称狼とユキは微妙な表情で顔を見合わせたが、拓羅の顔を頭の中に思い浮かべると楓の言葉も素直に受け入れる事が出来て、つい笑えた。

ひとしきり笑うと、二人と一匹は楓の家に入った。すると、中は入っただけで汗が噴き出しそうなくらい暑かった。

「・・・・・・・・やっぱ・・・・・・・・ファング達もまだ風邪？」

ユキは頷くと、舌を出して息を始めた。

「・・・・・・・・あー暑い。ダメや。あたしやっぱ向こう行つとる」

と言うことで楓の家は風邪ひき動物達に貸してやる事にして、二人と一匹は風邪ひき人間の家に入った。

寢室の横の廊下を通ると、拓羅が目覚まして「おう」と手を振った。しかし次の瞬間には目が点になった。

「・・・・・・・・おおおおまおまつ・・・・・・・・おままま前・・・・・・・・なんだそれ・・・・・・・・!?」

「あ、タク部屋貸してね」

楓は拓羅の質問には答えず、ヘラツと笑ってそう言った。

「いいけど・・・・・・・・じゃなくて、おいっ！どうしたん・・・・」

「アニキ」

楓の肩を掴もうとした拓羅の手を、称狼が掴んだ。目が「頼むか

ら・・・」と訴えている。刹那的にその目を見ると、拓羅は手を引つ込めた。ベッドに座り、奥に入っていく二人の足音を聞くだけだった。

楓はキツチンの椅子の上に腰掛けると、深いため息をついた。

「凋婁さん」

称狼が救急箱を探しながら声を出した。

「ん？」

「それって・・・あつた」

「は？」

救急箱をテーブルの上に置くと、それに手を乗せながら小さな声で聞いた。

「ボスにやられたんですか」

楓はしばらく称狼の顔を見てから、軽く頷いた。称狼は「そつか」と言つと箱の蓋を開けた。中はぐちゃぐちゃで、いかにも拓羅の所有物らしかった。その中から使える物を探し出すのはまさに宝探しのようだった。

少しすると称狼はさばくる手を休め、箱を見つめたまま聞いた。

「アニキには・・・言わない方がいいですか？」

「うん・・・」

「・・・分かりました」

称狼が消毒液を取り出すと、楓は手を出した。しかし傷口を出したわけでは無いので称狼は不思議そうな顔で楓を見た。

「貸して」

「え・・・」

「自分で出来るから」

「あ、はい・・・」

称狼に渡されると、楓は消毒液と救急箱を持って違う部屋に入っていた。

「病院行かなくて大丈夫ですか？」

「大丈夫、大丈夫」

楓は部屋の床に座りながらそう答えた。箱も床にドカツと下ろすと、中を見た。

「・・・・・・・・」

全ての薬などに『拓羅の』と書かれていた。

（書かなくなつて分かるじゃん・・・）

壁にもたれかかつて薬を箱に投げ入れた。血はもう止まっている。手の平で固まった血をこすり取り、ため息をついた。体中が痛かった。

「あーもー。痛いなあ・・・」

しかしそれ以上に頭も痛い。

「つていうか父親とか・・・・・・・・ワケわっかんないし・・・母親だけでも苦勞してるっつの」

首だけ動かして下を向いた。髪を束ねていたゴムを取ると、髪が傷口に覆いかぶさった。いつものように額に手を当てる。

「・・・もうなんか・・・・・・・・」

今度は上を向いて、窓から見える雨をボーッと見ながら呟いた。

「泣きそー・・・・・・・・」

雨がいつそう強くなつた気がした。

その頃、キッチンの椅子に腰を下ろして称狼は考えていた。

（一応手加減はしてあるみたいだな。・・・・・・・・だけど・・・女にまで手えあげるってどういう事だよ。いくらなんでもやり過ぎだろ）

考えるだけでも怒れた。テーブルにヒビが入りそうなくらい力を入れた。少しパキッといったところで称狼の手が止まった。拓羅が寝室から出て、称狼の目の前に立っていた。

「教えるよ称狼」

「何を？」

「とばけんなよ！楓の怪我に決まってるんだろ！」

「・・・凋婪さんな、海に行っただ。堤防に座ってたから俺がふざけて後ろから押したら落っこちちゃってさ」

「ふざけんな。落ちただけでああもなるかよ。・・・本当の事言えよ！」

「なら凋婪さん本人に聞けばいいだろ」

称狼は横を向いた。しかしすぐに前を向く。——と言うより向かされた。拓羅が称狼の胸元を掴んだのだ。

「教えてくれるわけねえだろ！？」

「本人も言えない事をなんで俺の口から言えるんだよ！少しくらい考えろ！」

称狼が喧嘩腰にそう言うのと、拓羅は力を弱めた。しかし服は放さない。称狼が放せよ、と言っても放さなかった。

「頼むよ称狼・・・。。絶対言わねえもんアイツ・・・言わなきゃ分かんないのに言わねえんだもん・・・。楓が怪我してる時に・・・俺ばっか寝てて情けねえじゃんかつ・・・。。。。」

「・・・。。。。」

「頼む。本当の事教えてくれよ・・・。。。。」

「・・・悪いけど・・・凋婪さんに口止めされてんだ・・・。。。。凋婪さんも考えてアニキには言わないようにしてんだよ。心配掛けまいと、って。分かってやれよ・・・。」

そこまで言うと、称狼は言葉を止めた。拓羅が称狼の肩に顔を乗せていた。そして肩に暖かいものが触れた。

「後悔してんだよ・・・。。。。」

声が震えていた。

「後悔？」

「小せえ頃・・・アイツ守ってやれなかった。虐待から・・・守ってやれなくて・・・。。今すげえ後悔してんだよ・・・！今なら・・・日本連れてくるだけじゃなくて親の暴力からも守ってやれるのに・・・。力なら有り余ってんのに・・・。。。。」

「・・・泣くなよアニキ」

「泣いてねえよっ!!」

だが確かに涙の跡は称狼の肩の部分にしっかりと付いている。称狼はポンポンと拓羅の震える背中を撫でながら言った。

「……なあ、もしさ、凋夔さんがアニキに守って欲しいなんてガラにも無い事思ってたとしたら……きつと今回の事もアニキに言ってるよ?」

「守って欲しくなくなっちゃって言うてくれないじゃなかよ!なんんだよ……!」

「やっぱそりゃ心配掛けたくないからだろ。……凋夔さんさ、アニキにスツゲエ感謝してんだよ。行動見てればすぐ分かるくらい感謝の気持ち現れてるぜ?ただあの人、女のクセに口下手だから上手く言えないだけでさ」

称狼は笑いながら言った。また拓羅の唇と背中が震えた。

「女のクセにつて……偏見だぞそれ……」

「ははっ。悪い悪い。……それにさ、感謝して無いような、どうでもいいような奴だったら病院連れてったりだとか看病したりだとか心配したりだとか……そんな事しねえだろ?」

「馬鹿野郎!話ズレてってんぞっ!」

「え、そうか?」

称狼は素っ頓狂な声で言った。

「だからもうさあ!いいから理由教えろよお!!」

「ラングにやられたの」

「は?なんでラン……あれ?」

拓羅が顔を上げて横を見ると、部屋から出てきた楓が居た。拓羅は慌てて服で目をこすると、「なんだよそれ!?」と怒鳴った。

「凋夔さん?いいんですか!?」

「うん。ゴメンね称狼、無駄な労力使わせて。タクも……ゴメン。隠されたら気分悪いよね」

「違……いやでも違つくないか……それより……なんでラングなんだよ?」

「父親なんだってさ」

拓羅は「は？」と言って楓の顔を覗きこんだ。

「だから、父親。あたしの」

「・・・・・・・・え、だって・・・・・・・・お前の親父・・・・・・・・逃げたんだろう？」

「うん。逃げるのは天才的みたい。今日だって・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「でも逃げる間際に腹に一発入れてやったもんねーだ！ざまーみろい」

楓は腰に手を当てて舌を出した。

「そう言う問題じゃ・・・・・・・・ないだろ」

「じゃあどう言う問題？」

「・・・・・・・・そう言う問題・・・・・・・・なのかな・・・・・・・・？」

「ホラ、そうじゃん」

「だけど楓に怪我させるなんて最低じゃんよ！許せねえじゃん！！」

拓羅がそう怒鳴ると、楓は大きなため息をついた。

「あなたは一体あたしの何を見てきたんですか？」

「え・・・・・・・・何を・・・・・・・・って？」

「もう殴られんのは慣れっ子。ハッキリ言っただけはいつでもいいの」

「どうしても良くねえだろ！」

「だってコレ自分から望んだんだよ」

「・・・・・・・・あ・・・・・・・・？」

顔を覗きこんで眉間にシワを寄せたのは拓羅だ。どこからどう見ても「何言ってるんだお前」と言う顔だった。

「条件付きなの」

「条件？」

「もう二度と顔見せるな、って」

楓がそう言うと、拓羅は「お前バツカじゃねえの！？」と叫んだ。
「は？なんでよ！」

「あのラングがだぞ。あのラングがそんなで来なくなるわけねえだろ！お前真正銘俺よりバカだぞ！」

楓を指差して「バカ」の部分強調して言った。楓は一瞬ムツとした顔をしたが、目だけ横を向くとわざとらしく言った。

「えー。なーんだ。あたしの父親なんだから聞き分けいい子だと思っただのにー」

「・・・はい？」

「だから、あたしの父親なんだから聞き分けいい子、って」

「お前の父親だから聞き分けいいのか？」

「うん、そう」

「ゴメンもつかい言って。誰の父親だから聞き分けい・・・」

「しつこい！！」

いつもの調子で楓は拓羅の額を叩いた。拓羅は笑いながら額を押さえ、「ジョーダンだって」と言った。

「でもマジでボスはそれくらいじゃ来なくなるわけな・・・って？」
その時称狼のポケットに入っていた携帯が鳴った。バイブレーションでブルブル震える携帯を取り出してサブディスプレイを見る。

そこに出ていた名前は——『ボス』だった。

第49話 『死闘の末に』

携帯電話を見た称狼は一瞬固まった。

「なに、誰？」

「・・・・・・ボスからです」

楓の顔を上目使いで見つけた。

「出るよ称狼」

その横で拓羅が言った。称狼は深く頷くと、通話ボタンを押した。一応録音ボタンも押しておいた。楓と拓羅の二人は称狼にピッタリとくっ付いて会話を聞いていた。

【称狼か】

「・・・・なんですか」

ラングは電話越しに称狼以外の二人には分からない言葉を言った。それはまだ称狼がラングに仕えている時に教えてもらった仲間同士の言葉だった。

その言葉を使い、ラングは称狼に「楓の居た倉庫に来い」と言ったのだ。

「・・・・え・・・・・・？」

眉をしかめて聞き返す称狼を無視してラングは続けた。「誰にも言うな」と。

（俺にも暴力ふるうつもりか。上等じゃんよ）

称狼はまん前を睨み、静かに、しかし力強い声で「わかりました」と言った。携帯をボタンと閉じると、ポケットに入れた。

「ねえ、最後なんて言ってたの？」

「つつか何語だよ、あれ」

「んー？俺は楓の父親よーん」だつて

思いつきり嘘を言った。

「じゃあ「わかりました」ってなによ」

「分かつてるから言うまでもないだろ、って事です」

会話を知っている側からしたら滅茶苦茶な話だったが、楓と拓羅はすんなり納得してしまった。

「あ、そうだ、俺フアング達を動物病院に連れていきますよ」

称狼は隣の楓の家を親指で差した。

「え？あ、そつか！あたしも・・・」

「凋婪さんは休んでください。長い間部屋にこもった割には全然手当てしてないし。何してたんですか、全く」

「えへへへー！」

「じゃ、アニキも休んでくれよ。それと凋婪さんの見張り役な！」「任しとけ！」

称狼が出ていった後、楓は拓羅の方を向いて言った。

「何よ見張り役って・・・」

「まあ細かい事は気にしなーい。ささ、今のうちに俺らはラブラブし・・・グフツ」

拓羅は、頬に思いつきり楓の鉄拳を喰らった。

その頃称狼は街を走り抜けていた。ラングに楓の仕返しをする一心で走っていた。例の倉庫の前に行くと、扉は閉まっていた。

「また面倒な・・・」

そう言つとシツカリと閉まっていた扉がゆっくりと開いた。

「・・・・・・？」

「やあ称狼」

暗闇から現れたのはラングだ。ラングの笑みを見た瞬間、称狼の足は震え出した。

（くそっ・・・止まれよ・・・！！）

いくらそう思っても震えは止まらない。ラングは称狼の後ろの扉を閉めた。外の明かりが入らなくなった倉庫は薄暗く、ラングの不気味さを更に引き立てた。

「・・・凋ら・・・楓さんになんて事するんですか」

「あれはアイツが望んだんだよ。殴れば？と言われたから殴った。

それだけの話だ」

「それが親のする事ですか」

「ああもう知ってるのか。・・・称狼、お前はもう邪魔だ」

称狼の震えはいっそう激しい物となった。目になんとも言えない
迫力がある。石のように固まり、動けなくなってしまうた。

「何故お前を呼び出したか分かるか」

ラングは称狼の回答も待たず、ナイフを取り出した。その先には
少しだけ血が付いていた。

楓の頬を切ったあのナイフだ。

「俺はあなたを殴る為にここに来た」

称狼は頼りない声を振り絞ってそう言った。

「ほお、なら殴ってみろ」

余裕の表情で両手を広げて見せたラングを睨み、称狼は震える足
で走った。ラングの目の前まで行くと拳を飛ばした。

だがラングはそれをいとも簡単に避けてしまった。元々震えてい
た足は、その場に崩れ落ちた。しかしここでやられるわけにはいか
ない、と立ち上がり、再度ラングの方へ走った。

ラングは称狼で遊んでいるようにも見えた。倒れ込んだところを
ナイフで一刺しにしないのがその表れだ。

「さあ称狼、お前も苦しませてあげようね」

笑ってそう言つと、今度はラングから称狼に近づいた。怯えて、
それでもまだ威嚇を止めない称狼を殴り飛ばす。壁に当たってずり
落ちた。

ラングは仰向けに倒れる称狼の手の上に足を乗せ、思い切り力を
入れた。

倉庫内に称狼の声が響いた。声は、密室の壁や床に当たって木霊^{こだま}
する。

「誰が誰を殴り飛ばすって？もう一度言ってみろよ」

「・・・俺が・・・アンタを・・・殴り飛ばすんだよ・・・!!」

ラングはフツと笑うと、手を踏むのを止めて、代わりに称狼の顔

を蹴りつけた。後ろが壁で逃げ場の無い称狼に向かって、何度も何度も蹴りを入れる。

ひとしきり攻撃が終わった時に称狼が咳をした。かすれた空気と一緒に赤い血も少し出た。

（ヤベ……。アバラ折れた……。）

称狼は腹を押さえながら痛みを耐えた。壁に助けてもらいながらなんとか立ち上がると、握りこぶしを作った。

「まだ苦しみたいか？」

「殴るまでは死ねねえからな……。！」

「馬鹿な奴だな」

「お前よかマシだっ！！」

称狼はそう怒鳴ると、ラングに向けて腕を思い切り振った。しかしやはり避けられる。

動くたびに腹が痛む。段々と息が荒くなっていくのが自分でも分かった。

「うおおああああああッ！！」

称狼は渾身の力を込めて拳を飛ばした。

「あ、そいえば称狼、ストーブ切ってってくれたかなあ？」

称狼が死闘を繰り広げているとも知らず、二人は暢気に話していた。

「ああー。アイツそう言うの忘れっぽいからな。見てこればいいじゃん」

「そうだね。じゃあちよつと……。！」

そう言って楓は拓羅の家を出た。隣の家ドアが閉まる音がした数秒後、激しく開け閉めする音が聞こえた。その音は拓羅の家にも攻め込んできた。

「どゆこと！？」

拓羅の家のドアを開けるなり、楓がそう叫んだ。

「・・・は？」

「フアング達ちゃんと居るよ、全員！」

「なんで？称狼が連れてったんだろ？」

「なんで？なんでってこつちが聞きたいよ！なんで！？」

「俺だつて聞きてえよ！なんでだよ！？」

二人にしてみると物凄い緊張が走っているのだが、称狼に比べたら物凄い平和だ。バックに平和な音楽が流れそうなくらい平和だった。

「どこ行つたのか分かるか？」

「全然・・・でもラングからの電話なんだよね・・・？」

「って言つてたな。やっぱアイツは大嘘野郎だ」

「うん」

そう言つてからしばらく考えた末、楓が声をあげた。

「あつ！倉庫！」

「あつそう？」

「は？何言つてんの。倉庫！海の所にね、倉庫があんの！そこで・・・」

「・・・」

「・・・なんだよ。「そこで」？」

「・・・まあ色々とありまして。多分そこじゃないかな・・・」

・？あ、でもバカじゃなければ場所変えるかな、普通」

「お前の父親なら大丈夫だ、場所は変えねえ！」

「・・・てめえ・・・」

ムカツキマークが出現するまであと3秒と言つた感じの楓を宿め、

拓羅が家を出ようとした時、楓が止めた。

「ちよつとコラー！タクまだ風邪・・・」

「んな事言つたらお前も怪我だろ」

楓の方を見向きもしないで答えた。靴を履くと、ドアを開ける。

楓は出て行こうとする肩を掴んだ。自然と拓羅は楓の方を向く格好となる。

「だってまたぶり返したら病院連れてくの誰だと思ってるの!？」

「は!？そっちかよ!」

「そっちだよ!悪いですかっ!」

まるで幼い頃に戻ったかのように二人は睨み合った。殴り合いになるのも時間の問題だ。

「俺が大丈夫つつたら大丈夫なんだよ!お前こそ休んでたらどうなんだよ!？」

「あーもー!この分からず屋ッ!」

「どっちがだバカヤロー!!」

このままでは埒が明かれないと思ったのか、楓はため息をつく。拓羅の横を抜けて外に出ようとした。

「バカお前・・・」

焦った拓羅は考える前に楓の腕を掴んだ。振り払って行こうとするが、拓羅の腕はなかなか放してくれない。

「タク痛い!」

「ホラ見る痛いんじゃないか!」

そのまま腕を引っ張ると、拓羅は怒鳴った。少し驚いた顔の楓を見て続ける。

「お前何でもかんでも一人で出来ると思うなよ。無駄に強がってんじゃないよアホ!」

「なっ・・・何それ!アホって・・・」

「昔っからいつもそうだよ!一人で何でも解決しようとしやがって!俺にも頼れよ!じゃなきゃ・・・なんかさあっ・・・なんか・・・」

「・・・お、俺が傍に居る意味ねえじゃん・・・」

拓羅はそう言った後、一人で顔を赤くした。だがそういう系にはとことん、普通じゃないくらい鈍い楓には何を言いたいのかサッパリだった。

茹でダコ状態の拓羅を見て、「は?」と言った。

「・・・鈍い・・・お前鈍すぎ」

「は?なんで?何が!？」

「お前マジで分かんねえの？」

「分かんない。・・・っていうか何が？」

拓羅はまだ顔を赤くしたまま楓を睨んだ。

「こ・の・鈍感野郎！！」

そう怒鳴り、楓の額に頭突きした。

「だっ・・・」

額を押さえてその場に座りこむ楓のまん前で、拓羅も額を押さえて叫んだ。

「・・・痛ってえええ！！」

「こっちのが痛いわけ！！」

二人はまた睨み合ったが、額に血の滲む拓羅を見て楓が吹き出した。それで喧嘩は終わったらしい。

「痛いならやんなきゃいーじゃん」

横を向いて笑いを堪えながら楓が言った。拓羅はまた顔を少し赤くした後、そんな楓の頭をぐしゃぐしゃ撫でると「ホラ行くぞ」と言って一人階段を降りていった。

「・・・なに今の・・・」

通路に残された楓は髪を手で梳ときながら拓羅の降りていった階段を見つめた。

出てみると外はどしゃ降りだったが、そんな事関係なく二人は走っていた。

「こんな雨ん中走ってさあ、また風邪ひいても知らないよ？」

「大丈夫、大丈夫。それに俺がずっとダウンしてたら読む人いなくなっちゃうし！」

「はあ？」

「ほら、俺ってばモテちゃうしいー？あ、ダメだよ楓、焼きもち焼

「いちゃ」

「あつらごめんなさい、聞こえなかったわあー！もう一度言ってくださるー？」

楓はわざとらしくそう言うと、耳を拓羅に近づけた。すると、拓羅も負けじと楓の頭を軽くはたいて「バーカ」と舌を出した。

そんな事をしているうちに倉庫が出現した。

「あ、ホラあれ」

走りながら倉庫を指差す。拓羅は「ふーん」と言うとスピードを速めた。

倉庫にはすぐに着いた。雨音と厚い扉で中の音は聞こえない。

「いいか、お前は称狼連れてすぐ逃げろ」

「タクは？」

「俺は……まあ色々と……」

楓が分かったような分からないような、曖昧な頷き方をして、二人は扉に手を掛けた。

中では称狼とラングの葛藤が続けられていた。先程の称狼のパンチは、ラングの頬に当たっていた。

放ったパンチは確実にラングを捕らえ、彼の横顔を床に叩きつけた。

しかし称狼が優勢になったのはそこだけだった。

「……………」

床に横たわる称狼の身体はボロボロだった。ラングが称狼の髪を掴んで顔を上げさせる。

「苦しいか？悔しいか？」

「……………」

何も言わない称狼を殴ると、元々口の中から出そうになっていた赤い血が黒い床に飛び散った。ナイフを首に突きたてた時、鉄の扉が勢いよく開いた。

見ると楓と拓羅が立っていた。二人とも濡れている。

「やあ、いい所に来たね。称狼、お前言ったのか？」

「俺は・・・言つてな・・・」

そこまで言うともたラングに殴られた。床に倒れ込む称狼はもはや虫の息だった。

「デメエ楓だけじゃ飽き足らず次は称狼か！ああ！？」

「まあまあそんな怖い顔をするなよ。今からいい物を見せてやるから」

「いい物・・・だと？」

「しっかりと目に焼き付けておけよ、愛娘」

ラングは楓を見て、「愛娘」をいやらしく言った。それを聞いて楓は更に強くラングを睨む。だがそんな物に到底退く訳が無い。

ナイフを持ち直して称狼に近づいた。

「デメエツ！！！」

刃先がもう少しで称狼に付く、と言うところで拓羅がジャンプしてナイフを捕まえた。

「バカめ、自分の手が切れるだけだぞ」

「いいよ切れたって」

じきに拓羅の手から赤いものが垂れてきた。それは銀色に光るナイフにも付いた。拓羅の顔が少し歪む。腕も少し震えていた。

その間に楓は称狼の体を起こし、なるべくラングから遠いところに避難させた。

「凋婁さん・・・？」

「あのねえ。アンタバツカじゃないの？」

「・・・分かってます・・・」

血だらけの顔で笑う。拓羅との計画通り、楓は称狼の腕を掴むと肩に乗せた。称狼が自分にしたように。

「・・・大丈夫ですよ・・・自分で歩けます・・・」

「あたしだって役に立ってます。立たしてください」

そう言つて楓は、はにかんだ笑顔を見せた。称狼はそれを見て安

心したように笑うと、「ありがとうございます・・・」と声にならない声で言った。すぐに空気に押し潰されてすぐ近くの楓にすら届いたかどうか分からない、そのくらい小さな声だった。

その後称狼の体からは力が抜け、もう殆ど楓の力だけで運んでいくようなものとなったが、時々よろめきながらも、なんとかマンシヨンへと戻れた。

第50話 『knife』

楓はマンシヨンの前に来た時に気が付いた。さすがにこの怪我は家で大人しくしてれば治る物ではない。少し戻って病院へと急いだ。その頃、拓羅はまだ倉庫でラングと向き合い、ナイフを握ったままだった。

痛みは半端ない。右手が焼けるようだった。ついには口までも震えてきた。

「痛いんだろう？そろそろ放したらどうだ」

「テメエが放さないんなら俺だって放さねえ・・・」

「お前は何をそんなに怒ってるんだ」
奥歯を噛みしめて耐えている拓羅に向かって、ラングは笑ってそう聞いた。

「・・・分からねえかな・・・。テメエの全てに怒ってただよ・・・」

「ほお？」

「楓に暴力ふるった事も称狼ボコボコにしゃがった事も！全部怒ってたんだ！！」

「・・・・・・」

「テメエが楓の親父だって事にも腹立ってたんだよ俺は！！」

怒鳴った時、拓羅の手からナイフが抜けた。ラングが故意に抜いたのだ。ナイフは拓羅の手の中を滑り、赤い液体と共に外に出た。

「・・・・・・ッ！！」

震える手を押さえ、拓羅は下を向いた。

「お前らは本当に飛んで火に入る夏の虫だな」

「・・・・・・今は冬だクソッ・・・！」

「じゃあ冬なのにそんなに汗が出るお前は凄いなあ」

ラングの言う通り、冬だと言うのに拓羅は大量の汗を掻いていた。それは決して雨のせいではない。

「お前ら兄弟揃って本当にアホだな」

「自分の女と子供残して逃げる奴よかマシだろおが！」

「ほお、なるほど」

「俺はテメエのそういうすました顔が大ッ嫌いなんだよ！！」

「お前に嫌われようが関係ないね」

「ラングはやはりすました顔でそう言った。そして手に持っていたナイフを拓羅に向けた。

「俺は称狼がどこに逃げようが殺す。そして邪魔をする奴だつて殺す」

そう言つて睨むラングの目は、さっきの目とはまるで違った。

「命なんて儚い物だ。左胸を刺せばすぐに終わる。人を殺すなんて容易い事なんだ。今ここでお前を殺してやってもいいぞ」

「テメエ・・・マジで最低だな」

「最低は俺から見たら最高なんだよ。お前を殺したら次は楓だ。アイツも称狼を殺す際には邪魔な存在だからな」

「んな事させねえ為にここに居んだよ。二人に手え出したら崇つてやるかな！」

拓羅はラングに飛びかかった。ナイフで腕を少し切られたが、彼の手はラングの首を捕まえ、締めた。

ゴリゴリした感触が親指から全身へ伝わる。拓羅の手から出る血で、ラングの首も赤く染まっていた。さすがにラングも焦り始め、拓羅の腕を掴んだ。

「放せ・・・！！」

「楓にも称狼にも手え出すな！！！」

「分かった・・・分かったから放せ・・・」

「・・・テメエの言葉なんて信用出来るか！殺さない限り安心出来ねえんだよ！！」

ラングは舌打ちすると手に持っていたナイフを拓羅の腕に突き刺した。ナイフは更に赤くなる。拓羅の眉間にシワが寄ったのが分かった。顔全体が歪んだ。首を締める力が弱くなった時を狙って、ラ

ングは起き上がる。

今度は逆になった。ラングが拓羅の上に馬乗りになってナイフを突き刺した。

拓羅はそれを顔だけ動かして避ける。ナイフは何度も床に当たり、刃先が少しだけ丸くなった。顔は避けられてしまうから意味が無い。ラングは肩にナイフを刺した。

さすがに肩は避けられなかった。

赤い血と共に拓羅の悲鳴も飛び出た。ラングは悲鳴の上で不気味に、そして満足そうに笑う。

肩を刺されて右腕は使い物にならなくなってしまった。

「そろそろ諦めろ」

「嫌だね！誰が諦めるかつ……」

「なら嫌でも諦めさせてやる」

ラングは馬乗りになるのをやめ、立ち上がった。怪訝ももそうな顔をしている拓羅の足に、ナイフを落とした。ナイフは彼の腿ももに突き刺さる。それを乱暴に引き抜き、反対の足にも突き刺した。

拓羅はうめき声をあげながら、足を抱えてうずくまった。

「どうだ、動けないだろう？諦める気になったか」

「……ナメンじゃねえ……！！」

「しぶといな。ゴキブリも退くぞ」

「うるせえんだよ！！」

「両腕切り落とさないで諦めないか？」

「どうされたって諦めねえよ、バーカ」

拓羅は懸命に口角を上げた。ラングを挑発しているようだ。

「お前を相手にしててもつまらん。先に称狼を殺しに行くよ。じゃあな」

そう言うと、ラングは鉄の扉を簡単に開け、雨の中に出ていった。拓羅が声をあげたときにはもうその姿は無かった。

「……くそ……。ヤベエー！」

足を押さえながら立ち上がり、歩き出した。地面を踏み締める度

に激痛が全身を襲い、血が流れ出る。

それでもなんとか街を抜けてマンシヨンの前に来た。透明な雨の中に、赤いものも混じる。びしょ濡れになってやっと中に入った。だが、そこからはエレベーターのボタンを押すだけでも辛かった。もうその箱の中で朽ち果てそうなくらい拓羅の体力は底を突いていた。目が虚ろになるのが自分でも分かるくらいだ。

目の前がボヤける。

エレベーターが三階に着いた。ゾンビのような動きで出る。自分の家のまん前まで来た時、倒れ込んだ。

ドアと正面衝突し、青いドアに赤い血が付く。

幸いその音で中の楓が気付いたようだ。

「・・・・・・・・？」

「なんだろう」と言う顔でドアを開けたと思ったら、次の瞬間には「は！？」と言う顔になった。目の前に幼馴染が、しかも全身血だらけで倒れているのだから当然だ。

楓は称狼を連れてさっき行った病院にまた行く事になった。

今度こそ全て彼女の力だけで。

第51話 『ファル』

拓羅が目を覚ましたのは病院に運ばれてから三時間は経った頃だった。体を起こそうとしたが、痛くて起き上がれなかった。右手は包帯がグルグルに巻かれ、足も同様だった。

「痛ってえ………」

右手は痛くて握る事すら出来ない。辺りを見回すと、隣のベッドには称狼が居た。静かに寝ている。拓羅はようやくラングの言葉思い出した。

（称狼を殺す―――）

じつと弟を見つめた。しかしなんだか安心出来ず、称狼が息をしているか確かめに行こうとしていた。だが足も少し動かすだけで物凄く痛い。

「あー、ダメだ。動けねえや。クソッ……」

そう言っただけでベッドに寝直した時、病室の白いドアが右にスライドした。

「あ、タク起きたんだ」

「おう」

よく見ると楓の手や顔には絆創膏が貼ってあった。

「………」

「ねえねえちよつと聞いて！これさあ、いいって言ってるのにペタペタ貼り付けてきやがったの！！どうよ！これどうよ！？」

「……あん？」

「あん？じゃなくて。これ見てどうも思わないの！？」

「………思わない……」

「……あ、はい。もういいです」

諦めたようにそう言っただけで、楓はベッドの近くの椅子に座った。そして顔の絆創膏をベリベリはがし始めた。

「何してんだお前」

「はがしてんの」

拓羅が「見りゃ分かる」と思ったところではがし終えてゴミ箱に捨てると、再度外に出て服を持ってきた。見ると拓羅の物だと分かった。

「はいコレ」

「服……？着替えが見たいのか？」

楓は「アホか」と言って拓羅の顔に服を押し付けた。そしてベッドをカーテンで囲った。

そのカーテン越しに二人は話した。

「……楓」

「んー？」

「ラングな、称狼を殺す、って言ってた……」

カーテン越しでも拓羅には楓の動きが止まったのが分かった。

「……なにそれ」

「分かんねえけど……多分今日その為に称狼を呼び出したんだと思う」

「ああ、そいえばあのナイフ……」

「称狼殺す為だろうな……なあ、称狼息してるよな？」

「は？何言ってるの。してるに決まってるでしょ」

そう言いながらも楓の声は徐々にボリュームダウンしていった。

そして急に立ち上がると、称狼の息を確認した。拓羅の言葉もあった一瞬心臓がドクンと音を立てたが、息はちゃんとしていた。称狼の口に当てていた手を下ろし、安堵のため息をつく。

「大丈夫だったか？」

「当たり前じゃん！」

そうは言ったものの、大きな音を立てた心臓と安心せいで目が少し潤んでいた。だが息をしている事を分かったため徐々にひいていった。

「アイツ……絶つつ対弄んでるよ」

「あ？アイツって……ラングか？」

着替え終わった拓羅がカーテンを開けながら言った。楓はやつと出した彼の顔を見ながら無言で頷く。そして膨れっ面で続けた。
「称狼殺したいんだったらなんで倉庫に呼び出してすぐ刺さなかったんだろって思わない？」

「思う」

拓羅は「俺もお前も殺すって言ってた」と言いたいのを堪え、頷いた。今そんな事を言ったら楓の逆鱗に触れるのは自分だけだ。拓羅の中はそんな気持ちだとも知らず、楓の顔はタコチュー顔になる一方だった。

その頃、ラングの方では称狼を殺すための計画が立てられていた。暗い部屋でロウソクに火を付け、紙を広げる。楓大大正解だ。

ロウソクの灯りに照らされてラングの隣には一匹のワウルフが居た。

ラングは紙を指で差し、隣のワウルフに声を掛けた。

「いいかファル。称狼は今入院中だ。逆に狙い易い。お前は楓と拓羅を捕まえろ」

「はい」

「もし暴れたら殺さない程度に・・・そうだなあ、骨でも折っとけ」
「任せてください」

「ファル」と呼ばれた者は指をパキパキと鳴らし、ニヤリと笑った。曲げた腕には物凄い筋肉が付いていた。こんな腕なら骨を折るなんて容易いことだろう。

一人と一匹は立ち上がると、窓から外に出た。彼等の飛び出た外はもう暗く雨も止んでいて、大きな丸い月が異様に明るく感じた。

夜、病室には三人居た。称狼、楓、拓羅だ。本来なら楓は病室に居る必要はないのだが、拓羅からラングの事を聞き、下手ながらも

芝居をして入院させてもらう事になったのだ。

「楓、ラング来ると思うか・・・？」

「そりゃ来るでしょ」

「来たら・・・頼むぞ。俺も称狼も動けそうにない・・・」

（とか言って実際に来たら止めても聞かないくせに）

楓はベッドに寝転がりながら、半ば呆れ顔だった。

「一難去ってまた一難ってまさしくコレの事言うんだろーな」

「珍しいねえ、タクがそんな事言うなんて」

「おい！俺をいくつだと思ってるんだ」

「精神年齢5歳！」

こういう時ばかり、楓は元気な声で言った。それを聞いて少し睨んだ拓羅だったが、すぐに普段の顔に戻った。そしてニカツと笑うと、「楓ー」と呼んだ。

「んあ？」

「こつち来て」

「・・・なんで」

「いいから！」

「自分が来りゃいーじゃん」と言おうとしたが、その言葉が喉まで出掛かった時に彼が動けない事を思い出し、しびしび拓羅のベッドへ向かった。

今は夜の1時だ。病棟は静まり返っている。裸足にスリッパの楓は「寒いし」と怒りながら椅子の上であぐらを掻いた。

「で、なんでしよう」

座って肺の中に溜まっていた空気を吐き出すと、そう言った。拓羅はもう一度ニツと笑うと、動けないと思っていた体で動いた。

「・・・なにアンタ動けんの！？」

「俺回復力だけはいいんです」

（つつつても早すぎだろ・・・）

楓は心の中でツツコミを入れると、すぐ近くにある拓羅の顔を見た。

「……………動じねえの？」

「何に？」

「だからこう……今迫ってんの、俺」

「何に？」

「だからお前……」

「あ、来た！」

急に窓を見て言う楓のまん前で、拓羅はズルツと滑り、顔をベッドの柵にぶつけた。

（誰かコイツの鈍さをどうにかしてくれ……）

心の中で一生の願いを呟き、顔を上げた。

「なんだよ……。何が来たって？」

「ホラ」

楓は拓羅の顔をチラリと見て窓を指差した。楓の指の先には、ラングの姿があった。

「……………来やがったな……」

拓羅が歯軋りをした時、ラングは窓をすり抜けて病室の床に足を置いた。

「……………！？今お前……すり抜け……」

「何を驚いてる？俺らならこのくらいどうって事ないんだ」

ラングはそう言いながらベッドに横たわる称狼を見た。ニヤリと笑ってベッドへ近づく。

「あつテメ……！！」

止めようとしたが、やはりまだ素早く動ける体ではない。その時、銀色のロッカーの隣に置いてある物に目がいった。急いでそれを取る。

ラングが称狼のすぐ近くまで行くと、後ろから棒が振り下ろされた。

スコーンと言うマヌケな音を立てて、棒は彼の頭に命中した。

「鈍っ！！」

「キサマ……！！」

後頭部を押さえながら後ろを向くと、楓がモップを持って立っていた。彼女は一人で勝手に頷くと、「よし。気が済んだ」と言った。「あー？」

「あ？じゃなくて、仕返し。ホイ、さんきゅ」

そう言って座りこむ拓羅にモップを返した。

「仕返したと・・・！？馬鹿を言うな！それはお前が望んで・・・」
「はあ？何言ってるの？」

「・・・」

「称狼とタクの分に決まってるでしょーが。あ、でも望むんならあたしの分もやったるっか？」

「お前は・・・そんな事を言うしか能が無いのか！？」

「うん、まあ能無しから産まれりや子供も能無しだわな」
笑いながらそう言い、ラングの前にしゃがむ。

「アンタ今何言ったって自分に不利なだけだよ？」

楓にそう言われ、ラングは拳を作って腕を振った。しかしその腕を拓羅がモップで叩き落とした。

「ボコ行きまーす」

拓羅はモップでラングの頭を叩き始めた。仕舞いには足まで出し、言葉通りボコボコにした。

「さすがにおかしいね」

ケケケと笑ってボコボコにしていた拓羅の後ろで、楓が言った。

確かに「ボス」と慕われていた者がこんなに簡単にやられるのはおかしい。

「・・・やられた」

「え？」

楓はそれだけ言うとは病室を飛び出した。拓羅も急いで出ようとする。その時、称狼のベッドが空になっている事に気付いた。

「・・・うつわマジだ！！やられた！！一発食わされた！！！」

あのラングは偽者だったのだ。偽者に気を取られている間に、本物のラングが称狼を連れて病院の外に逃げたようだ。

拓羅も頭を抱えながら病室を出た。

でも楓の姿はもうない。廊下に出て左右を見渡しても全く見えなかった。

「どこ行っただ？アイツ・・・」

走ろうとした時、タイミング悪く足の痛み止めが切れてきたようだ。その場にしゃがみ込み、足を押さえた。

「・・・くそっ・・・!!」

だが押さえれば押さえるほど傷口から血が出てくる。じきにズボンが赤く滲んできた。

「血い止まったんじゃねえのかよ・・・!!?」

仕方なく足をずったまま病室へ戻り、シーツを破いて傷口にあてた。

しかし血の出は悪くなっても、当然痛みは治まらない。

それでも足を引きずってやっと病院外に出てきた。上着を着ていても寒い。空は澄んでいて星が見えていたが、自然のプラネタリウムに感動してる場合じゃない。

「どこ行っただー？アイツら・・・」

しばらく歩いていると、「いでっ!」と声をあげ、豪快に後ろへ転んだ。道が凍っているため、転び易くなっているのだ。

「・・・もうヤダぞ・・・」

そう言っつて、すぐ近くにある建物の間の隙間に入りって休み始めた。寒さで歯が音を立てる。

「くっそー! 楓どこ行っただー!!?」

叫ぶと同時に、横から人が突っ込んできた。驚いた拓羅は身を引きながらその人間を見た。向こうも拓羅を見るやいなや、「当たった!」と笑顔で言っつた。

「楓・・・。何してんだお前?」

「ホイ、称狼」

「やあ、アニキ」

楓の手には、シッカリと称狼の服が握られていた。半分意識が飛

んだまだった称狼を、猫掴みで連れてきたようだ。

勿論今は目もパッチリ開け、拓羅を見ている。

「・・・なに、もうやり合ってきたのか!？」

「んなワケないじゃん。一瞬の隙を付いて取り返してきたんだよ。ホラ、あたしつてば凄いいい?」

楓は髪を指で巻きながら言った。場に少し沈黙が流れ、その間もずっと髪を巻き巻きしていた。もうすぐで彼女から冷や汗が出そうと言った時、拓羅が口を開いた。

「そうだな。さっきの滑り方も凄かったしな」

「・・・・・・・・・・。スライディングと呼ばたまえ」

「ただ単に滑っただけだろ」

「うるさいっ!!・・・・・・・・・・ってふざけてる場合でもないねえ」

「あ?何言ってるん・・・」

「ちよつと黙れ」

楓は拓羅の口を押さえ、奥に詰めるよう指示した。拓羅は称狼を引きずりながら奥の暗い方へ行き、身を潜めた。ラングとファルがすぐ近くまで来ているようだ。

ワーウルフが居るとは言え、建物自体が大きいため、路地裏は奥行きがある。

特別大きな音を立てない限りは見つかる可能性は低い。

しかし本人達は心臓が張り裂けそうなくらいドキドキしている。

「ヤバいんじゃないの?これ・・・」

拓羅が小声で言うと、楓は珍しく引きつった笑顔を見せた。何かいい案を期待して言った拓羅だったが、ダメのようだ。

路地裏から表に繋がってる所もなさそうだ。壁も高い。

「くっそ。どーすんだよ・・・!」

頭を掻きながら言った。壁のどこを触っても外れそうなブロックは無い。

「・・・・イけるかもなあ・・・」

そんな中、楓がボソリと言った。

「あ？」

「ちよい退いて」

拓羅を退かせると、壁との睨めっこを始めた。時々相手の壁をコンコンと叩いていた。

「何してんだよ、お前？」

「・・・やるしかないよなあ・・・」

「ね、お前何言ってるの？」

「よし、やるかあ」

そして楓の中で計画が実行されそうになっていた。壁に背中を向け、称狼の前にしゃがむ。

「称狼」

「・・・はい？」

称狼は、今まで下を向いていた顔を上げた。

「ユキ呼べる？」

「あ、そつか。ユキが居たんだ」

後ろで拓羅が音も無く手を叩くと、楓が呆れた顔で振り向いた。

「なに、忘れてたの？」

「そりやもうスツカリ」

いつも通りの二人の間で、称狼はポケットから小さな何かを取り出した。

「呼べる事は呼べますけど・・・」

「んじゃヨロシク」

「称狼、それなんだ？」

「無線」

そうとだけ言うと、称狼はそれに向かって口を開いた。やり方は電話のようだった。ただ違うのは耳に当てないタイプの電話だと言う事だけだ。

称狼の使者となった者には、仲間内だけの無線を内蔵される。勿論親機は称狼が持ち、それを使って呼びたい時にはすぐに呼べるようになってるのだ。

「どこに呼びます？壁の向こう？」

「うん」

壁を見たまま言った。その隣には拓羅が居る。

「でもユキ呼んでどーすんだよ。見つかる確立が高くなるだけじゃねえ？」

「白くまの力で壁ブツ壊し大作戦」

壁を向いたままそう言うのと、拓羅は「・・・マジで・・・？」と言った。

しばらくして称狼はユキを呼び終え、あとは待つだけだった。

楓と拓羅は相変わらず壁を向いたままだ。

「白くまの力だけでブツ壊せんのかよ？」

「この壁めちやくちや厚いわけでもなさそうだし」

「もし成功しなかったら・・・？」

「・・・。。。。笑って許してちょ」

「・・・バカか！！笑えるわけねえだろ！！！！」

つい怒鳴ってしまった。すぐ近くに居るラングとファルがその声に反応しないわけがない。楓は額に手を置き、いつものようにため息をついた。その後には拓羅の頭を小突き、怒鳴った。

「成功うんぬん以前の問題じゃん！！このバカ拓羅ツ！！」

そう言っている間にも、ラングとファルはドンドン近づいてきた。とうとう追い詰められてしまった。

「やあ、見つけたぞ」

「・・・あら・・・あ・・・ぶ、プリンアラドーモ！」

「・・・。。。。アラモードだろバカアニキ！！」

称狼も拓羅の頭を小突いた。しかしそんな事やってられるのも今のうちだった。目の前に立ちただかるファルによって、三人全員連れていかれてしまった。

そしてユキが壁をぶち壊したのはそれから五分後の事だった。

「あれ？おらへんやん・・・。なんやったんやろ？」

呼んだ人物が居ないとなると捜すのが普通なのだろうが、ユキはなんの疑問も持たずに戻っていつてしまった。

一方、こちらは海だ。海と言っても砂浜ではなく、港だ。

「・・・あのさあ、これって・・・あの・・・あれ？後ろからドッカンと・・・」

「だろーな。この状況じゃそう考える他ないだろ」

楓と拓羅の二人は今両手足縛られたまま、その港に立たされている。下は海。かなり深く、しかも荒れている。

「だってコレ・・・死ぬべ？」

「当たり前だろ、殺す為にやるんだ」

海を覗いていた楓の後ろで声がした。ラングだ。

「殺すんなら一思いにやつちゃってよー。銃で頭ぶっ放すとかさあ」

「お前今何気にスゲー事言ってるぞ？」

「あ、じゃあ心臓一突き！」

「それもなんだかなあ・・・」

そんな事を言っていると、後ろで「ふざけるな」と怒鳴る声が聞こえた。

ラングは二人の服を引っ掴むと、顔をすぐそこまで近づけた。

「もつと恐怖を見せる」

「はあ？」

「つまらないんだよ、お前らの反応は」

「・・・」

ラングがそう言うと、二人は顔を見合って小声で話し始めた。それは明らかにラングをバカにした会話だった。

「セリフ、古いよな」

「古い古い。「恐怖見せる」とかいつの時代？」

「恐竜見せるならギャグで済ませれるけどな」

「そんならジュラシックパークでも連れてこっか」

「ふざけるなお前ら！！！！！」

話しているとラングがまた怒鳴った。さすがに痺れを切らし、二人を陸のギリギリまで追い遣った。

「いいか？今俺が手を放したらお前らはすぐに海に投げ捨てられるんだ」

「んなもん言われなくても分かってるっつーの」

拓羅がわざとiyaみったらしく言う、
「ラングは手の力を少し抜いた。」

「大層な口を聞くなあ。死んでもいいのか」

「あ、ちよつと待て。マジ放すのか？あの子、俺ら、ピッチピチなワケよ。まだ18なワケよ。輝かしい未来があるワケよ」

今頃焦り始めた拓羅の横で、楓もしきりに首を縦に振っている。ラングの顔が少し満足そうになった気がする。

「だからなんだ？」

「まだ死ねないな．．．な．．．」

「えへっ！」

笑顔を作る拓羅の隣で楓も笑顔を作った。しかし二人の笑顔もむなしく、ラングは「落ちろ」と言つて蹴り、突き落とした。

「ちよつと待て！！待……待つ！！！」

拓羅の声が静かな港に響いた。だがそれも大きな水しぶきの音にかき消された。

二人は冬の海に落とされてしまった。

落ちた事を確認するとラングは後ろを向き、称狼を見た。

「これで邪魔者は居なくなったな。・・・ファル、連れてこい」
「はい」

ファルは称狼を連れて、ラングの後に続いた。

第52話 『ユキ参上』

深く、荒れている海から最初に顔を上げたのは拓羅だ。その少し後に楓の顔も上がった。

「さつつつびー！ー！！！」

「服重おっ！」

よく生きていられたものだ。

楓は腕の縄を懸命に引いてちぎろうとしていた。しかし何十にも巻かれているため、なかなかちぎれない。

力を入れれば入れるほど自分の体は沈んでいく。

「・・・あ、でも二人同時に入れてくれたのは幸運だったね。はい、タク」

そう言つと、楓は後ろを向き、自分の腕を拓羅の前にやった。「食いちぎれ」と言う事だった。

「俺は犬かつ！」

ブツクサ言いながらも作業に入った。

ちぎる間も風は容赦なく吹いてきて、濡れた二人の体温を見る見る奪っていく。

数分後、やっと紐がちぎれた。楓も拓羅の紐をほどこ、最後に足の紐をほどいた。

しかし問題はここからだ。上れそうなものは何も無い。

「こつからどーしよーねえ・・・」

「とりあえず・・・」

壁に手を付く楓の隣で、拓羅はせつせとトレーナーを脱ぎ始めた。そして楓の方を見るなり、「ホラ、お前も」と言った。

「え・・・だって出た時寒くない？」

「お前風呂に入ってるババアか。今沈むのとどっちがいいんだよ。なるべく重い物を無くした方が・・・」

「あーもー！分かったよ！分かりましたっ！！！」

こうして、海には二人分のトレーナーが流れた。

「俺泳ぎって得意じゃないんだよなあ……」

コンクリートの壁を見上げる楓の隣で、拓羅が苦い顔で言った。

「安心しなさい。いざとなったら……」

「助けてくれんのか？」

「置いてくから」

満面の笑みでそう言った。そんな楓の顔に水を掛けると、「だろーな」と言って拓羅はスイスイ泳いでいった。

「泳げるんじゃない！」

頭だけ見える拓羅に向かって言い、楓も続いた。

そして泳ぎ続ける事数十分。二人はなんとか陸に上がった。そこはあの倉庫が近くにある砂浜だった。

全身が風に晒され、半端ない寒さが二人を襲った。

陸に上がったはいいが、称狼がどこに連れていかれたかなんて分からない。

「服ビツシヨビシヨじゃねーか………家に帰ってる暇も無いしなあ……」

楓の後ろでは拓羅がブツクサ言っている。そして結局最後には「どーする？」と聞いてきた。そのすぐ後、ため息が聞こえた事は言うまでもない。

そしてその頃、ユキは頭を押さえながら放浪していた。

「称狼様ヒドイやんかー。呼び出したくせにやらへんなんて……。しかも頭痛いし」

壁に頭突きした為、頭の中はまだクラクラしていた。やはり白くまの力を持つてしても壁を突き破るのは辛いようだ。

ノロノロと街を歩いていると、東から光が差してきた。

「……あ。朝日や」

光を浴びて、少し目を細めながらそう言った。白い毛が輝いて見えた。

「朝日……朝日新聞ってどんなやつたっけ……」

ブツブツ言いながら再度歩き出した。しばらく歩いたところで、耳がピクリと動き、「ん？」と言って横の建物を見つめた。

ゆっくりと白いドアを押してみた。白いドアに赤い血がべつとりと付いてるのを見て、ユキは固まってしまった。

（なんやこれ……！！！？）

中を見たユキは更に固まった。

（や、や、ヤバイ！！かえちゃん達どこ行ったんや！？）

キョロキョロするが、無論、近くに彼女達の姿は無い。

（こうなったら……しゃあないな……）

ユキは魔法の準備をした。口の中に冷気が溜まっていく。

準備万端で中に入った。

「何しとんのアンタ等！！」

そう叫ぶと中に居た者はユキを見た。暗闇で顔はよく見えないが、その人物の下に居る者は分かっていた。

（称狼様……！！！）

ユキは称狼に目をやる。傷口がパツクリと開き、意識が朦朧もろろとしているようだ。

「ユキか」

称狼の上に居る人物がそう言った。暗闇の中でも、笑っているのが分かる。スツと立ち上がると、ユキの方に向かった。

もう少しで顔が見える、と言うところで、ユキは口内に溜まっていた冷気を吐き出した。

（やったか？）

そつと近づいてみる。氷の中には何も居なかった。

（嘘やん！ちゃんと仕留めたハズ……）

「役立たずだな」

声は後ろから聞こえた。ユキは、驚いた表情で後ろを向くと同時

に腹を蹴られた。

「ファル。コイツの相手をしてやれ」

「了解」

（ファル・・・！？って事はコイツ、ラングや！）

「立て。オレの玩具になつてもらうからな」

そのまま無理矢理立たされると、殴り飛ばされた。壁に激突し、骨の折れる音が響いた。見ると右前足が変に曲がっていた。

「チ・・・」

折れた足を底いながら立ち上がり、氷を吐き出した。しかし悉くしつこく避けられる。まだ向こうには少しも攻撃が当たっていない。

（くそっ！　なんで当たらんのか！！）

何度も何度も氷を出すため、建物内の至る所に銀色に光る氷がへばり付いていた。

（ヤバイ。このままじゃあたしの方が先にくたばってまうやんか）
荒い息をしながら、チラリと横を見た。称狼とラングが居る。ラングはナイフを持った手を振りかざし、称狼に突き刺そうとしていた。

「・・・・・・・・！！！」

ユキは「称狼様っ」と叫ぶと、ラングのナイフの下に滑りこんだ。その拍子に右足を付き、倒れ込む。そのままナイフは下に振り下ろされた。

床に血が飛び散る。口からも出た。白い毛が、腹から出る血で赤く染まっていく。

ヒューヒューと息をしながら、自分の下に居る称狼を見た。目を見開いてユキを見ている。

「多分・・・・・・・・もうすぐたつくん達来るさかい・・・・・・・・それまでの辛抱や・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

喋る度に口から真つ赤な血が出る。それは称狼の服にもべつとりと付いた。

「称狼様は死んだらアカンで……」

「お前だって……!」

「なあ、茶番劇繰り広げてる暇があったら立て」

血の付いたナイフを持ちながら、ラングはつまらなさそうに言った。その言葉は、称狼の目を変えさせた。

ユキを自分の上から下ろし、ゆっくりと立ち上がる。そしてラングを睨みつけながら、口を開いた。

「コイツが死んだらどうしてくれるんだ」

「俺の知ったこっちゃないな。死ぬなら勝手に死ねばいい」

その時、ラングの頬に硬い物が当たった。一秒後、彼の体は横に吹っ飛んだ。称狼が傷だらけの拳で殴ったのだ。

ラングは壁にぶつかって下にずり落ちた。すると、立ち上がる暇も与えず称狼は腹を蹴った。もう一度蹴ろうとした時、後ろから首を掴まれた。

「ぐっ……!?!」

「ボスから離れる」

ファルだ。首を掴む手に力を入れてそう言った。懸命に手を引き剥がそうとするが、力の差があまりにも激しい。ビクともしなかった。

「アンタこそ称狼様の首放しいや……!」

ファルの横で声がした。同時に、ファルのもう片方の手が凍った。「! 貴様死んでなかったのか!?!」

「そう簡単に……死んでたまるかドアホ!」

しかし、そう言うユキの足はフラフラとしていた。息も荒いままだ。ユキの腹の部分には、氷が付いていた。自分で付けたのだろう。一応は止血出来ている。

「どないしたんや。アンタの相手はあたしやろ? 早よ称狼様放さんか……!」

もう一度氷を出した。ファルは反射的に称狼の首を放すと、横に避けた。放された称狼は、やっと立ち上がったラングをまた蹴った。

そして傍に有ったナイフを拾い上げる。

ラングに向かって勢いよく振り下ろした。ナイフは彼の足に突き刺された。うめき声をあげ、足を押さえる。押さえる手にもナイフを刺した。手の甲に菱形の傷が出来、ラングの声は更に大きくなった。

ラングが動けないことを確認すると、次はファルの方へ急いだ。ユキを止める事に夢中になっているファルのわき腹に蹴りを入れ、そのすぐ後に腹にナイフを刺した。倒れ込みそうになるファルの顎を殴り、後ろへ倒した。

そしてユキを抱き上げると、急いで外へ出た。

「称狼様！怪我………」

「いいから黙ってる！」

ユキにそう怒鳴り、称狼は上着を脱いだ。その上着で両方のドアのノブを縛り、開けられないようにした。縛り終え、後ろを振り返ってユキを見た。

「走れるか？」

「で、でもあんまり走ると氷外れて……」

「そうだよな……」

また抱き上げると、そのまま街へと走った。

（とにかくバレない所に……）

頭の中にはそれしか無かった。しかし夜のため、建物などは全て閉まっている。

「称狼様、どないすんの？」

「とりあえず……」

呟いて路地裏に入ると、ユキを下ろした。腹の氷は大分溶けてきている。称狼は自分の服を脱ぎ、ユキの腹に巻いた。シャツ姿の称狼を見て、ユキは「ありがとうございます……」とボソボソと言った。

「とにかく今はアニキ達にも知らせないといけないな」

ポケットから携帯電話を取り出す。ディスプレイに拓羅の携帯番

号を出して掛けた。

だが何度鳴っても、電話の向こうから拓羅の声がする事は無い。

「うーん。ぶつ壊れてんなあ……」

場所は、再度楓と拓羅の居る砂浜に戻る。バサバサになった髪を触りながら、拓羅は壊れた携帯電話を手に入っていた。

「そりゃそーでしょ。水浸しだし」

「だよなあ。……金もう無いのに」

「家の電話使つとけ」

「ああ。そうする」

彼が称狼からの電話に出ないのは当たり前前の事だった。

第53話 『夜逃げ隊』（前書き）

今回、「空」と犬の「空」が同じ字でややこしい為、今回から犬の「空」は「ソラ」に変えました。
急な変更ですみません。

第53話 『夜逃げ隊』

「チツ。調子に乗りやがって!」

建物内では、ファルがドアを開けようと体当たりしていた。外で縛つてある称狼の上着は、少しずつ破れてきている。

「まだかファル!早くしろ!」

奥で座っているラングが怒鳴った。

「すみません、今・・・」

ファルはまた体当たりをする。そしてとうとう、上着は破れ落ちた。同時にドアも勢いよく開く。

「よし・・・!ボス、開きました」

「俺は歩けん」

「あ、はい」

そう言つと、ファルは座つたままのラングの方に駆け寄り、しゃがんだ。そのしゃがんだファルの上にラングが乗っかり、背負う形になった。

「行け」

「はい!」

一人と一匹は、夜のまっ暗な道に出ていった。

その頃、楓と拓羅は各自着替えを済ませ、家から出てきたところだった。

「さてと。早く称狼を助けに行かないとな」

気合は十分なのだが、病みあがりな上に、夜の、しかも冬の海に入れられた拓羅は、熱が凄かった。足もフラついている。

「・・・あのねー、今アンタに来られると、ハッキリ言つて邪魔!」

「あ!?!・・・だつてさっき・・・海ん時は二人いっぺんに

落としてくれて良かったって……」

「さつきはさつき、今は今」

「なんだよそれ！そんな屁理屈だ！！！」

拓羅が怒鳴った時、マンシヨンの階段の下にソラが来た。

「楓ー！」

「お、来た。んじゃね」

そう言々と楓は階段を降りていった。

「おい！！……んじゃね、って……」

拓羅の声だけが、薄暗い廊下に響いた。

楓は階段を降り、ソラの近くに行く。

「行くか？」

「うん」

自分の前に伏せて、「乗れ」と言うソラの背中に飛び乗った。

「うつわ。久しぶりだなあ」

「オレもこの感覚は久しぶりだ！……で、どこに居るか分かってるのか？」

「何言ってるの？分かってないからソラ呼んだんじゃん！」

「自信満々に言うな、そーゆー事を……」

こちらも一人と一匹で、暗い空を飛んでいた。

マンシヨンでは諦め切れない男が一人居た。言うまでも無く拓羅だ。

（自分の弟がヤバイってのに……俺だけ休んでられっかよ！！）

齒軋りをして、外に出た。一応外灯の付いている道を走りながら探す。だが少し走っただけで体は限界を訴えていた。すぐに気持ちが悪くなる。その度に止まってしゃがみ込み、収まるのを待つ。そしてまた走る。その繰り返しだった。

（……ヤベエ……。マジ気持ち悪い……）

息を荒げ、腹をさすりながら歩いている。その時、フツと横を見ると、称狼とユキの姿があった。

「称狼！？ユキも・・・」

「・・・あつ！アニキ！！」

「あ、たつくんやんか」

拓羅も休みたい気持ちがあった為、とりあえず同じ路地裏に入つて座った。

「今楓とソラが捜しに行つちまったぞ、何してたんだよ」

「アニキ達こそ。俺何度も携帯に掛けたんだぞ！なのに全然出ねえから・・・」

「あー。そりゃ出ないハズだ。ぶっ壊れてんだよ、俺の携帯。楓のも」

それを聞き、二人が海に投げ入れられた事を知っている称狼は「あ、そつか」と言った。

「しつかし・・・楓とラングが鉢合わせしなきゃいいけどな」

「ゲツ。なんかスツゲエ嫌な予感・・・」

「え、マジで？」

そしてその予感は見事的中してしまった。

またも二人は海付近で遭ってしまったのだ。いつもより少し強く風が吹いている。波も堤防からはみ出そうなくらいだ。

楓はソラから飛び降りると、急にラングの胸元を掴んだ。しかしラングは顔色一つ変えずに楓を見た。

「おや？愛娘の楓ちゃんじゃあないか」

「足怪我してんだ。いい気味だね」

二人とも口は笑っているが、目は笑っていなかった。両者共絶對に目を逸らそうとしない。二匹の方はハラハラしながら二人を見ていた。

沈黙が流れる。

先に口を開いたのはラングだった。

「称狼はどこだ」

「知るわけないじゃん」

またも沈黙が流れ、今度は二人同時に口を開いた。

「この生意気小娘！」

「最低クソジジイ！」

「お前ら何気に息合ってたぞ」

背後でボソリと言ったソラは、一秒後には楓に首を締められていた。

「フン。生憎だがお前達の相手をしてる暇なんて無いんだよ。名残惜しいがサヨナラだ」

「うん、永遠にね」

楓は笑顔でそう言うと、ソラの横でラングを指差した。その瞬間、ソラは飛び出し、ラングの首に噛み付いた。

「……！！！」

「ソラ、食いちぎっちゃいな」

「おう」

ラングが悲鳴をあげる中、ファルがソラの頭を掴んだ。

「貴様ボスに何をする！！」

「見て分かんねえのか？ 相当な馬鹿だな」

ファルより遥かに大きなソラだったが、ファルの力によって空中に浮かせられた。ラングの首も解放される。頭を掴まれたまま逆立ちのような形になった。

「お前どんだけ力持ってた……」

そこまで言うと、ソラは地面に叩き付けられた。しかもファルがジャンプしながらだった為、相当な衝撃だ。

もう一度上に持ち上げようとした時、後ろから楓に木の棒で殴られた。その隙に、ソラはファルの腕に大きな歯形を残して脱出した。

「二対一なんて卑怯だぞ貴様等！！」

「そっちにだって一人居んじゃない」

楓がそう言った時、ファルの動きが一瞬止まった。不審に思ったその時、楓は後ろから羽交い絞めにされた。

「よくもやってくれたな……！！」

「やっぱセリフが古……」

ラングは更に力を入れた。

「憎まれ口叩けるのもそこまでだな、凋夔さんよお？」

すると楓は齒を食い縛り、ラングの腹に肘鉄を喰らわせた。

「……………ッ!？」

腕の力が緩み、楓は頭を引つ込めた。そのまま腕の外で足を踏ん張ると、前かがみになっているラングの頭を蹴った。

丁度その時、拓羅の声が聞こえてきた。

「楓ええー!!!」

「げ。あのバカ。やっぱ休んでないし」

じきに姿も見え、すぐそこまでやってきた。目の前に来るやいなや、急にかがんで肩で息をした。

「ちよつと……………大丈夫？」

「……………おう……………」

ラングとファルが倒れている間に、楓と拓羅はソラに乗って、なるべく低空飛行で一端退き返した。

「称狼、居た？」

「ああ。路地裏で休んでたぜ」

「んで？」

「マンションに帰れって言つといた」

楓は「ふーん」と言つて軽く頷くと、何かを思い悩むような表情になった。

「どうした？」

彼女の背後から拓羅が声を掛けた。ゆっくりと振り返る。

「他んトコ行った方がいいかもね」

「……………。追い詰められたら最後だもんな」

「うん」

「だけどファング達はどうする？今はヤベエんじゃねえか？」

「だからその為に……………」

楓はそう言い、自分の下に居るソラを指差した。ソラなら動物の数匹くらい軽く運べるだろう。

いざとなればジークも居る。

拓羅は「なるほど！」と言って手を叩いた。

二人と一匹がマンションに着いた頃、フアング達の具合も少しだが良くなっていた。

フアング達の傍に座っている称狼の目の前に行き、拓羅は顎でドアの外を差した。

「ホラ、称狼行くぞ」

「……あ？行くって？どこに？」

「へっへー！旅行だ！コイツ等運ぶの手伝え」

そう言つて拓羅はフアングを抱き上げた。称狼も一気に顔を輝かせ、運ぶのを手伝った。

全員外に出すと、ドンドンとソラの背中に乗せていく。動物達四匹を乗せても、人間達が乗るスペースは有り余っていた。

「ソラ……改めてスゲエな」

「へっへっへ……」

ソラは舌をペロリと出して自慢気に笑った。

ジークも空と同様、自分の大きさを調節出来るようだ。まだ子犬だからか、思った時に調節、とまでは行かないが、時間を与えればなんとか小さくはなれた。

中型犬ほどの大きさとなったジークもソラの上に乗せ、いよいよ出発だ。

空に舞い上がり、雲の間を抜けてもつと上を目指す。やっと雲の上に来た時、称狼が口を開いた。

「ささっ、凋樊さん、ドコ行くんですか？原宿？お台場？……あ、もしかして東京タワー??」

「なんでそう東京しか出ないのよ」

「だって旅行でしょ？」

称狼が顔を輝かせてそう言った時、楓の視線は拓羅へと移った。

「アンタ一体称狼になんつー説明したワケ？」

「称狼、旅行行くぞ！って」

(・・・コイツなんか勘違いしてるし・・・)

楓はため息をもらしながら心の中で呆れた。

「で？で？凋婪さん、ドコ行くんですか??」

「あのさ、そんなウキウキワクワクしたトコなんて行かないよ?」

称狼の額に青い筋が入ったのが分かる。ついでに「ガーン」と言う音も聞こえた。

「どうでもいいけど楓・・・早いところろしてくれと嬉しいんだけど・・・」

次は拓羅の震えた声が楓の耳に入った。一応楓なりに考慮したつもりだった。わざわざ雲の上に来たのは下の景色を見えなくするためだ。しかし、何をどうやっても拓羅と共に空の旅は難しいようだ。自分の考えを無にされて少し怒ったのか、楓は拓羅の頭をガツシリ掴むと「じゃあ落ちる?」と笑顔で言った。こうなってしまうと拓羅の言葉は決まっている。

「ぐごごごごめんさい」

「よし」

パツと手を放し、また前を向いた。

しばらく飛んでいると、拓羅が称狼にもたれ掛かってきた。

「・・・おいアニキ?」

風邪がぶり返したのか、顔色が良くない。

「凋婪さん」

「ソラ、今どの辺?」

「知らん!」

ソラのあまりに早い切り替えしに、楓は瞬きを繰り返した。

「・・・はい?」

「だから、知・ら・ん!」

「知らん!!?知ってて飛んでよ!!」

「バカ野郎、知らねえもんは知らねえんだ、仕方無いだろ。そもそもこの真っ白な雲の上から現在地を把握しろって方が無茶だろーが。」

お前は出来るのか？この一面真っ白な世界から今自分がどこに居るか分かるってのか？あーあーそりゃあ大した能力だなあ！？」

「……………じゃあ、さ……………方角も……………わかんなかったり……………」

「おう、分かん！」

この瞬間、楓の額にも青い線が三本程入った。

「じゃあ下りて」

「無理だ」

楓は「なんでじゃあ」と言っソラの毛を思い切り掴んだ。

そして次は後ろを向き、称狼に向かって手を出した。

「方位磁石ブリーズ！」

「持つてるわけじゃないじゃないですか」

称狼は困り果てた顔で楓を見た。

「……………だよねー……………」

「ったく。しょーがねえなあ。下りてやるよ」

「最初からそうしてよっ！！！」

楓が怒鳴り、ソラはしぶしぶ雲の下に下りた。上空から見る地上は、赤や白の光が綺麗だった。その光を見つめ、ソラは徐に口を開いた。

「今は京都に居るな」

「えっ東京！？」

再度称狼の顔が輝く。しかしソラに「きょ・う・と！」と言われ、
「またもブルーになった。」

「あ。あれでしょ？京都って。えーと……………ヤツハシー！」

「ああ、生チヨコとか中に入ってるんですね」

「いいよねー、食べたいよねー」

「うんうん！……………あ、そいえば郷土料理って京都に関係してるんですか？」

「……………さあ？ねえソラ、どっち？」

「知らねえよ」

ぶつきらばうに答えた。ソラ的にはまだあの忘れ去り事件の事を怒ってるようにしたようだが、楓は何も気付かないまま、また称狼と話し始めた。

「……………おい、拓羅いいのかよ？」

「あ、そうだタク！！ね、ソラ、下りて」

「地上に？」

「当たり前じゃん！」

楓が頷くと、ソラはニヤリと笑った。

「ちゃんとお願ひしてくれないとなあ……………。今までオレ、楓にちゃんとお願ひされた事無かったしい？」

ソラがイタズラでそう言つと、楓はムツとした表情になった。

背後からは称狼の「洵焚さあん」と言う声が聞こえてくる。

「お願ひしまあす」

「そーんな投げやりな言い方あ？しかも棒読みだし。そんなんじや下りる気にならねえなあ」

「……………おっ……………お願ひしますソラ様……………」

「よし。下りてやろう」

そして地上に下りた時、ソラの頭には大きなコブができた。

第54話 『ファングの過去』

ソラが下りたのは森の中で、ラング達に見つからないよう潜むには丁度いい場所だった。

称狼は自分の上着を草の上に敷き、その上に拓羅を寝かせた。まだ空の色は暗く、風が冷たい。楓も自分の上着を脱ぐと称狼に渡した。

「・・・・・・・・・・？」

「タクの上。・・・掛けてあげなよ」

「・・・あ、そっか。ありがとう」

称狼は笑顔で上着を受け取ると拓羅の上にそっと掛け、しばらくそのまま座って拓羅の顔を見ていた。そしてしばらくしてから立ち上がると、ソラにくっついて座っている楓の隣にあぐらを掻いた。

「暖かい・・・・・・・・・・」

「まあ獣だしね。足は寒いけど」

笑ってそう言う楓を見て、称狼もニツコリと笑った。

しかしすぐに真剣な顔になり、前を向きなおした。

「・・・・・・・・・・凋楚さん」

「ん？」

「ファングの過去・・・・・・・・・・知ってますか」

真剣な顔で言われ、楓は少し眉をしかめてから首を横に振って「知らない」と答えた。

「アイツ、一度人間達に殺されかけたんです」

「・・・・・・・・・・は？」

称狼の言葉に、楓も真剣な表情になった。

そんな楓を見て称狼は続ける。

「ケルベロス、ってのは勿論、人間の方では珍しいなんてもんじゃないでしょう？しかも犬とのMIXだって言うんだから学者達は学者魂を揺さぶられる訳ですよ」

「……………うん……………」

楓はぎこちなく首を横に傾げた。称狼はそれを見て少し考え込む様子を見せ、それからまた口を開いた。

「とにかく学者達の餌食にならざるを得ないって訳です。……………」

・意味分かりますよね？」

「分かる分かる。……………もしかしてアンタのアニキと同レベルって思ってる？」

「はい！」

張り切って言う称狼を見て、楓はため息を漏らし、「んで？」と聞いた。

「それで、まあ学者達は研究するだけのつもりでファングに近付いたんです。その頃まだ幼かったファングは案の定怖がって攻撃したんです。そうしたら馬鹿な学者達が凶暴な動物だ、って騒ぎ立ててアイツは炎の中に放り込まれた……………」

称狼が話す間、楓はずっと正面を向き、黙ったまま耳を傾けていた。

「鎖に繋がれたまま人間の見世物になって、それでもファングは人間に対する威嚇のやめなかった。そんなアイツを見て腹を立てた一人が火の勢いを強めて、ファングの体の中は煙で一杯になって……………多分そこで力が目覚めたんだと思います、炎魔法の……………元々ケルベロスは炎魔法を使えるハズなんです、子供の頃からだけど普通の犬の血も混ざってるアイツは発動が遅かったんでしょうね。意識がぶっ飛ぶ寸前で炎を噴き出して人間全員殺したんです」

称狼が一息つくと、楓はソラの腹の上に頭を乗せた。ソラは驚いたのか、一瞬ビクンと動いたが、楓だと分かるとまた前足に顎を乗せて目を瞑った。

「俺と最初会った時には人間への警戒が強すぎて俺も殺されかけました。けどしばらく一緒に居るうちに心開いてくれるようになった……………それからです。「称狼様」って呼ぶようになったのは……………」

「・・・そっか」

楓は上を見てそう言う。横では称狼が頷きながら、「後から聞いた話だから事実かどうか分かりませんが」と言った。

楓も頷いたところで、称狼は立ち上がった。軽く伸びをしてから楓を見下ろす。

「じゃ、アニキのトコ行ってます」

称狼が一步踏み出した時楓も起き上がる。地面に座ったまま少し前に居る称狼を見た。そして徐に口を開く。

「なんで・・・あたしにその話をした？」

睨むわけでも無いが優しい眼差しでもない、そんな楓の目を見て称狼はフツと笑う。

「単に俺が話したかっただけ、つてのもあります。凋夔さんなら黙って聞いてくれると思っただし・・・俺の考えは当たってましたね」
そう言われ、楓は一度地面に目を向けた。そして称狼が「それ」と言うとき、また彼を見た。

「貴女なら・・・分かるんじゃないかと思って」

楓はため息混じりに笑うと、口角を上げたまま称狼を少し睨んだ。

「何それ。分かるわけ無いよ」

「そうでしょうか？」

軽く眉を上げて言う称狼に対し、口角を下げ、更に睨む。

「からかってんの？」

「いやぁ滅相も無い」

ニツコリと笑う称狼を見て、楓もニカツと笑って立ち上がる。二人の間ではさっきの会話は冗談でしか無い。

「・・・明るくなってきましたね」

楓が称狼の横まで行った時、称狼が遠くを見てボソリと言った。
木々の間から光が差し込んできていた。

しかし明け方と言ってもやはり寒い。

楓も称狼も、トレーナーのポケットに手をつっ込んでいた。

二人分の白い息が空気に触れている。光に当たって息の白さが更

によく分かった。

「へへっ。こうしてると俺ら恋人同士みたいですな！」

「・・・タクの弟だねえ、紛れもなく」

「え、嫌だなあ」

「しょーが無いでしょ、弟は弟だ」

微妙に笑いながら楓が言うと、称狼も「ははっ」と笑った。

「あーあ。あたしも兄弟欲しいなあー・・・」

白い息を吐きながら言う楓を見て、称狼は一步下がると、雪が降った日のように後ろから抱きついた。

「ちよっ・・・・・・重・・・」

「凋婁さんはもう俺のアネキだろ」

笑いながらそう言うと、楓は嬉しいような照れくさいような、そんな笑顔を見せた。

「・・・・・・。なんか・・・逃げてる、って感じしないね」

「いつその事もう空の旅で一生を終えちゃいましょうか」

「いいけどさ、タクが泣くよ」

「ああ・・・確かに」

称狼が笑いながらボソリと言い、楓も笑った。

しばらくして称狼は手を放し、服のポケットに手をつ込んだ。

「それじゃ。今度こそアニキのトコ行ってますね」

「称狼も少しは寝なよ？」

「分かってます」

笑顔で手を軽く振ると、寝ている拓羅のところへと向かった。相変わらず上着を被って寝ている。少し顔が赤くなっていた。

「・・・熱が上がっちゃったのかな・・・・・・?」

掛けた時とズレている上着を掛けなおし、横に座る。じっと見ていると、ノロノロと目を開けた。

「・・・・・・おう・・・・・・」

今にも死にそうな声だ。かすれている。称狼は、拓羅の額をペチンと軽く叩いた。

「おう、じゃねえよ。．．．大丈夫か？」

「頭痛えけど．．．．．なんとか．．．。楓は？」

体を起こそうとする拓羅の背中を支えながら、称狼は呆れた顔をした。

「向こうに居る。っつーか自分の心配しろよな」

「別に．．．心配じゃないけどさ．．．．．怒ってなかったか．．．？」

咳込みながら頭を掻く。そんな拓羅の隣で、称狼は「いや」と言っ
て首を横に振った。

「そか。ならいいや．．．．．」

「ってかアニキのセリフ矛盾してるかな」

「．．．．．そうか．．．？」

「頭更に悪くなったな、アニキ。「怒ってなかったか？」って結局
は自分の心配じゃねえか」

「．．．．．そうか．．．」

フツと笑うと、拓羅はまた寝転んだ。

上着を被って丸まり、そのまま、また眠りに入った。影から見て
いる者が居ると言う事を知る由も無く、称狼は拓羅を見て優しく微
笑んだ。

第55話 『白雪姫?』

「あんな奴等がオレに勝てるハズが無いだろ……………ボスも冗談が過ぎるぜ……………」

森の中の、太い木の影に隠れて笑っているのはファルだ。

楓と拓羅がソラに乗って退きかえした後、ファルはラングを建物内に置いて密かに後をつけて来ていたのだ。

建物の壁に寄りかかるラングの口から出たのは、「強いぞ。油断するな」と言う言葉だった。今、その言葉を思い出して、ファルは笑っていたのだ。

（オレの事にすら気付かないマヌケ共め……………）

ファルは怪しくと笑うと、「冥土の土産にでもするか」と言った。そして次の瞬間には、もうその場にファルの姿は無かった。

もう大分太陽が昇ってきている。楓がソラの傍で丸まって寝ている横に、称狼も丸まっていた。太陽の光が顔に当たり、眩しそうな目をゆっくりと開けるのは称狼だった。

「ん……………あれ?今何時だ……………?」

目をゴシゴシとこすると、楓の肩に手に乗せようとした。

肩を少し揺ると同時に楓は急に目を開け、称狼にアツパーを喰らわせた。

「んのヤ、口……………ウ……………??あ、れ?称狼。おはよ」

「……………おはよ、じゃねえよ……………いつてえ……………!」

顎を押さえながら目に涙を溜めている。どうやら敵と間違えたようだ。楓がへこへこ謝っている。

「凋婪さん、今何時ですか」

頭を下げたままの楓にそう言うと、彼女は「は？」と言って顔を上げた。

「太陽がスッゴイ昇っちゃってますよ。もうそろそろ出発しないと……」

称狼がそこまで言うと、二人同時に森の奥を見た。

「なんか……嫌な予感がしません……？」

「する……けど……マズイよ、今来られても」

「だけど大体そう言う時を狙って来ますよね」

「……よし、逃げよう！即逃げよう！ソラ、起きろ」

楓はソラの頭を軽く叩いた。称狼は、まだ眠そうな目をゆっくりと開けるソラに一度視線を向け、また楓に戻す。

「逃げるんですか!？」

「はいはい、驚いてる暇があったらアイツ等運びんしゃい」

彼女は目を見開いている称狼に向かってそう言い、拓羅達の方を指差した。称狼も仕方なく頷き、拓羅達の方へ走った。

「なんだよ楓。どうした？」

ソラが伸びをしながら聞く。

「いいからとにかく飛ぶ準備しといて」

楓はソラの頭を軽く撫でると、早口で言った。

「……いいから、って……まあいつか……」

状況がイマイチ把握出来ないまま、ソラはウォーミングアップを始めた。

と言ってもひたすら伸びをするだけだ。

——数分後、全員ソラの上に乗し、ソラの足は地上から離れた。飛び立った後、ファルが森から出てきた。空を見上げ、最初は悔しそうな顔をしていたが、次にはニヤリと笑っていた。

「さあて……どこまで逃げられるか……」

そしてまた上空のソラを追って地上を走った。

「凋婪さん、アニキの熱下がってかないですよ……」

雲の上を飛んでいるソラの上で、称狼が弱々しい声を出した。

「……………」

「凋婪さ……」

「ただの風邪でしょ。放つときゃ治る」

楓の意外な言葉に、称狼は目を丸くした。

「なん……なんだよそれ！？アニキの事なんてどうでもいいんですか……！？」

「男のくせにメソメソすんなつつてんの。自分の手が冷たいから熱く感じるだけなんじゃないの？その男は簡単にはくたばらないつつの……」

その時、称狼が急に楓の頭を叩いた。

「いつ……ちよつと何すん……」

「ふざっけんなよ！！最低だな凋婪さん！見損なつたよ！」

「……あのさあ、アンタ今自分の命狙われてるって分かってんの？人の事より自分の事心配してなさいよ」

「分かってるよ！だからなんだよ！！」

睨みながら叫ぶ称狼を見て、楓はため息を漏らした。

そしてしばらくしてから、「ゴメン！」と言うと、称狼の頭を殴った。

ゴン、と言う鈍い音がして、称狼の怒りは最高潮となった。

「なっ……………何すんだこの野郎！！！」

「だからゴメンつつつたじゃん」

至って平然と返す楓の胸元を掴むと、称狼は更に睨んだ。

「アニキが死んだっていいのか？どうでもいいのかよっ！？」

「……誰がいつそんな事言つた？」

自分の服を掴む称狼の腕を、今度は楓が掴んだ。

彼女の顔にも怒りの色が見え始めていた。

「……放つとくんだろ。放つといてどうにかなったら……」

「じゃあどうしろって？……今この状況で、あたしに何しろって言いたいのか？」

低い声でそう怒鳴ると、称狼はしばらく目を泳がせ、掴んでいた服を放した。楓も称狼の腕を放す。そして伸びをしながら前を向いた。

しばらくそのまま沈黙が流れたが、楓は自分の肩越しに称狼を見ると口を開いた。

「すぐ元気になるよ」

優しい声でそう言った。称狼がパツと顔を上げ、楓の目を見る。それと同時に彼女は慌てて前を向いた。

「……ソラ、今どこ？」

「だーから、お前学習能力ねえなあ。この雲の上からじゃ分かんねえつつってんだろ」

「でも方角分かってて飛んだんじゃないの？いくらソラでも考え無しに飛ぶほど馬鹿じゃないよねえ？」

「……………言っじゃねえかテメエ……………今この場で落としたっていいんだぞ……………」

「あははー！意地でも落ちてやんねー」

楓が舌を出すと、ソラはムツとした表情の後、後ろ足で体をガリガリと掻いた。しかも丁度楓の居る所を狙ってだった。

「ちょおっと！あつ……………危ないなあー！何すんのっ！ー」

「おー、悪いな。体が痒くなっちゃってよ。あつはっはー！」
今度は空が舌を出す番だった。

その瞬間、楓のこめかみに「ムカツキマーク」が出そうになった。だが段々と自分のしてる事がバカらしく思えてきたのか、挨拶しようとした「ムカツキマーク」は敢え無くサヨナラする事となった。

「潤婪さん」

後ろから称狼が楓を呼んだ。どうやら拓羅が呼び出しをしているようだ。

「何？」

ノソノソと拓羅の方に行き、横から声を掛けた。

「楓……俺はもう死にそうだあ……………」

「……………だから？」

「相変わらず冷てえなあ……………愛しのダーリンが寝込んでるってのに……………」

「バイバイ」

そう言つと、楓はまたソラの頭の方へ行こうとした。だが拓羅が焦って呼び止めたため、うざったい物を見る目をして仕方なく振り向いた。

「お前知ってるか？王子様はお姫様のキスで目え覚ますんだぜ？」

「逆でしょ」

「……………い、いいんだよ！！細かい事気にしてんじゃねえよ！！」

拓羅が叫んだ。急に叫んだ為、ゴホゴホとしばらく咳込んだ。

そんな拓羅を見て、楓はいつものように呆れ顔のため息をつく。

「なあ、ここまで言えば何すりゃいいか分かんのだろ…………？」

「……………あ……………うん！分かった！！」

ついさっきまでの呆れ顔が嘘のように、楓は目をキラキラ輝かせて嬉しそうに言った。

拓羅は、ニツコリと笑つとそのまま目を瞑った。今か今かと待っている。

しばらくしてから、拓羅の唇に何かが当たった。

ゆつくりと目を開けてみる……………。

だが開けた途端、トロンとしていた拓羅は、一気にギョツとした顔になった。

目の前に居たのは紛れもなくユキだった。

「……………なななんで……………」

「だって白雪姫でしょ？めちゃうちゃ丁度いいじゃん！タクってば風邪の時でもギャグ考えてんだねえ？」

冗談では無いらしい。真顔でそう言っていた。

拓羅は「違えー！」と怒鳴ろうとしたが、乾いた空気が喉に入ってきた為、咳でその言葉はかき消された。

「なんやたつくん、あたしとキスしたかったんかあ？そんならいつでもしたるさかい、どんな時でも呼び出してくれて構わへんよあ」

「い、いや……………遠慮しとく……………」

慌てて両手を顔の前で振る。ユキは「つまらへんなあ」と言つてドシドシと戻っていった。

楓と拓羅の横では、称狼が笑いを堪えるのに一生懸命になっていた。腹を押さえて肩が大きく震えている。拓羅はそんな称狼を睨み、楓はキョトンとした顔で見ていた。

「洵婪さんマジで言ってますか？」

目に溜まった涙をヒィヒィ言いながら拭き、楓の肩を叩きながら言った。

「称狼……………お前もうあっち行け……………」

二人の隣で、拓羅は上着を顔まで被った。

「まあ頑張れよ、アニキ。手強いと思うけど」

そんな拓羅をからかうような目をして称狼は言った。

「うるせえ！お前に言われなくても分かってんだよ！！」

「何？何が？何言ってるの？」

称狼は再度笑い出し、またも楓の肩を叩くと、ソラの顔の方に向かった。称狼がソラの首辺りに来た時、急に降下した。

「うおおおっ！？」

この降り方は拓羅にとっては地獄以外の何物でもない。反射的に上半身を起こした。

雲の下に行くやいなや、ソラが声を張り上げた。

「おい！！なんか追ってきてんぞ！？」

その声に、楓は目の前にある拓羅の顔を「邪魔！」と言ってまたソラの体にくっ付けた。そのまま拓羅を放って尻尾の方まで駆ける。もうすでに森は抜けたらしく、下にはビルなどが並んで見える。都会だ。どうやら大阪の方まで来たらしい。

「おかしいぞ、ここ……」

いつの間にか、楓の隣には拓羅が居た。称狼と楓の上着を重ねて着ている。

「何が？」

「人が少なすぎる」

確かに、都会の昼間にしては人があまりにも少ない。

その静かな街の中で、何かが動いた。物体を目で捉えるのだけで精一杯と言っくらしいの速い動きだ。

「楓、なんだよあれ？」

「知ってたら苦労しないっつーの」

「確かめてきますか？」

寝そべっている二人の隣に、称狼が来た。しかし楓は一度頭を抱え、称狼の目の前に顔をやった。

「だから！アンタは今命を狙われてるんだっての！！そーゆー軽率な行動が命取りになるんだこのボケッ！！」

「凋婪さん凄い顔になってますよ？」

「……………なんでアンタはそお……………」

「誰も俺が行くとは言っていないじゃないですか」

称狼は笑顔でそう言った。今ココに、健全な体なのは称狼、楓、ユキ、ソラだけだ。だがソラは病人らを乗せていないといけない為、カウント外。

そうなると残ったのは称狼、楓、ユキだけとなる。そしてその中で称狼が行かないと言うことは、楓とユキと言う事になる。

「でもユキは大切な跡継ぎなので行かせられませんからね」

「……………て事は……………」

「凋婪さん、トボケこっちは無しですよ」

目の前で目をパチクリさせる楓に向かい、称狼はまた微笑む。楓の顔が一気に青ざめても尚、微笑むままだった。

するとそこに拓羅が入ってきた。二人の間に入り、楓を守るようにして両手を広げると首をブンブン横に振った。

「ちよつと待てよ称狼！楓だけで行かせるなんて俺が許さねえぞ！」

「おー！タクもつと言つてやれ！」

拓羅の後ろで楓が応援している。そして調子に乗った拓羅は、称狼の服を掴んだ。

しかし称狼の余裕に満ちた目に少し怯む。

「じゃあ何？アニキが行く？別にそれでもいいよ」

「よし楓！行つてこい！！」

パツと服を放し、楓の方を向く。瞬間、楓のゲンコツが頭に落ちてきた。

「いつてえなテメエ！何すんだ！」

「うるさい！お前なんか一生グースカ寝てろっ！」

「な……なんだと！？コラア！！この高慢チキチキ女っ！」

「おーうやるつてのか、こんの腰抜けメソメソ男っ！！」

二人が取っ組み合いを始めようとした時、とうとうソラが痺れを切らしたようだ。

牙を剥き出しにして、「早くしろよお前らッ！！」と怒鳴ってきた。

その瞬間、称狼と拓羅の二人は一気に楓を押し始めた。下はビルや何やらの大都会。勿論、コンクリートだ。ここから落ちたら怪我だけでは済まないだろう。

「ちよつ……な、何すん……ホントに落ち……」

「いい！落ちろ！落ちてアイツを捕まえて来い！！」

「そうだよ凋夔さん！俺達の為と思って……」

「何が悲しくて自分を落とそうとした奴等の為に動かないといけな
いんだよっ……」

次は楓が怒鳴る番だ。二人の腕を捕まえて逆に落とそうとした。

顔をそらす事が出来ない中で、一気に拓羅の声が変わり、本当に死に物狂いで叫んだ。

「ちよちよちよちよっ！！焦るな！楓！！やめろ！！シャレにならんぞ！！」

「るっさいわ！！高所恐怖症の拓羅さんやい、どうですかこの景色は！！」

ギャーギャーと騒いでいると、突然、横を何かが通り過ぎた。三人共キョトンとした顔で見えていたが、すぐに「ソレ」がなんだったのか分かった。

「……………ファング……………！？」

灰色のコンクリートに向かって落ちていくファングの体が辛うじて見えた。着地に成功したのか失敗したのか、ドサツと言う音が微かに聞こえてきた。

第56話 『ファンゲvsファル』

コンクリートの上に着地したファンゲはヨロヨロと立ち上がる。
一応着地出来たものの、やはりコンクリートは硬く、左前足を痛めていた。

（くそッ……）

少し足をずりながら移動した。

「やっぱ高えなあ……」

上空に止まっているソラを見上げた。普通だったら間違いないで死んでいる高さだ。改めて辺りを見回した。本当にどこへ消えたのか、人間は一人も居ない。

ビルや家の中も見てみたが、誰も居なかった。

ファンゲの風邪はまだ治っていないらしく、時々止まってはクシヤミをした。

「……うー。ヤベエな……」

体をブルブルと振る。その度に左足に響いた。折れているかもしれない。ファンゲは気休め程度に足を舐めた。

地面に横になり自分の足音さえも聞こえなくなると改めてこの街の静かさが分かる。

しかし、その静かな街の地面に足音が響いた。

「……………！」

ファンゲは素早く起き上がり、その足音の方を向いた。暗く影になっっているところで、その足音は止んだ。

「……やっぱデメエか」

静かに口を開き、ゆつくりとその影に向かって歩き出した。

「よおファンゲ。……お前だけか？」

顔を出したのはファルだ。ファンゲは足を踏ん張り、攻撃態勢を取りながら笑った。

「丁度いいじゃねえか。一対一だ」

「いや、悪いがお前に用は無い。シヨウロウ、つてのはどこだ？」

「易々と教えつかよバーカ！！」

そう叫び、ファングは炎を噴き出した。だがもうそこにはファルの姿は無く、黒い焦げ目が付いているだけだった。

「どこ行きやがった……！？」

「お前鈍くなつたんじゃない？」

声はファングの後ろから聞こえてきた。慌てて後ろを向くが、もう遅く、ファングは殴り飛ばされた。一度宙に浮いた体は、大きな音を立てて地面に落ちた。

ファルは走ってファングに近づくと、頭目掛けて拳を振り下ろした。

寸前で飛び起き、ファングはジャンプ混じりにそれを避けた。硬い灰色のコンクリートに、丁度ファルの拳の大きさの穴が開いた。

高く飛びあがってファルの上を行き、今度はファングが背後を取った。炎の塊を吐き出す。だが動きの速いファルはなかなか仕留められない。

辺りには煙が充満していて、相手の姿は愚か、どこに居るかさえも把握出来ない状態だ。

（チクシヨウ……これが身から出た煙ってヤツか……！？）

間違ったことわざに対して齒軋りしながら、ファングは足を踏ん張った。姿が見えないため先制攻撃は逆に危険だ。

ファングが神経を張り巡らせる中、ファルはニヤリと笑った。ファルにはちゃんとファングの影が見えていた。

そうなるとやはりファルの方が勝っているようだ。しかし攻撃をしようとしなない。攻撃の代わりに、微かに音を立てた。

案の定ファングの影はその音と同時にビクンと動く。それを見て、ファルはまた静かに笑った。

しばらくの間そうやってファングをからかい、遊んでいた。

そしてそろそろ煙が晴れると言う頃、やっとファルが動いた。足音一つ立てずに背後に回り、ファングの頭をガツシリと捕まえた。

「……………!!!」

今になって後ろを向こうとするファングを嘲笑うと、頭を持ったまま体を地面に何度も叩き付けた。五回ほどやった後、ファルはジャンプした。

そしてそのまま腕を振り下ろす。ファルの体と共に、ファングも落とされた。コンクリートの地面が豪快に割れ、周りに破片が飛び散った。

その開いた穴と煙の量が衝撃を物語っている。

風によって煙が晴れ、ファルの姿が見える。今も尚ファングの頭は、大きなファルの手に押さえつけられたままだった。

ファングのうめき声は、次第にうなり声へと変わっていった。地面とファルの手の間に挟まれた、開く事が制限されている口から低いうなり声が聞こえてくる。

「なんだ？ ショックのあまり言葉を失ったか？」

「……………放せ……………」

「ショウロウはどこに居る？ 言ったら放してやる」

「……………ふ、ざけんな……………！」

ファルはニヤリと笑うと、ファングの頭を放し、今度は後ろ足を掴んだ。そのまま腕を上げてグルグルと回し、正面に飛ばした。

スピードを出して飛ぶファングの体は、ビルの壁に当たってやっとな止まった。ビルの一階と二階の窓は全て割れ、壁にもファングの体の三倍ほどの穴が開いてしまった。

壁のガレキと一緒にファングも下にずり落ちる。懸命に立とうとするが、足が震えて力が入らない。

そんなファングの正面にファルが立った。

「答える。ショウロウはどこだ」

「……………死んでも……………教えねえよ……………！」

言葉を発する度に口から血が出る。白い歯は既に赤く染まり、灰

色のファンクの体にもその赤はこびり付いていた。

「頑固者だな。だが居場所を教えん奴に用は無いんだ。今すぐ死ね」
そう言つと、ファルは白い毛むくじゃらの手から黒い爪を出した。
鋭く尖つた先は怪しく光っている。

「オレを殺したつて……………何のメリットも無いぜ…………？」

「邪魔者が一匹消える。立派なメリットだ」

ファルは肩を軽く上げて笑つた。だがいくら笑つていても、攻撃的な目が優しくなる事は無かつた。笑いながら腕を後ろに引き、爪は真つ直ぐにファンクを向いた。

黒い爪の先とファルの目が同時に光り、振り下ろされた――。

「楓えええ！！いい加減放せよお前ッ！！」

一方、こちらはソラの上に居る平和な三人だ。

「そうだよ凋婪さん！俺等が死んだらどーすんだよ！」

「称狼はともかくこの男が簡単に死ぬはずないね」

楓はそう言いながら拓羅を目で差した。見られた拓羅は、舌を出して「お前もだろ」と厭味つたらしく言つた。

その瞬間、楓の手の力が緩む。強気だつた拓羅は急に弱腰になり、叫びながら謝罪の言葉を連呼した。

「さてと、こんな事してる場合じゃなかった」

やっと拓羅と称狼を上に取り上げ、今度は楓が下を見た。後ろで二人がニヤリと笑つた事にも気付かず、ファンクを探している。

「かーえーでっ」

「凋婪さんっ」

二人で同時に呼ぶ。

そして振り向いた彼女の額を人差し指で軽く突くと、いとも簡単にバランスを崩した。ギリギリの所でソラの毛を掴み、なんとか持

たせた。

「ひっ……ヒキヨーだ二人してっ!!」

「ホレホレ、落ちるぞ?」

「なーに、単なる仕返しですよ、凋夔さん」

称狼はわざと楓の目の前にしゃがみ込み、笑いながら言った。

「いやでも仕返しどころじゃ済まないし。………っつーかもう落ちそうだしっ!!!」

「大丈夫だ楓!死ぬときゃ一緒さ!」

「そりや助かった」

今度は楓が笑い、自分から手を放すと同時に二人の足を掴んだ。案の定二人は引きずられる。そしてとうとう三人で落ちていった。マヌケな三人組を見て、ソラは笑いながらため息をついた。

「うおおおおおおおおおっ!!?」

「有りがちな叫び声はうるさいよ、タク」

「テメエが言うな!!元凶はお前だろ!!」

「まあまあアニキ、そう怒鳴るなって。ホラ、もうすぐ地面だし」

「……え?」

楓と拓羅は同時に下を見た。すぐそこに灰色の地面が迫ってきている。

「だっ……大丈夫だ!きつとフアングも大丈夫だったんだから俺等だっ……」

拓羅が自己暗示を掛けている間に、三人はコンクリートにぶつかった。三人分の衝撃音が響き渡り、しばらくは地面が揺れている感覚にまで襲われた。

「………いいたあー………全然大丈夫じゃないじゃん!」

「まああの高さだし………っつかさ、改めて俺等スゲーな!すんげえタフじゃねえ?」

変なところで興奮する拓羅に、楓と称狼は二人して冷めた視線を送った。

「しつかし凄いとこから落ちましたね、俺等」

三人共命の保障が無いバンジージャンプを味わえたことだろう。
ゆっくりと起き上がる。

動くと更に体の節々が痛んだ。

ぎこちなく動く腰を押さえ、拓羅が口を開く。

「腰痛え……」

「ジジくさッ！」

「うるっせえな！！痛えもんは痛えんだから仕方ねえだろーがっ！
！」

激しく動き、拓羅は「しまった！」と言う顔をした後でまた上半
身を前にかがめた。

「はいはい。腰痛じーさんは安静にね」

わざと厭味ったらしく言う楓を、拓羅が睨んだ。

二人の隣では称狼が辺りを見回している。

「さて、行きましょうか」

スツと立ち上がり、一步踏み出した。その瞬間、爆発音のような
音が三人の耳に入ってきた。耳を劈くような音と、地響きもおまけ
に付いてきた。

「うわっ……！？」

立っていた称狼の体は地面の揺れに耐え切れず、その場に倒れ込
んだ。

元々古かったのか、地響きが凄すぎたのか、ビルはどんどん崩れ
ていく。

だが、ビルの崩壊の原因は前者でも後者でもなかった。人間が来
た、と言う事を感じし、ファルがビルを押し倒していたのだ。

「くっそ！どうなってんだ！いくらなんでもおかしいだろ！」

三人はビルの下敷きにならないように全速力で走っている。称狼
の隣で、拓羅が息を切らしながら叫んだ。

「叫ぶなアニキ。体力の無駄だぞ？」

「つつーかどこまで走りゃいいんだよ！？」

称狼に言われても、拓羅はまだ叫ぶ。「どこまで」と言われても、楓も称狼もそんな事考えていなかった。

避難するのに適当な場所も見当たらない。楓と称狼は、まだ叫んでいる拓羅の横で顔を見合わせた。そしてほぼ同時に、拓羅に向かって「黙れ！」と怒鳴る。

しかし一向に拓羅が黙る気配は無い。

「どうしますか凋婁さん」

「もうあんなヤツ無視」

「だけどうるさくて隠れる場所探すのに集中出来ません」

楓は一度冷めた目で拓羅を見ると、称狼に視線を向け、口を開いた。

「……殴れ」

「ラジャ！」

称狼が声をあげ、そのすぐ後にゴン、と言う音がした。

第57話 『バカ二人』

街中にあるビルを全て壊し、少しだけ息を切らしてファルが戻ってきた。足元にはファングが横たわっている。

「おい、人間が来てたぞテメエのお仲間さんか」

ファルが低い声でそう言うと、ファングの体がピクリと動いた。

「当たり前か……。まあ今はビルの下敷きになってるか死に物狂いで逃げてるか、だけだな！」

白く光る牙を剥きだしにして不気味に笑う。やっとファングの顔が上がった。

額から垂れる血のせいで片目は瞑っているものの、その目の迫力にはさすがのファルも怯んだ。

「……なんだよその目は。またボコボコにされてえか!？」

叫び、ファングを壁に押し付けた。ファングの首を持つ手に力を入れると咳き込む。乾いた空気と一緒に赤い血も出てきた。

額から流れ出る血はファルの手にまで垂れてきた。生暖かい液体が手の甲をゆっくりと伝う。

「……………放せ……………」

ファングがかすれた声を出した。首にはファルの爪が少し食い込み、少量だが血が流れてきている。

「シヨウロウの居場所を言え……………!」

「死んでも……………言わねえつつってんだろ……………」

「お仲間さん」の中に入っている事に気付いておらず、ファルは尚もファングを問いただした。

「言わねえとテメエの仲間共ぶつ殺すぞ!!!」

「んな事してみる。オレが……」

そこまで言うと、ファルの手に更に力が入った。最後の方は声にならず、かすれた息が出るだけだった。

「ああ? 「オレが」なんだ? 言ってみるよ」

「……………」

「この愚図野郎が！ここでくたばってる！！」

ようやく壁からファングの体を離れた。そして首を持ったまま腕を上には振り上げ、地面に激突させた。やはりそこには大きな穴が開く。

一ミリも動かなくなったファングを確認すると、ファルは四つん這いになって走り出した。

三人は今、無事な建物が立ち並んでいるビルの一角に潜んでいた。頭にゲンコツを作ったままの拓羅は未だ目を覚まさない。

「……強くやりすぎたかな……一応病人だし」

「でもギヤーギヤー騒がれるよりマシでしょ」

「まあ……確かに」

称狼は意外にもすんなりと納得してしまった。

しばらくして、今になってやっと疑問が湧いてきた。

「なんでココ、人が誰も居ないんでしょうね？」

「こんなに建物沢山あんのにな」

後ろにある窓から少しだけ顔を覗かせ、楓が言った。その隣に称狼も顔を覗かせる。

「不自然過ぎですよ、この街。……もしかしてボスの……ラングの仕業だったり……」

「あたしらが逃げるって予想してたってワケ？」

座りなおしながら言う楓を見て、称狼は頷く。

「あの人なら……」

称狼がそこまで言うのと、楓はピクリと動いて微かに光が入り込んでくる入口を見つめた。

暗い建物の中、入口の形をした光が異様に眩しく見える。

そんな光の形が、突如崩れた。何かの影が形の端を陣取ってしまった。

「……なんですか、あれ……？」

静止している楓の隣で称狼が極力小声で尋ねる。辺りには緊張感が漂っている。

その緊張感の中で、不運にも拓羅が目を覚ましてしまった。勢いよく上半身を起こす。そして同時に口も大きく開いた。

「どこ……モゴッ……」

その大きく開いた口を楓が手で押さえた。

「今度はあたしがぶん殴ってやろうかこのクソ男ッ」

拓羅の胸元を掴み、歯を食い縛りながら小声で言った。二人を見て、称狼は小さくため息をつく。しかし拓羅はイマイチ状況を把握出来ていないようだ。

称狼から経緯を聞き、またも大声をあげそうになる。その度に後ろに居た楓が彼の口を押さえ、頭にチョップを喰らわせた。

やっと全てを話し終え、改めて入口の方を見た。だがそこにはもう影は無くなっていた。

「……あれ？」

三人は入口を見てボーゼンと立ちすくんでいる。

暗闇の中にただ沈黙だけが流れる。それを最初に破ったのは称狼だった。

「アニキ後ろっ！！」

称狼に言われ、振り返った。頭上に大きな腕がある。もう次の行動は分かっていた。

拓羅はバック転で腕を避けると、もうすでに後退していた二人の横に移動した。

「コイツが……あの影の……？」

「だろうな……どうすんですか凋斐さん」

「なんであたしなのっ!？」

そう言いながらも頭の中では色んな考えが渦巻いていた。前を見れば影の正体、ファルが立っている。そして後ろは壁だ。出入口はすぐ横なものの、出た後でどうしたって逃げようが無い。

向こうはかなり好戦的なようで、考える時間ももう無いようだ。

精神的にも追い詰められた拓羅と称狼は楓にしがみ付いた。

「どうすんだよ楓っ!」

「凋斐さん!!」

「っだーもーうるさいな!くっ付くな!!」

三人でぎゃあぎゃあ言っている。さすがに痺れを切らし、ファルが口を開いた。

牙が何十本もキレイに整列してる口から出てきたのは、腹に響くような、低い大きな声だった。

「黙れテメエ等!!」

「うおおお!?楓、アイツスゲエぞ!怖えぞ!!」

拓羅は更に力を入れて楓にしがみ付く。

「だからっ……もー!なんだこのメソメソ兄弟はっ!!」

楓も負けじと力を入れて拓羅を引っぺがそうとした。それはファルから見たらただのバカでしかない。人間二人がバカやっている、としか思わなかったようだ。

そして視線を称狼に向けた。称狼の顔は一度だけが見た事があった。途中でユキが乱入してきたあの時だ。たったの一度でも、ファルが顔を覚えるには十分だ。

「テメエもココに居たんだな。搜したぞ」

隣に居る『バカやつてる二人』も動きを止めた。

「ボスの所へ行くぞ」

「なんでだよ!俺はもうあんな奴の手下でもないんだ!」

「だからこそだ。ボスはテメエが邪魔になったんだ。手下でもなんでもなくなった奴なんだから目の前をウロチョロされると困るんだよなあ。ま、なんならコイツ等も一緒に連れてってやってもいいけ

どな？つーかその方が都合がいい」

ファルがそう言つと、称狼が立ち上がった。

「ふざけんなっ！！二人には手え出すな！俺だけでいいだろ！？」

「なら最初からそう言つとけ！今になつて善い奴ぶつたつてもう遅えんだよ、バーカ」

ファルは称狼の腕を乱暴に掴み、担ぎ上げた。そしてそのまま二人の方を向く。

「おら、テメエ等も来い」

顎で外を差し、言つた。その時ファルの背中とご対面している称狼が声を張り上げた。

「なんでだ！！俺だけでいいだろーが！二人に手え出すなっつってんだろ！！？」

「オレに命令していいのはボスだけだ。生意気言つてんじゃねえよクソガキ。オレはテメエみたいな奴が大ッ嫌いなんだよ！おら、バカ二人！早く来い！」

問題児を三人連れてる親のように感じ取れる。丁度大きさ的にもそのくらいだ。

ファルの大きさは通常の人間の倍はある。例えるならば、歯向かつたら包丁持つて追い掛けてくる近所のオバサンだ。もっとも、ファルの場合牙だけでも十分だが。

地面を歩いている人間二人、ワーウルフ一匹と、その一匹に担ぎ上げられているもう一人の、計三人と一匹は建物の外に出た。歩きながらも拓羅と楓は逃げる事を考えていた。

逃げるなら今しかないだろう。しかし問題は逃げてどこに隠れるか、だ。さつきも簡単に建物内に居る事がバレしてしまった。

多分、ファルの鼻を持つてすれば一秒と掛からず見つけれられてしまつたろう。

二人はコソコソと話し始めた。

「逃げるなら今、だよな……」

「だろうね。どこに連れてかれるか分かんないし」

「でも逃げた後、だよな……」

「そうだね。どこに逃げたってきつと見つかるし」

「どこに行くか、だよな……」

このまま放っておけば地球温暖化が進んでこの地面がマグマと化すまで延々と喋り続けるだろう。いい加減、楓も止めに入った。

逃げるのはいいが、称狼が肩に担がれたままだ。称狼をどうやってファルの肩からサヨナラさせるかが問題となる。

攻撃を加えて隙を作り、その間に称狼を連れて逃げる。それが最善の方法だが、そんな簡単にいくはずも無い。そんな弱い奴ならばラングの右腕として働いているはずが無いのだ。

しかしやってみなければ分からないと言う事もある。もしやってみて上手くいけば、それに越した事は無い。

「タク、アイツの腹にでも攻撃してやってよ」

「なんで俺なんだよ！お前がいけよ」

「こんな危険な任務をか弱い女にやれと？ああん？そんな事言う奴は男の風上にも置けないなあ。あーあー情けない」

「誰が「か弱い」だ、誰が！そんな女居たらとづくにガードして守ってるつつの」

拓羅の意見ももつともだ。どこをどうみても楓は「か弱い」には程遠い。下手すれば世間一般の男よりも強い女だ。

と言うことで、何故かその「危険な任務」は楓がやる事となった。ブツクサ言っているものの、足は準備万端でやる気満々だ。

「楓、行け！」

耳元で拓羅が小声で言い、先ほどまで御託を並べていた楓は無言のまま敬礼した。そして静かにファルの横まで移動する。ファルも一瞬頭に「？」マークを浮かべて楓を見たが、また前を向いた。

そこを狙って楓は腹に回し蹴りを喰らわせた。

だが痛そうな顔をしたのはファルではなく、楓だった。ファルの腹は、腹とは思えないほどに固く、まるで石のようだったのだ。

しかも丁度つま先で蹴るようにしたため、弁慶の泣き所にもろヒツトだ。

意味不明な言葉を叫びながら、足を押さえてケンケンしていた。そこへ拓羅が近づいてきて、口を開いた。

「ダメじゃないか楓。ふざけてちゃ」

「ちゃんとやったよ！！全然ふざけてないよ！！これでもかってほどちゃんとやったもん！！でもスngoイスngoイ固いんだよアイツ！！なんかさ、なんかさ、ホントに腹かよあれ！！？」

「まあまあ、そう怒鳴りなさんな」

目に涙をたつぷり溜めてファルを指差す楓の肩を、拓羅は軽く叩いた。

「他の方法を……」

楓が気を取り直してそう言った時には、拓羅はもう居なく、彼もまたファルに蹴りを入れていた。やはり楓と同じようにつま先で蹴ろうとしたため、勿論弁慶の泣き所にもろヒツトだ。

先ほどの楓と同様、拓羅も足を押さえて戻ってきた。だが楓は近づく事も無く、遠巻きに彼を見ていた。彼女が何を思っているかは顔にハッキリと書いてあるためすぐに分かる。「バカ」。

二人がそんな事をしている間にも、ファルは何食わぬ顔で称狼を担いだまま歩き続けた。

第58話 『ジェスチャー』

『ファルに攻撃を加えて称狼引っぺがすぞ作戦』は見事失敗に終わった。楓と拓羅の二人の足には同じように青い痣ができている。貰っても全く嬉しくないような努力賞だ。

ファルに対する肉体攻撃は意味が無い事が分かった。しかし、かと言って精神攻撃のしようが無い。彼が何に弱いかなんて当然知らないのだ。

「どうすんだ。このまま素直に連れてかれるなんてそんなの嫌だからな」

「そう思っんなら自分も考えなさいよ」

楓の一言で拓羅は押し黙った。

しばらくして、口を開いたのは楓だった。

「こうなったら称狼に自力で逃げてもらうしかないかなあ」

「自力で？どうやって？」

「あの位置からなら目潰しくらい軽く出来るはずでしょ」

「め……目潰し……拷問かよ」

拓羅は自分がされたわけでも無いのに目を押さえた。そしてそのまま電柱が差し迫っている事も知らず、ひたすら歩く。

その後の事は言うまでも無い。

「なーんであたしこんなバカと一緒に居るんだろ」

今更そんな疑問が頭をよぎった。幼馴染だから。又は母国が同じだから。はたまた一緒に日本に来たから。としか言いようが無い。

楓にバカにされているとも知らず、拓羅は電柱で激しくぶつけた自分の頭を撫でていた。

「でもさあ楓、称狼にどうやって目潰ししろって言うんだ？近づいて言ったら何するか分かつちまうだろ？」

「こんな時のジェスチャーじゃん」

そう言つと、少し背伸びして拓羅に耳打ちした。

「……なるほど！」

手を叩くと、拓羅は早歩きでファルに近づく。そして背中に顔を付けている称狼の頭を軽く叩いた。

「……？」

称狼は顔を上げると、丁度自分の斜め下辺りで何やら訴えている兄を見た。身振り手振りで何かを伝えようとしている。

こんなに近くに居るのに声を出さないと言うことは、ファルに聞かれてはマズイ事なのだ、と感じとった称狼は一生懸命に拓羅を見た。

ファルを指差してから、指を二本、目に近づけたり遠のけたりしている。

時々本当に目に指を入れてしまい、押さえる事もあったが、彼が何を言いたいのかは称狼もすぐに分かった。

最終確認としてファルを指差す。拓羅は称狼の顔を見て何度も頷いた。

そして静かに離れ、時を待った。

数秒後、崩れているビルに挟まれた道で、痛々しい悲鳴が聞こえた。何故か二人分だったが。

称狼が走ってくるのを見て、楓と拓羅の二人は満足そうに笑った。しかし称狼は全く満足そうではなかった。逆に今にも泣きそうな顔をしている。

「突き指寸前だぞアニキ！！」

「あ？突き指？」

「そうだよ！目え固いんだよアイツ！どんな訓練してるんだっつの！」

第一関節で折れ曲がっている二本の指を見せて、叫んだ。

「まあ今は逃げるのが先決だ。愚痴は後からいくらでも聞いてやる」「そーそ。……あ、そいえばファング！」

楓の言葉に、三人同時に固まった。自分達が逃げ方法を考えるので精一杯だった頭はフアングの方まで回らず、早い話が忘れていたと言っことだ。

「フアングどこ……？」

「知らねえよ」

「俺も知らないですよ」

三人とも化石になった。この二千年後くらいにはどっかの教授が彼等を見つけて、新種の化石と騒ぎ出すかもしれない。

しかし、その心配は無くなった。一人の化石が石を割って二人の化石に言葉をぶつけたからだ。その言葉によって二人の石も砕かれた。

「どーすんの……？」

「どーしような……？」

「どーしますかね……？」

どれだけ元化石の知恵を絞っても脳味噌をフル回転させてもいい案は浮かばない。これでもかと言うほど浮かばない。脳まで化石になったとも考えられるほどだ。

案が浮かばなくてもここでジツとしているよりはマシと考えたのか、三人は走り出した。

未だに目を押さえてうずくまっているファルの横を通って、倒れたビルの列を見る。改めてファルの力の強さを知った。ここまですもなると恐怖を覚える。今まで握り潰されなかったのが奇跡のようだ。

こうもビルが全て壊されてしまっていては、まるで砂漠だ。右も左も分らない。前後左右、全てが同じ景色に見える。

そんな中で、三人は走った。どこにフアングが居るのかなんて分からないが、とにかく動かない事には始まらない。

しばらく進むと、道に黒い焦げ跡のような物が付いていた。そこ

で思ったのは三人共同じだ。きっと、ファングはこの近くに居るのだろう。

もつと行くと、倒されたビルより酷い壊れ方をしたビルが三人を出迎えた。その壊れ方は尋常ではない。

一階の窓は全て割れ、壁にも大きな穴が開いている。中の鉄鋼数本で辛うじて立っているようだ。ダンブが突っ込んでもこうはならないだろう。そして道にまで大きな穴が開いていた。もはや生き物同士の闘いとは思えない。

「スゲエなこりゃ……」

拓羅がボソリと言った。

「下手な幽霊とかよりよっぽど怖いな」

隣で称狼も言う。しかし、それに反発する者が約一人。拓羅の隣の称狼のもう一つ隣に居る、この世で害虫と幽霊をもつとも嫌う女だ。この世界が害虫、又は幽霊に支配されたと聞かされれば、迷わず舌を噛んで死ぬ事を選ぶだろう。奴隷となれば生かされると言われようとも、やはり死ぬ事を選ぶくらい嫌っている女だ。

「幽霊居んの！？ヤダよ！！？」

『幽霊』や『害虫』の文字が出れば、最強的にくだらない下手糞な冗談でも本気にしてしまう。その冗談を信じる者が彼女ただ一人でも、死ぬまで信じ続けそうだ。

「何言ってるんですか、物の例えですよ。ビビっちゃって凋夔さんらしくないなあ」

「ビビビビビビッってないけどさ！……って言うかこのあたしがビビる！？あり得ないね！」

楓は心配そうな顔をする称狼の目の前で腰に手を当てた。

「あ、幽霊」

称狼の後ろで拓羅が楓の後ろを指差す。瞬間的に、彼女は拓羅の後ろに隠れた。

アフリカで猛獣に襲われても出せないスピードだ。

「なんだよお前。やっぱビビッてんじゃ……」

後ろを向いた拓羅は一気に凍った。楓から放出される冷氣が氷点下三十　なのだから、今の格好で凍らないはずが無い。

「スゲェー！凋夔さん人間版のユキだぁ」

以前にも、ユキに同じような事を言った者が居た。そしてそれに同意する者が約二匹。

言う相手が違ってても、やはり一人と一匹は同じ傾向にあるらしい。凍ったままの拓羅を置いて、楓はズンズン先へ進んでいった。称狼も自分の兄に情け無用で楓を追い掛けた。

「……誰か………俺を助けてくれ……」

氷の中で、拓羅の低い声が寂しくこだました。これはもう太陽の力で溶けるのを待つしか無いようだ。二人で走っていく楓と称狼を、拓羅は氷越しに見つめた。

「それにしてもスゲェ壊れてますね、ここのビル」

「ホント。どんだけ力あるんだか」

半ば呆れ気味に楓が言った。走りながらだからか少し息が上がっている。

楓の隣で、急に称狼が声をあげた。

「あ！」

前を指差す。楓は一度称狼を見てから指の先を見た。

横たわる灰色の物体、ファングだ。後ろにはやはり大きく穴の開いたビルがある。

頭で考えるより先に、称狼は飛び出した。すぐにファングの横に来て体を揺すった。

「ファング！おい、起きろ！！起き……」

ファングの体に置いた手を見て、一瞬固まった。ついさっきまで肌色だった自分の手は真っ赤になっている。ファングの体からは血が流れ出ていた。

辛うじて意識はあるようだ。虚ろな目を称狼に向けた。

「……………称狼様……………」

かすれた声だ。起きあがろうとするがすぐに倒れてしまう。

称狼はそんなファングの体の下に手を入れた。そのまま手を上に上げて、ファングを抱きかかえる。

そして歩き出した。称狼の腕の中で安心したのか、ファングは眠ってしまった。

「早いとこ戻りましょう。またいつファルが戻ってくるか分からない」

楓も頷き、今度はソラ捜しだ。ソラを捜すついでに、拓羅の氷も砕いた。

第59話 『烏龍茶』

ソラを無事見つけ出し、再度出発した一行は何故かファミレスに居た。動物チームはその辺に隠れてて、と言うことで、ソラ達動物チームはその辺に隠れている。

見つかりにくいところに隠れるとなると狭いところでないといけない。ソラが普通の犬サイズになっているとは言え、やはり動物六匹押し込められては元々狭いところだ。息が出来ないほどになる。

そんな空間から顔だけ出し、ソラが呟いた。

「つつかさ、オレは追ってくる奴を倒して来いって事だったんだけどさ、なんだよアイツ等。倒してくるところか逃げ帰ってきてさ」

「まあしゃーないやん。ソラっちもそんなカリカリせん。ファル言ったらめっちゃ強いで？ 気味悪いほど筋肉まとわりつけて。あんなのに勝てたらラングから逃げとる意味もあらへんわ」

ソラの横にユキも顔を出す。ちなみに、ユキの中でのソラは「ソラっち」だ。

怒り気味のソラをなだめるも、なかなか収まらない。

「楓め。痛い目見せてやる……」

ソラは笑ってるのか怒ってるのか分からない顔をした。

「……なんでかえちゃんだけなん？」

隣でユキが素朴な疑問をボソリと言った。

しかしソラはそれどころでは無いらしい。頭の中では色々な考えがグルグル渦巻いていた。

「楓。こんなとこでのんびりしてていいのか？」

「ダイジョブダイジョブ。ファルもラングも、まさかあたしらが、こんなトコでのんびりくらりしてるなんて思うまい？ きっと今頃必死

で逃げてると思って搜してんじゃないの〜？」

そう言い、楓は余裕綽々で、コップの中になみなみと注いだる烏龍茶を飲んだ。

拓羅も「なるほど」と呟き、こちらは温かい烏龍茶を飲んだ。自分が猫舌と言う事を忘れていたのか、一気に飲もうとしてしまい、「あべつちよいーい！！」と意味不明な言葉を叫んだ。

そして案の定舌を火傷だ。

隣同士で座っていた楓と称狼はコソコソと話し始めた。

「どーにもなりませんね、あのアホアニキは」

「もうなんか一緒に座ってるこっちのが恥ずかしいよ……」

「うん、確かに」

そう思うのも無理もない。さっきの拓羅の意味不明言葉によって座っている客全員の目は楓達の座っているテーブルに向けられているのだ。

いつそ拓羅を別のテーブルに移してやろうかとも思ったようだが、そうになると計画を立てにくい。仕方なく同じテーブルに座ったままだ。

しかし拓羅は性懲りも無くまた熱い烏龍茶に手を伸ばした。

瞬間、楓の手も伸びる。拓羅の手より少し早く楓の手がたどり着き、烏龍茶を奪い取った。

「ああっ！何すんだよ！」

「もーダメ！アンタにあつついの飲ませるとロクな事になんないんだから！」

「でも喉渴くじゃんよお！」

「じゃあこっち飲んでろ！」

楓は代わりに冷たい烏龍茶を拓羅の前に出した。その時、拓羅の頬が少しピンク色に染まった。

「いいのか……？」

「……………は？何が……………？って言うかなんでそんな少女漫画の主人公みたいな顔になっちゃってんの？」

楓は温かい烏龍茶を飲みながら言った。それを見た拓羅はニツコリ微笑み、

「だって間接キスになっちゃうじゃん？」
と言った。

そして彼のまん前に座っている女がした行為は決まっている。烏龍茶を嘔き出した。

烏龍茶は、ニツコリと笑った男の顔に狙ったかのように降りかかった。

「ああああっぢい！！テメエ何すんだっ！きつたねえな！！」

店員がすっ飛んできて濡れた布巾を手渡した。

「アンタが変な事言うから… あっスイマセン！アリガトゴザマス」

「お前カタコトになってんぞ」

「うっうっうるさいっ！！早く顔拭け！！」

店内は一気に騒がしくなった。と言ってもあるテーブルだけが、番号二十五番、この店から静けさを奪った者達が座ったテーブルの番号だ。

客全員を混乱状態にさせておきながらも、その者達は当たり前のように二時間も三時間も居座っていた。店長は彼等をブラックリストに記入するだろう。

そんな中、最悪の店内に一人命知らずが入ってきた。入って早々店員と話している。丁度店員の頭で顔は見えない。

すると店員は二十五番のテーブルに向かって歩いてきて、止まった。

「お客様」

三人に声を掛ける。

「申し訳ありませんが相席でもよろしいでしょうか？」

訳が分からないが、とりあえず頷いた。

店員が入口の方へ戻っていき、三人は近づいて話した。

「なんでだろうな？空いてる席結構あんのに……」

「究極の寂しがり屋で一人じゃ嫌とか」

「だったらここまで一人で来てること自体おかしいじゃないですか」
楓は称狼をじっと見た。

「……な、なんですか……？」

少し逃げ腰になる称狼の頭に手を伸ばし、クシャクシャと撫でた。
「あつたまいーなー称狼は！誰かさんと違って」

「おい、その誰かさんって誰だ」

拓羅が言った時、客が来たようだ。三人は一斉に顔を見た。そしてまた固まった。

新種の化石第二号だ。

その客は空いている拓羅の隣にどつかと腰を下ろすと、店員に「烏龍茶」と言った。

「やあ。まさかこんな所に居たとはね」

聞き覚えのある声だ。それもそのはず、相手はラングだ。

固まったままの三人に声を掛けるが返事がくるはずも無い。

ラングが待つこと十分ほど。またも三人の化石の中の一人が石を割って喋った。

「なんで居んの………！！？」

「それはこっちのセリフさあ。なんでこんなトコに居んの？」

ラングの問いには答えず、三人で会議が行われた。拓羅は迷わず楓の頭にチョップを喰らわせ、小声で怒った。

「バカヤロー！何がこんなところでのらりくらりしてるなんて思わない、だ！完璧に読まれてんじゃねえか！！」

「だってしょーがないじゃん！ってかなんでよりによってココに入ってくるわけ！？アンテナでも付けてんの！？」

「あ、そう言えばラングは狙った獲物には発信機を背中に取り付けて自分はアンテナ仕込むって聞いた事あります」

「嘘！？」

二人同時に称狼を見た。そしてまたも同時に自分の背中を見た。
「嘘」

次に称狼を見た時には、頭に二つのタンコブができていた。

テーブルに顎を付けて頭を撫でている称狼をさて置き、今度は二人の会議になった。

「どーすんの？このままじゃ逃げようにも逃げらんないよ……」

「くっそー。アイツやっぱ称狼が狙いだもんな。称狼渡せば俺等を助ける、とかそーゆー条件出してくんじゃねえの？」

「なににい！？男ならもつと正々堂々と……」

「なあ楓？」

急にラングが声を掛けてきた。頭の中がごっちゃごっちゃになっている時に声を掛けられたため、いつも以上に短気のようなうだ。凄い形相でラングを見た。

「あァん！？」

「ゴメン、これ飲んで」

「はぁ！？何言ってるんだクソジジイ！！称狼渡せって言われたってね！そう簡単に………はい？」

「落ち着け楓。誰も称狼渡せなんて言ってるぞ」

拓羅に肩を軽く叩かれ、楓は瞬きを繰り返した。さすがに耳を疑ったようで、ラングに向けて耳を出した。

「……………何？なんて言った？？」

言葉を待っているように急に耳を引っ掴まれ、ラングの方に引き寄せられた。

「ちよっ、いつ、待つ……………いいっで！！いだだだだ痛いつつってん——！！？」

「ホラ、飲め飲め」

耳を放したと思ったら、今度は口に烏龍茶を流し込まれた。考えるよりも早く喉が動き、烏龍茶は全て腹に押し込まれた。その後、頭痛地獄に悩まされた事は言うまでも無い。

「頼むよ楓、お前までボケボケキヤラにならないでくれ。誰が俺を止めてくれるんだ」

しかし、テーブルに顔を伏せて頭を押さえている楓には、何を言っても聞こえていないようだ。

ラングはニツコリ笑うと「じゃあね」と言つて席を立つた。

「あ、そうだ。良かったらコレ、君等も飲んでいいよ」

そう言うところから持ってきたのか、烏龍茶を二つテーブルに置いた。そしてオマケに伝票も置いてスタコラサッサと出ていった。また。

「……どーすんだよコレ……？こつちも」

拓羅は烏龍茶を差してから楓を差した。称狼も首を傾げるばかりだ。だが、思い立ったように手を叩くと烏龍茶を持った。

「大丈夫です凋婁さん！苦しみは分け合わないと！ね！！」

そう言う又何を血迷ったのか、称狼まで冷たい烏龍茶を飲み干した。二人並んでテーブルに顔を伏せる。

こうなってしまうと拓羅も飲まないわけにはいかない。

「え……ええい！こうなったらヤケクソだ！！俺だつて！」

何を競い合っているのか全く分からないが、拓羅も称狼に負けじと烏龍茶を飲んだ。

今度は店の中が静かになりすぎて不気味なくらいだった。

第60話 『火山噴火!!』

ラングに見つかってしまったてはずっと居座る意味が無いと考え、三人は店内を後にした。

外に出てソラ達が待っている場所へと向かう。狭い空間に向かって声を掛けるやいなや、急にソラが飛び出してきた。

飛びかかった相手は――。

「あ、楓、危ねえぞ」

女の叫び声が聞こえるかと思いきや、聞こえたのは犬の悲鳴だけだった。

飛びかかろうとしたソラの顎に、楓は見事アッパーを喰らわせたのだ。勿論手加減はしていたようだが、ソラにとっては予想外の行動であつたため声を出さずにはいらなかったのだ。

地面に寝そべって、舌をベロンと出したままのソラに拓羅が近づく。

「悪いな、今楓すっげえキレてんだよ」

「……キレてる？なんで……？」

「あのー……どっかのクソジジイのせいで」

「……………??？」

ソラの頭の上には「？」マークが扇状に広がっている。ワケが分からないようだ。

分かるのはキレてる楓に向かって飛びかかろうとした自分がバカだった事、そして顎がまだ痛むことだけだ。

「く……くっそー！もういい！お前に飛び掛ってやるー！！！」

そう言うつと、今度は称狼に飛びかかろうとした。拓羅が後ろで何か言っているが、それすらも耳に入らないくらいソラは興奮していた。

いつもナメて掛かっていた楓に逆にやられ、誰かに八つ当たりしないと気が済まなくなっている。

しかし、悲劇は重なる時にはとことん重なる。

またもソラは返り討ちにあってしまった。称狼は向かってくるソラの頬を殴ると、スタスタ歩いて地面に腰を下ろした。下を向いて、まるで貞子のようなのだ。

その地面に寝そべっているソラに、また拓羅が近づく。

「悪いな、今称狼もすっげえキレてんだよ」

「……………なんでそうキレてる人間ばっかなんだよ!!?」

「仕方ないだろ。どっかのクソジジイのせいなんだから」

「……………うううう!」

ソラは唸り声を出し、悔しさを押し殺した。近くに居ては自分も危険と感知し、拓羅は楓の近くに行った。

隣に座ると肩を叩く。

「かえでー。今からどーすんのー?」

しかし、虫の居所が悪い楓は怒鳴るでもなじるでもなく、ただただ隣の拓羅を睨むだけだ。

彼の上がついていた口角も見見る下がつていく。

「……………む、無言つてのが一番怖いんですけど……………」

しばらくの間ジツと見ていると、急に自分の膝を叩いて立ち上がった。案の定驚く拓羅を放って、楓はその場で伸びをした。

「さて。どこ行きますかね」

改めて拓羅の方を向いた楓が言ったのはそれだった。

口を半開きにしたまま彼女の変わり様に驚きっぱなしの拓羅だったが、数秒後彼も言葉を発した。

「……………って、それさっき俺が聞いた事じゃねえかよ!!!」

「あれ?そうだった?いつ言った?」

「……………もういい……………」

今回は珍しく拓羅が呆れてため息をついた。

隣にちょこんと座っている称狼に目を向け、楓は首を傾げた。そしてまた拓羅の方を向く。

「称狼何怒ってんの？」

「何、ってなあ……お前のせいだ、お前の!!」

拓羅が怒鳴ると、楓は微妙に縮こまって「は？」と言った。拓羅が言うには事の起こりはこうだ。

「楓、そんな怒んなよ」

ラングが帰って三人の頭痛地獄も治ってきた頃。ラングに強制的に飲まされた楓の怒りは止まる事を知らない、と言うくらいまでできていた。火山噴火五分前だ。

その火山の怒りを静めようと頑張っている者が二人。言うまでも無く拓羅と称狼だ。

一生懸命火山のてっぺんにジウ口で水を撒いているが、そんな物で静まるはずも無い。火山噴火は三分前に迫ってきている。暢気にカップラーメン作ってもいられない。

もうダメだー、と逃げ出した者が一人。拓羅だ。しかしもう一人は諦めなかった。

「大丈夫！みんなで力をあわせればなんとかなるはずさ!!」

思いつきり役に入り込んでいる称狼だ。しかも「みんな」と言ってもたつたの二人しか居ない。

こうなってしまうては仕方ない。拓羅も称狼の演劇ごっこに付き合っただげる事にした。

「じゃあどうするんだ！このままじゃ俺等も……」

「僕が火山の中に入って栓になるよ！そうすれば被害が広がる事は無くなるだろ!？」

いつもは「俺」と言う称狼だが、この偽善者役には「僕」が似合うだろうと言う事を瞬時に分析したらしく、頭の中で従来の称狼をぶっ壊して偽善者称狼に大変身を遂げていた。

少々呆れ気味の拓羅だったが楓の怒りが自分に来なくていいと考えるとそれはおいしい話だ。

と言うわけで火山の悪魔は称狼に任せる事にした。

「分かった。じゃあ頼む。俺はその間に逃げる!!」

「待ってくれ!なんでそんなに冷たいんだ!？」

「……だってお前が犠牲になってくれるんだろ?」

「弟が自分を犠牲にしてまで兄を助けようとしている!その兄弟愛が分からないのか!? 弟が兄を助けようとしてるんだから兄が弟を助けるのが筋つてもんじゃあないのか!？」

拓羅は心の中で「アホか……」と呟いたが、称狼をこのままにしておいてはそれもそれで可哀相な気もする。

それに弟に全てを任せて自分だけ逃げる、と言うのも、考えてみればセコイ話だ。

「………し、仕方ない。じゃあ俺はどうすればいいんだ?」

「僕が栓になる!だから火山が噴火しそうになったら僕を引っこ抜いてくれ!」

「………あ?」

どうも辻褄^{つじつま}が合わない。被害を少なくするための栓なのに、それを噴火前に抜いてしまつては意味が無いのもほどほどに、だ。

しかし称狼はやる気満々だ。命綱を付けて準備体操まで始めている。拓羅は一瞬冷めた目で弟を見てしまった。いつもとキャラが真逆だ。

そんな事をしている間にも噴火時間は迫ってきている。あと残り一分ほどだろう。

「つもー!どーすんだよ!!このままじゃお前はおるか俺だつて

……!」

「あれ?……見てくれ。火山が……」

「ん?」

見ると赤い怒りゲージが下がっていく。限りなくMAXに近かつたゲージは一気に赤から青に変わった。

「なんだ?何がどうなってんだ?楓の怒りがこんな簡単に静まるなんて……」

言っている間にもどんどん下がっていき、怒りゲージは有る意味が無くなった。

怒りが下がっていつて火山がどうなったかと言うと、眠り始めた。「……おい。何やってんだコイツは？何寝てんだコイツは！？」

「ああー。なんか色々ごちゃごちゃしててロクに寝てなかったのかも……」

称狼は楓の肩に手を掛けた。

「凋焚さーん。起きてくださーい。早く出てかないとまた烏龍茶飲まされますよー？」

そこまで言うと、称狼は急に後ろに倒れた。それは一瞬の出来事だった。

どんな時でも悲劇は起こる。寝癖と寝言と寝相が悪い拓羅に対して、楓は寝起きが悪い。

あの森の時でもそうだ。称狼に起こされたため、彼にアッパーを喰らわせた。今回も同様だ。称狼に起こされたため、彼にアッパーを喰らわせたのだ。舌を歯と歯の間に挟みながら、称狼は後ろに踏ん返り返った。

その後、「何やってんだお前！」と拓羅に殴られた楓は思いつきり不機嫌になったのだ。強制的に飲まされた烏龍茶と、寝起きが悪さと、拓羅に殴られた事でまたも火山噴火直前となった。称狼も自分で飲んだ烏龍茶の冷たさと、楓にアッパー喰らわされた事で火山噴火直前となった、と言うことだ。

「つつうわけだ」

そして今、人間三人は地面に座っている。

一部始終聞き終えた楓は、口を開けば「シンジラレナ〜イ」とでも言いそうな顔をしている。称狼は相変わらず下を向いたまま一言も発しない。

「これで分かったか？楓。お前のせいで称狼がこんなにブラックに

なっちまっただんだよ!!」

「……申し訳ゴザイマセン」

「急にカタコトになるなよ、お前はホントに……」

「お前お前ゆーなっ!」

下手に出ていた楓は急に立ち上がり、反撃し始めた。しかし拓羅は怯むことなく、楓を見下ろすように見ている。その迫力に珍しく逆に楓が怯み、初っ端からドモった。

「だっ……だだだだだっさっ!第一さっ!タクだっさ寝相悪いじやん!!」

「それとこれとどう関係が?」

「だから……あたしが寝起き悪くてもおかしい話じゃない」
気が付くと拓羅が目の前に来ていた。顔が一センチほどしか離れていない。さすがに楓も後退る。

「この期に及んで?言い訳するのかな?楓ちゃんは??ああーん?」
目の前で舌舐めずりする拓羅を見て、謝らざるを得なくなった楓は引きつった愛想笑顔で「ごめんナサイ」と言った。

「感情がこもってない!!」

拓羅が調子に乗り始めた。彼が調子に乗る時はなんとなく口調で分かる。それを十八年も一緒に居る楓が分からないはずが無い。

無理して上げさせていた口角が一気に下がった。しかし楓は称狼を殴ったと言う弱みを握られている。それを理由に「口ごたえするのー?」などと言われてしまえばそれまでだ。

仕方なくニツコリ笑いなおす。

「すみませんでした」

笑ったままそう言った。おや?と言う顔をする拓羅を見て心の中でガッツポーズをとる。

楓の笑顔に見事ハメられ、拓羅は「仕方がないなあ」と言って引き下がった。

残るは称狼だ。こうなってしまった称狼はただ謝るだけでは許してくれやしないだろう。八つ当たりマシンとしてジャンケンで負け

た方を行かせる事にした。たかがジャンケンに二人とも真顔だ。

そして、勝者楓。敗者拓羅。

以前楓とジャンケンした時にも負けていた。敗因は彼の最初に出す手の形だ。拓羅は緊張すると必ず「最初はグー」のまま出してしまふ。緊張で、手の形を変える事にまで頭が回らないようだ。

今もまだグーのまま悔やんでいる。隣では楓が大喜びだ。これでもかと言うほど喜んでいいる。たかがジャンケンでここまで喜べる人間も珍しい。

「なんでだチクショオ……!!」

「だーから、グーのまま出すからでしょ。ホラ、早く行け行け」

「……うう……楓様お願いします……」

「こればかりは無理。男ならちやっちゃんと覚悟決めろ!」

「お前のせいでこうなったのに……」

楓の動きが止まった。それを言われてしまえば勝者であろうが敗者であろうがオシマイだ。

ふと後ろを見ると子犬のような目をした拓羅が居る。

「そっ……そーゆー目えしな……しな……し、しなっ……」

「……」

「お願い、かえで」

捨てられた子犬のような目をしている男は口を開いた。凄いくらいに甘えているようだ。

これを高校三年生の、しかも男が言うのはどうかと思うが、楓にとってはこういう目をした者は犬でも人間でも、高校三年生の男でも関係無いらしい。

「ズルイよ!!そうやってさあ……ジャンケン負けたくせに!!そーゆーのにさ、よ、よよ弱いつて知ってるくせに!!」

拓羅を指差して、楓が怒鳴る。最後にハツとして「ヤダからね!!」と付け加えた。

結局、いくらそう言う目に弱い楓も拓羅の身代わりになるのだけは嫌だったようだ。最終的にどう足掻いても、拓羅が八つ当たりマ

シンになる事は変わり無かった。

「なあ、早く行こうぜ」

騒いでいる人間三人衆にソラが声を掛けるが、全く聞こえていないようだ。特に拓羅はソラの声を聞く余裕は無い。

「……もついいや。動物達だけで逃げようぜ」

「賛成やゝ！」

「早く手当てしないとファングも死んじゃうよ？」

「そーだそーだ！ケル犬死ぬぞー？」

みーなと良真言葉に人間達の動きが止まる。全員、今になって駆け寄ってきた。

楓も拓羅も称狼も、まさか思っではないだろう。

この人間三人組で笑い合えるのは今日で最後だと言っ事を。

第61話 『ようこそ、ファルくん!』

「称狼はどうでしたか」

「暢気なものさ。三人で笑ってた。裏切っておきながらアレだもんなあ。自分ばかり楽しみやがって」

「そうですか……」

「おいファル」

「はい」

「今度こそ失敗するな。俺はもう二度と手は貸さない。これが最後のチャンスだからな」

「……………はい……………」

とりあえず近くの動物病院に駆け込んでファングを置いてきた一行は、やはり雲の上だった。

「楓……もう嫌だああ!」

「じゃあ落ちな」

「それも嫌だああ!」

ボツコボコになった顔の拓羅が楓に泣き付いている。

「おい楓。なんかまた変な感じすんだけど」

ソラに声を掛けられ、楓は拓羅の頭を小突いて自分から離れさせた。前の方に顔を出し、今度は楓が声を掛ける。

「何?」

「変な感じすんの!あの、白い奴が追っかけて来た時みたいな……………」
首を傾げるソラの後ろで、楓は振り返った。しかしソラの体は大きくすぎて、一番前からでは一番後ろまで見えない。

面倒くさそうに立ち上がると、一番後ろ目指して移動し始めた。

そして尻尾まで来て頬を膨らませた。

「なんも居ないじゃん……」

だが、後ろを向いて戻ろうとした時視線を感じた。また尻尾の方を向く。

すると、ついさっきまで何も居なかった所にファルが立っていた。

「いよっ」

片手を肩の辺りまで上げる。

突如現れた敵を目の前に一瞬驚いた表情をしたが、楓もとりあえず同じように片手を上げて「いよっ」と挨拶をした。

真っ白な雲の上を飛ぶ茶色の犬の上で、片手を上げながら一人と一匹は睨み合った。

そこに拓羅も駆け寄ってくる。彼もファルを見て一瞬驚いたが、一人と一匹を見てから少しだけ首を傾げ、同じように片手を上げた。しかし、いつまでもそんなマヌケな事をしている暇はファルにも無かった。ラングからタイムリミットを決められている。一時間後までに称狼をラングの所に届けないとファルの命も無い。

「いいか。オレにはくっちゃべってる暇は無いんだ。さっさとシヨウロウを渡せ」

牙を剥き出しにして言う。

だが脅したところで簡単に渡すはずが無い。拓羅は片手を下ろすと、彼もまた負けじと歯を剥き出しにした。

「バツカヤロー！俺等がそんな脅しに負けるとでも思ってるん——！？」

一瞬、拓羅の体がよろめいた。ソラが大きく動いたわけでも、風が吹いたわけでも無い。

拓羅を見て、ファルの顔から怪しい笑みがこぼれた。一歩踏み出して拓羅の額を軽く指で突く。いとも簡単に、彼の体はソラの上に転がった。そしてそのまま無意識の世界へと引きずり込まれた。

「シヨウロウはあっちか？」

今度は楓を見る。そしてソラの頭の方を指差した。

「犬なら自分の鼻で探せば？」

「……ここは生意気なガキの溜まり場か」

ファルは楓に顔をうんと近づけて厭味ったらしく言った。

だがそれが凶と出た。楓は待つてましたと言わんばかりに笑うと、ファルの鼻にデコピン鼻バージョンを喰らわせた。

いくら体に筋肉まわり付けてるファルでも、鼻は鍛える事が出来ない。痛みとしては他の犬と同じくらいだろう。

予想通り、ファルは鼻を押さえて転がった。その間に楓はソラの頭の方へ走り「急降下」と一言だけ言った。

ソラは初めは分からない顔をしていたが、数秒後には力強く頷き、急降下体制を取り始めた。

ソラの上に転がっている今のファルなら、足に力が入っていないはずだ。急に自分の下が下がれば飛んでいくに違いない。

楓はまた尻尾の方へ走って戻る。ソラは体制が取れたようだ。合図も何も無しで急降下した。

「うつわあのバカ！！合図くらい……」

一度頭の方を見た楓だったが、また走り出し、拓羅の体が浮く寸前で上に覆いかぶさった。と言うより、ジャンプして申し掛かったと言った方が近いかも知れない。

しばらくして、拓羅は目を覚ました。まだ頭がガンガンする。そして自分の上には何故か腹這いになっている楓。

首が百八十度回るんじゃないかと言うくらい首を傾げた。状況が全く掴めていないようだ。

目を瞑って思い出してみる。

「え」と、確か俺はファルの野郎に倒されて、そこから分かんねえんだよね……。あ、でも……。なんか上に乗っかってきたのは分かつ

たなあ。……っつーか……ちょっと待てよ。なんで雲の上じゃないんだ？」

ゆっくりと辺りを見回す。拓羅以外は、みんな寝転んでいるばかりだ。

仕方なく起き上がり、ソラの上から飛び降りた。着地した時、何故か足元がフラ付いて倒れ込んだ。まだ体が覚め切っていないようだ。

ウォーミングアップ程度に、手を握ったり広げたり、屈伸をしただりした。

「よっしゃ」

屈伸の曲げている状態から飛び上がった時、はたと気付いた。

「そいえば……称狼……」

またソラの上に逆戻りだ。茶色い背中を見渡してみる。隅から隅まで走ったりもした。

だが、称狼の姿はどこにも見当たらない。

「マジかよ……ヤベエ……」

自分達が気絶してしまっただけで、ファルは称狼を奪い去り放題だ。

そこまでは分かっているのだが、どこへ行ったのか全く分からない。

また下に行って周りを見た。今までに無いくらいの殺風景だ。ただずつと道が続いているだけで、寂しいと言うより怖い。

「こ……ここを一人で歩くと……？」

頭を掻きながら動こうとしない。やはり一人は怖いようだ。しかし、誰も動く気配は無い。楓も無理に起こそうとすると危険と言う事が証明済みだ。

知っていながら起こす馬鹿は居ない。さすがの拓羅でもそんな無謀な事はしないだろう。

「……………こうなったら……一人で行くしかないよなあ……………」

彼は寂しい道を一人、歩き出した。

歩き出してから数十分後、拓羅の前に真つ白な建物が立ちはだかつた。これですに煙突でも出てたら工場に間違えられるだろう。そのくらいの大きさだ。

しかし、こんな所に建っているのはおかしい。拓羅は「何か臭うぞ」と言つてニヤリと笑つた。

そして彼の取つた行動は——言うまでも無い。

第62話 『拓羅の大冒険』

建物内に入った拓羅は中にも驚いた。まるでガラスのようにピカピカの床、一面真っ白な壁。ドアまでもが白だ。

初めてここへ来て、来た道戻れるのはよほどの記憶力を持った者だけだろう。生憎、拓羅はそんな高性能な記憶力は持っていない。昨日の夕飯も思い出せ無いくらいだ。

「あ、そっか。昨日夕飯食ってねえんだから当たり前か」

一生懸命思い出していた拓羅は、頭を軽く叩いて舌を出した。

床のせいで何度も滑りそうになりながら、奥へと進む。と、一つのドアとご対面した。ピッタリと閉まっている。

（こーゆーのって電撃バリバリとか来たりすんだよな！俺は知ってるぞ！）

取っ手の部分に何度か軽くタッチするが、電撃なんてものは来ない。

しかしまだ油断は出来ない。十分に用心しながら取っ手に手を掛ける。握っても電撃は来ない。

「なあゝんだ。何も来な……」

油断大敵とはまさにこの男の為に作られた言葉だ。五秒後、彼の手に衝撃が走った。タイマー式の電撃機械だったようだ。

「おおおおおおおおおうううう！！！！？」

叫んだ後、すぐに手を放した。だがもうすでに時遅し。

拓羅の手は完璧に痺れていた。そして掌の中心が赤くなっている。少しでも物が触れば、その衝撃は腕にまで来る。

「チッククショー……！！誰だ、こんなの造った奴！！ラングの野郎……！！」

何故そこでラングが恨まれなければならないのか分からないが、ラングのせいにしておくのが一番無難だろう。

よく見てみると、ドアの横にはパスワードを入れる機械が取り付け

けてあった。上に被せてあるカバーが壁と全く同じ色だったため、分からないのも当然だ。

だがパスワードが分からなければ元も子もない。ドアの前でひたすら悩む。そして一つの単語が頭に浮かんだ。

『ラング』。

幸い、パスワードを入れるところは小さなキーボードのようになっているので操作に悩むことは無かった。

入力後、『実行』キーを叩く。隣の赤いランプが緑に変わった。

(……ナルシストめ……)

拓羅は心の中でラングにパンチを喰らわせると、取っ手に手を掛ける。

今度こそ、どれだけ握っていても電撃が来ることは無い。勢いよくドアを開けた。その部屋は真っ黒だった。四角い空間が黒で塗り潰されている。

「なんだろこの部屋……？」

無用心にも中に入っていく。ドアがあるからいいものの、それが無かったら今どの方角を見ているのかすら分からないだろう。

黒の壁と睨めっこしていると、後ろから背中を蹴られた。

「……！！？」

壁に背を向けて後ろを見る。真っ黒な部屋の中心に、真っ白なファルが立っていた。

「やっぱそりゃ、こんな目立ってりゃ来るわなあ」

ファルが喋りだす。横を向いて鼻で笑うと、拓羅を睨んだ。

「ショウロウを捜しに来たか。アイツならボスの部屋に居るぜ。……

ま、辿り着けるかどうかは知んねえけど」

「お前……味方、なのか？」

「馬鹿かテメエは。テメエが行かねえと面白くなんねえだろ。オレは面白えもんが見てえんだ。ただそれだけだ」

また横を向く。そしてフンと鼻を鳴らした。

しかしそんな事に見向きもせず、拓羅はひたすらその場で足踏み

をしていた。

「じゃあ早くラングのところに連れてつてくれよ！でないと称狼が……」
「オレに勝つたらな」

平然とそう言うファルを見て、拓羅は固まった。楓と二人して蹴りを喰らわせたのにビクともしない奴だ。拓羅一人で勝てるはずが無い。

だがファルはやる気満々だ。さすが好戦的ワーウルフ。

「……ちよつと待てよ、おい。お前は強い。スнгеエ強い」

拓羅が『強い』と言う単語を口にした時、ファルの耳がピクリと動いた。口角も微妙に上に上がっている気がする。

「つ、強い？強いか？」

口調の変化に気付いた拓羅はバレない程度にニヤリと笑うと、更に続けた。

「ああ強い！ベラボーに強い！アンビリバボーなくらい強い！！最強伝説作っちゃえよ的に強い！！雑魚なんて蹴散らせベイビーってくらい強い……」

最後の方は意味不明だが、拓羅はとにかく色んな『強い』を並べてみた。

ファルの口角はドンドン上がる。拓羅のテンションもドンドン上がる。

「そ、そんなに……強いか！？」

「勿論さ！このしなやかにバランス良くついた筋肉！削りたての鉛筆みたいに尖ってる漆黒の爪！！噛みあわせが完璧で真つ白な牙！！「おばあさんどうしてそんなに口が大きいの？」って聞かれて「お前を食べちゃうためよチエケラー」って自信満々に言えるくらい大きなお口！！こんなに素人晴らしいモノ持ち合わせて強くないはずが無いじゃないか！！」

一気に喋って肺の中の酸素を全て吐き出した拓羅は、ゼーハーゼーハー言いながら地面に膝を付いた。

一件落着と思っていた時、拓羅の頭上からどす黒い声が聞こえて

きた。

「真っ白な牙……？大きなお口………？貴様オレを馬鹿にしているのか……！」

「……………え……………え、え、なんで……………？？いやいや、馬鹿にしてるだなんてとんでもない。滅相もな……」

「筋肉と爪はいいでしょう！！！これらはオレが頑張って手に入れた物！言うなれば努力の成果なのだ！！！だがな、真っ白な牙と大きなお口なんて物はオレが元々持っていたものだ！！！貴様は本当の強さと言うものを分からずに口に行っている！！オレはそれが許せん！！八つ裂きにしてやる！！！！！」

口は災いの元。

まさにその言葉がピッタリだ。良かれと思って口にした言葉でも相手に上手く伝わらない事はよくある。日常茶飯事だ。が、今はそんな悠長な事言っていられない。

拓羅はとにかく逃げようとした。壁をよじ登ってみたり、床を這ってみたり、ファルに土下座してみたりもした。仕舞いには床に転がって駄々こねたりしてみた。

だがどれも無意味だった。真っ黒な壁は滑るし、床を這ったって這いずりゾンビになるだけだし、ファルに土下座したって今すぐ背中を刺すぞと言うかのような殺気が襲ってくるし、駄々こねたってファルの神経逆撫でするだけだった。

拓羅の無意味な、或いは逆に火に油を注いしまった行為のおかげで、ファルの怒りはキリマンジャロの頂上まで一気に上がっていた。

その怒りは黒い部屋の隅々まで満遍なく広げられた。拓羅は無性に泣きなくなった。自分の馬鹿さ加減に。

少しつり目な彼の瞳に涙が溜まっている間にも、ファルのこめかみには「ムカツキマーク」が十個ほど並んでいた。楓を上回る新記録だ。

その血管の中的一本が切れたと同時に、ファルは拓羅目掛けて飛

び出した。

「お前を食べちゃうためよチエケラー」と自信満々に言える口をガツポリ開けて、噛みあわせが完璧で真っ白な牙を剥き出しにし、削りたての鉛筆みたいに尖った漆黒の爪を立てて、拓羅に襲い掛かった。

一瞬の出来事だった。

ジャンプしたファルが降り立った場所にはもう拓羅の姿は無く、ただ大きな穴だけが開いていた。

ファルは立ち上がると、血の付いた爪を舐め、ゆっくりと首を動かして左を見た。

そこにはギリギリで横にジャンプした拓羅の姿があった。左膝には大きな爪の後があった。その生々しい傷からは真っ赤な血が溢れだしている。

拓羅は歯を食い縛って膝の上辺りを押さえた。両手に力を込めるが、血は止まらない。仕方なく自分の服を破ろうとした時、またファルが襲ってきた。

「くっそ……!!」

右足を踏ん張って立ち上がる。またジャンプして避け、黒い床に転がった。

立ち上がり、出口に向かって一歩踏み出した直後、彼の上にファルが伸び掛かってきた。軽く百キロは超えている巨体に伸び掛かれ、拓羅は敢え無く倒れ込んだ。

ファルは拓羅の背中を足場にして、そこに爪を立てた。尖った爪の前には、服なんて無いも同然だ。肉と一緒に引き裂いた。右肩から背中に掛けて、膝と同じ傷ができた。

痛みで息が詰まる。言葉なんて物も出てこない。聞こえるのは、ガツチリと食い縛った歯と歯の間から漏れて出てくるうめき声とファルの笑い声だけだ。

その笑い声をBGMに、拓羅は痛みとめまいに対抗していた。ソラの上で起きたあのめまいが、また彼を襲い始めたのだ。

しかし痛みのおかげでなんとか意識は保っていられる。

震える腕を懸命に立たせ、起き上がろうとする。だが肩の傷とファルの重みで、思うように力が入らない。

（このままじゃ死ぬ……。どーすりゃいんだ……。!!?）

クラクラする頭を必死に働かせる。考えていると、急に背中のみが消えた。

「……………!？」

首を動かして敵を探す。敵はすぐ横に立っていた。

「立て。このままじゃつまらん！もつと死ぬ気でもがくとか出来ねえのか」

注文の多い敵だ。演劇がしたいのか闘いたいのかよく分からない。拓羅は頭の上に「？」マークを百個ほど並べた。

しかし、いつまでも疑問に思っている暇は無い。逃げるとしたら今しか無いだろう。

拓羅はジンジンと痛む足を引きずり、一気に外へと飛び出した。一瞬の事で、自分の好みの演出を伝えるのに一生懸命だったファルは目を点にした。

真っ黒な部屋の中に真っ白なファル一匹を残して、拓羅はひたすら走った。称狼の居る部屋への道が全く分からないまま。

第63話 『ダブル方向音痴』

しばらく走り続け、突き当りの壁に体当たりする。ズリズリと下に下がり、今まで走ってきていた道を見た。どうやらファルは追ってきていないようだ。

安心すると同時に傷の痛みが襲ってきた。

「っだー……………いつてえ……………」

やっと止血が出来る。もう体に被さっているだけと言っても過言でない服を脱ぐと、足に巻きつけた。

問題は背中だ。もう巻きつける物も無い。

そんな中、タイミングを見計らったかのようにして、ある人物が前から歩いてきた。

トコトコ歩いて何かを探しているようだ。その顔には見覚えがあった。小さい頃からずっと一緒に居るんだから当然の事だ。

その「ある人物」は拓羅に目を止めると凄いスピードで走ってきた。一瞬にして拓羅の目の前に顔を出す。

気付いた時にはもう彼の前にしゃがみ込んでいた。

「いたっ！ー！！」

「ある人物」は叫んだ。

「……………楓かよー……………ビビッた……………」

言うまでもなく、どこからどう見ても楓だった。拓羅もビビっているようだが、楓も相当ビビっていた。勿論拓羅の存在には無く、拓羅の傷の存在にだ。

「そーだ楓！丁度良かった！もう背中に巻くモンが無かったんだ！」手を合わせて拝む拓羅を、楓は冷めた目で見つめた。

「……………で？」

「で？じゃなくて、ここまで言えば分かるだろ！？」

「分かるのはアンタがバカみたいに拜んでる事だけだよ」

「……………あーそーかよー！じゃあもうチョコチップクッキー買

ってやんねー。土下座されたって買ってやんねー！頼み込まれても買ってやん…」

「この楓さんにお任せあれ！！なんでも言って！！」

楓は焦って笑顔を作った。その楓を見て、拓羅は「よろしい」と言ってから真剣な顔になった。そして発したのはこの言葉だ。

「お前さ」

「うん？」

「服脱げ」

その四文字を聞き、楓は目をパチクリさせた。真顔の男を見つめる。そして頭を押さえた。

「とうとう頭がイカレたか……！！」

特大のため息付きでそう言った。

「あ、違うぞ！？変な意味では決してないからな！！断じて違うからな！！俺を変態呼ばわりしたら後が怖えんだから覚悟…」

「わあかってるよっ」

このままではいつまで続くか分からないため、楓は立ち上がって言った。

「チヨコチップクッキー一年分」

それを聞いた拓羅は言うまでも無くギョツとした。

「い、一カ月分…」

「えーやったあ！タクったら二年分も買ってくれんの！？嬉しいなー！！二年分も買ったら財布の中どうなるか分かんないのにねー！！」

笑顔で言う楓に恐怖すら感じる拓羅だった。

ここで反論したら次は羽交い絞めにでもあつかもしれない。身の危険を察知した拓羅はその場に平伏した。

「一年分買わせていただきます」

「はい、よろしい。あ、じゃあちよつと待ってて」

楓は走ってどこかへ消えた。

「大丈夫かな、アイツ……」

「あ！なんだよお前、ズリイ！！女だからって……」

「でもさあ、上着あるんならそれ取りに行くだけでよくねえか？」

「何言ってるの。薄い方が縛り易いでしょーが」

「男に一言は無し……よっ！！」

[illegible]

「ぎゃほうっ！！！！いつてえなデメエ！！何すん……」

気を遣ったのか、ただ気付いたから持ってきたのか分からないが、とにかく拓羅は楓に感謝した。

泣きながら楓に抱き付く。

そう言いながらも、楓の顔は嘘を付けていなかった。

それに気が付いた拓羅は、ニヘラと笑った。

「なんだよー。お前そんな事言いながら嬉しいんじゃないかよー」
「はあ？……バツカじゃないの？」

いつも以上にバカにした目で拓羅を見ると、楓は彼を自分から引き剥がした。

「素直じゃねえなあまったく…」

拓羅の顔の中心に、楓の鉄拳がめり込んだ。

「い……て……え………」

「ふんっ！ーざまーみろいつ！」

倒れる拓羅に向かって、楓は舌を突き出した。

そして床に仰向けになって鼻血を出している男を放って、ただ真っ白な道を歩いていった。二人とも完全なる方向音痴だと言う事をすっかり忘れて。

「しまったあああああああああああああああああああ！！！！！！」

その数分後、真っ白な建物内に楓の声が響き渡った。称狼の上着で遠慮なく鼻血を拭いていた拓羅も驚く。目の前でメガホン使ったような声で叫ばれたら誰だって驚くに決まっている。その上、ついさっきまで自分をバカにしていた人が目の前で頭抱え込んで顔面蒼白になっているのだ。

しかし、仕返しと言って「バーカ」と言えるほど、拓羅の肝は座っていないかった。

ただひたすら、一体何が「しまったあああああああああああああああああああ！！！！！！」なのかを教えてもらえるのを待つしか無い。

素直に静かに待つこと十分。やっと立ち直ったのか、楓が立った。
「おう楓。大丈夫か」

軽く声を掛けてみる。掛けられた楓は、魂が抜けたような顔をしていた。間違いなく無表情だ。どう見たって笑ってるようには見えない。老眼でも見えっこないだろう。

いつもみたく怒ってる時より何百倍も怖い。拓羅は思わず後退った。今の楓の顔に長い前髪下ろせば貞子ソックリになりそうだ。真昼間に街出歩いても子供が泣き出しそうなくらいに怖い。

「か、楓……？泣く子も泣き出す怖さはやめろ……？」

日本語がおかしい気もするが、感じている怖さ自体おかしいのだ。大目に見てやらないと可哀相だ。

「大丈夫だ。な？たかが道に迷っただくらいで……」

「たかが……？この広い建物内でどっちも方向音痴でどーーやって帰れっつーわけ……！！？」

楓の特技、早口炸裂だ。

「っつーか十八年もだよ！？十八年も一緒に居てなんで今、タクが方向音痴だっと思いつけなかつたの……！！？……これもきつとラングの策略だ！絶対そうだ……！！だからこんな入り組んだ迷路みたいな道作りやがったんだあんのクソジイイイイイ……！！覚えてる！絶っつっつ対仕返ししてやる……！！万里の長城連れてっつて一生歩かせ続けてやる……！！！」

この気迫で仕返しと言う割には可愛い仕返しだ。

今の楓なら気合いで牙でも爪でも耳でも生やせそうだ。あつという間に狼少女の出来上がりだ。

炎に身を包んでいる楓の後ろで、拓羅はビクビク震えていた。

ビクビクビクビクビクビクビク震えていると、次第に楓を包んでいた炎は消えていった。哀れな拓羅を見兼ねて、誰かが上から水を撒いてくれたのかも知れない。

誰だか知らない命の恩人に、とりあえず拓羅は手を合わせておいた。

体の周りから炎が完全に消えた楓が振り向く。もう魂はちゃんと入っていた。

「まあ怒ったところでしょーがないな」

ケロッと口にした。それは、今度は拓羅の怒りを爆発させる物だった。

「もっと早く気付け!!!」

拓羅は溢れだす怒りを言葉に託し、楓にぶつけた。しかし、楓の身を守っている『気分爽快オーラ』が、それを遮断してしまった。

「……………ま、いつか」

どうやら諦めてしまったようだ。また楓の後ろをトボトボ歩き出した。

第64話 『睡魔』

「……………」

しばらく歩いていると、ふいに拓羅が後ろを向いた。

「どしたの？」

「……………なんか……………聞こえた……………」

「は？」

「お前……………聞こえなかったか？」

「全然。なんにも」

「おかしいな……………。確かに聞こえたぞ？なんか悲鳴みたいなうめき声みたいなの……………」

訝しげな顔をする拓羅を見て、楓も耳を澄ます。拓羅の言う、悲鳴のようなうめき声のような、そんな物なんて全く聞こえてこなかった。

「なあ、もしかして称狼の声だったり……………」

そこまで言った時、今度はハッキリと二人の耳に悲鳴が届いた。

男の声だ。

同時に同じ方を向く。

「ビンゴ……………かも？」

楓が苦笑しながら言った。

「くそつ……………！おい楓、あっちだ！」

拓羅は悲鳴の聞こえてきた方を指差した。

頷いて走ろうとした時、楓の視界でのみ地面が揺れた。足がフラ

つく。頭の中もずっと回転しているような感覚だ。

頭を押さえながら壁にもたれかかった。

「……………」

彼女の異変に気付いた拓羅が少し先のところから走って戻ってきた。

「楓？どうした！？大丈夫か！？」

「……や、なんか……眠……」

「眠い」と言う言葉を聞いて、拓羅の表情が変わった。

「お前もか……」

「何が……?」

拓羅にも、今楓に襲いかかっている睡魔の辛さがよく分かっていた。ソラの上とファルの所で起きたあのめまいがそうだ。気を抜けばすぐにでも眠ってしまう。

「……俺も……」

そこまで言って拓羅は言葉を飲み込んだ。ここで拓羅までもが「めまいがする」などと言ってしまったては、楓のことだ。何がなんでも行くとはい出さだろう。

楓は、今は唇を噛んで辛うじて意識を保っているが、しばらくそのままで居ると、今度は手足が痺れてきた。

座っていても目の前の回転が収まることは無い。

「二人一緒に、なんておかしいよな……」

「だから何が」

「いやいや。なんでもねえ」

いつもなら追求して、言うまでしつこく聞いてくるが、今はそんな気力すら無い。

睡魔は楓に容赦なく攻撃し、痺れも酷くなってきたようだった。指先を少し動かすだけでも全身に衝撃が走る。

頭を押さえていた手も地面にベッタリと張り付き、動かそうとしても動かせない。

しかし、拓羅も平然を装っている状態で精一杯だった。彼も今、酷い睡魔に襲われているのだ。ファルの時起きためまいより、更に酷くなっているようだった。

目の前の楓の声すらボンヤリ聞こえるくらいだ。そのくせ、一言一言が頭に響く。

いつもの彼らしい言葉を思いつくだけで労力をかなり使っている。「……もしかして、薬でも飲まされたか?……なあって。楓にんな

事しようとする命知らずがドコに居るってんだよなあ!？」

「……………居るよ……………」

殆ど吐息と化している楓の言葉に、ゲラゲラ笑っていた拓羅の表情が一瞬にして固くなった。

「命知らず居たのかよ!？」

「直接布当てたとかそーゆーんじゃないくてさ……………」

「……………なんだ？」

「ファミレスントコで……………ラングが来たじゃん……………」

拓羅は今まで思いもしなかった事を一生懸命思い出した。忘れ去られて頭の隅っこでいじけていた記憶を呼び出す。記憶は嬉しそうに走ってきた。おかげで一分も掛からずに思い出す事が出来た。

そう言えば、薬でも入れるとしたらあの時しか考えられない。あれが三人での最後の休息だ。

まさかのらりくらししてるなんて思わない、と豪語していた楓の目の前にラングが現れてしまったあの時だ。

完璧に思い出し、拓羅は手を叩いた。

「ああ!あそこか!!そう言えば相席とか言って…」

拓羅が思い出した時には、もう楓は夢の中だった。

この眠り方から推理するに、どれだけ強く揺すつても、頭を床に打ち付けても、殴ってボコボコにしても、起きることは無いだろう。

「……………仕方ねえよな……………」

ため息をこぼす。いつまでも二人してここに居るわけにはいかない。

拓羅は、前回しそびれた仕返しと言う事で楓の頭を小突いた。

無論、今の楓はそんなもので起きるはずが無かった。

スツと立ち上がると、拓羅は傷の痛みを堪えて走り出した。

拓羅が走っていったからしばらくすると、真っ白な廊下を何者かが歩いてきた。まるでこのタイミングを待っていたかのような。

壁にもたれて眠いつている楓を見て、迷う事無く軽々と抱き上げる。

いわゆる「お姫様抱っこ」で来た道を戻っていった。

全速力で走っている拓羅は最初は速かったものの、そのスピードは三分と持たなかった。三分間自己ベストで走り続け、敢え無くダウンした。

「……………くそ……………頭痛え……………」

走ったせいか、頭がガンガンする。頭の中だけまだ上下に揺れている気さえする。

だが休んでなどいられない。ぼやける目を擦りながら、トボトボ歩き出した。

「ったく……………！俺足遅えな……………」

歩きながら自分の足にケチを付けている。歩いている時間すら無いのに、疲れ果てて歩かざるを得ない自分の足と、痛んでやまない頭が大層憎かった。

（最初からスピード出すんじゃないかったぜ……………）

拓羅は心の底から悔やんだ。自分は持久派なのだと言う事を改めて思い知らされる事となった。だが今はそんな事を思っている暇すら無い。一刻も早く称狼を助け出さないと殺されてしまうのだ。

獲物を捕まえてそのまま生かすほど、ラングは甘く無い。

「早く行かねえと……………！くそ……………こんな時に楓は暢気だよなあホントに……………！！」

そんな事を言っても、楓はクシャミすら出来ないほどに熟睡していた。それはやはり自然に出来る眠り方では無い。

ぐっすりと寝ている彼女に、男の足が近づいたのが分かった。

「どこだ……称狼……」

楓の状況を知るはずも無く、拓羅は称狼を捜す事で頭がいっぱいになっていた。

角を曲がる。もう自分がどうやってここまで来たかも分からない。この見渡す限り真っ白な建物内に、しかも方向音痴なのだから無理もないだろう。

（やべ……なんか目の前グルグル回ってる氣いすんだけど………）
壁に頼りながら歩く。一人で歩こうとすればすぐにでも倒れそう
だ。睡魔に追い討ちを掛けるように、気持ち悪さも襲ってきた。

吐き気を堪えてしばらく進むと、何やら物音が聞こえてきた。横
の部屋からのような。普通の大きさのドアを二枚横に並べた大きさ
の、横開きのドアだ。

拓羅は、少しだけ開けて中の様子を見てみた。ぼやけている目で
も辛うじて分かる。

白衣のような服を着た、髪の高い男が立っている。白衣には汚れ
一つ付いていない。

その向こうには檻のような物があつた。

（……なんなんだ………？）

檻を見つめた。中には、どうやら人が入っているようだ。時々白
衣の男が檻を蹴って脅している。

檻の中の人間の声が聞こえた。男らしい。声や話の内容からして、
命乞いしているようだった。

（奴隷とか………そういうのかな………）

拓羅はそのまま見続けた。白衣の男も檻の中の男も動かない。檻
から出すのか、と拓羅が思った時、白衣の男はその真っ白な服から
真っ黒な銃を取り出した。

「……！？」

拓羅の口が開いた。銃は真っ直ぐ檻の中の男を向いている。

（単なる脅し………？だよな………？まさかホントに撃つはずないよな
………）

しかし、彼のカンは見事にはずれた。ゆっくりと引き金が引かれ、音が部屋に響いた。

檻の鉄棒部分に少し血痕が残る。

「なっ……………！？」

思わず声が出てしまった。ヤバイ、と思ったがもう遅い。白衣の男は徐に拓羅の方を向くと、近づいてきた。別に驚いた様子ではなく、うんともすんとも言わない。

まるで拓羅が見ている事を知っていたかのような。ゆっくりと手を伸ばす。手はドアを開けて拓羅の首を掴んだ。

第65話 『白い建物in黒い悪魔』

外はもう日が沈んでいる。真つ白な建物は夜の暗闇に包まれて、不気味にそびえ立っていた。

そんな建物の一室で、楓はやつと目を覚ました。目を開けてあくびを一つ。

しかし手は伸ばせない。手も足も何故だか縄で縛られている。冷たい床にその状態で寝転んでいたのだ。

「……………なんじゃこりゃあ？」

縄に喧嘩を売ってみるものの、勿論買ってもらえるはずがない。今度は鶏のように前後左右何度も見た。そして前を向く。

「ココ……………ドコ…………？」

微妙に首を傾げる。ダンボールや袋などが置いてあり、異様に暗い。天井に電球が一つ付いているが、灯りは付いていない。倉庫のようだ。

いつまでも首を傾げているわけにもいかず、彼女は縄をほどく事に専念した。

しかし一本一本が太い縄はなかなかほどけてくれない。

いくら男勝りでもやはり力は女だ。その力でほどけるならこんなに太い縄を用いる意味が無い。

「つつーか……………女相手にこんな縄用意すんなっ！！」

ブチブチ言いながらほどこうとする。

しかし、ほどくどころか緩みもしない。だが負けず嫌いの楓さんだ。こんなところで諦めるわけが無い。

縄と格闘すること五分ほど。

さすがに疲れてきたのか、横顔をベッタリ床にくっ付けていた。

そんな時、暗い倉庫の重そうなドアが開き、少し光が漏れる。

何者かが入ってきた。光は足のあたりで終わっているため、顔までは見えない。

「やあ。お目覚めか」

顔は見えないが、声ですぐに分かった。ラングだ。

「結構強力な睡眠薬だったんだけどなあ。この時間で起きるとは予想外だ」

ラングと分かった瞬間、楓は地面に顔を伏せた。

少しムツとした顔をしたが、ラングはそのまま続ける。

「称狼を殺そうと思ってたんだけどさ、やっぱりお前の方が邪魔なんだよね。だからお前を先に殺すことにするよ」

だが、何を言っても楓はラングを向こうとしない。

ラングもそのままジツと待っている。意地の張り合いをしているみたいだ。だが、短気なラングはそろそろ苛立ちを隠せないようだ。

「……バカにしてんのかテメェ!!?」

怒鳴って肩を蹴る。それでもまだ向かない。

齒軋りした後、ラングはポケットからまたも折りたたみ式のナイフを取り出した。それを楓に突きつける。

「なあ。聞いてんのか。殺すつつてんだよ」

しかし頑として向こうとしない。

「いい度胸じゃねえか……」

急に、腹に衝撃が走った。ラングが蹴りつけたのだ。一瞬息が止まったが、それでも下を向いたままだ。少し咳込み、背中を丸めてうずくまる。

ラングは満足そうな笑みを浮かべ、しゃがみ込んだ。そしてわざとらしく言う。

「頑固だな、お前も。……そうだ。アイツはどうなってるかなあ？」

あの拓羅クンは」

『拓羅』と言う言葉に、楓が少し動いた。

それを見逃さなかったラングは更に続けた。

「いけないなあ、嗅ぎ回るなんて。あの部屋に入ったら終わりだもんなあ。今頃死んでるか……」

そこまで言うと、下を向いていた楓は急に顔を上げ、暴れたした。

怒るかと思いきや、ラングは満足気に笑ったままだ。少し地面から離れている楓の頭を、また地面に叩き付ける。そのまま押さえつけた。

頭を押さえつけられながら、楓はラングを睨んだ。息が荒くなっているのが分かる。

「なんだよその目は」

ラングは自分を睨む目を、逆に睨み返した。

そして今度は声を出して笑うと、スツと立ち上がった。

「まあいい。どうせお前は逃げられないんだから……」

楓は不思議そうにラングを見ている。彼は普通にドアを開け、普通に出ていった。なんの変哲も無い、ただの「部屋から出る男」だ。また何かする、と思っていた楓は、彼の意外な行動に、頭の上に「？」マークを浮かべて首を傾げるだけだった。

夜。もう外は真っ暗だ。月も雲によって隠され、外灯も何も無い外の道はただ黒いだけだった。

ラングも誰も来ないため、暇だった楓はとうとうまた寝てしまった。と言っても、物音がすればすぐに目を開けられるくらいの浅い眠りだ。

そして物音はすぐそばでした。カサカサと荷物の方から嫌な音が聞こえてきた。案の定楓は目を開ける。

（まさか）

彼女は嫌な物を想像してしまった。しかしこの倉庫内で、しかも食べ物なども沢山入っている箱が積まれているこの倉庫に、アイツが出ないはずがない。

すぐにでも飛び起きたかったが、縄で手足の自由を奪われているため、起き上がるのも一苦勞だ。ならば後ろを向いて正体確かめ

よう、とも思ってたが、向いた途端目の前にあのゾツとするような真っ黒な体があっても嫌だ。

大体、アイツ等が這ったかもしれない床に頭をくっ付けていると言う事自体、楓にはショッキングな事なのだ。

飽くまで平然を装うと頑張るが、その状態は一秒と持たなかった。楓は後悔した。何故小さい頃からあの黒い姿を見ておかなかったのか、と。そうすれば今よりは免疫がついて、耐性度もアップしていたはずだ。靴で叩こうにも今は靴を脱ぐことすら出来ない状態だ。もっとも、楓には黒い悪魔を自分の靴で叩けるだけの勇氣は備わっていないが。

ここでもまた、彼女はラングを憎んだ。彼女をここに置いてけぼりにしていったのも、他ならぬラングなのだ。

（こんな時タクがドアを開けてくれればカッコイイのになあ……）

目の前に本人が居たら間違いないくドアを開けていたセリフを、楓は心の中に寂しく響かせた。今どれだけそのセリフを繰り返しても彼には届くはずがない。

だが、ここで叫べばもしかしたら拓羅に届くかもしれない、と楓は考えた。しかし新たな問題が彼女の前に立ちはだかった。

叫ぶとしても、何と言って叫べばいいのか。「きゃあ」なんて柄ではないし、「いやあ」と言う柄でも勿論無い。この際助けが呼べれば叫び声なんてなんでもいいと思うのだが、楓は口が裂けても「きゃあ」なんて叫びたくはなかった。

（ブリッ子みたいじゃん！気持ち悪！）

自分がそう叫んでいる所を想像して、楓は一人で身震いした。

そしてもう一つ、更に身震いできるような物は近づいていた。彼女の背後に居る、黒い悪魔と考えられる物だ。

その事を考えると、楓の身震いはいつそう凄さを増した。まるで、半袖で北極に放り出されたかのようなのだ。

足音の力サカサは、更に彼女との距離を縮めてきていた。そしてソイツは大きく飛んだ。その瞬間、楓も器用に上半身だけ起こした。

腹筋が悲鳴をあげているが、今はそんな物関係無い。

「見たかバーカ！お前の攻撃なんて喰らってたまつかいっ！一生飛んでろ！んでタクに踏み潰される！バーカバーカバー……………」

……あ？」

肩で息をしながら一生懸命厭味を言っている途中で、楓は相手をよく見た。

黒い悪魔でもなんでもなく、ただの葉っぱだった。

葉っぱが床にこすれる音が、丁度黒い悪魔の歩く音に似ていただけだった。

「あ？」の状態で口をあぐり開けたまま、楓は葉っぱを見ていた。結局、彼女は葉っぱに話し掛けていたのだ。正体を知った後で自分の姿を思い返すと、顔がボンと赤くなった。

（あれ？だけど……）

風も何も無いこの部屋で、どうやってこの葉っぱが動けたのだろう、と楓は考えた。

どこかに風の抜け道があるはずだ。そうでなければ、見えない何かが動かしたとしか考えられない。

楓は性懲りも無く、またも嫌な物を想像してしまった。半透明の場合によつては足がないあのフヨフヨ浮いている奴だ。

それこそ涙がちよ切れそうだった。だがそんな物とは夢でもご対面したくない楓は、懸命に風の抜け道を探した。壁にでも穴が開いているのか、と言う考えとは裏腹に、風はドアからきているようだった。

本来なら鍵が掛かってあるはずが、どうやらラングが掛け忘れたみたいだ。

（あー。そいえば音しなかったなあ……）

楓はラングが出て行った時の事を思い出した。これなら外に出る事が出来る。

ラングが人間である事に、この時初めて感謝した楓だった。

第66話 『合流』

楓はドアを口でこじ開け、外へ出た。走っていきたかったが、手足の縄が邪魔だ。これではピヨンピヨコ飛び跳ねて行くしか無い。

ピヨンピヨコ飛び跳ねている自分を想像した楓は、その一生懸命な顔にため息をついた。ため息によって想像のモヤモヤは消される。どうでもいい事を想像するより、縄をほどく方が先決だ。

どこかにいい道具は無いか、と探したが、そんな物が置かれているはずが無い。鍵を掛け忘れて、縄をほどく道具まで用意しているとなると、ラングは相当バカなボスだ。

「さすがに無いかぁ」

ため息混じりに言った。

その頃、ラングは一人、部屋の中で椅子をクルクル回して喜んでいた。

「うむ！これで楓も少しは俺に対して怒りを覚えるだろう！」

うんうんと頷き、また喜んで椅子をクルクル回し始めた。

少しどころかかなりの怒りを覚えている楓だが、そんな事ラングは分かっているようだった。今までの行為は、彼にとっては序の口なのだ。

ラングはまた喜んで、椅子をクルクル回し始めた。

だがその幸せは一瞬にして壊れた。彼がある事を思い出したからだった。

（しまった！！あの……あの倉庫には……！）

ワインが入っていたのだ。しかし箱の中に入っているため、易々とは見つからないだろう、と考え直したラングは、また椅子をクル

クル回した。

しかしクルクル回っている間も、嫌な予感は絶えなかった。

そして、その嫌な予感は的中だった。

縄をほどく道具が無いため、楓は倉庫の中の箱を片っ端から頭突きで壊して中の物を確認していたのだ。おかげで彼女の額はもうすでに赤くなっていた。頭突きする度に足も頭もフラフラしてくる。

「これは……かなり痛いぞ……？」

分かりきっていた事だったが、口にせずにはいられなかった。

しかし凝りずにまた隣の箱に頭突きする。はたから見たら自分の行動に後悔している人間か、ただのバカにしか見えない。

「あつ！」

だが突然、楓が声をあげた。

箱の中にはワインの入ったビンがズラリと並んでいた。

「こんな毎日飲んでんのかなあ……？」

首を傾げる。正直、楓にはワインの凄さが分からなかった。美味しいと言って飲む人達の気が知れない。

しかし、今回ばかりはその凄さの分からないワインに感謝した。いや、ワインのビンに感謝したのだった。

音が漏れないようにドアを閉め、ビンを起こして口にくわえた。そのまま落下させた。

パラシュートも何も付けていないビンは、一瞬にして割れて地面に散らばった。その中の欠片をしゃがんで持ち、まず腕の縄を切り始めた。

少し時間が掛かったものの、なんとか切る事が出来た。あとは足の縄も同様に切るだけだ。自由の利くようになった腕は、すぐに足の縄を切った。

「クソジジイめ。自分の阿呆さを思い知れっ！」

誰も居ない倉庫に向かってベーと舌を出し、走っていった。中には寂しく、縄と割れたビン、床に零れたワイン達、そしてバラバラに壊された木の箱が残された。

しばらく走ったところでため息をつく。

壁にもたれ掛かって、腕の縄の跡を見た。

楓が悩んでいたのは、拓羅にこれをどう説明するか、と言う事だった。本当の事を言ってしまうえば、拓羅は暴走してしまうだろう。そして「なんで言わなかったー！」と状況を知った上でも滅茶苦茶な事を言うてくるに違いない。

楓自身、わざわざそんな事を言っただけを怒らせたくは無かった。そして嘘を一生懸命考え始めた。歩きながらうーんうーん考える。

その時、別の方からもうーんうーんと聞こえてきた。最初は自分の声がこだましているのかとも思ったが、それにしては低い。

小首を傾げ、楓は声のする方へ歩いていった。

どうやら声はすぐその扉の向こうから聞こえるようだった。扉は少し開いていて、隙間から中の様子が見える。

そつと覗いてみると、中に見えたのは拓羅だった。口をガムテープで塞がれて腕も縛られているようだ。

急いで扉を開け、中に入る。縄をほどこうと動き回っている拓羅は、いきなり楓を視界に居れると、叫び始めた。

「ん！ん！ん！ん！ん！」

「何言ってるかわかんないよ」

「ん！ん！ん！ん！ん！ん！」

「……………」

何を言っているか分からなくても、大体は分かっていた。早くほどいてくれ、とでも言っているのだろう、と思い、楓は拓羅のそばまで行き、しゃがみ込むと、ガムテープに手を添える。

そして手加減無しに、全く容赦せず、楓は拓羅の口に張り付いているガムテープをベリツと剥がした。

その後、拓羅が痛々しい悲鳴をあげた事は言うまでも無いだろう。「テンメエエエエ!!! もっと剥がし方があんだろ、剥がし方が! ! !」

まだ腕を縛られているため、口だけで反抗する。

「もー。静かにしなよ」

楓は正面から食って掛かってくる拓羅を後ろに向かせると、腕の縄をほどいた。

腕が自由になるやいなや、拓羅はすぐに楓の首を掴んだ。

「もっと優しく出来ねえのかお前はっ! ああん!!!?」

「まあそう興奮しないの」

自分の首をガツチリ掴んでいる拓羅の腕を、楓が掴み返した。

丁度その時、本当に偶然に見てしまった。楓の腕にもついている縄の跡を。

「なんだよ。お前も捕まってたのか?」

その一言で、楓は拓羅の腕を掴んだ自分の腕を憎んだ。しかし見られてしまっただけは逃げようが無い。なんとかその場で、一瞬で嘘を考えついた。

「あのねっ夢見たのねっ!」

「..... あ? 夢?」

「そ! 夢夢! 誰がなんと言おうと夢! !」

「分かったから。だからなんだ」

「それでね、幽霊が出てきたのね。ソイツがね、なんかね、急に、ホントにホントに急に、あたしの腕を掴んできたわけなのね」

「..... ほう?」

「そしたらね、そこで目が覚めて、そしたらなんと腕に手形が! あら怖い! あっはっはっはっは..... はっ..... ははは.....」

長い沈黙が流れた。

楓にとつては物凄く気まずい、十八年間の中でもっとも気まずい沈黙だった。

「お前いつからそんなに嘘が下手糞になったんだ？」

その沈黙を破って、拓羅が眉をしかめて言った。

確かに見ようによつちや手形に見えないでも無いが、拓羅はそんな物には騙されなかった。楓がもつと本当の事のように言えば騙されないでも無かっただろうが、今回は状況がキツすぎたようだ。

元々下手な演技は、この短時間で考えたシナリオに付いていけず、更に下手さを増してしまっていた。

思いつきり赤面する楓を見つめて、拓羅はニツカリ笑った。

「つていうかなんでアンタまで捕まってたわけ？」

「お？一番始めに捕まった奴が大口叩いてんなあ」

「……………質問してんだから答えなさいよっ」

「うるせえな、知るかよ。急に白衣の男が捕まえてきやがって……あれ？そいえばアイツ、どこ行っただらろ？」

「白衣？」

拓羅はゆっくり頷く。

そして檻の中に人が入っていて、その人を白衣の男が撃つたと言ふ事も話した。

「その中の男が称狼だったりとか……そーゆーのは考えなかったわけね…………」

そう言われて初めて気が付いたようだ。拓羅の顔はサーツと白くなっていた。

「まあ大丈夫だとは思っけど」

「……なんでだよ？」

「ラングが来たの。捕まってる時にさ。もし檻の中が称狼ならその時点で言ってるハズじゃ……」

「お前捕まってたのか!!?」

「は!?!何、さっき気付いたんじゃないの!?!」

二人とも驚いた顔を見合った。

しかし、ここで喧嘩しても意味が無いと考える事が出来た、少し大人になった二人は黙った。

「……で。なんだったわけ？」

「あー……つとね……」

またも沈黙だった。

どちらも頭を掻いて別々の方向を向いている。二人は喧嘩しないと逆におかしくなるらしい。

「……だから……とにかく、それが称狼ならラングが挑発するような事言つてなきゃおかしいって事」

「あ。……あーあーあー。そっかそっか。そーだな、うんうん」

「ホントに分かってる？」

「分かってる分かってる。要するに檻の中の男は称狼じゃないってワケだ？」

「要するにもクソも無いけどね」

楓がボソツと言った。

その楓を拓羅が睨む。

だが睨んだ後は、普通の会話に戻った。

「なあ、ラングがどこに居るか分かるか？」

髪を縛っている楓を見て言った。

縛り終わり、彼女は拓羅を見てから横に伸びている道を見た。

「大体ああ言う奴の行動は分かりきってるのよ。捕虜とか俘虜とかは下の階に置いて、後は手下に任せてさ、自分は高みの見物ってわけ。だから……」

「だから？」

「上の階じゃない？」

楓は力無く言った。拓羅は呆れ顔で「高みってそっちかよ……」
と言った。

「タク」

「あ？」

楓が顎で差した方を向くと、真っ白な宇宙服のような物を身にまとった人間二人が歩いていくのが見えた。その二人が曲がった角を見てみると、エレベーターのマークのような物が書いてあるプレートが貼り付けてあった。

「ツケてくか？」

「まあ彷徨うよか無難だわな」

二人を追って、楓と拓羅も角を曲がった。

第67話 『手錠』

「称狼」

鉄の檻の中に入っている称狼に、ラングが近づいた。

ラングの部屋のような。壁は一面ガラス張りになっていて、床は部屋の外と変わらず真っ白だ。

称狼は無言のまま睨み付ける。

「お前もアイツに頼もうかと思ったが………まあいい。お前は俺が殺る」

檻の中から睨む称狼を見て、ラングは薄暗い部屋の中で笑った。

「ボス」

外から声がした。ラングは近づいてドアを開ける。自動ドアの開く音が響き、部屋の外には宇宙服のような服を着た二人が居た。

「お前等か。外の奴等は殺ってきたか？」

「はい。奴等弱すぎで一分も掛かりませんでしたよ」

「そうか。ご苦労だったな。もういいぞ。下がれ」

ラングはクルリと後ろを向いた。

一歩踏み出した時、後ろから首を捕まれた。しかし彼は驚いた様子一つ見せず、その腕を掴んだ。

「なんの真似だ？」

低い声だった。腕を掴んだままの手に力を入れる。

「バレちゃったか？」

「当たり前だ」

宇宙服の一人が横に移動し、腕を捕まれている方も振り払って横に行った。

ラングは二人に挟まれた。

「お前等、芝居が下手すぎだぞ」

宇宙服の一人が頷く。もう一人は首を傾げた。

その間にもラングはポケットから銃を取り出した。両手に黒い銃

を持ち、二人に向けた。

「動けば撃つぞ」

二人は黒いプラスチックに覆われた顔を見合わせた。遠くから見ると相手の顔なんて全く分からない。

だが、一人が頷き、同時に動き出した。銃声が響く。

左右の部屋に飛び込んだ。

「っあー。もー、なんだこれ。暑いし重いし……」

左の部屋に飛び込んだ一人が、頭に被さっていた物を取った。楓が顔を出す。

右の部屋でも同じ事をしていた。

こんな重い物を頭に乘せたままでは上手く動けない。拓羅も楓も白い服を脱ぎ捨てた。

中央の部屋ではラングがジツとしている。しかし、少しでも動く気配が感じられれば容赦なく引き金を引くだろう。

拓羅はラングを見て舌打ちをした。

(どうすんだ、チクショウ……)

こちらが動かなければラングも動かないようだが、これでは埒があかない。

そしてラングの居る部屋には称狼も居る。もしラングが称狼を盾にしてしまえば、手の出しようが無くなる。

しばらくの間は様子を窺^{うかが}っていたが、急にラングが立ち上がった。何しろ短気な為、もう痺れを切らしてしまったのだろう。

「お前等が出てこないのなら仕方が無い。称狼を殺すまでだ」

最悪のケースだった。ラングは檻から称狼を出し、首に腕を回して頭に銃を突きつけた。

真正面を向いている為、後ろに回ろうとすればどうしてもラングに見つかってしまう。

「凋婪さん、アニキ！出てくる事無いぞ！！殺すなら殺せよ！どうせ二人が出てきたって殺すつもりなんだろ……！！？」

称狼が怒鳴った。その声は、静かな部屋に響いた。

「……そうだな。それまでの時間が縮まるだけだ。別に今殺したって差し支えないがな」

しかし、そんな事は二人が許さないだろう。ラングはそれを分かった上で言っていた。

その時、横で物音がした。ラングは瞬間的にそちらを見る。拓羅が走って向かってきていた。ラングは全く動揺せず、銃口を彼に向けた。

真っ白な部屋に銃声が響いた。壁に吸い込まれるように、その音はすぐに消えた。

銃口から出る煙が消えた時、銃は床に転がっていた。ラングが手を押さえている。

だがすぐに顔を上げると、銃に手を伸ばした。手が銃に触れる寸前に、拓羅が奪い取った。今度はラングが銃口を向けられた。

「……お前に撃てるか？」

ラングはニヤリと笑い、挑発的に言った。

事実、撃てそうに無かった。銃を持つ手は緊張と重さで微かに震え、このまま撃ったら称狼にまで当たってしまう。

ラングの額に狙いを付けていた銃は、ゆっくりと下ろされた。ラングは安堵の笑みを溢す。そして手を伸ばした。

「……お前には扱えない。返せ」

しかし、拓羅は自分の後ろに銃を隠すようにして、舌を突き出した。

「誰が返すか!!」

「……俺はナイフも持ってんだ。称狼の首裂いてもいいんだぞ!!」

拓羅は称狼を見た。称狼も、何かを訴えかけるようにして彼を見ていた。

そして称狼は大きく口を開くと、ラングの腕に噛み付いた。

「っ!？」

「逃げろっ!!」

拓羅に向かって叫ぶ。少し迷ったが、拓羅は舌打ちすると、銃をズボンのポケットにしまつて楓を担ぎ上げた。

「！？ちよつ……」

「とにかくこの部屋離れるぞ」

「はぁ！？バツカ何言つてんの！！？下ろして！！」

耳元で声をあげるが、拓羅は一向に止まろうとしない。

エレベーターが来るのを待っている時間も惜しいようだ。迷わずエレベーターの前を通り過ぎ、階段にさし掛かった。

一気に降りて、一番下の階まで戻ってきた。

そして角を曲がった時、急に拓羅の足に激痛が走った。ガクンと折れて倒れる。

当然、拓羅に担ぎ上げられていた楓も床に転がる。

「いつ………悪い……」

拓羅が足を押さえながら言った。頭をさすりながら、楓は起き上がった。

「や、いいけど………って言うか………大丈夫？」

「大丈夫、大丈夫。ゴメン」

顔の前で軽く手を合わせる拓羅の前に、楓の手が差し出された。

拓羅が彼女の手を握った時、ガチャリと音がした。楓の腕に冷たさが残る。

ふと楓が自分の手を見ると、両腕に手錠が掛けられていた。拓羅は「ゴメンな！」と言つて、手錠の鎖の部分に縄を通して手すりに縛り付けた。

「はっ！！？ちよつと待つてよ！何コレ！！」

「称狼のトコには俺だけで行く」

「なんで！」

「俺の弟だから。それだけだ」

拓羅はそう言つと、走り出した。

「あっコラ！外していきなさいよ！！恩を仇で返すのかっ！！このバカ拓羅っ！！！！」

楓の声は届いていなかった。

足の痛みなど感じていないように見えたが、本当は我慢して走るのが精一杯の状態だった。

今度はエレベーターを使って、一気にラングの部屋のある階へと上がっていった。

第68話 『エンドレスバトル』1

エレベーターで上がっている間も、拓羅の足には痛みが押し寄せていた。

ジンジンと痛む。傷は蚯蚓みみずば腫れのように膨れ上がって、破れたズボンの生地に当たるだけでも相当な痛みを催した。

「くっそ……………！」

壁に背中を預けて、拓羅は大きなため息をついた。

ボタンの上に取り付けてある、デジタルの階表示を見た。もうすぐ着くようだ。

正直、動く事が億劫になっていた。しかし弟の為と思い、彼は懸命に堪えていた。

最上階に着き、拓羅は扉を急かすように手で広げ、外に出た。ズボンの後ろポケットに突っ込んでおいた銃を取り出し、トリガーに指を合わせる。

汗ばんだ手で握り締め、ラングの部屋の自動ドアに手を掛けようとした。

だが手を掛ける前に、ドアは開いてしまった。

「……………」

真っ白なドアが左右に消え、中からラングが顔を出した。

「やあ。やっぱり来たね」

「…………… 称狼は？」

ラングは笑いながら、静かに退いた。後ろには相変わらず檻がある。その中に、先程までと同様、称狼が入っていた。

「…………… アニキ……………」

称狼は呟くように言った。その顔の数箇所^{いく箇所}に傷ができていた。拓羅が称狼に近づこうとすると、ラングが二人の間に立ち塞がった。

「見す見す渡すわけにはいかないよ」

「ふざけんな。称狼どうするつもりだ」

「君は相当なお馬鹿さんだね。殺すに決まってるだろ」

「馬鹿はデメエだクソ野郎!!!」

そう怒鳴り、拓羅は握っていた銃を構えた。だが、右肩から背中に掛けて付いている傷が妙に重く感じ、震えてしまう。

（震えてんじゃねえよチクショウ……!）

齒軋りして左手を添えた。やっと引き金を引いた時、ラングはもう目の前まで迫っていた。

「……!」

銃声と共に、拓羅の体は吹っ飛ばされた。後ろの壁にぶつかる。傷が体と壁に挟まれ、更に痛みを訴えた。しかし、辛うじて銃は放さずにいられた。

銃口は素早くラングの姿を捉え、二回ほど弾を吐き出した。そのうちの 하나가、彼の足を攻撃し、倒れさせた。

拓羅は立ち上がり、ラングの近くに駆け寄る。そして起き上がるうとするラングの頭に銃を突き付けた。

部屋に沈黙が流れる。

その中に、カチリ、と手ごたえの無い音だけが響いた。

「弾切れだな」

ラングは微かに笑った。

「くそ!!!!」

銃を放り投げ、拓羅はラングの胸元を掴んだ。そして顔を思い切り殴る。また倒れ込むラングに、更に攻撃を加えた。

「檻の鍵渡せ」

拓羅は手を出した。しかしラングは彼を見るだけで、鍵を取り出すとはしなかった。

その態度に、拓羅はラングの腹を蹴った。

「渡せつつてんだよ!!!!」

今までにない形相で怒鳴り、壁を殴った。

だがやはりラングは渡さず、挑発するようにニヤリと笑った。

「デメ……！」

拓羅が殴りかかる前にラングは立ち上がり、檻に向かって走り出した。

鍵も何も無く、普通に開けて称狼を出してしまった。

「……………かぎ……………無かったのか……………？」

両手をだらんと下ろし、ぼーぜんとする拓羅の目の前で、ラングは称狼の首にナイフを突きつけた。

「さて。どうするか。元々コイツは殺す予定だし……………今この場で殺してやつても……………」

「ふざけんな！やめろ……！」

「やめてください、だろ？」

拓羅は齒軋りをして、押し黙った。

「意地でも言わないつもりか。例えばコイツが殺されようとしてもか……………」

「……………頼む。やめてくれ」

「そつだなあ。……………じゃあこう言うのはどうだ？楓を殺ってこれば称狼はお前に返す。楓を殺らないってんなら……………今この場で刺す」

一瞬目が泳いだか、拓羅はラングを睨みつけた。

「んな事出来るわけねえだろ！」

「そつか。なら仕方ないな。これ以上甘やかすつもりはない」

「ちよつと待……………」

拓羅の言葉を見殺して、ラングは瞬間的に称狼の背中を壁に付けさせ、胸にナイフを突き刺した。

「……………！！！」

柄を両手で握り締め、ラングは更に力を込めて奥へ奥へと沈ませていく。

じきに称狼の口から赤い血が漏れ出した。体全体がガクガクになり、足にも力が入っていないようだ。壁を滑るようにして尻もちをついた。

左胸にはまだナイフが刺さっている。

手に付いた血を服で拭い、ラングは拓羅の方を向いてニツコリと笑った。

「散々逃げ回った割には呆気なかったな」

しかし、今の拓羅には、その言葉に食い付けるほどの気力が無かった。

もうピクリとも動かなくなった自分の弟を見つめ、静かに息をするだけだ。

「これでとりあえずは終わったってわけだ。……じゃあな。俺はもう多分お前等の前には姿を見せな……」

ラングの動きが止まった。

彼の背後を狙って、拓羅がナイフを突き刺していたのだ。

称狼の胸から落ちたナイフは床に転がり、ラングが後ろを向いた瞬間に拓羅はそのナイフを取って刺していた。

「……………」

ラングは叫び声すらあげず、前を見ているだけだった。

「死ねクソ野郎……!」

拓羅の声を合図としたかのように、ラングの口から血が飛び出た。そのまま前方に倒れ込む。

拓羅は、ラングの背中に刺さったナイフを引き抜き、おぼつか覚束無い足取りで称狼の傍へと向かった。

称狼の足元に崩れ落ち、冷たくなった手を触る。

涙で顔がよく見えなかった。顔から視線をそらし、未だ握ったままのナイフを睨んだ。

本来銀色の部分も血で真っ赤に染まっている。そのナイフを見て、拓羅は歯を食い縛った。

食い縛れば食い縛るほど涙が溢れだす。

悲しみの涙と言う事もあったが、悔しさからくる涙でもあった。震える手を振り上げ、握っていたナイフを思い切り投げ捨てる。

歯の間から嗚咽が漏れた。

ちまみ血塗れの手で髪を触ると、その部分が赤くなった。嗚咽は激しく

なる一方だ。半狂乱になった拓羅は、真つ白な部屋の中で叫んだ。

「おう、拓羅。……………ってお前、なんだそれ!？」

戻ってきた拓羅を見て、ソラが声をあげた。

頬には乾かぬ涙の跡がしっかりと残り、足の傷も丸見えになっていた。

「……………ごめん……………」

第一声はそれだった。

「は？何がや？どないしたん？」

ソラの上からユキが声を掛ける。

しかし拓羅から称狼が死んだ、と告げられると、その声は全く聞こえなくなった。

完全に風邪が治った良真、みーな、ジークの三匹も、黙って拓羅の顔を見つめた。

「なんで……………」

ユキが言った。

「なんでなん……………」

もう一度言う。だが、拓羅は何も言えなかった。今何か言葉を発すれば、また涙が溢れだしそうだったからだ。

ただ唇を噛んで、ユキの声を聞くだけだった。

「なんでたつくんがおったのに守れへんかったん!!？」

今までに見せた事の無い形相で怒鳴る。ユキの鋭い牙が、初めて顔を出した。

「ユキ落ちて着いて!」

みーなが宿められ、なだ我に返ったようだ。ハツとして。牙を仕舞い

込む。

「……アカン。ごめん。つい興奮して……」

「謝る必要は無い。ユキの言ってる事が正しい」

黙っていた拓羅が口を開いた。

「俺はラングから称狼を守れなかった。……怒るのも無理ない。

ユキが……正しいんだ……」

今にも消えてしまいそうな、か細い声で言った。

「……とにかくさ、ファングも待ってるんだろ？とりあえず戻ろっぜ」

ソラの意見に全員賛成し、拓羅も乗って空へ飛び立った。

「なんか……足りない気がしないか？」

もうすぐでファングの居る病院に着く、と言うところで、良真が声をあげた。

「足りない？何がだ？」

ソラが話に加わり、ユキもみーなも拓羅も考え始めた。

「ファングが足りないのは……当たり前やしな。あとは……あ……」

ユキの声が響くと同時に、ソラの足が地面に付いた。

全員、

「ちくしょー！クソ拓羅あああああつ……」

一人だけしか居なくなつた建物内に、その声は響き渡った。勿論返答は無い。

そのせいで寂しい思いになった。

まだ外は暗いままのため、白い建物も不気味に見えた。そしてその建物の中に居るのが彼女なら尚更だ。

腕は上げっぱなし、足はしゃがみっぱなしで、両手足完全に痺れていた。

「クソ拓羅あ！！！！呪い殺す！！！！」

この迫力なら幽霊も逃げ出すこと間違い無しだった。

第69話 『エンドレスバトル』2

朝になり、ようやく拓羅が戻ってきた。隣には足を引きずっているファングも居る。

怒り疲れたのか、楓は器用に眠っていた。

「楓……？」

拓羅の声で目を覚ます。寝ぼけた目もこする事が出来無いため、頭をブルブルと振った。

「悪い。忘れてた………じゃないや。えっと……ファングの迎え行ったら忘れて………じゃねえって！」

「アンタ何言ってるの」

「とにかく、悪かった。今外す」

縄と手錠を外され、楓はまず最初に床に寝そべった。

白い床とご対面してからため息をつき、拓羅を睨んだ。

「どんだけ疲れたか知ってるのかバカ拓羅……！」

「いや、マジで悪かったって」

このままだと本当に呪い殺されそうだった。

その殺気を感じ取ったのか、拓羅はその場に土下座して謝った。

「あ、それでな」

急な変わり様に、楓は更に憤慨してメドゥーサに変身した。彼女に睨まれた拓羅は一瞬にして固まる。

拓羅を見てファングは呆れた顔になり、変わりに口を開いた。

「ラングは死んだ」

「……え？」

その言葉に、楓の髪はヘビから普通の髪に戻り、拓羅も解放された。

「なに？なんで？」

「拓羅が殺った」

「そ。俺の手柄！」

楓は、隣でピースをする拓羅の首を締め、また視線をファングに戻した。

「それと……称狼様も……死んだ……」

重い口を開き、ファングは言う。楓は先程よりも更に驚いた顔になった。

そして横の拓羅を見る。沈んだ顔になり、下を向いていた。何も話したくない様子だ。

拓羅をジッと見つめ、楓は立ちあがった。

「楓？」

目の前に居るファングが少し驚く。

「ソラ……居るんだよね？」

「あ？ああ……居るけど」

「いつまでも待たせてるわけにいかないし。……行く」

そう言つて、楓は歩き出した。

ファングも拓羅も、てつきりユキのように怒ると思っていたため、キョトンとした顔のまま座り込んでいた。

「楓！怒らないのか！？」

「え、バカじゃねえのかお前……」

ファングは驚いた顔で拓羅を見たが、彼は楓しか見ていなかった。仕方なく、ファングも楓の背中を見る。

「……怒ったってしょうがないし……」

楓はいじけたような口調で言った。

「つて言うか、その時に悠長に繋がれてたのは自分だし。や、元はと言えばタクのせいだけだし、でも……責めてさ、じゃあ自分助けられたのか、つて聞かれたらそれまでだし……」

「やっぱ俺のせいかな……」

「当たり前じゃん！他に誰がこのキレーな腕に手錠の跡付けやがつたつての」

拓羅は眉を寄せてから、楓の腕に顔を近づけた。

「キレー……？」

楓の言葉を繰り返す。満足そうに「うんっ！」と頷く彼女を見て、拓羅はまた言った。

「キレエー??」

「拓羅さんしつこいよ」

頷いた時の笑顔は消え失せ、楓は拓羅を睨んでいた。

「悪い！」

身の危険を察知したのか、拓羅は顔の前で手を合わせた。

「なあ、楓……悲しかったり……しないのか？」

「悲しんでないように見えちゃう？」

「ハッキリ言つて……見える」

「やっぱり？あたしも自分でそう思う」

「……お前なあっ!!」

頭を掻きながら言う楓を見て、ファングは怒鳴った。

しかし楓はそれを遮るように、言葉を被せる。

「でも悲しいのは事実だよ。……悲しいって言うか悔しいって言う

か………それとも驚愕、なのかな」

「キョーガク？」

「まさかホントに殺すつもりだったとは思ってなかったから………

……」

「だよな。俺もそうだった。冗談だったと思ってた、ってワケじゃねえけど、本気とも思ってた、っつーか………」

後ろの拓羅が頷く。それにつられるように、ファングもゆっくり頷いた。

「拓羅」

「ん？」

「オレさ、お前の事スゲエって思う」

「……?なんで？」

「だって………家族殺されて、それでも明るく振舞えるって、オレには真似出来ねえもん」

「そうか？」

不思議そうにファングの顔を覗き込む拓羅を見て、ファングは照れ臭そうに頷いた。

「なんだよ。急に褒めるなんて。熱でもあんじゃねえの?」

「いや。もう熱も怪我也コリゴリだから」

「ははっ! そっか」

そして拓羅は楓を向く――が、彼女はもうその場には居なかった。遠くの方に小さな背中が見える。

「あ、おい楓!! 先行ってんじゃねえよ!!!」

追い掛けようとして、拓羅は一瞬止まった。

その背中には、微かに震えてるように見えたのだった。

「よ、っと」

二人と一匹が建物を出ていった後、建物の影に隠れていた男が顔を出した。

彼の隣には、ファルと白衣の男も立っていた。

ファルが手を差し出す。

「大丈夫ですか、ボス」

「ああ。……………残念だったな。あのくらいで死んでたら俺はボスなんて呼ばれねえよ」

ラングは空を見上げ、ニヤリと笑った。

ナイフで刺されたはずの背中への傷は、綺麗に無くなっていた。

「うーん。清々しい朝だねえ」

ファルの手を払い、ゆっくりと立ち上がる。

そして朝日に向かって伸びをした――。

第69話 『エンドレスバトル』2（後書き）

これで最終話です。この話をもってendless battleは終わりにさせていただきます。

なんかこれじゃあ称狼メインっぽいとも思ってたんですが……。

でもこのままズルズルと続けていくのもどうかなあと思ったので、こんな微妙な終わり方になってしまいました。すみません。

ここまで読んでくださった方々、本当にありがとうございました！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1880b/>

endless battle

2010年10月8日12時57分発行